

# 小話ついたー



託生

2013年07月09日(火)

柔らかな感触に、粟立つ肌。

触れたのは、ほんの一部分なのに、表面を小波のように広がり、ぼくを包み込む。

思わず漏れた吐息に満足げな吐息を返され羞恥に身をよじっても、また与えられる感覚に、ぼくの思考が震がかる。

そして、全てが、君の物になっていく。

---

2013年06月09日(日)

忍び込まれ重なり絡まり、くすぐられる。とたん形作っていた輪郭がおぼろげになり、溶け合い融合する。どこまでが自分でどこからが彼か、判別できない空間の中、熱く内部が高まっていく。呼吸が止まる。意識が震む。自分が自分でなくなり、彼へと取り込まれるような瞬間。ただただ、幸せな刹那のとき。

---

2012年12月12日(水)

「愛してる」

そんな言葉、いらないんだよ。だって、その目が雄弁に語っているから。

君に愛されているのは、見つめられるだけで、わかるから。

でも、ぼくからは言わないとわからないよね？いつも恥ずかしがって言えないし。

だから、君の視線がぼくから外れているときに言うよ。愛してるって。

---

2012年11月18日(日)

水の中にいるみたいだ……。

体を包む曖昧な空気と肌を行き来する熱い手のひらが混ざり合い、ぼくを……ぼく達の周りを見えない膜が包み込んでいる。

外界と遮断し、秒針の音さえも、もう聞こえない。

ふわりと浮き上がるような感覚に身を任せた。

混沌とした意識の中、鮮明に浮かび上がる真実。

足の先から髪の毛一本一本まで、ぼくは君を感じていた。

---

2012年10月27日(土)

305号室に来客があり、これから緊急の評議会だとギイが呼び出された。

「こんなことなら、着替えなきゃよかった」

せっかく託生と裏庭デートしようと思ったのに。

ブツブツ言いながら、ギイが制服を身につけていく。

緊急なのだから文句を言ったって仕方がない。それに、校舎内は基本制服着用。こればかりは、諦めないとね。

「じゃ、ちょっと行ってくる。晩飯には間に合うと思うから待ってろよ」

そう言い置いてドアの方向に向いたギイの襟元の形が崩れていたので、

「あ、ギイ」

「うん？」

呼び止めて右手を伸ばし、ブレザーの襟を整えた。

「もう、いいよ。いってらっしゃい」

そのまま軽く手を振ってギイを見送ったつもりなのに、ギイはなぜか微動だにせずぼくの顔を凝視していた。

「……なんだよ」

あんまり見つめるなよ。

嫌悪症が治ってギイの側に近寄れるようになったけど、そうやって見られるのは慣れてないんだから。

「託生……」

「なに……うわっ」

「いいなあ、オレ。すっげ、感動してる」

「な……なにが」

「あー、幸せ」

抱き潰すつもりがあるんじゃないかと思うほど、ぎゅうぎゅうとぼくを抱きしめ、頬を摺り寄せてギイが呟く。

「ギイ、評議会、遅れるだろ？」

「遅れたっていいよ。もう少し感動に浸らせろ」

「ダメだってば」

渋々ぼくを解放し、こめかみから髪をかきあげるように撫で素早く口唇を奪って、

「今夜は寝かさないからな」

「え？」

ぼくの返事を待たずに一方的に宣言し、部屋を出ていった。

ギイとそういうことをするのは嫌いじゃないけど、いや、むしろ好きだけど……じゃなくて！

ぼく、なにかしたっけ？

---

2012年08月18日(土)

ガラガラガシャーン！

「おー、落ちたな」

吹き込む雨もなんのその。

ギイが、窓の外に視線を向けのんびりと眺めている。

「ギイ。そんな暢気なこと言ってないで、窓閉めてよ」

「なんだ、怖いのか？」

「怖くないけど、うるさいの」

それに、少し寒いし。

「どうせ窓を閉めたって、それほど変わらないと思うぞ」

そりゃ、こんなおんぼろの寮なのだから、ギイの言うことはわかるけど。

「雷が見たいなら屋上でも行つたらいいじゃないか」

嫌味で言ったのに、

「あー、そうか。託生、ナイス！」

「はい？」

「ちょっと、屋上に行くてるよ」

へ？

「なんだ？」

「雷が落ちたらどうするんだよ？！」

「落ちるかよ」

「危ないって、ギイ」

シャツの袖を引っ張りながら引き止めるぼくをじっと見詰めていると思ったら、ギイは盛大に吹き出した。そし

て、嬉しそうにぼくを抱きしめる。

「ギイ……！」

「愛されてるなあ、オレ」

「だだだって、雷が鳴っている中、子供みたいに飛び出そうなんて」

「そうかー。オレが危ないことをしようとしたら、託生、止めてくれるんだ」

「当たり前だろ」

誰だって、同じことをすると思うけど。

密かに呆れたぼくに、

「オレ、そんな心配性の託生が好きー」

ギイは猫が喉を鳴らすように、ごろごと頬を摺り寄せた。

「はいはい」

たまに、やけに子供っぽくなる。こんなギイも新鮮でいいけど。

「それより、お風呂でも入っておいでよ。髪が濡れてるじゃないか」

窓の外に頭を出していたんだから。

「んー、じゃ、一緒に入ろう」

「はあ？ ……うわっ、ギイ、下ろして！ おーろーせー！」

「託生、恋人の仲を深めようぜ」

子供から一気に大人の表情に変え、ギイはニヤリと笑って洗面所へのドアを開けたのだった。

あー、もう！ 大人か子供か、はっきりしろ！

---

2012年04月15日(日)

「いつ、オレに恋をした？」

聞かれて、言葉が詰まった。

いつ……。

自覚がないまま、気が付けば君に恋してた。

君の眼差しに、君の声に、無意識に追っている自分に気付いたとき、分不相応な想いを持った自分を叱咤した。

馬鹿なことを考えるんじゃない、と。

いつか終止符を打つ恋だと覚悟を決めていたのに、あの暗闇の中で、あの熱い腕の中で、夢のような言葉と熱い口唇を受け止めたとき。

運命の人なんだと、ぼくの本能がシグナルを送った。

---

熱い指先を肌に受け止め、熱い吐息を口唇に受け止め、ぼくの本能がむき出しになる。

纏っていた理性を一枚ずつ剥ぎ取られ、体の奥深くに君を感じたとたん、抱きしめられている自分が愛しくなった。

こんな自分が愛されるなんて、思いもしなかった。

涙の向こうに揺らいで存在する君に手を伸ばす。

絡められる熱い指に、全てを込めた。

夢よ、どうか覚めないで。

---

2011年12月30日(金)

手を繋ぐ。ビクリと無意識に拒否してしまうぼくを絡めとるように、力強く握られた手に、ホッと溜息がかかる。それさえも、君に気付かれているけれど。でも、このままでいいわけがない。ギイの優しさに甘えているわけにはいかない。君の気持ちに応えたい。だって、ギイが好きだから。

---

2011年12月28日(水)

ギイはわかってないと思う。

ほんの少し微笑むだけで、ぼくのライバルを増やすことに。

それなのに、ぼくが後輩と少し話しただけで大騒ぎする。

もう少し、自分の影響力ってのを考えてくれないかなあ。

え？お前こそって？

惚れた欲目だつてば。

ぼくが抱かれたいと思うのはギイだけなのだから。

って、ギイ？どうしたの？気分悪い？

そんな恨みがましい目で見られてもわかんないってば。

---

2011年10月01日(土)

「ごめん、託生。来週行けなくなった」

真夜中の電話。

アメリカと日本の距離。

会いたいと思ってもすぐに会える距離ではなくて。いや、そんなことよりも、彼の過密なスケジュールの中から、逢瀬に費やす時間を紡ぎだす方が至難の業だとわかっているから、

「ううん。ギイ、気にしなくていいよ」

自分の心を押し殺して、返事をするのが精一杯で。

電話の時間さえも慌しく、ギイの謝罪を聞くだけで終わったライン。

切れた携帯を床に放り、膝に頭をぶつけた。

「会いたいよ」

君に会いたい。君に触れたい。君に触れられたい。

伝えられない本心を胸の中で押しとどめようとして、涙が溢れる。

---

2011年04月04日(月)

「託生、ここにいるのか？」

ヤバイ！

「託生？」

「う…うん。すぐ行くから待って！」

だから、こっちに来ないで。

「カフス見つかったか？」

慌てて脱ごうとするも、パニック状態になったぼくの指がしっかり動いてくれない。

ああ、もう、ボタンが！

「託生？」

「あ……」

ぼくの姿を見てあんぐりと口を開けていたギイが、不敵にニヤリと笑う。

「そういうや、この頃マンネリ気味だったかな」

「そんな事ない!大丈夫!」  
全然、マンネリじゃないから。  
「懐かしいな、託生の制服姿」  
言いながらネクタイ緩めないで!上着脱がないで!  
「たまにはいいじゃん。こういうプレイも」  
プレイじゃないってば!  
「託生君、あきらめなさい」  
もしかしなくとも、ぼく、絶体絶命?

---

2011年03月24日(木)

「愛してる」と言われて何も言えなくなる。君の言葉とぼくの言葉と重みが違うような気がして。だから、重なった口唇と背中に回した腕に、ぼくの想いを込めてみるのだけれど。君の想いが大きすぎて、まだまだ足りない気がする。どうしたら、君に伝えられるのだろう。君を求めている心ひとつ分。

---

2011年03月18日(金)

ポーカーフェイスに隠されて誰にも気付かれないけれど、ぼくにはわかる。君が、どれだけ心を痛めているか。だから、側にいるよ。寄り添う事しかできないけれど、ぼくは君の隣にいる。

---

2011年03月09日(水)

「.....託生？」  
バスルームのドアを開けたギイが、真っ暗な室内に声のトーンを落として、ぼくの名前を呼んだ。  
「ここだよ、ギイ」  
窓の側にいるぼくを確認したギイはホッと息を吐き、  
「何してるんだ、託生」  
背後からぼくを包み込むように抱きしめた。  
「.....あれ」  
ぼくの指差す方角を見て納得する。  
「遠雷か」  
「なんだか、ギイみたいだね」  
「オレ？」  
「うん。遠くから見ていると、綺麗」  
.....そして、優しい。  
ぼくの言葉に片眉を上げ、  
「じゃあ、近くなら」  
と、頬にキスをする。  
「いろんなことに、巻き込まれる」  
「なんだ、それ? オレがトラブルメーカーのようじゃん」  
「巻き込まれるのも、楽しいよ?」  
「託生、フォローになってない」  
と言いつつも、なんだか楽しそうだ。  
「風が吹いてきた。もうすぐ雨になるぞ」  
少し風が強まり、ぼくとギイの髪が乱れる。

「体が冷たくなってる。もういいだろ？ 窓を閉めるぞ」

「うん」

窓とカーテンを閉め、静かになった二人きりの室内。聞こえるのは少し早くなったギイの鼓動。

もうすぐ大粒の雨が、窓を叩きつけるだろう。

その音を、ぼくは聴く事ができるのだろうか。

---

2011年02月27日(日)

「ギイ」と呼びたくて。でも、こんなぼくが呼ぶなんて、おこがましくて。「崎君」と呼ぶたびに必ず訂正されて、おそるおそる小さな声で「ギイ」と呼んでみた。風にまぎれてしまうくらい小さな声。それなのに、これ以上嬉しい事はないという表情で「託生？」とギイは振り返った。…君が、好きだよ。

---

窓際に立つギイの髪が夜風で揺れた。ぼくが見ているのに気づき「寒い？」聞かれて横に首を振る。差し出された手に素直に重ねるとシーツごとぼくを抱き締め「まだ熱い？」からかい混じりにぼくの髪を震わせた。「熱いのはギイだろ？」ぼくの声にクスクス笑い「大当たり」無遠慮な指先が滑り込んできた。

---

2011年02月18日(金)

優しい腕にストンと滑り落ちる。まるで初めから用意されていたかのような、暖かな場所。外界を閉ざし密閉されたぼくだけの異空間。ゆらゆらと揺れる淡い視界が、まるで水中に咲く花を見ているようで。指先で君を探し、口唇で君を確かめる。どうかこのまま溶けないで。ぼくだけの夢…。

---

2011年01月08日(土)

夜風が頬を撫でた。なぜか懐かしい匂いがして石畳の上で立ち止まる。優しい街灯の明かりが、ぼくを慰めるように揺らめいていた。あれから何年経ったのだろう。彼を忘れるために日本を離れたのに、まだ忘れられないぼくがいる。見上げた夜空がふいに閉ざされ「託生…」力強い腕に囚われる。これは、夢？

---

2011年01月07日(金)

「このままだと、託生を守りきれない。だから守れるだけの男になって、もう一度、託生に会いたかった」遠くを見つめて独り言のように言葉をつづっていたギイが、ぼくに戻ってくる。「今はそれだけの力をつけたつもりだ。託生、オレ達やりなおせないか？」

---

2011年01月04日(火)

ぼくからの不意打ちのキス。ギイの目が丸になったのがおかしくて吹き出すと「悪戯っ子め」逃げる間もなく長い腕に捕まった。背中に感じる体温とぼくを纏う花の香りが逃げ場を塞いでいく。「託生」肩越しに仕掛けられたギイのキス。ベッドにいざなう甘い合図のキス。

---

2010年11月28日(日)

いつ気づいたんだろう。雨の日に、ギイはぼくを抱かない。

ただ一つのシーツに包まり、子猫のように温もりを分け合って眠るだけ……。

ギイ

2013年01月05日(土)

「さすが、ギイ」

……生まれてこの方、数え切れないほど受けた賛辞。

そりや、オレでないと解決できないであろう事柄に対する言葉であろうが、その裏には「そうでないと、ギイじゃない」という思いが見え隠れして、賛辞ではなく揶揄されているような気分になって、苦々しく思っていた。

「さすが、ギイだよね。すごい！」

それが、どうだ？

託生に言われて、面食らいつつ照れてしまうことになるなんて。

どれだけ裏で動いていたことも頭を悩ませていたことも知らないのに、託生は真っ直ぐな賞賛をオレに送ってくれた。

「すごいだろ？」

だから、オレも素直に自分をさらけ出せるんだ。

そうやって、オレを受けてくれ。

お前の前でだけ、オレはオレという人間になれるのだから。

---

2012年12月28日(金)

「葉山、今日の図書当番に行ってくれ」

そう言い置いて、返事を聞かずにその場を離れた。そこにいたとしても、葉山の声を聞くことはないだろうから。

だからと言って、葉山が図書室に行かず、寮に帰ることなんてあり得ない。人一倍、責任感の強いヤツだ。

それを、オレは知っている。

案の定、了承の言葉も断りの言葉も口にせず、無言のまま足早に教室を出ていった。……オレに視線を向けることもなく。

同じ1-Cのクラスメイト。そして、オレはクラスを纏め、クラスメイトに連絡事項を伝える役に携わる級長だ。

葉山がどのクラブにも所属していない状態で交わる接点は、この環境の中、最善なものだと認識はしている。

どれだけ葉山に嫌われていようと、話しかける口実となるのだから。

「託生い。今日のクラブ早く終わりそうだから、一緒に晩飯食べよう。部屋で待ってるから」

「…………うん、わかった」

片倉が親しげに葉山に声をかけ、了承して小さく頷く葉山が視界に入り、口唇を噛み締めた。

たったそれだけのことで、血が逆流するほどの嫉妬心が己の内を渦巻く。

オレが、あと一步踏み込めば、チラリとでも見てくれるだろうか。声を聞かせてくれるだろうか。

そう思った瞬間、即座に否定し、決してあり得ない望みに乾いた笑いがこぼれた。

心に秘めた恋心は、コップの淵まで満たした水のようで、少しでも波立てば、もう零れてしまいそうだ。

しかし、これ以上、拒絶されることを恐れ、気持ちを伝える勇気がない自分自身が情けない。いつか……いつか、この想いを伝えるときが来るのだろうか。

葉山が教室を出て行く間際、ふと振り返ったように見えたのは、オレの都合のいい束の間の

夢。

---

恋は永遠か?  
ミステリアスな部分を残しておけるのなら。  
愛は永遠か?  
形を変えても許容できるのならば。  
でも、出会ったときにわかっているはず。  
この人が永遠の人なのだと。

---

2012年12月09日(日)

「や……あ……」

「嫌……か？」

ふるふると首を横に振っている託生には、自分がなにをしているのか、もうわからないのだろう。ただ、体の奥から疼く感覚に抵抗することもできずに、ただどうにかしてほしいと訴えているだけ。

眉間に皺を寄せ、オレの二の腕をきゅっと掴んで目を開けた。

潤んだ瞳が、挑戦的にオレを射る。

売られた喧嘩は買わなきゃいけないよなあ。

口唇をペロリと舐め、シーツの上に生贊を縫いとめた。

「正気でいてみろよ」

噛み付くようなキスにまぎれた、オレからの勝負。

勝つのは、どっちだ？

---

2012年11月01日(木)

ドサリと左側の机に荷物を置いた。

305号室。

これから一年生活する部屋。

同室者は、葉山託生。

部屋の空気を入れ替えるために窓を開け、冷たい風がオレの頬を撫でたとたん、まるで夢のように感じていた現実が流れ込んできた。

葉山……いや、託生……！

どう声をかけようか。

初めから託生と呼べば、驚くだらうが少しは馴染んでくれるだらうか。

あのとき、託生は他の誰でもない、オレに助けを求めた。

あれだけ高熱を出していて、覚えていることはないだらうか。

けれども、嫌われていないと本能が感じたんだ。

振り向いて部屋の全体を見回した。

この椅子に座って託生が机に向かい、あのベッドで託生が眠るんだ。

うつとりするほどの、これから的生活。

オレとの生活に慣れてもらってから告白するか。それとも……。

どうか、オレの心を受け止めてくれ。

愛してるんだ、託生……！

---

2012年07月09日(月)

託生に恋をしているんだと思っていた。

恋焦がれて、振り向いてほしくて、オレを認めてほしくて、この恋心を受け止めてほしくて…。

音楽堂で想いをぶつけ口づけをしたとき、それは間違いだと思った。

これは、恋じゃない。

託生の過去も現在も未来も、オレは愛おしいんだと。

嫉妬もした。壁を殴りたくなるくらいの怒りを感じた。

それでも、お前を形作った全てが、オレには大切なもののなんだ。

愛されることに慣れていないお前に、どうこの想いを伝えればいいのか。

いや、焦る必要はないさ。今、お前は、この腕の中にいるのだから。

愛に飢えたお前に「愛してる」と囁き続けよう。

真綿で包むように、この腕の中がこの世で最上の場所であるように、オレは演じ続けるから。

だからオレだけを見てくれ。

オレだけに、愛を囁いてくれないか？

オレは、お前を愛しているのだから。

---

2012年04月15日(日)

抱かれている託生の目が、夢現に揺らいでいるのは気付いていた。

快感に流されながら、しかし、刹那の時間なのだと切羽詰まったものを感じていた。

なにが、お前をおびえさす？

まだ言葉が足りないのか？それとも、どこにも飛び立てないように閉じ込めたなら、安心するのか？

たぶん……いや、それはオレの願望なのだろう。

焦るな。

託生がオレの腕の中で安心して眠れるように。

オレは託生を真綿に包んで、何物からも守ってやる。

---

2012年04月03日(火)

恋人とは言えども、最初は口唇を触れ合わせるだけのキスだった。

一線を越えたとき、オレは初めて柔らかさを味わった。

しかし、それは、オレの一方的な行動。

チロリと舐めたそれに託生が絡ませ、応えてくれたあのとき。

覗き込んだ瞳に、同じ欲望の色を見たとき。

全てが溶け合うような甘く淫猥な夢に、オレは自ら飛び込んだ。

---

2011年12月30日(金)

手を繋ぐ。それだけで全てが絡み合ったような気がした。まだ、手、だけだけど。これ以上、近づくことはできないけど。それでも、託生と心が繋がっているような気がした。運命の人間だと感じたんだ。ゆっくりでいい。無理しなくていい。けれども、覚えておいてくれ。お前の隣には必ずオレがいることを。

---

手を繋ぐ。  
熱く燃える指を絡ませ。  
心を繋ぐ。  
求める心が絡み合う喜び。  
体を繋ぐ。  
至上の幸せを感じる時間。  
どれ一つ欠けることなく繋げる人間に会えた奇跡。  
オレは、生きながら天国で生きる権利を手に入れた。

---

2011年12月29日(木)

お前な.....。

抱かれたいと思うのは...なんて、あっさり言ってくれるなよ。

ここが真昼間の温室じゃなかったら、問答無用で服を脱がされているところだぞ？

そうやって、頬を染め潤んだ瞳を向けられてみろ。

誰だって誘われていると勘違いしてもおかしくない。

無自覚に醸し出す艶っぽさと、そういう自分に気付かない無邪気な鈍さ。

クラリとした視界に、キヨトンとした託生が映り腕を伸ばした。

誘ったのはお前だからな。覚悟してもらおうか。

「なあ。今すぐ、ここでオレに抱かれるのと、今夜、足腰立たなくなるまで抱かれるのと、どっちがいい？」

「なななんなんだよ、その選択肢？！」

「託生、どっち？」

「どっちも、イヤだよ！」

「じゃあ、今すぐゼロ番な」

「ええっ？！」

となるわけですね(笑)

---

2011年11月25日(金)

「愛しているよ」

何度も言った。

「どうして、ぼくなんだよ？」

何度も聞いた。

理由が必要か？

葉山託生という人間が、そこに存在した瞬間に、たぶん決まっていたんだ。

オレがお前に恋することを。

見えない糸を手繰り寄せ、がむしゃらにお前の瞳に映ることを考え...。

そして、今、お前の瞳にはオレがいる。

手を伸ばせばお前に触れられる。

口唇を寄せば瞳を伏せ応えてくれるお前がいる。

心が打ち震える幸せ。

だから、もう、オレから離れるな。

何者にも目を向けるな。  
何も見なくていい。  
オレだけを見ている。

---

2011年07月25日(月)

暗闇を怖がるくせに、波の音が響く砂浜に連れてきたとたん、託生が目を輝かせた。頭上には落ちてきそうなくらい、所狭しと輝く星の数々。あんぐりと空を仰ぎ見る託生に、クスリと微笑が漏れた。「すごいね……」言葉を発した事さえ自覚はしていないだろう。この満天の星空よりも、お前の方が綺麗だよ。

---

2011年03月27日(日)

ピクピクしている託生の腕を掴み、足早に寮の階段を下りる。

「どこ、行くんだよ」

これからどんな無理難題を仕掛けられるのか、できるのなら行きたくないと感情が見え隠れする。それでもついてくるのは、自分が不利だと悟っているからだ。

「食堂?」

そう。余りにも振り回されて、さすがに腹が減った。しかも、こんな時間だし。

一応、人が少ない一角のテーブルを選びトレイを置く。

「いただきます」

託生が味噌汁を一口飲んで、喉元を通り過ぎたのを確認し、

「託生、あーんって食べさせて」

嫌がる事を承知で要求した。

とたん託生の手から箸が転げ落ち、あんぐりと口を開けたまま頬が赤く染まつてくる。

「ギイ……今、なんて?」

「あーんって、食べさせてくれ」

「バツ…!なに、考えてんだよ?!」

周囲を気にしてか、小声で噛みつく。

「これだけ振り回されたからには、それなりの代償があつてもいいだろ?」

「だからって、ここ食堂!」

食べさせてもらうのに、食堂以外どこがある?

「じゃ、反対に、オレがあーんって食べさせてやろうか?」

「ヤダよ!」

間髪入れずに否定して、でも、振り回した自覚があるのか上目遣いにオレを見る。

「他のじゃダメ?」

……毎回思うが、この角度を計算していない所が不思議だ。許してやりたい気分になる。

いやいや、それじゃ、オレが振り回され損だ。

「オレは別にいいけど、じゃあ、何を要求し・よ・う・か・な」

ゆっくり区切ってニヤリと笑えば、

「いい、考えなくていいってば!」

何を想像したのか託生は全力で阻止した。

どんな想像をしたのかは難くないが、オレはどちらでも万々歳だ。それなりの報酬をもらって当然。

「どうする?」

オレの言葉に、託生は、  
「う——つ」  
と小さく唸り、自分の皿の上のコロッケに怒りを込めて箸をぶすりと突き刺し、  
「あーんっ!」  
やけくそにずいっとオレの口の前に差し出した。  
「.....託生、大きくないか?」  
「.....あーん」  
いじめすぎたか、涙で潤んだ目が座っている。  
いいかげん、弱いよなあ、オレ。  
差し出されたコロッケを一口かじって、託生の腕を押しやる。  
「ごちそうさん」  
あっさりと引いたオレに拍子抜けしたのか、キヨトンとして、  
「それだけでいいの?」  
コロッケに箸を突き刺したまま聞いてくる。  
「もう一口、あーん、してくれるって?」  
ぶんぶん首を横に振って慌てて食べだした託生を笑い、オレも空腹を訴えている胃袋を静めるために、大人しく箸を取った。  
残りはベッドの上で請求させてもらうとして、実はそれほど怒っていなかったりする。それどころか、託生が遠慮なくオレを振り回した事に、感動すらしていた。  
同時にこれから先も託生には勝てないだろうなど、身を持って悟ったのは成り行きとは言え、あまり気付きたくなかった事実である。  
惚れた方が負け。古人の言う事は間違いなかった。

---

2011年03月25日(金)

この世にたったひとつしかない禁断の果実。芳醇な香りと甘い蜜が思考を狂わせ、誘われるがままに味わえば、もう二度と放す事はできない。もしも手放せば、永遠に飢えと渴きに苦しみ干からびるだろう。だから、お前が逃げる前に引きずり込んでやる。誰の手も届かない漆黒の闇へ。.....お前はオレの物だ。

---

2011年03月18日(金)

お前の悲しそうな顔を見れば、オレも悲しくなる。お前の泣き顔を見れば、オレも泣きたくなる。けれども、泣きたい時は泣けばいい。オレが全部受け止めてやるから。そして泣き疲れて眠った後は、ほんの少しでも笑ってくれ。お前の笑顔が、なによりの元気の素だから。

---

2011年03月05日(土)

暗い闇に潮騒が聞こえる。頭に優しく流れ込む潮騒を求め、五感を頼りに自ら手を伸ばした。指先に触れる泡が熱く輝き、オレを包み込んでいく。遠く浅く聞こえていた波の音が耳に大きく響いた時、オレの全てが波に取り込まれ溶け合った。そして、波が消える。

---

2011年02月27日(日)

今では当たり前のように呼びかけられるオレの名前。でも、初めて「ギイ」と呼ばれた時の胸の

高鳴りを、今でも覚えている。絶望的な片思いにあがいて、それでも諦められなくて、音楽堂で溢れ出た想いをぶつけてしまった入寮日。初めて触れた口唇に奇跡を感じたあの日。自分の名前が特別な物に感じた。

---

「ギイ」当たり前のように呼ばれた自分の名前にドキリとした。誰もが「ギイ」と呼ぶ中、「崎君」と遠慮がちに呼んでいた愛しい恋人の声が、やっと「ギイ」に変わったとき。触れる事はできないけれど、少しだけ心が触れ合ったような気がした。「託生」オレの愛しい最初で最後の恋人。

---

2011年02月26日(土)

肩に頬を乗せホッと吐き出された安堵の溜息に、クスリと微笑が漏れる。左腕で薄い肩を抱き右手でさらさらの黒髪をかきあげれば、猫が喉を鳴らすように安心しきった表情でオレに身を預け、気持ち良さそうに目を閉じた。そんな顔をされると何もできないじゃないか。風に揺れる305号室のカーテンの前。

---

2011年01月14日(金)

誰よりも信じたかったんだ。誰よりも愛されたかったんだ。傷ついた心を癒せるのなら、オレは道化師にでもなってやる。全てをかけて、命をかけて、お前を愛している。託生……！

---

2011年01月09日(日)

それが恋だと自覚したのは、いつだったのか。気付けば、託生の事ばかり考えているオレがいた。たった一瞬の出来事。でも、永遠に続く切ない恋心。成就する可能性なんてゼロに等しいのに、それでも諦めきれなくて託生を追って、ここ祠堂まで来てしまった。

---

2011年01月09日(日)

「将来の夢は？」子供の頃、小学校の作文なんかで書かされた事がある。もうその頃には親父の後を継ぐ事を自覚していたから、優等生の答えを書いたけれど、事実、オレの夢なんて自分でわからなかった。だからこそ託生が憧れだった。楽しそうにバイオリンを奏でる姿を見て、わけもなく心が引かれた。

---

2011年01月09日(日)

シーツに残ったお前の香りがオレの気持ちを搔き乱し、満たされたつもりの心に破片となって突き刺さる。ドアの向こうに消えていく姿が、残像のように何度も脳裏を横切った。

---

2011年01月08日(土)

背中に柔らかな草を感じながら、ポツカリと開いた蒼を見ていた。まるで託生に会えない自分の心のようで。目を背けるように瞳を閉じると、微かな足音が耳に届いた。オレの隣で止まった足音。ふいに柔らかな唇が落ちてきて、思わず腕を伸ばした。突然訪れた幸せを手放したくなくて。託生、このまま……。

---

2011年01月02日(日)

お前への想いを鏡に映したなら、その中に見えるのはどす黒い嫉妬と独占欲。お前が思っているオレを壊したくなくて、醜いオレを鏡の中に隠している。お前が鏡に気付いたのなら、どうしてくれよう。そのまま鏡の中に引きずり入れようか。万華鏡に隠された狂気。

---

2010年12月15日(水)

<たぶんボツ>聞いてくれよ。前から可愛い可愛いと思っていたんだが、この頃託生がパワーアップしてきて、オレ、理性試されてるのかと悩んでいるんだ。朝起きるだろ？以前は、オレに慣れてなかったから、ちょっとした物音でも目を覚ましていたのに、今は熟睡してるんだよ。

<たぶんボツ>「安心してくれるんだな」と、感動しているがな、この寝顔がまた可愛い。ああ、もちろん、その後30分ほど寝顔を堪能しているけどな。それで、寝起きなんて、飛びつきたいくらい可愛いんだぜ。

<たぶんボツ>ぼや～んとして子供みたいなんだけど、多分託生自身も気がついてないと思うが、あいつベッドに起き上がった後、乾いた唇を湿らすようになめるんだ。もう艶っぽくて、誘われるとしか考えられなくて、でも、飛びついたら殴られるのわかってるから、今は我慢しているが。

---

2010年12月15日(水)

<たぶんボツ>オレは、わざと聞こえない振りをした。訂正してギイと呼んでくれるものと思っていたのに、託生は何も言わないままだ。そろりと、託生を振り返る。ギヨッ？！  
唇を噛み締め、オレを見詰めた託生の瞳に、こぼれ落ちそうな涙。「託生？！」慌てて立ち上がり、ポロリと涙が落ちた。

---

2010年11月28日(日)

ほんの数分前まで一緒にいたのに、もう、お前を求めている。託生の温もりをまだ覚えているのに、もうお前に触れたくなる。目を閉じれば、お前の吐息もお前の熱さも鮮明に甦るのに、腕の中にもうお前はない。

### 章三 & 奈美子

2010年12月15日(水)

「でも、なんかいいなあ」「何が！？」「一度でいいから、言われてみたい……」うつとりと宙を見る奈美子の瞳は、恋する乙女そのものだ。恥かしくてそんなこと死んでも言えるか。墓穴を掘ったかもしれない章三は、そそくさとキッチンをあとにした。

---

「よく出来ました」章三に褒められて、満更でもない奈美子が笑う。「大丈夫かな？」  
「ギイなら上手くやるさ」車の走り去った道を見ながら、章三が呟いた。

# 日常会話

2014年07月06日(日)

「尻に注射だと？！」

「そりゃ、ブロック注射って患部に打つんだから仕方ないだろ？いたたたた」

「人前で尻を出すんだろうが！」

「人聞きの悪いこと言うな。医者に注射打ってもらうだけ」

「医者とは言えオレ以外の人間に……！」

「……別に反対してもいいけど、夜の相手はいつまでたってもできないからね」

「ハッ！」

「だからって、動けないからここぞとばかりにチャンースって襲ったら出ていくから」

「……オレガマチガッテマシタ。チュウシャウケテキテクダサイ」

……うん、一進一退だなと。ふう。

なにごとも経験！ネタの元！(やけくそ)

---

2014年06月28日(土)

「島岡……」

「はい？」

「今より2倍、いや5倍の容量の充電池の開発をさせろ。充電速度も短く……ん？発電装置を備えた携帯を開発した方が早いか？使っていない間に電力が増えるよな」

「義一さん……」

「充電切れのない携帯って、なかなかいいと思わないか？」

「義一さん、涙目ですよ」

---

013年07月11日(木)

「託生」

「……」

「おい、託生」

「授業中になんだよ。休み時間に聞いてあげるから」

「なあ、オレ、託生と制服デートやってみたい」

「……はあ？」

「制服デート」

「制服って、これ？」

「な、いいだろ？」

「いいとか悪いとか、そういう問題じゃなくて……っ！ギイ、授業中だってば」

「なあ、なあ、託生。制服デートしようぜ。いたっ、章三～～～」

「制服デートでも体操服デートも、やりたきゃ勝手にやってこい。授業妨害するな」

「やってこいだってさ、託生」

「やりたくないよ！」

「……葉山、英語の授業はそんなにイヤか」

「え……いえ、あの、すみません」

「丁度いいから、P15とP16を読んで訳してくれ」

「う.....はい.....(ギ~~~イ~~~~!)」

---

2013年05月25日(土)

「ギイの爪、綺麗だね」

「.....は？つめ？」

「うん」

「爪って、これ？」

「そう。すごく綺麗な形だね」

「爪が？」

「うん」

「.....爪を褒められたのは初めてだ(ぼそり)」

「ないなあ」

「なにが？」

「章三か」

「さっきから、邪魔なんだけどな。なに、探してるんだよ」

「爪磨き」

「...は？」

「託生がさ、オレの爪が綺麗って言ってくれたんだ。だから、ちょっと磨こうかと思ったんだけど、購買部に売っていないんだな」

「...男子校だっての、お前、忘れてないか？」

---

2012年10月19日(金)

「章三一。肉じゃがが食いたい」

「お前な.....ここをどこだと思ってるんだ？」

「305号室。オレと託生のスウィートルーム」

「スウィートルームは余計だ。じゃなくて.....」

「材料は買ってきてぞ。前に章三が教えてくれたもの全部。調味料も。な、託生？」

「うん」

「葉山。お前、なぜギイを止めない？」

「だって.....」

「あれこれスーパーで選ぶの、新婚気分で楽しかったもんな」

「ギイ！」

「.....新婚気分を味わうのは勝手だけどな、根本的に、ここは寮の部屋だ！水はあっても火はない！」

「パッパカパッパ、パッパカパッパッパー♪Electrolux Mobile Kitchen♪と、鍋と包丁～♪」

「ギイ.....音程が.....」

「今更だ、葉山。ギイ、それは。ノートパソコンか？」

「ちっちち。これはな、携帯するIHクッキングヒーターだ」

「はあ？！」

「ということで、章三君。肉じゃが、作って♪」

.....というのが、思い浮かびました。これを見て。

⇒<http://t.co/ipYPUVN5>

2012年10月04日(木)

「崎君……朝から掃除って……」

「普通、朝と晩と掃除するものなんだろう？」

「え？」

「……託生と片倉は、いつ掃除してたんだ？」

「……部屋は2日か3日に1回くらい。お風呂掃除は毎日交代で、洗面台は一週間に1回くらい」

「……あのヤロー」

「崎君？」

「そのルール採用な」

2012年05月08日(火)

「ギイって、冬はスキー、夏はマリンスポーツって感じだよね。穂乃香さんも言ってたし」

「あー、まあな。祠堂に入る前までだけど」

「でも、真っ赤になりそうだね。日焼けひどそう」

「もちろん日焼け止め塗ってたぞ？ 水ぶくれなんて、ごめんだからな」

「……背中は？」

「はい？」

「背中に日焼け止め塗ったの、だれ？」

「あのー、たくみくん？」

「……別にいいけどね。誰とバカンスを楽しんでいても」

「いや、あの、祠堂に入るまでだぞ？！祠堂に入ってからは一度もない！」

「ふうん、そうか。ぼく達が中学のときには、もうプレイボーイだったんだ」

「そんなことは…！」

「海千山千って言ってたよ？ 来るもの拒まず、去るもの追わず？」

「……あのな、託生」

「……なんか悔しい」

「へ？」

「ぼくが塗ってあげたかった！」

「……託生」

「ベッタベタに日焼け止め塗ってあげたのに！」

「ああ、これから、託生が塗ってくれよ」

「その上で、ウインナーを焼くんだ」

「……おい」

「食べられないだろうけど」

「そうか？ってか、おい、いつの間にワイン一本空けた？！」

「日焼け止め、ぼくが塗るんだからね！」

「はいはい。そのときは頼むな」

「間違えて、日焼けオイルでも文句言うなよ」

「言いません」

「よしつ。じゃ、ぼく寝るから」

「いきなりかよ？！」

2012年02月06日(月)

「お前な....。葉山の肩を持つつもりはないが焦りすぎ」

「そう.....なのか？」

「つい数ヶ月前まで他人を寄せ付けなかった奴だぞ？言葉の裏なんてわかるわけがない」

「オレが言ったことは.....」

「口説いてるつもりでも、葉山にとっては『ただの言葉』かもしれないぞ？」

「.....orz」

---

2012年01月24日(火)

「予防接種を受けていても、感染するときはするんだよ」

「ものすごく損した気分だ」

「はいはい。うだうだ言ってないで、薬を飲んだらさっさと寝る」

「託生にも移したかもな。ごめん」

「一応、先生から飲んでおきなさいって、ぼくも薬を貰ったから気にしないで」

---

2012年01月09日(月)

「硬くなったものは、小さく切って揚げて、醤油をかけると旨いぞ」

「赤池君、これ、そのまま揚げちゃダメなの？切るのも大変なんだけど」

「.....やってみたらどうだ？」

「あ.....赤池君！もちが爆発してる！ああ！膨れてる！うわあつ！」

「だから小さく切るんだよ」

「どうしよう。はんぺんくらい大きくなっちゃった.....」

「ギイにでも食べさせとけばいいだろ」

「あ、そうか」

「託生の手作りか？！特大なのは託生の気持ちだよな？！」

「.....うん」

「どこまでもポジティブなやつだ（呆）」

---

2011年12月31日(土)

「5.4.3.2.1Happy New Year！なんだよね？」

「カウントダウンをしたいのか？」

「そういうわけじゃないけど、日本じゃ除夜の鐘で年を越すから」

「煩惱の数だったよな」

「よくわかんないけど」

「ぷつ。託生らしい」

「笑うなよ」

「除夜の数より、カウントダウンより、オレは託生と繋がって年を越したいよ」

「ギ.....っ！」

---

2011年10月16日(日)

「『夢よゆめ恋しき人に逢ひ見すな さめての後にわびしかりけり』だと」  
「はい？ なにか言った、赤池君？」  
「はあ。今、僕達はどこに向かってるんだ？」  
「えっと、恒例の階段長会議だよね？」  
「それに、お前さんが呼ばれてるってことは……わかるだろ？」  
「ギイ？」  
「しかいないだろう」  
「ギイと夢とどう関係あるんだよ？」  
「ここんところ葉山の夢ばかり見てるんだとさ」  
「///」  
「で、朝起きて、がっくりきていると」  
「がっくり？」  
「そうそう。夢でしか託生に会えないから、なんとかしろってな」  
「…………夢でも会えたら、ぼくは嬉しいけどな（ぼそり）」  
「はーやーまー」  
「あ、いや、違うよ！ ギイのことじゃないよ！」  
「……ま、いいけどな。そういうことで、今回は葉山を投入しろってさ。いったい僕をなんだと思っているんだ、あいつは？」  
「あの、えっと、ごめん……なさい？」  
「おい、そこ、疑問系にするな」

---

2011年08月01日(月)  
「託生も舐めろよ」  
「え…でも……」  
「今まで何回か、経験してるだろ？」  
「それは、そうだけど……」  
「ほら、口開けて」  
「うん……」  
「託生？」  
「甘っ！」  
「そりゃ、コーティングされてるし。託生、舌見せて」  
「べっ」  
「あー、真っ赤。オレとお揃い♪」  
「だから、イヤだったんだよ。りんごあめ」  
タε=ε=～ε(・д・)3`

---

2011年07月14日(木)  
「だから、ぼくはイヤなんだってば！」  
「お前は、人の目を気にしすぎなんだよ」  
「でもね、気になるものは気になるんだよ。だから人前では止めてほしいって言ってるんだ！」  
「オレ達、恋人同士なんだぜ？ 人目を気にしていたら、おちおちデートだってできやしないじゃないか」  
「…………どこまでも平行線だよね。こんなので、これから先、一緒にいられるのかな？」  
「え、あ、託生？」

「一つのほこりびが連鎖して、気がつけば取り返しがつかない所まで来ていって、結局別れてしまったカップルも多いよね」  
「た……託生！」  
「ギイと別れたくないけど、そうなっても仕方がないのかな……」  
「いや、ちょっと待ってくれ！」  
「だって、これは気持ちの問題だし、ぼくは慣れるなんて事はできないだろうし。でも、それがギイには不服なんだろ？だったら、無理だよ」  
「すまん！オレが託生に気持ちを押し付けすぎた。オレが悪い。だから、別れるなんて言わないでくれ！」  
「でも、一つでも不満を持っていると、絶対後から後からどんどん不満が出てくるに決まってるよ。そんな状態で一緒にいるなんて、お互い不幸だと思う」  
「託生、オレが悪かった！」

つ……続かない；ネガティブ託生くん(笑)  
ただ、泣き落としの土下座くらいしないと、たぶん無理じゃないかなとは思ってる。  
がんばれ、ギイ。

---

2011年07月10日(日)

「熱い！」  
「んー？」  
「だから、ギイ、熱い！」  
「そりゃ、夏だからな」  
「じゃなくて、その暑いじゃなくて、熱いの！もう、引っ付くなよ」  
「引っ付いてないぞ。オレはマジックテープかっての。託生を抱きしめているだけだ」  
「だから、それが熱いんだってば！」  
「冷たいなあ。お前、恋人だろ？」  
「恋人だらうと何だらうと、熱いものは熱いの！ただでさえ暑いんだから」  
「いいじやん。どうせなら、二人でもっと汗かくか」  
「ちっがーーーう！って、ちょっ……ダメだって！熱いんだってば！！」  
……マジ、暑いっすね。とけそう；

---

2011年06月27日(月)

「託生と知り合った人間は、全員託生のファンになるんだもんなあ」  
「……それって、お友達作っちゃダメってこと？(グスン)」  
「いや！ そうじゃなくって！」  
「だって、ギイ、機嫌悪くなるじゃないか」  
「あのな。友情と恋情と区別できるか？」  
「ん？ ……恋情って、そんな奇特な人、ギイ以外いないじゃない」  
「……ようするに、区別できないってことだよな(溜息)」  
「ギイは、わかるの？」  
「わかるよ」  
「なんで？！」  
「そりゃ、ライバルだから」  
「…ライバルじゃないよ。だって、ぼく、ギイを愛してるのだから」

2011年06月20日(月)

「な...なに、ギイ?」「んー、ちょっと熱いんじゃない?」「そうかな?」「計ってみろよ」「うん」ピピピ♪「どれど  
れ。...ぴったり100度か」「え、ぼく、沸騰してるの?！」...とボケてる託生くんが通り過ぎた。

2011年05月22日(日)

「ちょ...ギイ!」「うーん、このうなじの色っぽさがなんとも」「もう、ダメだって!あ、右手、どこに...!」「誘われたら  
応えなくちゃな」「誘ってない!ギイ、ほんとうにダメだって。着付けできないんだから」「オレ、できる」「嘘?」「ギ  
イ君の記憶力を信じなさい」「え、ちょっと、裾捲らないで!」

2011年05月10日(火)

「...あのさ、ギイ」

「うん?」

「ギイは、いつ一人になるの?」

「は?オレ、託生の言っている意味がわからん」

「ごめん。え...っとね、一人になりたい時間ってない?」

「託生は、オレというのが嫌なのか?」

「違う...違うよ。そうじゃなくて、ほら、一人でぼーっとしたり」

「そんな時間があるなら、オレは託生といたい」

「でもね。気疲れしない?」

「1年間無駄に過ごしたんだ。1秒でも託生と一緒にいたいって思うのは、おかしいか?」

「ぼくなんかといったって、面白くもないだろ?会話が続くわけでもないし、接触嫌悪症だし...」

「あのな、オレが『ただいま』ってドアを開けたら、託生が必ず『お帰り』って言ってくれるだろ?それがすごく嬉  
しいんだよ。疲れもなにもかも、吹っ飛んじまう。他人はどうか知らないが、一人で時間を過ごすよりも、オ  
レは託生と一緒にいる方が遙かに有意義だ」

「.....どうして、ぼくなんだよ?」

「託生が託生だからだ。それ以外理由なんてない」

2011年01月29日(土)

「託生、肌がかさついてるぞ」「うーん、乾燥してるのかな...」「今日、商品開発部からボディーローションの  
試供品を貰ったんだ。つけてやるよ」「ギイ、ありがとう」

.....「ギイ...これ、なんだかチョコレートの匂いがするんだけど...」「バレンタイン用のボディーローションだか  
ら」「バレンタイン用? !なに、それ?」「美味そうだな、託生」「ぼくは食べ物じゃないからね!もう!舐め  
ないでよ!」「いっただっきま~す♪」「ギイ!」

2011年01月14日(金)

「そ...うなんだけど、子供だったから横文字が読めなくて。日本語で書いてあるのもあったんだよ『私を今まで  
連れてって』とか」「ああ、Fly Me to the Moonだ」「昔、弾いてみたくて弾いたことがあるんだけど、なんか  
ちょっと違和感を感じて...うまく言えないんだけど...うーん...」

「で、今弾いてみてどうだった?」「違和感はなかったよ?」「託生が大人になったって証拠だよ」「どうし

て?」「マスカレードは大人の恋の曲だから」

---

2011年01月06日(木)

「ギイ、おみやげ」「おっ、託生からのプレゼントか。ありが...」「どうしたの?」「なんで、サボテン?」「可愛いから」(可愛いのか?いやでも、託生がオレの為に買っててくれたんだ)「託生、ありがとう」数日後「託生、ほら!」「何か出てる」「毎日託生と呼んでら赤ん坊が出来た」

2014年09月04日(木)

「子だくさんになってたりして」

「めでたいことだが、彼が気の毒だな。そのたびに寿命が減るぞ」

「うーん、ぼくは、過保護のような気がするな」

「.....お前が男でよかったと心から思うよ」

「え、何か言った？」

「いや、なんでも」

---

2014年08月15日(金)Blogより転載

「山」「寒い」「包む」を使って感動する短文を作りなさい。#voitekatyan

<http://shindanmaker.com/103535>

感動はないけれどReset設定で。

間接照明だけの薄暗いリビングに、もう託生は寝ているのだろうと音を立てずに開けた寝室のドアの向こうで、黒い影がもぞもぞと動き、その場で足を止めた。

「.....なにやってるんだ？」

「遭難ごっこ」

「は.....？」

ただいまの挨拶をすっ飛ばして質問したオレに短く答えた託生は、動いた拍子に落ちた毛布の端を再度自分の体に巻き付ける。

カーテンを開け放した窓の下で小さく座り込み、毛布に包まれた託生を見れば、遭難中に見えなくもないが、なにしろここは空調設備が完璧なペントハウスであるからして、当たり前だが全くもって寒くはない。それどころか、ここまで完璧に毛布を巻き付ければ、暑いだけだろう。

それでも、自分が極寒の山中に佇んでいるような錯覚を受けるのは、それだけ託生が至極真面目だからだ。

理由を聞いても、託生は答えないだろう。プロの意地というやつで。

一緒に暮らし始めて知った、託生の歯を食いしばり見えない何かに向かって真っ直ぐに睨みつけるような眼差し。

納得できない音に何時間も防音室に籠り、それでも自分の思っている音に近づけないとき、託生は常人には理解不能な行動を取ることがある。

今は、気分だけでも遭難したように自分を極限まで追い込んで、なんとか乗り越えようと足搔いているところなのだろう。やっていることは子供染みているようでも、託生なりに真剣なのだ。

脱いだ上着をベッドに放り、託生の横に座って肩を抱き寄せ、改めて毛布で包む。

「ギイ？」

「明日の朝、二人で山を下りようか」

「下りれるかな？」

「下りれるさ、きっと」

少し汗ばんだ頬にキスを落とし、疲れ切った体をほぐすように、ゆっくりと黒髪を梳いて眠りに促すと、オレの意図を察した託生は小さく微笑み、そっと瞳を閉じた。

何事からも託生を守りたいけれど、こればかりは託生自身の力で乗り越えるものだと、オレは知っている。他人に癒しをもたらす託生の音が、自分の血肉を分け与えるような努力の上に成り立っていることも。

だから、せめてオレの腕の中で眠ってくれ。

窓の外で煌びやかに輝く摩天楼も、夜明け前はひと時の眠りに落ちるのだから。

---

2014年05月15日(金)Blogより転載

琥珀色の紅茶にミルクが混ざりゆくようなトロリとした空間に静肅が満ちる。

重なり崩れる輪郭。共有する体温。

現実を忘れ二人で溺れる快楽の海は、どこまでも深く底が見えない。

肩から滑り落ちた手と耳元にかかった細く長い吐息が合図となり、止まっていた時間が動き出した。

震える瞼がゆっくりと開き、幸せそうに微笑む。

何度見ても見飽きないオレしか知らない笑顔に、いつも抱いている飢餓感が薄らいでいるような気がした。

「疲れたか？」

「少し……」

体を移動させながら託生を腕の中に抱き、少し乾いた口唇にキスをした。

鼻先に立ち上る託生の香りに、もう一度体を繋げたい欲求が体を駆け巡るが、もう今夜は無理だろう。

髪を梳くオレの指の動きに、目を閉じて委ねる託生に疲れの色が見える。

離れていた時間を取り戻すかのように、凝縮され濃密になってしまう時間を申し訳なく思うも、ひとたび体を重ねれば我を忘れ、貪るがごとく求めてしまう。

そして、あと何度も抱けるのかと恐怖する。

あのモノクロの世界に戻る日が、いつか必ず来るのだから。

しばらくすると、安らかな寝息が聞こえてきた。

安心しきった無垢な表情にホッと溜息を吐き、託生の体を引き寄せ目を閉じる。

今だけは闇のベールの陰に隠れて、二人きり……。

---

2014年05月05日(月)

「ちくしょ——つ！」

「ひっ！」

玄関口ビーで副社長を待っていたら、廊下の奥から絶叫が聞こえ体を竦ませた。

今日は、なんなんすか？！

「そろそろ充電させないと、効率が悪いですからね」

と、昨日は島岡さんが早め帰宅できるようスケジュールを調整したから、今日は機嫌がいいものだと思っていたのにい！

角から現れた副社長の背後に、悶々とした禍々しい渦が巻いているような気がする。

「お…おはようございます、副社長」

直角90度に頭を下げ、副社長の視線から逃れた。お願ひですから、無理難題言わないで下さいよ～。

「.....松本」  
「は.....はいい！」  
「言わないでくださいってば！」  
「今夜も早く帰るから調整しろ」  
「ええええ？！」  
「お前、Fグループ副社長付き優秀な第二秘書だろ？このくらい簡単だよな？」  
僕の顔を覗き込む副社長の目が据わってる。  
「ぜ.....善処します」  
「そんな頼りないこと言うなよ。頼んだぞ、ま、つ、も、と」  
「ひえっ！」  
神様、仏様、誰でもいいです！か弱い僕を助けて！

続きの松本君サイドでした。

---

2014年04月20日(日)

「よ、桜井。今日はオフなのか？」  
「ジェームズ、君こそ.....ああ、副社長もオフなのか」  
「そういうこと。しかし、せっかくのオフなのに射撃訓練だとは、相変わらずだな」  
「日本にいる間は、全然撃てなかったからね」  
「あー、そうか。日本は銃に厳しい平和な国だもんな。何年行ってたんだ？」  
「ちょうど5年かな.....」  
バンバンバンバンバン！  
「.....と言いつつ、全弾命中って.....化けもんか？！」  
「いや、やっぱり鈍ってるみたいだ。数センチずれてる」  
「なあ。本当に5年間触ってなかったのか？これっぽっちも？」  
「おもちゃなら、触ったことがあるが.....」  
「は？おもちゃ？」  
「日本の夏祭りの夜店に射的という出し物があって、事務所のみんなと毎年行っていたんだ」  
「おもちゃの銃で、的にでも当てるのか？」  
「そう。棚に景品が並んでいて、当てて落としたら貰える遊びだったよ」  
「.....俺は今、その店の店主にものすごく同情したぞ」  
「？？？」

---

2014年3月20日(土) Blogより転載

【 蛍 】

まるで螢のようだ。  
身の奥深くに受ける激しさと対照的に、緩やかなせせらぎを飛び交う柔らかな光がギイに重なった。  
思い浮かべたとたん、ほんの少しだけ楽しく口元がほころび、重ねた口唇がそのわずかな動きを読み取って、  
「なんだよ？」  
不服そうに動きを止める。  
「ううん」

「思い出し笑いができるほど、随分と余裕があるんだな」

「違うって………ば……っ！」

えぐるように体を突き刺され、声が裏返る。

余裕なんてあるわけがない。受け止めるのが精一杯で、いつも汗に滑る背中を抱きしめているだけじゃないか。

心が交じり、体も交じり、けれども、いつもぼくは必死にギイを掴んでいる。

彼のテリトリーに、ぼくが飛び込んだだけ。ギイは、ここから動けないし、動かない。

もしも、ぼくが姿を消したならば、探すことなく諦めるだろう。ホッと安堵の溜息を吐きながら。

そして、また時間の流れに立ち止まつたまま、未来を考えることなく生きていくんだ。

「待つ……う……」

「待たない、託生……たくみ……」

気を削いだお仕置きだとばかりに体を進めるギイに不満を口にするも、あっさりと退けられ、熱い指がぼくを翻弄する。体中を駆け巡るうねりが出口を求め、

「ギイ…もっと……」

ポツリと音が零れ落ちた。

もっと、側に。二人の輪郭が融けるほど、近くに。

口内を探るように忍び込んだ熱い塊に、甘い水はこちらにあるのだとばかりに深く絡ませた。

「愛してる、ギイ……」

ぼくにあるのは、この心と体だけ。今、ギイの腕の中にある、ぼく自身だけだ。それ以上の物はないにないけれど、ぼくの全てはギイの物だから……。

激しさを増す愛に、不要な物がそぎ落とされ、むき出しの欲望がぼくを包み込んでいく。君を求める心だけが浮き上がり、研ぎ澄ましていく。

何物にも代えられない極上の頂を駆け上がり二人で落ちた先は、甘い水の中だろうか。

ほ ほ ほたる こい。

---

2013年10月30日(水)

「ギイ……」

「ん、なんだ？」

振り向いたと同時に、託生がべったり抱きついてきた。

条件反射で、背中に回ったオレの腕と、超元気になる下半身。

なのに、ついつい下半身を離し、その分重力に誘われた上半身がオレの肩にかかり、右足を後ろに下げ託生を支えた。

「託生……」

「うー」

「託生くん？」

「あー、やっと落ち着いた」

「は？」

にっこり笑った託生は可愛いが、この中途半端に置き去りにされたオレをどうしろと？

「ギュッてするの習慣みたいになっていたみたいで、出張に行っている間、落ち着かなかつたんだよね」

「ぎゅつ？」

「うん、そう」

「それを追求して、オレが欲しいとかなかつたのか？」

「うん。全然」  
あっさり、ぱっさり言われて、力が抜けた。  
オレは、出張中、四六時中、託生が欲しかったぞ！  
キヨトンとオレを見ている託生に、まだまだなのだと思い知った。  
「託生」  
「なに？」  
「オレは、落ち着いてない」  
言うなり濃厚なキスを仕掛け、舌を絡ませたオレの背中を、託生の手がすっと撫で上げた。  
「同じだね、ギイ」  
口唇を触れ合わせたまま悠然と微笑んだ託生に、オレは一瞬で煽られた。

---

2013年10月26日(土)

「なあ、託生」  
「うん、なに？」  
「お前、いつの間に、そんな技を身につけたんだ？」  
「そんな技って？……わっ！」  
「オレを悶々とさせつつ、我慢限界まで色気を増大させる技」  
「……ギイ、落ちたんだ」  
「このやろ。……ああ、落とされたよ。覚悟しろよ」  
「望むところ」

---

口唇を合わせ、誘われた遊びに戯れ、彼を引き寄せた。

重ねた口唇が「積極的だな」と笑う。  
「……ぼくだって、我慢限界だから」  
余裕があったのは、そこまで。  
茶色の瞳が熱く変化したのを見た瞬間から、ぼくは……ぼくの体は輪郭を無くした。

---

2013年10月08日(火)

「……イ……ギイ……！」  
肩を揺さぶられ、暗く哀しいドロ沼に沈みこんでいた意識が覚醒し、ハツとして目を開けた。額に浮かぶ汗が冷たく米神を流れる。  
自分の乱れた呼吸が、他人事のように耳に届いた。  
オレを覗き込む心配そうな瞳に、ギクリと体が硬直した。  
「たく……み……どう………」  
どうして、ここに？  
そう口に出そうとして、うっすらと現実を思い出す。  
心配そうに揺らぐ瞳はあの頃と同じなれど、薄暗い部屋に暗順応してきた視界に映るのは、十年の時を経てこの腕に戻ってきた託生だ。  
……ああ、そうだ。今、託生はここにいるんだ。  
「なにか、怖い夢でも見た？」  
「…見ていたかもしれないが、覚えてない  
「そういうことあるよね。目が覚めたと同時に忘れちゃうの」

邪気のない表情に、心配ないと微笑み返す。

しかし、オレが忘れるわけがない。託生がゼロ番を出て行くあの光景を、今まで何度も夢で見、何度飛び起きただろうか。

繰り返される絶望感。心が空になり、オレの体がただの器のように感じる一瞬。

「ギイ？」

「ちょっとシャワー浴びてくるよ。起こしちまって悪かったな。託生はこのまま寝てくれ」

ベッドをおりようとしたオレの上に託生が滑り込むように乗り上げ、オレの肩を押し戻した。

「託生？」

「汗かいたのなら今更だよね」

「え……？」

汗で冷えたオレの頬に手を伸ばし、託生が囁く。

首筋に託生の熱い吐息と柔らかな口唇の感触を感じたとたん、すがるように引き寄せ、自分の体の下に引き込んだ。

手のひらで、口唇で、絡む足さえも、託生を感じているのに、まるで霞のように消えてしまいそうな恐怖感。

また暗い闇に吸い込まれそうになり、抗うようにオレは託生を求めるべッドに沈んだ。

---

2013年07月05日(金)

託生さんとの接点がわからないように、私宛に届く義一さんへの荷物。

「義一さん。桜井さんから定期便が届いてますよ」

「ああ、サンキュ」

デスクの上にそっと封筒を乗せ部屋を辞した。

誰にも邪魔されない空間で優しく封筒を撫で、ペーパーナイフで丁寧に封を開けるのだろう。

CDが終わるまでの時間、義一さんの心は託生さんの音に包まれる。

ともすれば、心を失ってしまいそうな義一さんを引き止める最終手段だ。

この時間だけは誰の邪魔も入らないよう、全てをシャットアウトするのが私の仕事。

でも、できるのならば、もう一度輝きを取り戻してほしい。あの二人でいたときの、義一さんらしい笑顔を、もう一度見たい。

いつか、そのようなときが来るのだろうか。

嫌味なくらい青く透ける空の向こうで、彼の想い人は生きている。

---

もう、起きたどうか。薬は抜けているだろうが、体は大丈夫だろうか。

考えるのは、託生のことばかり。

この数日、夢のような日々を送らせてもらった。

託生の口唇が「ギイ」と動き、オレを見て微笑んで、オレだけのためにバイオリンを弾いてくれた。

もう、充分だ。

オレは、未来を考えてはいけない。これ以上、望んではいけない。

託生に恋したことそのものが間違ったんだ。

だから、託生。

日本に帰ったら、オレのことは忘れてくれ.....。

---

「あのさ、ここってギイの部屋？」

「まあ、個人的な居間かな。そっちが、デスクとか置いてる部屋で、あっちがベッドルーム」  
「うん、それはいいんだけど」  
「なに？」  
「どうして、ぼくの荷物、この部屋に持ってきたのさ？」  
「どうしてって……恋人が別々で寝る方が変だろ？」  
「…………ギイ。パリで電話したとき、ぼくのこと、なんて説明したの？」  
「恋人。恋人を連れて帰るから、メシは二人分にしてくれ。ベッドルームの用意はいらないって」  
「…………ギーイーッ！」  
「本当のことだろ？ 使用人達に、最初から説明した方が、お互いやりやすいし。託生が客室に行きたいって言うんなら、オレもそっちに移るだけの話だ」  
「…………もう、いいよ。ギイに羞恥心を求めるのが間違いだった」

---

いつものように最上階でエレベーターを降り……その人の多さにギョッとした。  
…………自分と同じSPの人間ですね。同じ匂いがします。

「桜井じゃないか！」  
「ジェームズ！」  
親しげに自分を呼ぶ声に周りの視線がいっせいに集まり、その奥から昔なじみの顔が、にこやかに近づいてきた。  
「4年…いや5年ぶりか。いつこっちに帰ってきたんだ？」  
「1週間ほど前に。そういう君こそ、副社長の？」  
「ああ、今はチーフをやっている」  
チーフとは、また出世したものです。  
しかし、この離れない視線はなんなのだろう？ そんなに悪人顔はしてないつもりなんですが……。  
「桜井がここにいるってことは、副社長の大切な人が見れるんだな？」  
「え？」  
「おいおい、仕事でここにいるんだろう？」  
「それはもちろん」  
その含みのあるようなジェームズの台詞に首を傾げる。  
副社長にとって託生さんは大切な人ではあるだろうけど、私とどう関係があるのでしょうか。  
「大切な人には違いないだろうけど……」  
「相変わらず謙虚な人間だな。一人で十人力の君がついているだけで、副社長の特別な人だとわかるってもんだ」  
バシバシ肩を叩かれて機嫌よさそうにジェームズが笑う。  
そして、  
「おい、お前ら、伝説の桜井の顔を揉めるなんてラッキーだぞ。しっかり覚えておけよ」と好き勝手なことを言い出して、なぜかむさくるしいSP軍団から両手を合わせられた。  
あの、私を揉んでも、なんの願いも叶えられないんですが……。  
というか、そろそろ中に入らせてください。

---

2013年07月02日(火)  
「島岡さん、大変です！」  
「……なんですか、松本君」

「副社長が行方不明なんですね～！」  
「はあ。いつからですか？」  
「最後に副社長室で見たのは20分前でした」  
「20分前ということは……今日で5日だから……」  
「島岡さん！すぐに副社長を探さないと！」  
「松本君。15分後に託生さんの事務所に向かってください」  
「……は？」  
「十中八九、事務所にいますから」  
「わかってるのなら、今すぐ行ってきま……」  
「ダメです」  
「はあ？」  
「どうせならフル充電させないと、持ちが悪くなりますからね」  
「持ち？」  
「ええ。まだ今日は予定が詰まってますから、途中で電池切れされても困りますし」  
「あの～」  
「はい？」  
「僕、副社長の話をしているんですけど？」  
「ええ。私も義一さんの話をしてますが？」  
「……副社長って、人間の皮を被ったロボットだったのだろうか」

---

2013年06月15日(土)

留学を終え、フランスから帰国された託生さんを空港まで迎えに行き、その足で事務所に顔を出してスタッフへの紹介と事務所内を案内し、そしてお疲れだろうからと、事務所から徒歩圏内のマンションへ足を向けた。

もちろん、私の部屋も同じマンション内にあります。

「託生さんの部屋はこちらです」

ドアの鍵を開け「どうぞ」と託生さんを促すと、

「お邪魔します」

ご自分の部屋なのに、なぜかそう挨拶して託生さんは入室し、

「え、階段？」

部屋の中にある階段に目を丸くされた。

下階は10畳ほどのリビングダイニングと8畳の防音室。上階はプライベートルームと洗面関係があるメゾネットマンション。

すっきりとしたシンプルな部屋。

「あの……」

「なにか、足りないものありますか？すぐに、用意させていただきますが」

「いいえ！とんでもないです！そうではなくて、こんなに広いところいいんですか？」

家賃高そう……。

「こちらは社宅扱いなので、託生さんは気になさらないでください」

「そう……ですか？」

と言いつつも、部屋を見ながら「やっぱり広い」とポツリと呟かれるのを見て思い出した。今まで屋根裏部屋で、慎ましい生活をされていたことを。

フランスでの託生さんのステュディオと比べられているんですね。

「こちらが防音室ですので、いつでもお好きなときに練習できます」

そう言いながら重いドアを開けて照明をつけると、キヨロキヨロと部屋を見回し、壁際に置いてあるアップライトピアノの蓋を開けられ、「ええ？」  
と呼ばれ、なにか粗相があつたのかと慌てて側に寄ると、「これ……ベーゼンドルファー……ですよね？」  
戦々恐々とした風情で、心細そうに私を見上げられたのだが、託生さん、申し訳ありません。実はベーゼンドルファーだと知ったのは、たつた今だつたりします。「こんなすごいピアノ、ぼくには必要ないのに……」  
と言われましても、託生さんにはお伝えできませんが、この部屋は副社長が用意したものなんです。私も日本に来られた島岡さんから鍵を預かり、確認の為に一度部屋に入ったきりで、詳しいことはわかっていないんです。  
「プロの方には、それなりの楽器が必要かと……」  
「そ……うですか。……そうですね。プロ…なんですね。ぼく、がんばらなきゃ」  
苦し紛れに言い訳をした私の言葉に力強く頷いて、「これから、よろしくお願ひします」  
「こ……こちらこそ、よろしくお願ひします」  
真っ直ぐに私を見つめ、深く頭を下げられた託生さんに慌てて頭を下げながら、託生さんの礼儀正しく謙虚な人柄に、感動で胸がいっぱいになりました。  
このような方のガードにつかせてもらえるとは、SP冥利に尽くるというもの。  
内ポケットに入れた託生さんの注意書きを、スーツの上から確認し心に誓う。  
不肖桜井。我が命に代えましても、託生さんをお守りいたします。

---

2013年05月27日(月)  
紫のチューリップを劇場スタッフの人から受け取り、ホテルに向かって歩き出した。  
そのとき一陣の風が頬を撫で、どこからか、ふわりと懐かしい香りを運んできたように感じて、「……ギイ？」  
思わず振り向き、そして、そこにギイの姿がないことを認識して苦笑った。  
あの不思議な花の香りをまとい、ほんの一瞬、つむじ風のようにぼくを包み込んだ風。  
……ここに、いるわけないじゃないか。  
わかりきっている現実と、諦めきれない想いが交差する。  
「託生さん、どうしましたか？」  
立ち止まつたぼくを、不思議そうに桜井さんが振り返った。  
「いえ、なんでもありません」  
そして、後ろを振り返ることなく、一步を踏み出した。  
もう、二度と一緒に歩くことはないけれど、彼が歩いていく道は、幸せに包まれていてほしい。  
それだけが、今のぼくの願い。

---

2013年01月25日(金)  
さすがに今回の報告書の封筒は分厚かった。  
パンフレットやプログラム、写真数枚。  
デビューコンサートあれこれの詰め合わせってヤツだな。  
眩い光の中、黒のテイルコートでバイオリンを弾いている託生の写真を手に取る。

「託生、デビューおめでとう」

バイオリニストとしての第一歩を踏み出した愛しい人に、心からの祝福の言葉を送った。

これから先の未来が、宝石のように輝くことを願って。

コンサートの様子を思い浮かべながら読んでいた報告書の最後に、それは書いてあつた。

「さすが、章三」

小さく吹き出し、夜明け前、まだ薄暗い廊下で最後に会った相棒の姿を思い出す。

「悪いな。まだ終わってないんだ」

まだだ。まだ早い。あと半年.....。

終わっても、会えないがな。託生にも。章三にも。

込み上げる奴らへの憎悪と、郷愁にも似た遙か遠い山奥の楽園への想いが入り混じる。

丁寧に一式を封筒に入れ、デスクの上に置いた。

指を滑らせると、冷たい紙のはずなのに、なぜか包み込むような温もりを感じた。

---

2013年01月24日(木)

佐智さんが託生さんのマンションに遊びに行かれた翌日。

「託生くんの部屋で、いいものを見つけたんですよ」

満面の笑顔で事務所に入ってこられた佐智さんの背後には、おろおろとした託生さんの姿が。

「これ、見てください」

重そうなバッグから取り出し、スタッフルームのデスクの上に広げたのは、膨大な数の手書きの楽譜だった。

「あの、これは.....」

「託生くんが作曲したものです」

「え.....託生さん、作曲もされてたんですか？」

託生さんのマネージャーを一年近くやっていたのに、作曲されるなんて全く知りませんでした。

「でででも、ただの暇つぶしの趣味なんで.....」

あたふたと胸の前で両手を振り謙遜されているようだが、この佐智さんの様子だと、全ての楽譜に目を通し、そしてなにかしらの考えを持って事務所に持ち込んだのであろうことがわかります。

「一度、聴いてみてくれませんか、託生くんの曲。ね、託生くん、弾いてみて？」

そして、佐智さんの勢いに押されるがまま、指示された数曲を弾かれた託生さんの曲に、スタッフ一同深い溜息を吐いた。

なんと奥深く、優しさに包み込まれた曲なんでしょう。胸に突き刺さるような切なさまで感じます。

「どうですか？」

「これは.....」

にっこり笑った佐智さんの笑顔に、交渉専門のスタッフが大きく頷いたと思ったら、そのまま録音したMDを持って事務所を出て行き、数時間後。

「番組のテーマソングに決まりました～♪」

と、意気揚々と帰ってきた。

事務所内、拍手喝采。さすが、マネジメントのプロ。

「ただですね」

「はい？」

「タイトルを聞いていくのを忘れてしまって、自分勝手なイメージで『始まりのとき』と言ってしまったんですが、託生さん、タイトル教えていただけますか？すぐに相手方に訂正しますので」

頬をかきつつ「すみません」と頭を下げたスタッフに、そういえば私も聞いていなかったと思い出しました。

曲の印象があまりにも衝撃的で、タイトルを忘れてました。

全員の視線を受け、

「あの……」

託生さんが口ごもった。

「タイトルはないので、それでお願いします」

「は？」

タイトルがない？

「ぼく、ネーミングセンスないんで、作った順に番号を振っているだけで……」

確かに、楽譜には数字が書いてますが、これがタイトル代わりってことですか？

「じゃあ、作っているときに浮かべていたイメージを教えていただければ……」

「イメージですか？」

あんなにも印象的な曲なのだから、なにかしらイメージを思い浮かべながらでないと、作れないような気もするのですが、その辺りは素人の私に考えが及びません。

スタッフの問い合わせに小首を傾げた託生さんの表情が、ほんのすこし苦く顰ったように感じたものの、それは私の気のせいだったようです。

いつものように穏やかに笑い、

「……いえ、イメージはないので適当にお願いします」

と、頭を下げる。

「じゃあ、曲のイメージでつけさせていただきますね」

「はい」

そして託生さんが作られた曲については女性スタッフが中心となって企画がなされ、『恋』と関連性のあるタイトルをつけられることが決まった。

それが託生さんの代表作となる『恋シリーズ』の始まり。

女性の感性というのは、我々男には、よくわからないのですが、託生さんの曲とタイトルがミスマッチなものはありません。

---

クラシック業界に新風を巻き起こすという触れ込みと留学時代の賞の数々がメディアによって紹介され、佐智さんはもちろん、音楽関係者を招待した託生さんのデビューコンサートは、華々しい晴れの日となりました。

この日を迎えるにあたり、託生さんが血の滲むような努力を重ねていたことを知っているスタッフ一同は、コンサートの大成功の裏で目を潤ませつつ、より一層バイオリニスト葉山託生の名を広めることを心に誓ったのです。

そしてアンコールが終わり控え室に戻った託生さんの下へ、佐智さんが花束を持って駆けつけてくれた後ろに、一人の男性がいました。

「赤池君！」

「よう、葉山。デビュー、おめでとう」

話をお聞きすると、託生さんの高校時代の友人だそうで、赤池さん以外にも何人の方がこのコンサートを聴きにきてくださっていて、しかし全員で控え室に来るのは邪魔だろうと、代表で佐智さんと訪れてくれたそうです。

もう、他のお客様もいらっしゃらないだろうとロビーに移動した託生さんを、ご友人たちが取り囲みました。

皆さん、ご自分のことのように喜んで、あつという間に託生さんの両腕が花に埋もれた姿を見て、苦笑しつつ花を受け取り控え室に向かおうとした私に、赤池さんが声をかけてきました。

「貴方のボスに伝えてください。逃げても無駄だぞって」

「あの、ボスって………」

この事務所がFグループと繋がっていることは一切表には出していない。ましてや、副社長が関わっていることなどスタッフ以外誰も知らないのに、赤池さんはどなたのことを言っているのだろうか。

「本当にあいつは頑固だから。終わったのなら、さっさと姿を現せて付け加えておいてください」

「赤池さん………」

「NYにいる、貴方のボスですよ。言えばわかります」

ニヤリと笑って赤池さんは託生さんの側に歩いていかれました。

やはり副社長のことを言っているのでしょうか。

今日の報告書と一緒に赤池さんのことも書いておかねば。

---

2013年01月11日(金)

シャワーを浴びて居間に戻ると、ギイがソファで寝ていた。

「だよね。仕事忙しそうだし、松本さんもよれよれの顔してたし」

こう……なんとなく……そういう気分だったのだけど、ギイの疲れきった表情を見れば、ぼくのそういう個人的事情なんてものは、我慢でしかないような気がして。

「ギイ。ベッドに行ってくれるかな。疲れが取れないよ」

ギイの肩を揺さぶって、寝室への数歩だけでも覚醒を促した。

「ん……託生………？」

「こんなところで寝たら、風邪引いちやうよ。………うわっ」

ギイの背中に腕を回し、起き上がるのを手伝おうとしたぼくの腕を、ギイは力任せに引っ張り、自分の体の下に敷いた。

「ギイ！」

「託生、その気だったろ？」

ズバリ核心をついた台詞に、言葉が詰まる。

そうだけど。

はしたなくも、ギイが欲しくて堪らなかったのだけど。

「託生が誘ってくれたんだもんなあ」

と言いながら、ぼくの首筋に口唇を寄せたギイの吐息に寝息が混じっているのに気づいて、思わず右手が動いた。

「ぐはっ」

「………寝ろ」

「た……く……おまつ………」

「中途半端な状態なのは、ぼくが困るんだよ。義務で抱いてもらいたくないし。ギイがその気になったら、するから」

「でも、その気だったろ？ そういう目でオレを……おい、こら、殴るな！」

「今、その気がなくなったから！ バカなこと言っている間に、ベッドに行って！」

足蹴りしてギイを立ち上がらせ、隣の寝室に引っ張っていき、ベッドに放り込んだ。

「ほら、疲れてるんだから………」

「一人でするなよ」

「………は？」

「オレが抱くまで、一人で………うつ！」

「寝ろって言ったよね？」

これ以上、恥ずかしいこと言われると、それこそ意識してしまいそうで、ギイの頭を枕に押し付けた。

1、2、3、4、5。

「ほら、疲れてたんじゃないかな」

カウント5で深い寝息に変わったギイに、大きな溜息が零れた。

「今日の分は、次に上乗せしてもらうから」

そんなことされたら、ぼくの体が壊れてしまいそうな気がするけど、ギイは深い夢の中。

これ以上、自分がそういう気分にならないように、とりあえず、もう一度シャワーを浴びてこよう。

---

2012年12月10日(月)

葉山託生のSP兼マネージャーの桜井。

ラジオ体操第一をこよなく愛する男。

ちゃんちゃんか ちゃんかちゃんか♪

「いっちはん さんっしつ にーにっ さんっしつ」

「マイケル。きちんと筋を伸ばさないと、いざというときに怪我をしますよ」

「はっ！」

「ジョン。手首がまだほぐれてませんね。もう一回」

「はっ！」

エレベーターホールに流れるラジオ体操の曲に乗って、ビシバシと体を動かす大男が三人。

「…………桜井さん、わざわざ日本からCD持ってきたんですか？」

「みたいですよ」

「ラジオ体操って、あんなに真剣にするものでしたっけ？」

夏休みに首からかけたカードに、スタンプをぽんと押してもらうことしか覚えていない。

「一度、桜井さん並に真剣に体操したら、結構汗かきましたよ」

「へえ、そうなんだ。運動不足だから、明日からやってみようかな……」

「ダイエットにいいんなら、やってみようかしら」

「じゃあ、私は腰痛予防に……」

そして、事務所の朝は、ラジオ体操第一で始まることになった。

ごめんなさい。これです、これ！『櫻井孝宏 「ラジオ体操第一」』

⇒<http://t.co/MPVdwgAB>

---

2012年12月06日(木)

バスルームから出てきた託生が、ソファに置いている物を見て足を止めた。

ミニスカサンタに、ミニスカとなかいに、特大サンタの袋(赤いリボン付き)。

「なに、その荷物？」

「あのな」

「うん？」

「これを着てくれ！」

「…………別にいいけど」

某国で、遥か昔にあった見合い番組の交際申し込みのように頭を下げたオレの上空から、あつ

さりとした返事が聞こえて、聞き間違いか？と恐々顔を起こした。

「ぼくに着て欲しいんだろ？」

オレの訝しげな視線に、小首を傾げて反対に聞く。

ブンブン首を振り、しかし、まるで夢の中のできごとのような錯覚になった。

これは、ほんとに託生なのか？照れもせず恥ずかしがらず、素直に着てくれるなんて！

脳内で勢いよく紙吹雪を散らし、勝利のラップを吹き鳴らそうとした瞬間、

「それで、ギイはどれを着てくれるの？」

真っ逆さまに突き落とされた。

「…………は？」

「まさか、ぼくだけ着ろなんて不公平なこと言わないよね？」

と、託生がにっこり笑う。

…………オレがミニスカサンタ？

ダメだ、ダメだ！絶対、吐き気を催すだけだ！

しかし、なにかを選ばなくては、託生の可愛らしい姿を見せてもらえない。

この重要且つ最大の問題を、どう乗り切る？

オレのこめかみに冷たい汗が流れた。

---

2012年12月05日(水)

『サンタとトナカイとサンタの袋、どのがいい？』

「…………は？」

『さっき見かけたからさ、買って帰ろうと思って』

…………サンタとトナカイと袋？

これは、やはり、あれか？コスプレしてくれるってことなのか？

ここはサンタで…………いや、託生のことだ。以前の看護師のときだってパンツだったのだから、ミニスカサンタではない普通のサンタだよな。

ならトナカイで、と浮かべてみる。

もここまで可愛いだろうが、少し色気がないような気がするな。

しかし、サンタの袋はどういう使い方を…………入ってくれるつもりなのか？託生が袋の中に？

ああ、託生がプレゼントになってくれるのか！

直球じゃ照れくさいからと遠まわしに言ってくるとは、可愛いヤツめ。

これは、託生の期待に応えないと男が廢るってもんだ。

「オレは、袋がいいと思う」

キリッとした声のわりには、たぶん顔がにやけているだろうが、どうせ繋がっているのはラインだけだ。託生には見られる心配もない。

『サンタの袋だね？わかった。買って帰るから楽しみにしててね～』

その夜。

「託生、これはなんだ？」

「サンタの袋だよ？」

見てわからない？と差し出された、お菓子入りサンタの袋。

「じゃあ、もしオレがサンタかトナカイを指定したら…………」

「うん、お菓子の靴を買ってくる予定だったんだ。でも、さすがギイだよね。一番お菓子が入っているのを選ぶんだから」

キラキラした目で見上げてくれるが、託生。オレは、そんな褒め言葉嬉しい。

「ギイ、食べる？」

「ああ………電話が一本残ってるんだった。すぐに戻ってくるから」

「うん」

私室に戻るなり、携帯を手に取った。

「松本ーっ！ミニスカサンタとミニスカトナカイとサンタの袋、今すぐ持て来い！」

『は………はいいいい？！』

期待した分の落差は大きいんだ。絶対、託生に着せてやる！

---

2012年11月02日(金)

「ケータリングサービスです。ご注文いただきまし………に、忍者ぁ？」

「担当者を呼んでくるので、待っててくれ」

「はあ…」

「先輩、ここすごく凝ってますね(こそこそ)」

「ハロウィンでも、ここま飾り付けるところ、なかなか見ないな(こそこそ)」

「お待たせしました」

「ケータリングサー………ひつ！」

「フ………フランケン……？」

「テーブルの準備はできていますので、こちらに運んでもらえますか？」

「はあ」

Ave ! Ave Versus Christus～！

「終わりましたら、声をかけていただけますか？受付付近におりますので」

「はい！………早く、終わらせようぜ」

「ええ、マジにここ怖いですよ」

数分後。

「終わったぞ」

「じゃ、さっさと帰りましょうか」

ガチャ。

ぺたぺたぺたぺた。

「………」

「今、河童通りませんでした？」

「………気のせいにしておこう。頭が痛くなってきた」

---

2012年10月03日(水)

異国の街角に、変わらないお前がいた。

その瞳に映ったオレは、恋に落ちたまま立ち尽くしている愚か者。

「ギイ」と呟いた声に、色あせない思い出が切なく脳裏を駆け巡っていく。

もう、あの頃には二度と戻れないと言うのに……。

---

2012年09月28日(金)

「『無事、日本についてます。お休みなさい 託生』………と」

空港まで迎えに来てくれた桜井さんと事務所に行って、あれやこれやと用事を済ませ、一ヵ月半ぶりに帰ったマンション。

ぐつたりとした体に鞭を打ち、シャワーを済ませて、ふと思い出して鞄の中から取り出した。

アメリカから帰るとき、ギイに渡された携帯。  
祠堂で使っていた携帯とデザインはまるきり一緒なれど、たぶん、機能は格段にアップしているのだろう。

ぼくには、使う当てもないけれど。

ギイに、十年ぶりにメールを打った。

ハートマークを忘れたけれど、まさかそのくらいで拗ねないよね。

そのまま、サイドテーブルに置いた携帯をじっと見詰めていると、着信ランプが光った。

ギイ、早すぎないかい？ちゃんと、仕事してる？

そう思いながらも、頬は緩み、素早く携帯を手に取る自分に笑ってしまった。

『オレの夢見ろよ。愛してるよ、託生。お休み。ギイ』

何度も画面を見て、ギイからのメールを読み返す。

この二週間、ギイと一緒にいたけれど、ここ日本に帰ってくれば、まるで夢を見ていたかのような気分になる。

でも、現実だよね。ギイともう一度、一緒に歩いていけるのは。

幸せな気分のままベッドに潜りこんだとき、月の光に反射して、ハートのストラップがキラリと光った。

「でも、ギイ。この歳でハートはないと思うよ」

今度ギイに会ったら、これだけは言ってやろうと、心に決めた。

「松本君の、これが本当の日常」の託生くんサイドでした。

---

2012年07月25日(水)

「桜井」

「副社長？どうされたんですか？」

「託生のブログを開設したのか？」

「いえ、まだです。今朝、託生さんからお聞きしたところでしたので、今から……」

「こっちで今日中に用意するから待ってろ」

「はい……？」

「肖像権の問題があるからな。右クリック、印刷、コピー＆ペースト、画面のキャプチャ、ソースの表示、キャッシュの保存。全て禁止させるから」

「……副社長、それって相手のPC側にインストールさせて操作させるものですよね？」

「そんなもの、託生のブログを開いたと同時に勝手にダウンロードさせればいいだろ」

「それってスパイウェア……」

「なにか言ったか、桜井？」

「いいえ。でも、そんなプログラム誰が……」

「IT部門に作らせばいいだけの話だろ？託生の写真をこれ以上バラまくわけにはいかないんだ！」

「副社長……」

---

2012年07月24日(火)

「託生くん、ちょっと隣に立って」

「佐智さん？えと、ここ、ですか？」

「そうそう。はい、笑って」

パシャリ。

「これで、よし、と」

「あの、佐智さん？」

「ブログにアップしようと思って。いいかな？」

「それはいいんですけど、ブログを書かれてるんですね」

「大木さんに言われてね。託生くんも言われてない？」

「そうなんです。桜井さんに言われてるんですけど、ぼく書くことなくて……」

「毎日書かなくても、コンサートの告知だけでも大丈夫だよ？たまにこうやって写真載せてもいいし。『友人の葉山託生くんが聴きにきてくれました』……と」

「佐智さん、早いっ！……こんなに短くていいんですね」

「そうだよ」

「それなら、ぼくでもできるかな……」

♪♪♪♪♪

「もしもし？」

『佐智———っ！お前、なにをブログに載せてるんだよ？！』

「なにって、託生くんとのツーショットだけど？」

『託生の写真は事務所を通して……！』

「プライベートだから構わないよね。ね、託生くん？」

「はい。って、ギイですか？」

『託生！お前、佐智とツーショットなんて！』

「佐智さんファンに怒られるかな」

『そうじゃなくて！』

「気にしなくていいよ、託生くん。僕と託生くんの仲がいいのは有名だし」

「そうですか？」

『こら———っ！佐智！託生とツーショットを撮っていいのはオレ……！』

ブチッ。

「託生くんのブログにも、ツーショット載せてくれるかい？」

「もちろんです！桜井さんに用意してもらいますね！」

---

2012年06月21日(木)

「島岡、幸せな夢を見たよ。そして果てしなく愚かな夢だ」

そう微笑んだ義一さんの目が、揺らいだように見えた。

「義一さん……」

「予定どおり明後日NYに帰る。すまないが、事後処理をしておいてくれ」

「わかりました」

そうしてシャトー・ルフェビュールに戻った義一さんに、私がなにを言えるのか。

あのとき、死ぬのも辞さないような義一さんを引き止める為に、私は託生さんのコンサートチケットを用意した。

結果、NYに帰ってきた義一さんの目に生命力が宿り安堵はしたが、この人の心は深く傷ついたままだった。

義一さんの心は痛いほどわかる。

けれども、これでいいのか？この人は、このまま一生を終えるのか？

あれから10年。もう一度幸せを求めてもいいんじゃないだろうか。

そう考えていたのは私だけではなかった。

しかも彼の大切な幼馴染は、義一さんだけではなく、今でも託生さんと密接な繋がりがあり、私が側で義一さんを見ているように、彼もまた託生さんを案じていた。  
自分の心を隠す義一さんを揺さぶるには、託生さんしかいない。  
だから、二人のオフをぶつけた。  
数日一緒にいれば、頑なになっている義一さん的心が溶けるだろうと望みをかけて。  
なのに、どうしてこういうことに……。  
義一さん、自分の幸せを諦めないでください。  
託生さん、どうか彼を救ってやってください。

---

2012年04月09日(月)

「たーくみっ」

「…………なんだよ」

「なんだよって、ご挨拶だなあ。早く帰ってこれたのに」

「……お帰り。でもね、その大きな箱はなんなんだよ」

「託生、よくぞ、聞いてくれた！」

「聞いてない、聞いてない。ぼく、興味ないからね」

「まあ、まあ」

「もう、なんなんだよ？！」

「松本の友人がこういうのを扱っていて、回してもらったんだ」

「…………」

「セーラー服は気に入らないか？なら、看護師の服も婦警もあるぞ。客室乗務員とかOLの制服とか」

「あのね…………」

「ああ、女性用じゃなくて、パイロットとか警察官とか宅配便とか医者とかもあるぞ」

「…………で？」

「濃厚な時間にするための、愛のエッセンス代わりに」

「ふうん…………じゃ、ぼく、これね」

「お、託生も、やる気満々…………ちょっと、待て——っ！」

「一度、化学防護服、着てみたかったんだよね」

「いや、それは、止めてくれっ」

「すごいなあ。ガスマスクまでついてる。よいしょっと」

「…………これで、どうやって甘い雰囲気を出せと……orz」

---

2012年03月28日(水)

『来週のスケジュール確認をお願いします 松本』

のメモを添えて島岡さんに送ったデータが、送り返されてきた。

「えーと…………はいいい？！」

就業時間は一時間早まり、早まった分、帰宅時間が早まるかと思いきや今までと一緒にで、しかも会議も商談も今までの二分の一以下の時間に縮まり、一日の仕事量が一気に今までの三日分くらいに詰め込まれている。

「島岡さん、これは無茶っすよ」

慌てて部屋を飛び出し、第一秘書室のドアをノックして返事を待って扉を開けた。

「どうしました？」

「島岡さん、これ、本気ですか？」

電子手帳をデスクを上に置き問いかけると、

「ええ、大丈夫ですよ」

あっさりと島岡さんが頷いた。

「でも、こんな短い時間で会議が終わるなんて、絶対ないと思うんですけど？」

「いや、絶対終わりますよ」

「そんなこと……」

ありえません……と続けようとした僕の背後から、

「おい、島岡」

副社長の声が響いた。

「義一さん、どうしました？」

「あー、今週末、なんとかならないか？」

「なんとかとは？」

「託生のコンサートなんだよな」

「で？」

「でってな……。だーかーら、休みが無理だったら、5時までには終わらせてくれ！」

「5時はちょっと……」

「じゃ、5時半！ぎりぎり6時でもいい！」

どっかりと椅子に座った島岡さんに、すがりつくように懇願する副社長。

5時に仕事が終わることなんて、今まであつただろうか。

首を捻っている僕の電子手帳を副社長の前にスライドさせ、

「今週こういうスケジュールでよろしいのなら、なんとかなりますが」

島岡さんが澄ました顔で提案する。

いや、だから、島岡さん。そのスケジュールは、無理ですってば。

じーっと電子手帳の画面を見詰めていた副社長が、ニヤリと口角を上げた。

「わかった。詰め込め」

「えええええ？！」

「なんだ、松本？」

「いや、あの、会議……」

「ああ？こんなもん、すぐに終わらせてやる」

マジっすか？！終わるんですか？！

「わかりました。スケジュール調整しますので、今のうちにデスクワークを終わらせておいてくださいね」

「了解」

部屋を出ていった副社長を呆然と見詰めていた僕に、

「目標があればあるほど、義一さんの仕事の効率がよくなるんですよね。こういうときにこそ、義一さんを存分に使わないと」

覚えておいてくださいね。

島岡さんの悪魔の微笑みに、僕の背中をぞくぞくと寒気が走り抜けていった。

---

2012年02月01日(水)

晴れやかな顔をして、ぼくを抱き上げたギイだけど、シャワーを浴びて寝室に入ったとき垣間見えた後悔の表情。

どれだけの傷を、ギイは受けたのか。

もしも、今、ぼくがこの場から逃げ出したとしても、ギイは後を追わないだろう。  
だから、ぼくからキスをした。  
君が欲しいのだと。君しか、欲しくないのだと。  
抱きしめた腕が震えていた。  
まるで、抱きあうことが罪だというように震える腕に気づかない振りをして、ギイを抱いた。  
もう二度と離れない。

---

勢いのままベッドにギイを押し倒した。  
口唇を離して目に映った、昔とは違う風景。  
ギイの震える指先が、ぼくの頬を覆った。  
「愛してる、託生」  
「うん……ぼくも、愛してるよ。ギイを、誰の目にも触れさせたくないほどに」

---

2012年01月31日(火)  
なんだ、あの車は。  
タイヤを替えていないのか？  
バスを降りたところに、危なっかしい車が目に入った。  
雪が降り積もり、けれども、こんな山奥の道を通るような車は地元民しかいないような状態なのに、その車はそこにいた。  
その余りにも危なっかしい運転に、オレは身構えた。そんな事は有り得ないと思いつつ。  
しかし、危惧していたオレの予想通りの軌跡を、その車をたどったのだ。  
「託生！！」  
「え？」  
間に合ってくれ！  
まっすぐに向かってくる車に身動き一つできず立ち尽くした託生を抱きかかえ、地面を蹴る。  
「ギイ！！」  
「葉山！！」  
ドサリと転がった背後で鈍い音がし、車が祠堂の外壁に当たり、車が大破した。  
「なに……？」  
今だ状況を把握していない託生に、  
「怪我は？！」  
怒鳴りつけるように問うた声に、  
「だい……じょうぶ……」  
言いながら、目の前で煙を上げて停まっている車を目にしたとたん、抱きしめている託生がガタガタと震えだした。  
「ギイ……」  
「見るな！」  
言いながら、あの脅迫状の文字が浮かんだ。

---

2012年01月16日(月)  
「荷物を纏める」とペントハウスに戻った副社長を迎えに行き、しかし、特大の苦虫を噛み潰したかのような副社長の登場にビビりつつ、無言のままケネディ国際空港に到着した。

夕刻出発の飛行機を待てるほど時間に猶予はなく、すでにプライベートジェットが準備されているはず。

一般客とは別の税関に向かっているとき、ピタリと副社長が足を止めた。

「副社長、どうしました？」

「………松本」

低い低い声色に、ゾゾゾと悪寒が走る。

今回は何でしょうか？！

やっぱり行かないなんて、言わないでくださいよ！！

思わず両手を組んで祈った僕を振り返り、

「今からペントハウスに戻って、託生をドイツまで連れてこい」

「はいい？！」

人間一人をドイツまでなんて、そんな無茶な………。

「連れてこなかった場合は………わかってるな？」

いえ、わかりません！全然、わかりません！！わかりたくもありません！！

「お…お言葉ながら、葉山さんにもお仕事が………」

「託生は元々オフなんだよ」

「あ、それなら………ではなくて！葉山さんが素直についてきて下さるか………ひつ」

「連れてこいと言ってるんだ」

副社長～～目が据わってます～～。

もう、いったい荷物を取りに帰ったときに何があったんですか～～。

「わ…わかりました！ドイツまでお連れします！！」

だから、ネクタイ引っ張らないでください～～。

「よし。もしも、ドイツ行きの飛行機に乗っていないことがわかったら、オレもトンボ帰りするからな。オレに仕事をさせるのが秘書の仕事だろ？」

そんなこと社則に載ってません！

「今日は桜井も休みだから」

そう言ってSPを一人僕の側に残し、ゲートをくぐった副社長が視界から消える。

「あー、もう！どうしろって言うんですか？！」

拳を突き上げて叫んだ僕の声が、ターミナルビルの中に木霊したような気がした。

---

2012年01月15日(日)

「悪い！本当にすまない！」

「仕事だったら仕方ないよ」

明日から二人合わせて三日間のオフを取っていたのだが、聞けば、ドイツの支社で問題勃発。急遽オフ返上で出張になったというわけだ。

ぼくだってバイオリニストとしての仕事を持っているから、こういう予定外の仕事には理解はできる。

できるのだけど。あれを見なかつたら、ぼくだって素直に見送れたのになあ。

先日、仕事を抜け出し事務所に来たギイを迎えに来たのが、島岡さんでも松本さんでもなく、綺麗な女性だった。

しかも、いつもならあーだこーだと言い訳をつけつつ居座るギイが、溜息を一つ吐いただけですんなりと帰っていったのが、それはそれで気に入らなかったのだ。

あの女性も同行するのだろうか。

「帰ったら絶対埋め合わせするから！」

慌しく手を動かしながらも、ぼくへ謝り続けるギイに、なぜだか無性に腹が立って、  
「やだ」

スルリと口から零れ落ちた。

こんな我侭言うつもりなかったのだから、これはギイのせいだ。

ぼくの言葉に、ポカンとしてギイが振り返る。

「やだ？」

「うん、やだ」

「と言われても……」

ギイの心底困りきったような表情に、今度は悪戯心がむくむくと湧き上がり、

「帰ってくるまで待てないから、今、埋め合わせして」

「はい？」

スーツケースの蓋を閉めようとしていたギイの頭を抱きしめて、口唇を重ねた。

深く深く舌を絡め、ベッドの中でしかしないような濃厚なキスを堪能し、1分後ギイを開放した。

口唇を離すときにペロリとギイの口唇を舐めたのはご愛嬌。

「はい、終わり。気をつけて行ってらっしゃい」

これで浮気してきたら、蹴りだしてやるからな。ここはギイのペントハウスだけど。

「お……おまえ……悪魔……」

体が多少前かがみだけど、大丈夫だよね、ギイ。

ヨロヨロと出て行ったギイに満足しつつ、三日間なにをしようかとソファで考えていたぼくは、一時間後に飛び込んできた松本さんにドイツまで拉致された。

---

## 2011年12月30日(金)

手を繋ぐ。

十年ぶりに繋いだ手は、とても暖かかった。

少し怯えたように震えた手でぼくの手を握った君の手を、引き止めるようにギュッと握った。

君がいなかつた十年。

君が守ってくれた十年。

大きな愛に包まれ生きてきた十年。

これからは、ぼくが君を守っていく。

命の限り、愛してる。

---

## 2011年12月27日(火)

「託生さんが何も言わずに大阪に向かうとは、さすがに驚きましたよ」

「こちらも、副社長がパーティを抜け出して外出されかけていたので、葉山さんが来られて助かりました」

「あー、託生さんにはわかってらっしゃったのでしょうか。(副社長が夜遊びに出られることを)」

「そうですねえ。わかってらっしゃったんでしょうね。(副社長が葉山さんの所に行かれることを)」

「でも、今は(夜遊びにも行かず)お二人でおとなしくホテルにいてくださるので、やっと一息つきますね」

「ええ。(葉山さんが側にいれば)ホテルから出る必要もなくなったんでしょうけどね」

「明日は(夜遊びにも行かなかったので)早いんでしょうか?」

「いえ、(一ヶ月分を発散して)お疲れでしょうし、ゆっくりされると思いますよ」

「じゃ、私達も今夜は呑みましょうか?」

「いいですね！」

ボツの桜井さんと松本さんの会話～。

---

ギイの手が頬に触れた。

愛おしげにゆっくりと撫で上げる指に、ぼくの心が赤く欲望に染まる。

ギイに会いたくて、ギイが欲しくて、なにもかも放ってここまで来てしまった。

もう、ギイはわかつてしまっただろう。

エレベーターのドアが閉まる隙間に見えたのは、ゴクリと喉を鳴らした肉食獣のような瞳。

それすらも喜び、体を熱く振るさせたぼくがいた。

---

2011年12月26日(月)

「今日はもう外出されないということだったので、これから食事にでも行こうと思いまして」

「なら、松本」

「は、はい？！」

「お前、ほとんど食ってないだろ？ 桜井に連れていくつもらえ。おい、お前らも」

少し離れた場所にいるSP二人も呼ぶ。

大阪は初めてだという松本に、日本語を話せないSP二人。こいつらだけでもなんとかなるだろうが、ここは桜井に任せるのが賢明だろう。こいつも何度か大阪に来ているはずだし。

「へ？あの、桜井さん、いいでしょうか？」

「もちろんです。あ、なにか食べたいものありますか？」

「お好み焼き食べたいです！あと、なんでしたっけ、副社長？」

人見知りなんて言葉を知らない松本が遠慮なく桜井に要望出し、オレを振り返る。

秘書なんだから、そのくらい一回で覚えろよ。行動力はあるんだけどなあ。

「たこ焼き、イカ焼き、ネギ焼き、キャベツ焼き」

「ああ、粉もんですね。京橋まで歩けばあると思いますよ」

「やった！ 桜井さん、よろしくお願ひします！」

カップルだらけのクリスマスに男四人は浮くだろうが……。

ま、オレには関係ないな。

---

2011年11月15日(火)

副社長のマンションに着き、連打しそうになる呼び鈴を理性で一回にとどめ、

「松本です。副社長はいらっしゃいますでしょうか？！」

繋がったと同時に、叫ぶ勢いで呼びかけ、オートロックの解除をじりじりと待ってドアを転がり込むように開けた。

これほどエレベーターを遅く感じたのは初めてかもしれない。

最上階につきエレベーターのドアが開いたと同時に飛び出した。

「副社長は？！」

「少々お待ちください。連絡をしますので」

執事さんの言葉に、ホッと胸を撫で下ろしたものの、なにやら廊下の奥の方から怒鳴り声が聞こえるような気がする。

内線で連絡を取ってくださった執事さんの受話器から、

『帰らせろ』

無慈悲な声が漏れ聞こえ、その場に膝をつきたくなった。

副社長~~~~~。

泣きたくなるような状況の中、

『て―――っ！』

と、副社長の叫び声が受話器から聞こえ、廊下からドタバタとどなたかが走ってくる音がした。

「あの！ご迷惑おかけしてすみません！絶対仕事に行かせますので！」

ペコペコペコ。

「いえ！休暇の延長なんて初めてだったので、僕こそパニックになってしまって、ご迷惑おかけしました」

ペコペコペコ。

「いえ、ギイの我侭が原因なんで！」

ペコペコペコ。

「いえいえいえ、とんでもない！」

ペコペコペコ。

初対面の人間とお辞儀合戦を繰り広げる中、

「松本。休暇は延長だと言ってるだろうが」

低い低い声が響き、頭を上げると不機嫌そうな副社長の顔が目に入った。…、と同時に、目の前の人物が殴りかかった？！

どなたか存じませんが、相手は副社長ですよ？！

「我侭言うなって言ってるだろ？！」

「でもな、託生、オレの休暇が終わったら帰っちまうだろうが！」

「当たり前だろ！ぼくだって、日本でやることがあるんだから」

「だから、オレも日本に行くって言ってるんだ！」

「人様に迷惑かけるな！」

いつも冷静沈着でストイックでクールで、感情を表に出すことなんて全くなかった副社長を、こんなにも激変させてしまうタクミさんというのは、一体ナニモノ？

お二人のやり取りをオロオロと見ていた僕は、内ポケットから携帯を取り出し、

「島岡さ――ーんっ！」

無意識に携帯に向かって叫んでいた。

「松本君。そんなに呼ばなくても聞こえます」

「す…すみません！でも、あの……！」

「義一さんが休暇を延長しろとでも言いましたか？」

「そうなんです！って、どうしてわかったんですか？」

落ち着き払った島岡さんが、ラインの向こうで「やれやれ」と溜息を零し、

「そこにいる葉山託生さんに代わってください」

葉山託生さん…あ、タクミさんは葉山託生さんとおっしゃるのか。

目の前で言い合いを繰り広げているお二人の間に入りたくはないのだけれど、

「あの！！」

勇気を出して声をかけると、邪魔をするなど言わんばかりに副社長が振り向き、葉山さんは僕がここにいるのを忘れていたのか一瞬驚いた顔をして赤面した。

「葉山託生さん…ですか？」

「はい、そうです」

「秘書の島岡が電話を代わっていただきたいと……」

おずおずと携帯を差し出し、葉山さんに手渡すと、

「もしもし、お久しぶりです」

島岡さんが目の前にいないのに、またもやペコペコとお辞儀を繰り返した。

日本人特有の謙虚な態度になんとなく和み頬が緩みそうになったものの、副社長の厳しい表情に慌てて引き締める。

うわ、こんなに機嫌が悪い副社長初めてだよ。

その間にも島岡さんと葉山さんの会話は続き、ほんの少し困ったような顔をして、「わかりました。はい。いえ、島岡さんのせいじゃないです。気になさらないでください」そう言って葉山さんが今度は副社長に携帯を差し出した。

「ギイ、島岡さんが代わってって」

嫌そうに携帯を耳にあてた副社長を横目に、葉山さんが僕に向き直る。

「もう大丈夫ですから。スケジュールはそのまで」

ニコリと笑った葉山さんに、パニックなっていた心がパーンと明るくなった。

「ありがとうございます！」

感動に葉山託生さんの右手を両手で握り締め、深く頭を下げる。

年に一回ではあるものの10日間の休みを確保するために、休暇前後のスケジュールはどうしてもハードになる。もうすでに副社長の仕事が山積みだ。

これ以上休みと言われても、にっこりさつちもいかない状態で、マジにどうしようかと肝を冷やしていたのだ。

またもや葉山さんとお辞儀合戦をしていた僕に、携帯を切った副社長が目を向けた。と、目が吊り上ったあ？！

「.....松本」

「は、はいっ！」

「触るな」

「は、はいっ？！」

慌てて手を離したと同時に副社長が葉山さんを背後から抱きしめ.....あの、ここはどこ？私は誰？

眼前で突然始まったフランス映画ばりの濃厚なキスシーンに、思考が停止する。

さすが副社長。キスも上手いんだ。

「仕事は行ってやるから、早く帰れるように調整しろ」

「はい.....」

ボケッとアホ顔になっているだろう僕に、そう言い置いて副社長は力が抜けた葉山さんを抱き上げ、廊下の向こうへ消えていった。

「ギイのばか—————っ！！！」

数秒遅れて木霊のように響く託生さんの声で、我に返る。

今のはいったい、なんだったんだ.....。

ギクシャクと執事さんに挨拶をし、ペントハウスをあとにした。

副社長と葉山さんって.....。

「え—————っ？」

NYのど真ん中で情けなく叫んだのは僕です。

最後の最後までお騒がせして、申し訳ありません。

---

2011年11月14日(月)

経済界のカリスマこと崎義一副社長付き第二秘書。これが、僕の肩書きだ。

あ、初めまして、松本です。

MBAを取得しFグループ本社に就職できた僕は、色々なテストを受けた結果副社長付き第二秘書に抜擢されたのが二年前。

生粋のサラブレッドである副社長の第二ではあるけれど秘書となり、もちろん仕事は思っていたよりもハードで、毎日が修行の連続ではあったけれども、副社長の手腕をこの目で見れるのはとんでもなくラッキーだった。

ストイックで仕事に対していつも冷静な判断を下し、それどころか仕事が趣味かもしれないほど副社長は毎日世界中を飛び回っていた。

そして男から見ても羨ましいくらいリックスは抜群でセレブ。

女性なんてより取り見取りの状態で、近づく女性は後を絶たない。それなのに女性をスマートにエスコートしても、副社長はなびくことがなかった。

僕にとっては男の中の男。

その副社長が毎年恒例のフランス行きのため、休暇を取ったのが9日前。

明日で休暇が終わる副社長に伝えるため、スケジュールの最終調整を行っていたとき、携帯が鳴った。

お、副社長だ。

「松本です」

「あ、休暇四日間延長な」

「は？」

ブチッ。ツーツーツー。

一言で切れたライン。

今、副社長はなんて言った？

『四日間延長な』

四日間…延長……。

「マジっすか—————っ？！」

慌てて副社長の携帯にかけるも、

「おかげになった電話番号への通話は、お客様のご希望によりおつなぎできません」

まさかの着信拒否？！

僕は、なにかをしてしまったのだろうか？

島岡さんに相談しようにも、副社長誘拐事件の件で彼はフランスに飛び、副社長の休暇明けと同時にNYに戻ってくる予定になっていた。

どうしよう……。

そのとき、脳裏に浮かんだのが、

「まずは行動しろ！」

の副社長の言葉。

あたふたしていても仕方がない。とにかく動かなければ。

僕は慌てて車のキーを取り、駐車場に向かった。

---

2011年10月31日(月)

抱き上げた体が、記憶にある重みより軽く感じ胸が痛んだ。

綺麗に微笑んで眠りの世界に落ちた託生から目が離せない。

部屋を出て行かねばと思いつつ、髪をかきあげる手を止めることができなかった。

こんなに近くに託生がいる。

それだけで満足しなければいけないはずなのに、オレの欲望が底なし沼のように訴えかける。

ほんの少し温まった頬に手を当て、

「今、幸せか？」  
そっと聞いた。

---

2011年10月24日(月)

「託生さん、どうなさいました？」

執事さんに帰宅時間を連絡してくると出ていった託生さんが、顔を曇らせて戻ってきた。

「あ、ギイが体調を崩して、マンションに帰ってるんだそうです」

「副社長が？」

いつも元気な副社長でも、そういうときがあるんですね。……と言ったら失礼ですね。

「では、急ぎましょうか。車をすぐに回します」

と、ヘッドセットでマイケルに指示を出すと、託生さんがホッとしたように溜息を吐いた。

その託生さんの背後で、なにやら女性スタッフが集まりだし、ぼそぼそと話し合いをしていたと思つたら、大野さんがロッカールームに向かいなにやら紙袋を持って戻ってきた。

「託生さん、よかつたらこれを」

「あの、これはなんですか？」

はてなマークを頭に飛ばした託生さんに、

「看護師の服です」

「…………はい？」

大野さんは仏のような慈悲深い微笑を浮かべた。なぜか、背後の女性スタッフも同じような表情で頷いています。

というか、なぜ、看護師の服がここに？

「日ごろ健康な方は、体調を崩されると気弱になることがありますよね？」

「そうですね。たしかに」

大野さんの言葉に、託生さんは頷き、でもそれとこれのどこが繋がるのかわからないという風に困惑の表情を浮かべた。

「そんなとき、看護師さんの姿を見たら、なぜか安心しませんか？」

「あ、それ、わかります。お医者さんだとちょっと怖いけど、看護師さんだったらホッしますよね」

「ですから、格好だけでも変えたら副社長も早く元気になると思うんです」

なるほど。病は氣からと言いますから、それはそれでいいアイデアかもしれません。

同じように託生さんも感じたのか、

「そうですよね。早く治ってもらわないと、仕事に響きますよね。じゃ、お借りします」

と素直に受け取った。

「では、お先に」

「お疲れ様でした」

託生さんと連れ立って事務所をあとにして、気付きました。

なぜ、看護師の服が置いてあったのでしょうか……。

2011年10月23日(日)

自分の体調を騙し無理をしていたのはわかっていた。あと数日、持つだろとも思っていた。

しかし、デスクから立ち上がったとたん、激しい眩暈に襲われ、気付けばマンションのベッドの上。執事から「安静にお願いします。お仕事の方は、調整しておりますので」と言われ、ぐつたりとベッドに横になった。

なんだよ、もう。

どうせ休みなら、託生といちゃいちゃしたいのに、自分の体が思い通りにならないなんて。  
ぶつけようのない怒りを感じながら、しかし薬のせいなのか、うとうと眠りに落ち、次に目が覚めたのは、ベッドサイドの明かりがほのかに映る薄暗い部屋の中だった。

「うん……？」

「ギイ、起きた？」

声を潜めてオレを呼ぶ声に、心がホッとする。

なんだよ。体が弱っているとき気弱になるってのは、オレには似合わないだろうが。

なんなく照れくさを感じつつ、声のする方向を見ると。

「託生……」

「気分は悪くない？ 痛いところある？」

そこに、ナイチンゲールがいた。

「さっき、おかゆ作ってきてもらったから、入るんだったら食べてもらいたいんだけど」

と言いつつ、ほかほかの湯気が立った土鍋をトレイごと差し出した。

うん。腹は減っているから食べるけど。

おかゆよりも、その隠れているウエストラインより下が、ものすごく気になるんだけど。

「食べれそう？」

「ああ」

そう答えると、託生はほっとしたように微笑み、オレがベッドヘッドにもたれかかるのを手助けし、そしてベッドの上にトレを置いた。

「ふーふーしようか？」

「いや、自分で食べれる。けど……託生」

「うん？」

「その服はどうした？」

「これ？」

うん、そう。薄いピンクの看護師の制服。しかも帽子つき。ものすごく似合ってるんですけど。

「あのね、帰宅時間を連絡したときにギイが体調を崩して帰ってるって聞いて、そしたら、スタッフの人が貸してくれたんだ」

ほお、そうか、スタッフがか。

……って、なにも、思わないのか、お前は？！

「あのさ、託生」

「なに？」

「立って」

「はあ？」

「そこで、立ってくれ」

熱が上がりそうな気がするけど、このモヤモヤしている状態を持ち続けているのも、絶対体によくないと思う。

首を傾げながら、その場に立った託生の下半身は……。

「なんで、ミニスカじゃないんだよ？！」

「はあ？！」

「看護師の制服と言えば、ミニスカだろうが！」

「あのね、今はパンツが多いの。ってか、なに考えてんだよ」

「託生のチラリズムが……。オレの楽しみが……」

ドカッ！

「……ってー！ 病人になにをする？！」

「それだけ元気だったら、大丈夫だね。ぼく隣の部屋で寝るから」

「おい、こら、待て！看護師は？！ミニスカは？！」

「夢の中でどうぞ～」

「託生！」

まずった。熱で頭が回らなかつたが為に逃した鯛だった。今度は計画を練つて、必ずやミニスカ看護師を託生に！！

…………あらぬところに熱はいらないんだよ。

どうしろってんだ、この半身を！

託生～～～～！

---

2011年10月10日(月)

「ギイ？」

「精神統一とかして邪魔になるんだつたら、すぐ出ていくけど」

予定の時間より早く着く事ができたオレは、託生の控え室に顔を出した。

「んー、それはいいんだけどね」

ほんの少し小首を傾げて、困ったように笑う。

「どうかしたのか？」

コンサート直前のこのときに、何か問題でも発生したのか？

眉を顰めたオレに、

「別になにもないんだけどね」

と言いつつ、やはり何故か託生は困り顔。

「オレにできることなら、言ってくれ」

こんな状態でコンサートなんて、まずいだろ。

「んー、ギイ、呆れない？」

「呆れる？オレが？」

「人々、ギイがここに来るからいけないんだけどね」

「オレ？」

「うん、じゃ、責任とつもらおうっと」

「はい？」

言うなり、託生の腕がオレの首に巻きつき……。

おまっ、ちょ……。

熱く口唇を重ねる託生の背中に腕を回そうとするも、ビシッと託生に払い落とされ、思う存分キスを堪能して託生が口唇を離す。

「ふう、落ち着いた」

そうか、落ち着いたのか。緊張が解れたのなら、それはよかった。

……と言いたいところだが、この素直な下半身を抱えたオレをどうしろってんだ？！

「そろそろ行かなきゃ」

「そ……そか」

「じゃ、ギイ、あとでね」

機嫌よく手を振つて託生は出ていったが、オレはそのままその場に座り込んだ。

「落ち着け、オレ」

自己暗示をかけつつ、今夜はどうしてやろうなんて余計な事を考えたおかげで、座席にたどり着けたのが1分前。

今夜は、覚悟しろよ。抱き潰してやる。

2011年10月09日(日)

ピンポン。

いつものように託生さんの部屋のインターフォンを鳴らし、ドアの前で託生さんの応答を待つてい  
ると、なんの前触れもなくドアが開き、

「桜井か？」

副社長が顔を覗かせた。

「お…おはようございます」

あ、昨晚の壮行会の後、託生さんのメゾネットマンションに泊まられたのですね。

「話がある。入れ」

副社長はすっと身を引き、私を部屋の中に促した。

通されたリビング兼ダイニングに、託生さんの姿はありません。

まだ上階の寝室にいらっしゃるのですか。

「そこに座ってくれ」

「はい」

言いながら副社長はコーヒーメーカーからコーヒーをカップに注ぎ、私の前に置いた。

「託生さんは、まだお休みですか？」

「ああ。さすがに昨日は飲みすぎたらしくてな。今日は、休めないか？」

「それは、大丈夫です。事務所内も引越し業者が梱包しますので、託生さんの手をわざわ  
せることはありません」

普通なら数ヶ月前から荷物を整理し、なおかつ大型の荷物は船便で、残りの小型の荷物は  
航空便でというのが一般的。

しかし、事務所移転が決まったのが1ヶ月ほど前の事。

しかも、できるだけ早くという副社長の言葉に、事務所内はもちろん各自の荷物の引越しなど  
どうしようかと思案していた中、なんと副社長が貨物専用の航空便をチャーターし、全員いっせい  
にNYに移転という、一大プロジェクトになってしまった。

ぎりぎりまで荷物をまとめることができるのはありがたいのですが、一体どのくらいのお金が……。

いや、ありがたいお話なのだから、そんな下世話な事を考えてはいけませんね。

「それでだ。託生の荷物の荷札をこれに張り替えておいてくれ」

「あの、ここは……」

「オレのマンション」

やはり、そうですか。

昨晚、私が口を滑らせたから…。

「あの、託生さんには……」

「あとで言っておく」

と私の台詞をさらうように口を挟みつつ、明後日の方向を向いているのは何故でしょう。

「まあ、2発くらいは想定内だし」

「はい？」

「桜井。託生に絶対気付かれるなよ」

「はあ」

「オレの顔面が変形したら、お前のせいだからな」

「ええっ？！」

そ…そこは、私の責任なんですか？！

「今日の午後帰るから、あとは任せたぞ」

私の肩を力強く握りつぶすように掴み、副社長はにっこりと笑った。

さて、託生さんに気付かれないようにするには、いつ張り替えたらいいのでしょうか。  
いや、それよりも、副社長。肩が痛いです。

---

2011年10月06日(木)

託生を手放す.....？そんなこと.....。

考えたくない現実を脳裏に浮かべたとたん、目蓋の裏が暗くなり頭がぐらぐらと揺れ、その場に膝をついた。

「か.....はっ.....！」

息が出来ない.....！

床に倒れるように横たわり、手で口を覆う。

咄嗟に過呼吸の対処ができる自分を冷笑しつつ荒い呼吸を繰り返し、何も見えなかつた視界が戻ってきたとき、額に滲む汗とは別にこめかみを滴が流れていた。

何を迷ってるんだ。託生の命に変えられるものなんてないだろ。託生が殺されていいというのか？！

---

2011年10月04日(火)

「今まで、ありがとう。最高の相棒だったよ」

「馬鹿が.....」

差し出した右手を、唇を噛み締めて章三が強く握った。赤くなった目には気付かない振りをしてやるよ。

「元気でな」

後ろ手にドアを閉め薄暗い廊下を歩き寮を出たとたん、痛いほど冷たい風がオレの頬を撫でていった。

まだ託生は眠っているだろうか。

振り向いて仰ぎ見た270号室の窓には、カーテンが引かれている。

東の空がようやく変わり始めた頃、バス停に着いた麓行きの始発バス。

これに乗るのも最後だな。

座席に座り、走り出したバスの窓から祠堂を振り返った。鬱蒼とした木々の隙間から見える校舎が小さくなっていく。.....夢が遠ざかっていく。

眠る振りをして俯いたとたん、ポツリと水滴が足を濡らした。

「託生.....」

奥歯を噛み締め嗚咽を堪える。

生きててくれるだけでいい。もう二度と会わないから、託生の命だけは狙ってくれるな。

---

2011年09月22日(木)

【がんばれ桜井さん】

「今年も、託生くんの恋シリーズを出すんですか？」

ラインの向こうから、朗らかな佐智さんの声が流れた。

毎年この時期から企画を始める託生さんのインストゥルメンタル集「恋シリーズ」は、第一弾から佐智さんが企画に加わっていました。

いえ、元々佐智さんが託生さんの部屋で見つけた楽譜を事務所に持ち込んだのが始まりで、毎回楽しそうに選曲をなさっています。

「はい。今、女性スタッフが、いつものようにタイトルに凝りますよ」

「僕も、来週、そちらに行く予定になっているんです。だから、選曲のお仲間に入れてもらいたいのですが」

「それは、ぜひともお願ひします」

「そうして、ラインは切れたのですが……。」

「桜井、オレも選曲に入れろ」

数日後、突然事務所に副社長が現れた。

「それは、かまいませんが……」

でも、副社長。貴方には本来のお仕事があるはずですが……。

というか、そのスーツの中からブブブブ鳴っている音は、携帯のバイブだと推測されます。

また、抜け出してこられたのですね……。

「ギイ？」

「お、託生。恋シリーズの選曲にオレも加わるから」

「ダメ！」

間髪入れずの否定に、副社長の眉間に寄る。

「なんでだよ？！」

「ギイ、仕事があるだろ？」

「だから候補曲聴いて、いくつか選ぶだけ……。」

「それでも、ダメ！」

「佐智がよくて、なんでオレがダメなんだよ？！」

「とにかくギイはダメ！！」

私を挟んでお二人の睨み合いが続く中、事務所の入り口から慌しい靴音が鳴り、

「義一さん！やはり、こちらにいらしたのですか」

島岡さんが飛び込んできた。

「島岡さん、すみません。ほら、ギイ、仕事に戻って」

これ幸いにと託生さんが副社長の背中を押そうとするも、副社長は梃子でも動く気配がなく、その様子に島岡さんが額に手を当て首を振った。

「あのね、ギイ」

すると、力いっぱい背中を押していた託生さんが、反対にスーツの上着を引っ張り部屋の隅に副社長を連れて行き、耳元に手を当て何かを言った。

むっすりとしていた副社長の表情が徐々に輝き、

「よし、わかった。楽しみにしてる」

託生さんの左頬にキスをして、

「島岡、帰るぞ」

「当たり前です」

来たときと同様、慌しく事務所を出て行った。

「あの、託生さん。何を言われたんですか？」

あの副社長があっさりと納得するなんて。

「いえ……ただ、押してダメなら引いてみろを実験してみただけです」

なるほど。確かに(背中を)押したり引いたりしていましたね。

押してダメなら、引いてみろ。

私にも、この技は使えるのでしょうか？

今度、実験してみようかと密かに思ったのは、ここだけの話です。

2011年09月14日(水)

【がんばれ桜井さん】

いつものようにインターホンを鳴らし、最上階のペントハウスに通され、

「これは、桜井様。おはようございます」

これまた、いつものように執事さんが出迎えてくれた。そして、いつものように朝の挨拶を……。

「おはようございます。託生さんのお迎えに……ん？」

廊下の向こう側が、なにやら騒がしい。

「どうか、されたのですか？」

思わず尋ねた私に、執事さんが引きつり笑いを浮かべ、

「お気になさらず。託生様はすぐに来られると思いますので、そちらのソファでお待ちください」

私をホール横のソファへ案内した。

そうこうするうちに、騒ぎの声が大きくなってくる。

「約束しただろ？！なんで起こさないんだよ？！」

「ギイが熟睡していたからだろ！」

「一週間ぶりだったんだぞ？！それだけを楽しみに帰国したってのに！」

「あーーっ、もう！朝から何言ってんだよ！！」

託生さんと副社長の声が近づくにつれて、なんとなくわかりました。

夜遊びの約束をしていたのに副社長が寝てしまったということですね。やれやれ。

「託生さん、副社長。おはようございます」

姿を現したお二人に挨拶をすると、

「お、桜井、いいところに」

「はい？」

そのまま横になってしまったのだろう、しわくちゃの服を着た副社長が足早に近づき、

「今日、託生、休みな」

ドカッ！

「てーーーっ！」

「勝手なこと言うな」

「託生、お…まえ……」

「放っておいていいですから。桜井さん、行きましょう」

容赦なく向こう脛を蹴った託生さんが、私の腕を引きさっさとドアを開けて歩きかけたと思ったら立ち止まり、

「…………すみません、少し待っていただけますか？」

もう一度ドアの向こうに消え、5秒後また戻ってきた。

「大丈夫ですか？」

「もう大丈夫です」

託生さんがそうおっしゃるのなら、大丈夫なのだろう。

その日の仕事が終わったとき、なぜか上機嫌な副社長が現れ、さっさと託生さんを連れていつてしまわれた。

「明日のお迎えは、時間を遅らせたほうがいいですね」

私の独り言を聞いたスタッフが、苦笑いしたのはなぜでしょうか……。

---

2011年07月24日(日)

「そもそも、どうしてパリに？お前、フランス語勉強してたのか？」

「フランス語なんて、できるわけないじゃないか」

当たり前のようにあっさり言われて、あんぐり口を開けた。

「よくそれで授業受けられたな……」

「うーん。バイオリンのレッスンはね、『Non ! Non !』とか言われて先生がその場で弾いてくれて、そのニュアンスで言ってることがわかったと言うか」

「あー、なるほど」

実演してもらえば、言葉なんて関係ないよな。

「大変だったのは講義だよね。辞書片手に予習はするんだけどさ、講義中教授が何言ってるかわからなかったから、ノートにカタカナでそのまま書いてて」

「カタカナ……」

「うん。帰ってから、また辞書見てフランス語に直して、それを日本語に訳して」

「……託生」

相変わらず無謀な。

「でも、なんとかなったみたい」

人事のようにあははと笑う託生に脱力した。

ほい。背中ボツ放流～。落ち。

---

### 【がんばれ桜井さん】

事務所の移転を一週間後に控えた金曜日。

託生さんは「高校時代の友人が壮行会を開いてくれるから」と、嬉しそうに事務所を後にされ、私は託生さんの後を追い、店が見える位置で立っていると、

「桜井」

すっと車が止まり、中から副社長が降りてこられた。

「託生は？」

「お店の方に入られていますが」

そういうふうに副社長は、託生さんと同じ高校でした。ここにおられても不思議ではないですね。

「桜井。オレのSPがついているから、お前は帰れ。渡米の準備があるだろう」

「それは、ありがたいのですが……」

「気にするな。こっちには数人ついている」

「わかりました」

確かに自分の荷物がまだ片付いていない状態。

副社長の言葉にありがたく帰路につこうとした私の背後から、

「ギイ先輩？！」

若い男性の声がしました。

「真行寺じゃないか。久しぶりだな」

「うわ！本当にギイ先輩だ！お久しぶりっす」

ああ、この方も祠堂の方なんですね。真行寺さん……ですか。

「あ、もしかして葉山サンがNYに行かれるのって……」

「ああ」

副社長が答えられると、真行寺さんは感動したように目を赤く潤ませて、

「よかったです。皆心配してたんです」

よかったですと何度も咳き鼻をすすった。

「真行寺……」

この方も、託生さんと副社長が仲直りされたのを喜んでいるんですね。託生さんの側にいる方は本当に優しい方ばかりで、私まで嬉しくなってきます。

これも、託生さんの人柄なんですね。

「じゃ、向こうに行かれたら一緒に暮らすんですよね」

「ああ」

「え？！」

お二人の会話に、思わず不躾に立ち入ってしまった私に、お二方がゆっくり振り向いた。

「桜井、どうかしたのか？」

「あ……あの。託生さん、スタッフと一緒にマンションを探しておられましたが」

私が言うと、副社長の目がむっすりとすわり、真行寺さんは「葉山サン……」と頭をかかえられました。

もしかして、私は何か失言をしてしまったのでしょうか。

「…………うか。わかった。桜井、礼を言うぞ」

副社長、目が笑っていません。全然、礼を言われているような気がしないのですが。

「真行寺、そろそろ中に入るか」

「はい！」

「じゃな、桜井、気をつけて帰れよ」

そしてお二人は居酒屋の中に消えていかれました。

明日、託生さんにお話した方がいいので……ピピピピ♪

『託生には何も言うなよ』

ブチッ。

…………託生さん、申し訳ございません。

---

2011年07月18日(月)

あの頃のぼくは、崩れそうな砂の上に立っていた。

進むこともできず下がることもできず、ただ臆病な心を隠し気丈なふりをして、ピエロのように笑っていた。

時を経て、ぼくの隣には君がいる。

全てをさらけ出すには、まだ少し慣れないけれど、君が好きな気持ちはあの頃と変わらないから。待ってて。

---

2011年06月24日(金)

「おい、泣くなよ」

ギイは目尻に口唇を寄せ、優しくこぼれ落ちる涙を吸った。

「ギイが優しすぎるのが、いけないんだ」

ぼくの屁理屈にクスリと笑い、

「いい男だろ？」

頬に口唇を滑らす。

「……自信過剰」

「今更」

自信満々に断言するギイに吹き出した。

もう、どうして、こうぼくの心を軽くするのが上手いんだよ。

鼻の頭にちょんとキスをして、

「眠れないなら、軽く二人で運動しないか？」

熱っぽい瞳で、ギイが覗き込んだ。

「.....軽く？」

「いや、激しく」

了承を含んだぼくの突っ込みに間髪入れず訂正し、ギイはぼくの体をふわりと持ち上げた。

「ギイ、愛してる」

首に腕を廻しながら耳に口を寄せ囁くと、とても嬉しそうに微笑み、

「お返しはベッドでな」

ウインクをひとつきめた。

---

2011年06月23日(木)

真夜中過ぎ。そっと音を立てずに、ギイが部屋のドアを開けた。

「ギイ、おかれり」

「託生、まだ起きてたのか？」

ぼくが寝ていると思っていたのだろう。

ソファに座ったぼくを見て一瞬目を見開き、ギイは足早に近寄り、

「ただいま」

ぼくの肩に手を乗せ、ただいまのキスをした。

「明日の仕事に差し障るぞ.....それとも、眠れなかつたのか？」

そして隣に腰掛け心配げに顔を曇らせ、ぼくの顔を覗きこむ。

自分こそ体を壊しそうなくらい無茶をしているのに、いつもいつも、ギイは、ぼくの事だけを考えてくれている。

ギイの背中に腕を廻し、肩口に顔をうずめた。

煙草とコロンの混じったギイの匂いを嗅いだとたん、ツンと鼻の奥が痛くなる。

『もしも託生に恋人ができる託生が幸せそうなら、見守ってやってくれ』

どんな気持ちで、ギイはあれを書いたのだろう。ぼくの幸せだけを考えて、二度と会わないと覚悟を決め、そして遠くで見守ってくれていた。

ずっと愛し続けてくれたギイ。

「ギイ.....」

「ん、どうした？」

優しく髪を梳く指を取り、指先にキスをした。

「ギイ、好きだよ」

「オレは、愛してるぞ」

クスリと笑い口唇を寄せるギイに、引き寄せられるまま瞳を閉じる。

深く哀しい愛し方を覚えさせてしまった、ぼくの罪。

一生かけて、君に償っていくよ。

言葉と涙を飲み込んで、口唇に想いを乗せた。

---

2011年06月09日(木)

託生への3つの恋のお題：優しい笑顔が好きだった/百年の恋って言うけれど/寂しいときに限つて居ない <http://shindanmaker.com/125562> あ～、これは切ない。Reset設定で書けそうなお題だ。

目を閉じれば浮かんでくる。ぼくだけに見せる優しい君の笑顔。

けれども、ぼくの隣に君はいない。

あの暖かな手を離してしまったぼくには、そんな権利はないけれど、ひとり想う事だけは許してほしい。

いつものように目を閉じ胸に手を当てた。

そして、光の中へ歩き出す。

ぼくの中には君がいる…。

---

2011年06月05日(日)

【がんばれ桜井さん】

「桜井さん、おはようございます」

「おはようございます、託生さん」

「あ、島岡さんにお聞きしたんですが、桜井さん。ぼくの説明書を持っているんですって？」

悪戯っ子のように笑って、小首を傾げる。

託生さんのマネージャー兼SPになった時、副社長より渡された分厚い紙の束。

全てを頭の中に叩き込み、この5年、内ポケットに入れ片時も離さず持ち歩いていました。

「説明書というよりは、注意書きですが…」

「それ、見せてもらっていいですか？」

「ギイも知っていますから。きちんとお返しますし」

クスクスと笑いながら促す託生さんに、それならと、内ポケットから注意書きを出して渡すと、託生さんは興味深げに開いていき、

「ふつ、わざわざ筆で書くなんて」

手近な椅子に座りペン立てから太文字のマジックを手にした。

そして、

「過保護だなあ。子供じゃないんだから」

と、呟きながら

「これ、いらない。これも、いらない」

ダメ出しをしながら、ペンで線を引き消していました。

私も、それは思いました。

もう十分20歳を回った大人に、夜遊びをさせないようになんて、さすがに言えません。第一、副社長自身、託生さんを夜遊びに連れまわしている状況なのに。

最後まで目を通した託生さんは、ふと、目を細めて手を止めた。

キュッと唇を噛んで線を引き……うん？ やけに丁寧に消してます。

「ありがとうございました。これからも、よろしくお願ひします」

そう言って託生さんは注意書きを私に返し、練習室に入っていた。

見届けて紙を広げてみると、半分以上の項目が黒い線で消されていました。

でも、ブツブツと「子供じゃない」と呟いていたわりには、託生さん、緑黄色野菜の部分は消していないんですね。

そして、最後まで目を通したとき、文章そのものが見えないように丁寧に塗りつぶされた一文が…。

確か、ここに書いてあったのは…。

『もしも託生に恋人ができると託生が幸せなら、見守ってやってくれ』

色恋沙汰に口を出されるのは困るというところでしょうか。

大丈夫ですよ、託生さん。恋人ができたときは、見て見ぬ振りをしながら、応援させていただき

ますから。

内ポケットに注意書きを滑らせた。

---

いつものようにガードにつき、託生様の練習風景を硝子越しに眺めていたその時、イヤホンからジョンの焦った声が聞こえてきた。

「マイケル！ すぐに玄関ロビーに来てくれ！」

慌ててロビーに走っていくと、そこには四角い箱を取り囲んだ桜井さんとジョンがいた。

「時限爆弾かもしれません……」

桜井さんの声に、緊張が走る。

「託生様の避難を！」

「マイケル、待ちなさい！」

走り出そうとした俺は、桜井さんが有無を言わさぬ声に引き止められた。

まずは、託生様の避難では……。

「託生さんのテールコートは、できていますか？」

「はい。昨日店から連絡が入っています」

桜井さんは顔を青くしている女性スタッフの大野さんに確認すると、

「ジョン。爆発物処理班に連絡を。スタッフの方は、託生さんを連れ出した後、すぐに避難してください。マイケルと大野さんは、こちらへ」

次々と指示を飛ばし、託生さんの練習室に足早に向かった。

「託生さん」

「桜井さん、どうしました？」

先ほどまで険しい顔をしていたのに、いつものような穏やかな表情を浮かべ、

「託生さんのテールコートが出来上がったらしいので、申し訳ありませんが大野さんとサイズチェックに行っていただけませんか？ ガードはマイケルがつきます」

危険な状況である事をおくびにも出さず、ごく自然に託生さんを事務所の外に避難させようとした。

「はい、わかりました」

託生様は、桜井さんの言葉になんの疑いもなく頷き、手早くバイオリンをケースに直して廊下に出てこられ、そのまま3人で車に乗り込み事務所を後にした。

その後、ジョンから「無事時限爆弾は処理された」との連絡が入り、胸を撫で下ろした。しかも、爆弾処理のほとんどは桜井さんがやつたものだとの言葉に、度肝を抜かれる。

爆弾処理までこなすとは、伝説の桜井さんの異名は伊達ではない。

それに、あんな切羽詰った状態であったのに、託生様に気付かれず避難させてしまうとは、桜井さんの手腕には頭が下がる。まだまだ俺は青い。

いつかは桜井さんのようなSPになれるのだろうか。いや、いつかは、なってみせる！

---

2011年05月31日(火)

桜井から送ってきた再来週発売のCD『恋を知った貴方に…』

「また、女性受けしそうなタイトルだな」

クスリと笑ってコンポにセットした。

託生が手がけた初のインストゥルメンタル集。

偶然、作曲して書き溜めていた五線紙を佐智に見つかったのが運のつき。

早速事務所が手を出し番組のBGMなどに使われ始め、「バイオリニスト葉山託生」の名を

浸透させた。

それに伴いCD化の声が寄せられ、今回の発売に繋がったと聞く。

コンポからは軽やかな優しいメロディが流れていた。

報告書には「女性スタッフがタイトルに拘り、インストゥルメンタル集には必ず『恋』の文字を入れるそうです」と書かれてある。

「恋……ね」

恋を知り、恋に溺れ、恋をなくしたオレに聴く権利はないのだろうが。

「なあ。お前は今、恋しているのか？」

呟いた声が、バイオリンの音色に溶けた。

---

2011年05月08日(日)

【がんばれ桜井さん】

「桜井さん、おはようございます」

「おはようござ…どうかしましたか？」

スタジオに現れた託生さんの雰囲気が、いつもと違うような気が…。

「いえ、何もありませんよ？」

「そうですか。今日のレコーディング。よろしくお願ひします」

「はい。全力を尽くします」

そう言って奥に消えた託生さんの後姿が、やはり違うような気がします。そう思っていたのですが、レコーディングが始まると、まるきりいつもと一緒に

「私の気のせいだったんですね」

ホッと息を吐きかけたところに

「桜井」

「！！！」

背後から低い低い声が聞こえてきて飛び上がらん驚きました。

振り向かなくてもわかります。

「副社長、どうなさったんですか？」

仕方なく振り返ると、案の定そこには、やけに疲れた顔の副社長が。

「託生は？」

「レコーディング中です」

「あとどのくらいで休憩なんだ？」

「あと…10分ほどですね」

「……控え室で待ってる」

そう言って、硝子越しの託生さんに目を向げず、さっさと奥の控え室に入っていった。

「お疲れ様です。副社長が控え室でお待ちですが…」

「ギイガ？」

言うなり、託生さんの目がすっと細くなった。

「あの…」

「ちょっと行ってきます」

託生さんは、足早に控え室に向かい、やけに静かに部屋に入っていった。大丈夫でしょうか？

「レコーディングだって言ったよね？」

「悪かった」

「止めてっていったよね？」

「ごめん」

「寝不足がどれだけ影響与えるか、わかってる？」

「本当に悪かった！託生、許してくれ！」

「……一日待ってくれればよかったのに」

「え？！じゃ、今日…！」

「無理」

「託生～～」

また、託生さんを夜遊びに連れまわしたんですね。

本当に困ったお方だ。

でも、控え室から出てきた託生さんが、その後なんとなく気分良さそうに演奏されているように見えて、安心しました。

すれ違った副社長のおでこが赤かったのは、たぶん私の気のせいです。

---

「一体どんな人物なんだろうな。『この人物に何かがあった場合、Fグループは崩壊する』なんて」

「よくわからんが、最重要人物なのは確かだな」

「SPの追加って事なのか？」

「追加と言えば追加だが、今まで桜井さんが一人でガードをしていたそうだ」

「伝説の桜井さん?!あの過去最悪の襲撃事件の指揮をしつつ、最前線で主要人物の喉元を斯き切った?!」

「俺達SPから見れば神様みたいな人物だな」

「そんな人がガードについているのなら、ものすごいVIPって事じゃないか」

---

2011年04月24日(日)

【がんばれ桜井さん】

「申し訳ありませんでした」

「いいえ!桜井さんのせいじゃないです!無茶を言ったギイが悪いんですから」

副社長より『託生にバレた』と連絡があった翌日、オフィスで頭を下げた私に、託生さんはわたしと両手を振って許してください、それどころか、

「ギイの我侭に振り回されて大変だったでしょう」

労いの言葉までかけてくださいました。

それだけでこの数年感じていた後ろめたい思いが開放されます。

本当に優しくて懐の深い方ですね。

「でも、桜井さんがカメラを構えているのを見た事ないんですが、どうやって撮ってたんですか?」

聞かれるであろうと思っていた疑問に、

「これなんです」

と一式を入れたアタッシュケースを開けると、

「これ、全部、カメラですか?」

と驚いたのもつかの間、

「おもしろ~い」

と託生さんは次から次へと使い方を私に聞き、何故か私を被写体に何枚かの写真を撮られた。

たしかに、こんなものがカメラだとは、誰にもわからないでしょう。

「桜井さん、一緒に撮りませんか?」

通りかかったスタッフにシャッターを切ってもらい、  
「じゃ、これ、ギイに返しておきますね」  
とアタッシュケースを手に帰宅されたのですが、そのまた翌日のこと。  
ふらりと現れた副社長が何故か恨みがましい顔をして、  
「桜井、シャッターを切れ」  
と、練習中の託生さんを拉致し、羽交い絞めにして声をかけてこられた。  
言われるがままにデジカメのシャッターを切ったのですが、その瞬間、託生さんの右ひじが鳩尾に入り、確認した液晶画面には副社長のつむじが綺麗に写っている。  
「ふうん、左巻きなんだ。珍しいね」  
横から覗き込んでのほほんと言う託生さんに、崩れ落ちる副社長。  
副社長付きのSPも身動き一つできず、成り行きを見守っていた。  
二人の間に挟まれた私は、この後どうしたらいいのでしょうか?

---

2011年04月20日(水)  
「ん、託生、どうした?」  
「よいしょっと」  
「た...託生?」  
「ん?」  
「どうして膝の上に乗るのかなあって」  
「乗りたかったから」  
「...それだけ?」  
「うん」  
「本当に?」  
「んー、Chu」  
「託生、やっとその気に!」  
「ストップ!」  
「へ?」  
「仕事だからここまでね♪」  
「おまっ」  
「行ってきます」

---

2011年04月02日(土)  
【がんばれ桜井さん】  
託生さんが留学先のフランスから日本に戻られて、ついに本格的に動き出した頃、  
「今すぐ来い」  
の一言で呼びだされたFグループ本社副社長室。  
ここに入るのは2度目ですが、やはり緊張するものです。  
ノックの後、入室を促され室内に入ると  
「そこに座っていてくれ」  
とソファを薦められ、しばらくすると副社長が手になにやら色々な物を持って向かいのソファに座った。そして。  
「どれがいい?」  
「はい?」

副社長、話が見えないのですが。

「カメラだよ」

「カメラ?!」

机の上に置かれているのは、ペンに腕時計にライターに、これは車のキーですか？

他にも、ボタン、ipod、サングラス、コーラの缶？これが、全部カメラ？

「あ、お前の趣味もあるかと思って、MINOX DCC Leicaも用意したぞ」

レトロなカメラらしいカメラですが、この小ささおもちゃじゃないんですか？

いえ、それよりも、このカメラでどうしろと？

「報告書に託生の写真も付けてくれ。あ、メモリーカードでいいから」「それは、どういう写真なのでしょうか？」

今、ものすごく、背中に鳥肌が立っているのですが。

「何をしているときでもいい。普通の素のままの託生の写真」

それは、もしかして

「盗撮？」

「人聞きが悪い事を言うな」

「申し訳ありません！」

そ…そうですね。副社長ともあろう方が盗撮を命令するなんて、常識的にありえません。

「ま、でも、ある意味、盗撮だよな」

「ええ――――っ?!」

「別に覗きをしろと言ってるんじゃないんだ。練習している時とか、コンサートのリハーサルとか、CDのジャケットに使うような正式なものじゃないのが欲しいだけだから」

ああ、出資者として、託生さんがバイオリンをきちんとされているかを確認するためなのですね。

「頼めるか？」

「承知しました」

副社長の命令なのだから仕方ありません。託生さんにはとても申し訳ないですが。

「お、そうだ。カメラ全部持つていけ。どれが一番使いやすいかわからないだろう？」

そうですね。確かに、使ってみなければわかりません。

アタッシュケースに詰め込んで

「では。行ってまいります」

「桜井」

「は！」

「託生に気付かれるなよ」

「…努力します」

スパイになったような気がするのは、私の気のせいなのでしょうか。

---

2011年03月25日(金)

散り散りに破った未来図が、まるで桜の花びらのようにはかなく舞い踊る。

風に吹かれるまま、いつかは消えてなくなるのだろうか…。

夢と涙と心を捨て、これから生きていく。

お前のいない陽炎の世界で。

---

2011年03月06日(日)

「マイケル!ジョン!オフィスまで託生を頼むぞ」

「「はっ！」」  
「じゃな、託生。遅くなるから、先に寝てろよ」  
「か...」  
「か？」  
「帰ってくんないー!!」  
「ははは...」  
「託生様、大丈夫ですか？」  
「.....はい」  
「オフィスに戻られますか？」  
「.....そうします(ぐったり)」  
「託生さん、お戻りに.....どうされましたか？」  
「桜井さん...いえ、何もないです...ちょっと練習してきます...」  
「マイケル、いったい何があつたんですか？」  
「あー、副社長が、ニューヨークのど真ん中で愛を叫ばれまして」  
「は？」  
「『ナイトライフを一週間から五日にしろ』と迫られて、お疲れになったようです」  
「はあ。よくわかりませんが、私はもう少し打ち合わせがあるので、ガードお願いします」  
「はっ！」  
「...副社長にも困ったものだ。夜遊びに連れ回されて、託生さんが、お疲れにならなければいいが...」

---

2011年03月05日(土)  
「ギイ、話があるんだけど」  
「改まって、どうしたんだよ？」  
「来月から3ヶ月コンサートツアーに入るだろ？」  
「ああ。全国回るんだよな」  
「うん。それで、間のオフの時には帰ってくるけど、各コンサートの1週間前からはベッドは別にしたいんだ」  
「なんで?!」  
「困るから」  
「オレは全然困らない！」  
「ふうん。じゃあ一緒にいいけど、エッチはないよ?」  
「なんで?!」  
「困るから」  
「オレは全然困らない！」  
「うーん、それなら、3ヶ月帰らないことにするよ」  
「ちょ...ちょっと待て、託生！」  
「あ、桜井さん?ツアー中、泊まれる所探してもらえませんか?わっ、ギイ?!」  
「桜井!今のなし!」  
ガチャ  
「わかった!1週間前からはエッチなしにするから!だから、別居は止めてくれ!帰ってきてくれ、託生!」  
「これから先、ずっとだよ?いいの?」  
「いい!!別居だけはお断りだ!」

「じゃ、オフの時は帰ってくるよ」  
「ほっ。あ、託生、スケジュールは?」  
「これだよ」  
「.....1回しかチャンスがないじゃないか!」  
「やっぱり、ぼく、どこかに...」  
「それはダメ!!」  
「.....傍若無人に拍車がかかってるように気がする」

---

### 【がんばれ桜井さん】

「さああくうらああいいいいい」  
地獄の底から聞こえてくる声というのは、こういう声の事でしょうか。  
来月から始まるコンサートツアーの最終調整を詰めていたオフィスのドアから、この世の物とは思えない位おどろおどろした音が響き、私は瞬間息が止まりそうになりました。  
背中から漂う気配も恐ろしく黒く感じます。  
振り向きたくはないのですが、他スタッフの顔色が白から青を通り過ぎてどす黒く変化する様を見、覚悟を決めて方向転換すると、そこには髪を振り乱した副社長が、まるで鬼夜叉のような顔をして立っていました。  
あの美声がここまで変化するなんて、一体何を怒らせてしまったのでしょうか。  
「これは、なんだ?!」  
あ、託生さんのスケジュール。  
「あの、これが、なにか?」  
「どうしてオフがここしかないんだ?!」  
ちょうどツアーの半分を過ぎた頃に10日程設定したオフ。  
とは言え、移動時間を入れると8日間しかありませんが。  
「もう少し伸ばすか、別の日にもオフは取れないのか」  
「それは、できません」  
「桜井——」  
副社長の意志に背いても、こればかりはできません。  
託生さんの体力を考えれば、これが限度なんです。  
「...今年はもう無理ですが、来年でしたら何とかしますが」  
「なんとかとは?」  
「今までどおり、コンサートツアーにかける期間を6ヶ月にすれば、オフももう少し長めに取れます」  
「ろっかけつ.....?」  
「はい、六ヶ月です」  
「ろっかけつ.....」  
そうです。副社長の希望を取り入れ、今年は3ヶ月にしたんです。  
その代わりかなりの強硬軍になりそうなので、移動時間と託生さんの体調を考えて各国のコンサートでの割り振りを考え、10日間だけですがオフを作ったんです。  
...が、副社長、瞳孔が開いているような気がするんですが、私の気のせいでしょうか?  
というか、瞳孔が開いたら死んでますね。失礼しました。  
「来年からは、そうしましょうか?」  
「.....いや、いい」  
「副社長?」

「……このままでいい。半年なんて絶対無理だ」

「は？」

なにが、無理なのでしょうか。

「スケジュールもこのままでいいから、進めてくれ」

「はあ」

そう言い残して副社長はふらふらとオフィスを出て行った。

入れ違いに戻ってきた託生さんが私の話を聞き飛び出していったのですが、一体どちらに行かれたのでしょうか？

---

「ギイーーー!!また桜井さんに無茶言っただ……ギイ?」

「……託生」

「……な、なんだよ」

ガシッ!

「愛してる、託生!」

「ちょっ…ギイ、ここ、街中(ぼそぼそ)」

「二度と会えないと思っていたけど、オレはずっと託生の事を愛してたんだ」

「わかつてるってば。だから、ここ往来…」

「1秒でも離れていたくはないと思うのは、オレの我侭か?!お前を抱いていたいと思うのは、変なのか?!」

「お…落ち着いて、ギイ」

「ずっとずっと、お前に愛を囁きたい。この腕に抱き締めて、愛を確かめたい。今、この瞬間でさえも、託生を抱きたいんだ———!!」

「わかつてるってば!!!」

「頼む。コンサート一週間禁欲、三日にしてくれ!いや、五日でいい!託生!!」

「わかった!わかったから、五日でいいから!!お願ひだから、もう、黙って!」

「……商談成立(ニヤリ)」

「あ!ギイ、ズるい!!」

「あー。よかった。マジに死ぬかと思った」

「ギイってば!」

「男に二言はないもんな。じゃあ、仕事に戻るとするか」

「ギイ!!」

「愛してるよ、託生」

「だ…だ……大っ嫌いだ———!!」

---

2011年02月26日(土)

「ガードを増やしてみてはいかがですか?」

「だよなあ」

「すぐ側で…は、託生さんが気にしそうなので、少し離れて」

「マネージャーはやめてほしくないと言うなら、それしかないよな」

「不服そうですね」

「あいつ相性診断抜群だったんだ」

「義一さんよりもね」

「一言多いぞ、島岡」

「事実でしょう?」

「誰にでも平等に見えつつ、人見知りされますからね。仕事のパートナーなら、気を使わない相手の方がいいと言われたのは義一さんですよ」

「...そうだが」

「SPとしての力量、技量、経験も群を抜いていますし、マネージャー業のような綿密な細かい作業にも向いています。付け足して言えば、託生さんの体調面もメンタル面も彼に任せておけば大丈夫でしょう?」

「.....そうだが」

「なにより、桜井さんは真面目です」

「.....わかってる」

「天下無敵の義一さんも、託生さんにかかると形無しですね」

「あれだけ『桜井さん、桜井さん』言われてみろ。オレだって自信をなくす」

「そんなに気になるなら、託生さんに聞いてみればいいでしょう?」

「あいつ怒らせると怖いんだぞ」

「大丈夫ですよ。...で、会議の時間なんですが」

「...(ジロリ)」

---

「えっ?」

「だからな。桜井って、どういう奴?」

「どういうって、ギイが決めたんだろ?」

「オレはテストの結果を持って指名しただけ。桜井の事はよく知らん」

「うーんとね。仕事に関してはね.....バイオリンを弾く事だけに集中させてくれる」

「集中?」

「うん。ぼく、大雑把だから、あれもこれもになるとパニックになるし、バイオリンに集中できなくなると本末転倒だろ?だから、全部桜井さんが動いてくれてるよ」

「まあ、それがマネージャーだからな」

「あとは、一緒にいても疲れない」

「.....人見知りの託生には珍しいな」

「うん。気を使わないとかそういうのじゃなくて」

「じゃなくて?」

「あ、利久!!」

「片倉あ?」

「うん、歳も違うし桜井さんに失礼かもしれないけど、利久といふみたい」

「な.....るほど」

「あ、でも、口数が少ない所は駒澤君」

「...そういう事か」

「なにが?」

「いや、こちらの話」

「???」

「託生、桜井でよかったです?」

「もちろん!!」

「.....やっぱり気に食わない(ボソリ)」

---

2011年02月25日(金)

「ねえ、ギイ」

先に帰宅していた託生が神妙な顔をして切り出した。

「なんだ?」

「桜井さん」

「桜井がどうした?」

「SPでなくてもいいと思うんだけど」

「どういう意味だ?」

ネクタイを緩め、託生の隣に座る。

「だからね。桜井さんにマネージャー専任についてほしいなと思って。ずっと神経を張り詰めていたら疲れるだろ?」

託生の言っている意味はわかる。

普通SPは交代制でガードにつくところを、この5年、桜井は一人で託生のガードをしていたのだから。しかもマネージャーというこれまた神経を使うような仕事をこなしながら。

しかし。

「それは、無理だな」

「どうして?」

「桜井自身、基本がSPだから」

「わかんない」

きょとんとして見上げる託生に苦笑し説明する。

「SPとしての能力はもちろん、マネージャーとしての適性検査、託生との相性診断、ストレス診断、心理テスト、ありとあらゆる物をパスしたのが桜井だ。その基本は、SPとしての忠誠心。だから、桜井にマネージャーだけと言っても、今更混乱するだけだぞ」

「でも.....」

オレの説明はわかっても心理的に納得できないのか、託生が口ごもった。

別 の方法があるとすれば....。

「それとも桜井をSP専任にして、別のマネージャーつけたいか?」

「それはダメ!ぼくには桜井さんが必要だよ!」

間髪入れずに即答した託生に、恋人として深い溜息が零れる。

「.....託生」

「なに?」

怒るだろうな。怒るだろうけど.....。

「オレと桜井、どっちが必要?」

「.....」

昔のようにすぐ手が出なくなったのはいい事なのかもしれないが、この冷たい視線も結構堪えるもんだ。

「どう答えてほしいわけ?」

「いいえ、愚問でした」

「よろしい」

10年前より強くなっているような気がするのは、オレの気のせいじゃないよな。

「桜井の事は考えてみるから、心配するな」

とりあえず託生の心配事を一つ減らして、せっかく二人でいるのだから、オレの事を考えもらおうではないか。

「ギイ、桜井さんの負担、減らしてね」

「わかつてるって」

だから。  
このオレの前で、他の男の名前を出す託生が悪い!  
「うわっ、ギイ?!おろして、おろしてってば!!」  
「桜井が4回、オレが2回」  
「な...なにが?」  
「託生が名前を呼んだ回数」  
「それが、なんだよ?」  
「あまり桜井ばかり呼ぶんじゃない」  
単純に計算して、オレより桜井と一緒にいる時間の方が長かったんだ。二人きりの時間まで、あいつに邪魔されたくないんだよ。  
「.....ヤキモチ焼き」  
「なんとでも」  
クスクス笑う託生をベッドに下ろし、そのままのしかかる。  
「今からはオレの事だけを考えるように」  
「はいはい」  
柔らかな口唇にキスをした。

---

2011年02月21日(月)  
【がんばれ桜井さん】  
託生さんと色々な所に挨拶回りし、最後のビルを出て電源を落としていた携帯をオンにして固まつた。  
「どうしました?」  
「着信履歴が...」  
常識を弁えている託生さんが携帯を覗くような事をしないとわかっているので、自ら携帯画面を託生さんに見せた。  
「ええ?!」  
それは、驚きますよね。着信履歴38件。全て事務所から。  
「桜井さん、帰りましょう!」  
言われなくても。事務所で何が起こっているのでしょうか。  
事務所に飛び込むと、これまた慌てた様子のスタッフが  
「託生さん!」  
まるで救いの神がやってきたような表情で託生さんの腕を取り、ぐいぐいと事務所の奥に引っ張っていく。  
「あ...あの...」  
腕を取られるがまま歩いていく託生さんの後ろにつき、周りを見回すとスタッフ一同が冷や冷やと眺めていた。  
「よっ」  
「.....ギイ」  
奥の応接室に悠然と座っていたのは、この事務所ができてから一度も訪れた事がない副社長だった。  
灰皿の上の吸殻を数えて...かなりお待たせして、スタッフが慌てていたのだなど推測する。  
副社長は呆然と立ちすくむ託生さんの側に寄り、右頬にキスをした。とたん  
「何するんだよ?!」  
間髪いれずに託生さんの右手が飛ぶ。

あの、託生さん。今のはアメリカ式の挨拶ですよね?いや、ここは日本ですけど。というか、いきなり平手打ちというのは、ちょっと物騒だというか。

それより、託生さんがこんなに手が早い事、今まで知らなかつたのですが。

副社長は殴られたことなど全然気になつてないようで、

「こっちも」

と言いつつ今度は左頬にもキスをして、もう一回殴られていた。

もしかして副社長はM?!

いやいや、そんな失礼な事を考えてはいけない。

「急になんだよ?」

「出張でこっちに来たから寄ってみた」

「連絡くらいくればいいじゃないか。桜井さんの携帯すごい事になって驚いたんだから」

「オレ、入れたぞ?」

「え?」

託生さんは慌てて胸ポケットから携帯を取り出し、何度か電源ボタンを押し

「...充電切ってるみたい」

えへへと誤魔化した。

確かに、よくありますね、託生さん。私も、何度も経験済みです。

「託生の部屋に泊まって鍋が食べたいってメールしたんだけどな」

「え、泊まるの?」

「お前な。NYに日帰りしろと?」

日帰りは厳しいでしょうが、普通はホテルにでも泊まるものじゃないでしょうか。

託生さんの部屋は1LDKですし。ベッドも一つしかありませんし。

「それはいいけど、お鍋の材料ないよ?」

え、託生さん、いいんですか?!

「じゃ、スーパーでも寄って帰ろうぜ」

副社長がスーパー?!まさか、あの籠を持つんですか?!

「うん、そうしようか」

託生さん、当たり前のように頷かないでください。

あまりにも一般庶民の会話に、頭がついていけなくなった私に向かって

「桜井、託生つれて帰るぞ」

と託生さんの肩に手を回した副社長は、容赦なく託生さんに手をつねられ

「いて」

と顔をしかめつつ嬉しそうに二人は出ていった。

二人揃ったシーンというものを見たのは初めてですが、一体どういう関係なのでしょうか。

今時の友人関係というのは、あんなにもスキンシップが激しいものなのでしょうか?いや、スキンシップが激しかったのは副社長だけのようですけど。

私は、どなたに聞けばいいのでしょうか....。

---

2011年02月18日(金)

【がんばれ桜井さん】

「誕生日おめでとうございます」

「ありがとうございます」

少し頬を赤くして照れながらプレゼントを受け取った託生さんに、頬が緩む。

SPにつくようになって初めて訪れた誕生日に、何を贈つたらいいのか悩み、お役に立つものをと

佐智さんに相談して決めたバイオリンの弦。

そして小岩井のはちみつ牛乳。

さすがにNYには売ってはいないので、日本に行ったスタッフに買ってきてもらった。

毎年同じものではあるが、託生さんはとても喜んでくれている。

プレゼントを受け取った託生さんは弦を大切にバイオリンケースに直し、はちみつ牛乳を両手で持つて

「いただきます」

と礼儀正しくお礼を言いストローをくわえた。

その時、オフィスの入り口辺りが騒がしくなり、しばらくすると副社長が顔を覗かせ、託生さんの手の中にあるはちみつ牛乳を目にすると、機嫌悪そうにじろりと私を睨んだ。

「ギイ、どうしたの？」

「いや、近くまで来たから」

「ふうん」

「どうしたんだ、それ」

「桜井さんからの誕生日プレゼントだよ？」

「わざわざ託生の為に日本から取り寄せたのか？」

ものすごく『わざわざ』が強調されたような気もしますが。

「いえ、日本に行ったスタッフに買ってきてもらいまして」

「ほお、スタッフに頼んで、託生の為にわざわざね」

やはり、強調されているような気がする。

私と副社長の間に挟まれながらチューチュー飲んでいた託生さんが

「飲みたいのなら『飲みたい』って言いなよ。大人げないなあ」

なんと副社長の口にストローを突っ込んだ

「美味しいだろ？」

ニコニコと笑う託生さんにコケコケと頷く副社長。

なんだ副社長も小岩井のはちみつ牛乳がお好きだったのか。

「ギイ、飲みすぎ！」

「いいじゃん、少しくらい」

はちみつ牛乳を取り合っている二人を眺め、副社長の誕生日には小岩井のはちみつ牛乳を用意しなければと、『副社長取扱書』にメモをした。

---

2011年02月17日(木)

「ギイ、そっちで寝るの？」

「なんだ。起きてたのか」

「うん。眠れそなんだけど、眠れない」

「明日もコンサートだろ？ 体を休めないと」

「うん…」

「……で、どうしてオレのベッドに移動するかな」

「ギイ、暖かいから」

「あのな。オレは託生との約束守って、こっちのベッドに入ったんだけど」

「そうだね…コンサート期間中は…ダメだからね……」

「ダメと言いつつ、お前これはなんだよ？」

「うん…？ ギイの腕…枕……」

「こら、寝るな。じゃなくて、隣のベッドに行くから放せ。何日禁欲してると思ってるんだよ？！」

「ダ...メ.....」  
「託生、襲うぞ？」  
「Zzzzzzz.....」  
「これは紫のチューリップの仕返しか？」

---

2011年02月12日(土)

「託生？まだ打ち合わせが残っているのか？」  
「ううん。桜井さんとこに行くんだよ」  
「こんな時間からか？」  
「うん。マッサージしてくれるから」  
「マッサージ？！それなら、オレが...」  
「いいよ。ずっと桜井さんにやってもらってるし」  
「ずっと？！」  
「なにか問題ある？」  
「大ありだ！あいつには託生に近づくな触るなと言ってあったのに！.....あ」  
「ふーん。そんな事、桜井さんに言ってたんだ」  
「あ...あのな、託生」  
「マッサージ受けないと、明日のコンサートに差し支えるんだよ。仕事の邪魔はしないよね、ギイ？」  
「...はい。邪魔はしません」  
「じゃ、30分ほどで帰ってくるから」  
「わかった...(ずーん)」  
「あ、ギイ。寝る前にホットワイン飲みたいな♪」  
「よっし、わかった。特別に美味しいのを用意しておいてやる」  
「うん。楽しみにしてるね」  
パタン。  
「桜井～～～～～！覚えてろよ～～～！」

---

2011年02月06日(日)

【がんばれ桜井さん】

託生さんのお話を聞くと、まだ何も決められていないという事でした。  
それならばと話を進めると、まるで捨てられた子犬のように不安そうな顔をして私の話を聞いてくださいました。  
そして佐智さんの後押しで  
「宜しくお願ひします」  
と頭を下げられた時は、私こそ  
「ありがとうございます」  
と土下座したい気持ちになった。これで大手を振って日本に帰れる。  
そうそう忘れていました。  
日本から何かお土産をと散々悩んだ末、注意書きにお好きだと書いてあった『小岩井のはちみつ牛乳』。  
鞄から出して差し出した時、託生さんの顔がパーンと明るくなり  
「ありがとうございます！」

ふわりと笑った表情に、すとんと『可愛い人』が落ちてきた。  
なるほど。こういう事なのか。  
しかし無事託生さんが事務所入りされると報告した時、副社長の機嫌が悪かったのはどうして  
だろう。  
『小岩井のはちみつ牛乳』喜んでいただけたのに...。

---

2011年02月05日(土)

【がんばれ桜井さん】

ホテルに荷物を置き託生さんを尋ねた。建物の屋根裏部屋に当る狭いステュディオ。  
コンクールの優勝賞金でもっとましな所を借りられるはずなのに、慎ましい生活をされているので  
すね。

「託生君!」

「佐智さん?!」

佐智さんに抱きしめられて顔を赤くしているこの方が、託生さん?

確かに普通の22歳の男性見えますか...。

私の顔を見て小首を傾げ、ふわりと笑って部屋に招きいれて下さった。

えと、初対面の人間にこんなに無防備でいいのでしょうか?

あ、『知らない人間についていかせないように!』これですね。

副社長わかります。託生さん、ついていきそうです。色々な意味でSPが必要なわけがわかりま  
した。

その前に何とか話を受けていただきないと...。胃がキリキリと痛んできました。

---

2011年02月04日(金)

【がんばれ桜井さん】

「もしかして緊張します?」

「はい」

もしかしながら緊張します。あの託生さんにお会いするのですから。それに副社長と事務所  
からのプレッシャーで眠れなかつたんです。

「写真見られたんでしょ?託生君は普通の22歳の男性ですよ?」

「それが...」

「見てないんですか?」

「はい。書類に写真がついていなくて」

私の言葉に佐智さんは目を丸くして吹き出した。この人でもこういう笑い方するんだ。

「あはは。よほど義一君、渡したくなかったんですね」

「はい?」

「桜井さんの手元に託生君の写真が残るわけでしょ?」

渡っていたらそうなるでしょうが。

「もしかして他にも何かありました?」

「注意書きと『近づくな』『触るな』と指示を受けたのですが...」

今度こそ佐智さんは爆笑した。

もしかして私は世にも珍しい物を見ているのではないだろうか。

「単なるヤキモチとハツ当たりですよ。気にしないで下さい」

.....ヤキモチとハツ当たり?はて?

「託生君は誠実で真面目で可愛い人ですよ。心配しなくても大丈夫です」誠実と真面目はわかりますが……可愛い人?  
今時の若者の友人関係というのは、複雑で私には難しいようです。

---

2011年02月03日(木)

【がんばれ桜井さん】

久しぶりの日本。

マネージャーの仕事を覚える為に、事務所に送り込まれ日々勉強をしている。

事務所のBGMは、託生さんが弾かれた物だと聞いた。

こんな素晴らしい音楽を奏でられる託生さんは、どんな方なのだろう。

「いつ託生さんはこちらに来られるのですか?」

「まだ契約してませんよ」

「はい?!」

ここは託生さんの為に作られた事務所なのでは?

と言うか、もう既に何度もミーティングを行ないプロジェクトとして始動しているのに?

「来られたときにすぐに動けるようにとの指示だったので」

誰の指示かはわかるような気もしますが…。

「では誰が託生さんに…」

じ———つ

「もしかして…私…ですか?」

「説得がんばってくださいね」

そ…そな。

託生さんを説得できなければ、集められた有能スタッフ全員解散?!

『ああ大丈夫大丈夫。託生はワンコには優しいから』

「ワンコ……」

私は犬扱いですか?

『ゴツいのには慣れてるし』

そりゃ子供が逃げ出す怖顔ですが…。

『自信がないなら佐智を連れて行け』

「わかりました」

そうしよう。 そうしましょう。 どんな方なのかもわからないし、怖がられてもいけないし。

『桜井』

「はい!」

「触るなよ」

……近づくなが触るなにレベルアップした…。

私は、どうやってSPをやっていけばいいのでしょうか…。

2011年02月02日(水)

【がんばれ桜井さん】

ある人物の表向きマネージャー、実はSPの任命を受け、呼び出された副社長室。

ただのSPである私がこのような役員室に入る事になろうとは…。

初めて会う副社長は值踏みするようにじっくりと私を見ると軽く頷き

「宜しく頼む」

と一言言った。  
上司の命令は絶対。拒否なんて言葉はこの世にない。  
「あー、それでだな」  
……これは果たし状か?  
渡された分厚い紙を開けていき...。  
「あのー」  
「なんだ?」  
「これは一体...」  
「お前が警護する人間の注意書きだ。頭に叩きこんでおけ」  
そうは言われましても、何項目あるのだろうか...。  
「『緑黄色野菜はテンションを下げるからコンサート前は少なめに』と言うのは...」  
「まんまだ。あいつ人参やピーマン嫌いだからなあ。体に悪いのはわかってはいるが、コンサート前だけは甘やかせてやってくれ」  
「『冬は暖かく。マフラー、手袋、カイロ必須』と言うのは...」  
「極度の寒がりだからな。小道具がないと外出したがらない」  
「『心靈、お化け関係は苦手だから見せるな』は?」  
「.....Xファイルでさえ嫌がったんだ。誰彼かまわず抱きつかれても困る」「は?」  
抱きつかれたら困る?  
「全部に注釈が必要か?」  
「いえ!とんでもありません!」  
そんな事されたら何時間かかる事やら。  
「報告は忘れるな。スケジュール変更もしかりだ。そして絶対にFグループとオレの名前は伏せろ」  
よほど遠慮勝ちな人間なのだろうか。  
「では、行ってまいります」  
「桜井!」  
「はっ!」  
「必要以上に近づくな」  
「はあ...?」  
警護するのに近づくな?こんな仕事初めてだ。

---

2011年02月01日(火)  
ずっと欲しかったんだ。  
お前に触れ、お前に包まれ、お前に溺れて.....あの夢のような時間に戻りたかった。  
渴きっていた心に染み渡る至高の水。飲めば最後。お前から離れられない.....!

---

2011年01月31日(月)  
【がんばれ桜井さん】  
「今まで申し訳ありませんでした」  
「いいえ!ぼくこそ、皆さんに気を使わせてしまってすみません」  
ああ、なんて謙虚で頭が低い人なんだ。  
あの電話で怒鳴りあっていたのは、私が寝ぼけていたからに違いない。  
「移転、大丈夫なんでしょうか?」

「その事なんですが…」

「はい」

「さすがに一週間では少々時間が…せめて一ヶ月は欲しいかなと」

「はあ?!」

「副社長が一週間で移転しろと…」

託生さんの目が…目が据わった?

「少し、待っていて下さい」

パタン。託生さんどこへ?

「ギイ———っ!一週間で移転なんてできるわけないだろ?!何考えてるんだよ?!事務所の人達に迷惑かけるな!最低一ヶ月はかかるからね!」

パタン

「すみませんでした。一ヶ月以上かかっても大丈夫ですので(にっこり)」

電話のお相手は、まさか副社長とか言いませんよね?

というか、託生さん一方的に言うだけ言って切っていたような。返事聞いてました?

いや、それよりもNYは明け方だと思うんですが。

「あ…ありがとうございます」

一体このお二人の関係って…。

---

2011年01月30日(日)

【がんばれ桜井さん】

「託生の荷物、全部こっちに送ってくれ。それと事務所もこっちに移転な」

「はい?!」

「ちょっとギイ!勝手に決めないでよ!桜井さん、送らなくていいです!」「こら託生!携帯取るな!」

「送らないで下さいね!」

「桜井!送れ!」

「送らないで!」

AM3:00寝させてください。

---

「事務所を移転?」

「お二人から電話があって、たぶんそうなるだろうと」

「ふうん」

「あの…お二人は一体?ご友人ですよね?」

「桜井さん、聞いてないんですか?」

「何をですか?」

「……ご愁傷様です」

……佐智さんのあの哀れみの目はなんだったのだろう……。

---

2011年01月29日(土)

託生の怒った顔、泣いた顔、笑った顔。

まるで走馬灯のように浮かんでは消えていく。

鮮やか過ぎる夢を見たんだ。オレは託生の人生にかかわってはいけない。それなのに…。

「ギイ?」

背後から聞こえてきた託生の声に、オレの決意は砂の城のように脆く崩れ掛けた。

---

ふいに視界を横切った人物に呼吸が止まった。

「託生？！」

桜井からの報告では既にレコーディングは終わっているはず。なのに、佐智と話をしながら前方へ歩いていく。

…そのまま通り過ぎればいい。そうすれば託生を巻き込む事はない。

なのにオレは吸い寄せられるように車を近づけていた。

---

俯いている薄い肩を抱き寄せ思い切り抱きしめたかった。

理性を総動員し鳴り止まぬ鼓動を隠して、何気ないふりをして声を掛ける。

「託生も、久しぶりだな。元気にしてたか？」

ビクリと肩を震わせ顔を上げた託生の瞳に、オレは人生最大の後悔をした。

---

「あの…な…」

「なに？仕事の邪魔をされる為にアメリカに来たわけじゃないんだけど」「オレだって仕事の邪魔なんてする気はない」

「だったら、あれはなに？」

「だってな。10年離れていたんだから、その分もっと託生といたいと思ったんだよ！」

「じゃあ、DVDの発売反対は？」

「託生の映像をバラまきたくなかったんだよ！…オレだけの託生なのに……」

「……ギイだけに決まってるじゃないか」

「託生？」

「ギイしか知らないぼくだってあるだろ？」

「それって…」

「あ！用事思いだした！」

「て、逃がすか！」

---

2011年01月28日(金)

バイオリンを構えたとたん託生を包む空気が変わった。

澄んだ朝の空気のような凜とした佇まい。そこから紡ぎ出される音色は託生と絡まり、聴衆を癒しの空間へと導いていく。

そして託生自身、音に揺られ至高の輝きを放っていた。

…こんな託生をDVDにして売れるか、桜井?!

---

「あのですね。副社長のご希望は、託生さんのコンサートの日数を削り、レコーディングも本国のみ、そして休日を増やせ。でしたね？」

「そうだ」

「これを補う為にはDVDを発売するしかないんですよ!ファンクラブの苦情が殺到しているんです」

「なんとかしろ、桜井」

「できません」

「島岡さん、どうしたらしいんでしょう」

「簡単ですよ。託生さんに選んでもらえばいいんです」

「託生さんにですか？」

「A案とB案、どちらがいいですか？と」

「はあ」

「大丈夫です。結果はすぐにでます」

「桜井さん？」

「ですから、A案の『コンサート数、レコーディングの場所、休暇の日数が今まで通り』とB案の『ライブDVD発売』どちらか選んでください」

「どちらも仕事ですよね？」

「そうです」

「.....はっ！」

「託生さん？」

「ギイ——！ いつたい何をしてるんだよ！ えっ？ ! .....こんな変な選択、ギイが口出したに決まってるだろ！だから？ ! .....わかった。仕事の邪魔をするなら、日本に帰る.....絶対？邪魔しない？ .....とりあえず、桜井さんには謝ってね」

ブチッ

「A案とB案、両方通してください(にっこり)」

「島岡さん、わかりました。切り札は託生さんなんですね？」

「ギリギリまで取っておくと、威力は抜群ですよ」

「ご助言ありがとうございました」

終わっちゃえ(笑)

---

2011年01月25日(火)

「ミシェル...」

気をきかせたつもりか?オレのベッドの上で、天使の寝顔を見る事になるとは。

それよりも、託生をどうやって運んだんだ?抱き上げて運んだというのなら...ブツ殺す!

ごめんなさ~い(/;°□°)/

---

2011年01月21日(金)

夢の終わりを告げられた時。オレは責める事も縋る事もできなかった。

オレがお前に恋をした事、それ自体が間違ったんだ。

あの柔らかな腕も包み込むような口唇も、全て夢の中の出来事なのだと。

そう思い込まなければ、オレは...生きてはいけなかった。

---

2011年01月20日(木)

手放してしまった幸せだった。望んではいけない幸せだった。

でも、お前の顔を見れば、微かな希望が叶えられるような気がして...。

お前が笑ってくれるこの時間が、永遠に続いてくれればいいのにと。

叶わない想いを胸に秘めていた。

---

2011年01月12日(水)

あの笑顔も泣き顔も、思い出だと思っていた全てが、オレの都合のいい幻覚のようで。  
酔えない酒でのどを潤しても、この身に巣食う飢餓感がなくなることはない。  
何もない空間を彷徨いながら、ただ一つ理解できること。託生がこの腕にいない現実(リアル)

2014年11月9日(日) Blogより転載

「ただいま」

キッズルームを覗いたオレに向かって、

「だー」

片付けていただろうおもちゃを放り投げて、大樹が駆け寄ってくる。

この前までヨロヨロとおぼつかない足元をしていたのに、数日見ないうちに走れるようになったようだ。腕の中に飛び込んできた大樹を抱き上げ、ただいまのキスをした。

もう甘いミルクの匂いはしないけれど、まだまだ柔らかく弾力のある頬に、そのまま小さく齧りつくと「キャッキャ」と声をあげて笑う。

「お帰り、ギイ」

「ただいま」

そして、大樹が放り出したおもちゃを片付け、遅れて近づいてきた託生の口唇にキス。

「大樹が寝る前に帰れてよかったです。寝顔しか見れなかったからな」

ウインクをつけて言うと、託生が困ったように苦笑した。

以前、寝ている大樹を突いて起こして、

「自分の我儘で、寝た子を起こすな！」

と、襟首を絞めるような勢いで託生に激怒され、以後ベビーベッドを覗くだけになっていたのだ。

しかし、まだ生まれたばかりの頃は寝ている時間が長かったけれど、今は時間が合えばこうやって大樹と触れ合えるから、顔を忘れさられるようなこともないだろう。

オレの顔を小さな手で触りながら、わけのわからない言葉で一生懸命しゃべっている大樹に相槌を打ちつつ、なにか言いたげにオレを見詰める託生に気付いた。

「どうした、託生？」

「ううん、なんでも」

慌てて首を横に振り、しかし、託生自身気付いていないだろうが、ほんの少しだけ尖った口唇に笑みが浮かぶ。

なるほど。大樹ばかり相手にしてるから、拗ねてるんだな。

「たーくみっ」

「なに……ギイ！」

左腕で大樹を抱き上げたまま、オーバーアクションで勢いよく右腕で託生を抱き寄せ、そのまま託生の髪に顔をうずめた。

「やっと家に帰ってきた気がする」

「随分前に帰ってるけど？」

「相変わらず、男心のわからんヤツだなあ」

大げさに溜息を吐いたオレにクスリと笑いを零し、託生はオレの肩に頬を預けて力を抜いた。

変わらない託生の香り。変わらない託生の癖。

この愛しい重みに慣れるまで、この幸せは本当に現実のものなのか、白昼夢じゃないのかと、疑ったこともあった。

真っ直ぐに向けられる眼差しがオレを映す喜び。馴染みはしても慣れることはない。そのたびに、オレは幸せを噛みしめているのだから。

「あーあー」

大樹の声にハッとして、同じように顔を上げた託生と目を合わせ吹き出した。

忘れていたわけじゃないぞ。だから、そんなに叩くな。

「除け者にするなってさ」

拗ねたようにペチペチ叩く大樹に、喜怒哀楽がわかりやすくなつたなあと感心しつつ、  
「大樹も託生も、オレの大切な宝物だよ」  
もう一度二人を、腕の中に閉じ込めた。  
(おわり)

---

2014年10月31日(金) Blogより転載

ドドドと階段を数段ぬかしで駆け下りる靴音が聞こえてきたなと思ったら、プライベートの居間のドアが勢いよく開いた。

「託生、子供達は？！」

両手になにやら大荷物を抱え、肩で息をしながら飛び込んできたギイに驚きつつ、

「寝たよ」

勢いに飲まれたようにぼくが答えると、ギイはピシリとその場に固まり壁掛け時計に目を向けた。

「七時……だよな？」

「うん、だけど、三人ともはしゃぎ疲れてコテンと寝ちゃったんだよ。一颶と咲未なんて、食べながら寝てたし」

あれは笑った。

口は動いているのに、こっくりこっくり船を漕いでいた咲未と、右手にフォーク、左手にパンを持ったままけっして離さず、机に突っ伏していた一颶を思い出し、また笑いがこみあげてくる。かろうじて起きていた大樹も、機械のように手を動かすだけで、目はうつろだった。

普段なら、もう少し遊んでいる時間だけど、さすがに可哀想になってそのままベッドに連れていったのだ。

「急いで帰ってきたのに………」

ぼくの言葉に、ギイはその場に座り込んで、がっくり肩を落とした。

こんなに早く帰ってくることなんて滅多にないのに、子供達が寝ていたのは残念だけど、これだけは仕方ないと思う。眠いのに起きてろなんて、鬼のようなことは言えないし。

ギイの隣に同じように座り込み、しかし紙袋が邪魔になり、ギイと直角に座るしかなかったぼくは、「ところで、この荷物はなに？」

ギイがいまだに大切そうに抱えている荷物が気になって聞いてみた。

パンパンに膨れた紙袋が二つ。中から、ガサガサと音が鳴っている。

「昼に、動画を送ってきたろ？」

「うん？」

「子供達が仮装した」

「ああ！ 可愛かっただろ？」

今日はハロウィン。近所の家を回るようなことはできないけど、気分だけは味あわせてやりたくて、毎年ペントハウス内を子供達が仮装して練り歩き、メイド達もそれに付き合ってくれていた。

今年は咲未も一歳になり、大樹と一颶のあとをトテトテとついてお菓子を貰い、三人大喜びしている姿が可愛くて思わずビデオカメラを回したのだ。自分でも親バカだと思うけど、可愛かったんだもん。

それを、ギイと本宅に送った。

や、だって、可愛かったから誰かに見てもらいたくて、でも、あまりにも親バカかなと思ったから、許してもらえたそうな人に送ったんだ。

午後にお菓子をどっさり抱えたお義父さんとお義母さんが訪ねてくださったけど……って、まさかこの荷物は……。

「オレも、子供達にTrick or Treat！と言つてもらひたかったんだ！」

あ、やっぱり？

ということは、この大荷物全てお菓子……。

ぼくも親バカだけど、ギイも相当親バカだ。

「でも、もう寝ちゃってるし、これ以上お菓子を渡したらご飯が食べれなくなっちゃうから、少しづつ渡してもらったら助かるんだけど」

今でも三人の部屋には、ペントハウスの皆から貰ったお菓子とお義父さん、お義母さんから貰ったお菓子でいっぱいだ。当分、おやつはいらないだろうなと思うくらい。

「オレも子供達の仮装見たかった……」

「うん、ギイに送ったのは一部分だけだから、あとで見ようよ」

直に見れないのは気の毒だけど。

がっくりと意気消沈している様子のギイに、今すぐビデオの用意をした方がいいかなと立ち上ががろうとしたそのとき、

「託生」

ポツリと呼ばれてギイの顔を覗き込むと、ガシリと腕を掴まれた。

「Trick or Treat」

「はあ？」

「託生、お菓子」

「なに言ってんだよ。そこにあるじゃないか」

「これは、子供達に渡すお菓子。託生、オレにお菓子をくれ」

「あるわけないだろ。ぼくだって、子供達に全部渡したんだから」

用意していたお菓子はもう、すっからかんだ。

「じゃ、いたずらしても文句はないな」

ニヤリと笑うギイに呆気に取られ、ポカンと口を開けた。

さっきまでの悲壮感は、どこにいったんだよ！

「ギイ、君、何歳？」

「花の二十九歳。オトコノコ」

「なにが、花のだよ。そんな大きな子供知らないよ」

「知っても知らなくても。子供達は熟睡だし、まだ宵の口だし、あー、今日はいい日だなあ」

「いや、ちょっと待って、ギ……っ！」

捕まれた腕を引っ張られバランスを崩したぼくを、なんなくその場に押し倒し、長い長いキスでぼくを黙らせたギイは、

「今夜はじっくり大人のフルコースが楽しめそうだよな、託生？」

嬉しそうに耳元で囁き、その響く低音にぼくの体温が上がったような気がした。

---

「「トリックアトリー」」

「といくあといー」

「あらあらあら。お菓子あげるから、いたずらは止めてね」

「「「わーい」」」

……だと思うのですよ。籠の中にキャンディーやらチョコやらクッキーやらを貰って、キャッキャしてるの。

……とてつもなく、原作から離れているのは自覚してます。

---

「一緒に風呂に入るか？」

「ヤダ」

「おい」

「だって…その…お風呂で…始めちゃうだろ？」

「え…そりゃ、まあ、ないとは言い切れないが」  
「じゃ、ダメ」  
「なんでだよ？！」  
「こんな子供達が寝ている時ってないから、あの、その、ゆっくりしたいっていうか……」  
鼻血ブフォが希望。

---

2014年5月30日(土) Blogより転載

「明日は、大阪に行くんだ」  
「大阪？」  
「うん、子供達がUSJに行くのを楽しみにして」  
「…………葉山。タオルを多めに持っていくよ」  
「はい？」  
「全員分の着替えは大変だろうからな」  
「着替え？」  
「覚悟して行くんだな」  
「????」

…………よく、わかったよ、赤池君。

ジュラシック・パーク・ザ・ライドで水を被り、ジョーズで水を被り、バックドラフトで多少乾いたような気もしたけれど、ウォーターワールドで諦めた。

ど真ん中の席に座っただけではなく、ギイはもちろん、大樹も一颶も咲未もバケツで頭から水をぶっかけられるために、喜んで立ち上がった時には眩暈がしたよ。

びしょびしょのぐしょぐしょで、レインコートを着ていたぼくまで、びちょびちょ。

楽しかったけど、楽しかったけどね！

…………今が冬でなくてよかったって、心底思ったよ。

USJに崎ファミリーが行ったら、どうなるかなあと思って。

---

2014年5月22日(水) Blogより転載

「やっぱり確認した方がいいよな」  
「だな。あとでグダグダ言われるのも面倒だ」  
「おはよう。皆で集まってどうしたの？」  
「お、葉山。おはよう」  
「うん？なんだ、神妙な顔して」  
「おはよう、ギイ。二人に確認しておきたいことがあるんだが」  
「なに？」  
「片倉は別として、僕達は葉山のこと、これからどう呼んだらいい？」  
「え？」  
「『葉山』じゃないだろ？」  
「あー、そうか。ぼく、苗字が変わるんだ」  
「『崎』は変だろ？」

「だなあ。オレも崎だし」  
「同様に『崎さん』も、なんだかなあって感じだし」  
「他人行儀みたい」  
「で『託生』にしたら………」  
「片倉以外、認めんぞ」  
「だろ？なら『託生さん』『託生ちゃん』」  
「………気持ち悪い」  
「で結局『葉山』に戻るんだが」  
「ぼくは『葉山』でいいけど。皆にそう呼ばれるの慣れてるし。ギイは？」  
「うーん。せっかく結婚したのに『葉山』はなあ………」  
「でも、他に呼び方ないよな？」  
「………仕方ない。『葉山』というあだ名だと思うことにするよ」

ということで、ずっと葉山と呼ばれます。  
やっと表に出せた。

---

2014年5月15日(金) Blogより転載

「ぞうさん体操ってのがあるんだぞ」  
「ぞうさん？」  
「ぞーたん！」  
「腰に手を当てて………あたたたたた。託生！耳、耳！」  
「マミイ？」  
「大樹、一人で着替えできるかな？」  
「できるよ」  
「一颶も風邪ひいちゃうから、先に着替えようか」  
「ぞーたんは？」  
「(ピキピキ)明日、動物園に見にいこうね」  
「動物園！」  
「ぞーたんぞーたん」  
「………ギイ。子供達連れて、本宅に戻ってほしい？それとも、お義母さんと絵利子ちゃんに遊びに来てもらう？」  
「………ヤメテクダサイ。オレが間違ってました」

---

2014年5月14日(木) Blogより転載

バスルームにて。  
「ダディ、おつきい」  
「すごいだろ？」  
「うん、すごい」  
「しゅごいしゅごい」  
「でも、大きいだけじゃダメだぞ。テクニックも身につけないとな」  
「ギイっ！子供にいたい、なんの………！」  
「パアアアン！」

「え？」

「あー、マミィ、シャボン玉壊した一つ」

「こわちた一つ」

「ご、ごめんね。シャボン玉、作ってたんだね」

「……ふうん、託生」

「ギクッ」

「なにを想像したんだろうなあ？」

「ううん、なにも想像してないよ！お邪魔しましたーっ！」

---

2014年4月3日(木) Blogより転載

「あなた、お帰りなさい」

「ただいま」

「ほら」

「まあ、副総帥夫人の？すごく豪華じゃない？」

「十周年だからな、今回は凝ってるぞ。DVDまでついてる」

「珍しい……というか、初めてじゃない？」

「まあな。随分前から話には出ていたんだが、副総帥の許可が下りなかつたんだ」

「じゃあ、今回だけが特別？」

「……になるのかなあ。ご子息の助言で許可が下りたようなもんだし」

「そうなの？お綺麗なのに勿体ない。でも、ここまで引っ張りダコになつたら、個人事務所でもお作りになられるってことはないの？あなたの仕事がなくなりそうで心配だわ」

「まさか。タクミさんは、そのあたりは大雑把なんだ。自分の仕事はバイオリンを弾くことって名言されているからな。スケジュールからなにから、全て事務所に任せてくれているし、個人事務所を作るような面倒なことはされないとと思うよ」

「でも、もしも副総帥がそういう案を出されたら……」

「んー、いや、大丈夫だろう。副総帥はタクミさんに弱いから」

「あらあら。そんなこと言っちゃって大丈夫？」

「でなければ、タクミさんに暴言を吐いた俺が、未だに事務所にいれるわけないだろ？」

「そうだったわね。聞いたときは、なんて馬鹿なことをしたのかしらって眩暈がしたわ」

「反省してるよ。若気の至りってやつだ」

「でも、許してくださいってのよね？」

「それどころか、お礼を言われて呆気に取られたよ」

「それでファンになっちゃったのよね？」

「まあな」

「いつか恋心に変わりそうで心配だわ」

「なに馬鹿なこと言ってるんだ。そもそも、俺に副総帥と張り合う度胸があると思うか？」

「全然」

「だろ？それより、俺の仕事の出来栄えを見てくれよ。CDを流しながら」

「ええ」

---

2014年4月2日(水) Blogより転載

「Mrs Sakiが、シーメールだと知つましたか？」

「タクミがシーメールなわけないでしょ？女同士の貸し借りなんてものもしているの」

「でも、男子校に所属していた事実が……」  
「それが、なに？ 貴方達に関係あるの？」  
「仮面夫婦だと言われてますが、それについては……」  
「あの夫婦が仮面夫婦だって言うのなら、世の中の夫婦全員仮面どころか離婚してるんじゃない？」  
「では、サンダース嬢の子供は……」  
「ギイの子供なわけないじゃない。そんな暇があるのなら、その木の下でタクミを待っているわよ。普段の二人を知らないのに勝手に決め付けないで」  
「そうよ。貴方達のせいで、タクミはクリスマスコンサートに出演できなくなったのよ。コンサートマスターに決まっていたのに」  
「貴方達に都合のいい台詞を引き出したいのでしょうか、バイオリン科全員の反感を買っていることに、いい加げん気付きなさいよ。私達は、ギイとタクミの友人なの」

---

2014年03月17日(月)  
けんかをするほど仲がいいとは言うけれど、なぜか二人揃って帰ってきた親父とお袋の間の空気が険悪だ。  
暮れなずむ夕方の車内はいい雰囲気に包まれそうなのに、なぜこんな状態なんだよ。  
「ネックレスの値段が、バレたのかしら？」  
「また、母さんの仕事に口を出したとか？」  
「いや。仕事を放ってきたかもしれないぞ？」  
色々と理由を考えてみるも、誰もが原因は親父だと疑ってはいない。それは、日ごろの行いを見ていればわかること。  
さて、そろそろお袋の雷が落ちるかな。ちらちらと親父がお袋の顔色を見始め、話の糸口を探し始める。巻き込まれないうちに、オレ達は退散しますか。

greenhouse\_rikaさんは、「夕方の車内」で登場人物が「ケンカをする」、「雷」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai shindanmaker.com/28927  
名前を出していいから、大丈夫だよね。久しぶりのお題でした。

---

2014年3月16日(日) Blogより転載  
「仕事で出るときは、それなりの服を着て出るだろ？ そのとき、このペンダントをつけてほしいんだ」  
「でも、これって、高いんじゃないの？」  
「そうでもないけど……あんな、託生」  
「うん」  
「これは、オレの事情なんだけど」  
「なに？」  
「オレってFグループの次期総帥だよな？」  
「うん、そうだね」  
「だから、託生がFグループ所属の社員の一人だとして考えてくれ。もしも、Fグループのトップが……総帥がみすぼらしい格好をしていたら、この会社大丈夫か？ 潰れそうなのか？って心配にならないか？」  
「…………言われてみれば、そうかも」  
「安心して働いてもらうためには、オレ自身、身なりに気を付けないといけないんだけど、託生も仕事で表に出るときには、それなりに着飾ってほしい」

「ぼくも？」

「ああ、これに関しては、託生の意思を無視することになるから、本当にすまないと思う。でも、Fグループに所属している社員の精神状態を安定させるためには、託生の協力が必要なんだよ」

「ようするに、それなりの格好をしろと？」

「ああ。でも、普段は……子供達の送り迎えなんかは、今までどおりでいいんだけど、これからは、バイオリニストとして表に出ることになるだろ？ 託生が、次期総帥夫人ってのは、もう既に認知されていることだから、服やアクセサリーにも注目されてしまうんだ。それなりのものを身に着けないと、Fグループの社員のやる気が失せてしまう」

「あー、そっか。そうだよね。でも、仕事で表に出るときだけでいいの？」

「もちろん。そのネックレスを普段使いにしたら、咲未に引っ張られるだろ？」

「うん。たぶん、一日で千切れる」

「だから、仕事のときだけでいいから、それをつけていってくれないか？」

「……うん、わかった」

「巻き込んで、すまない」

「謝らないでよ。ぼくだって覚悟を決めてここにいるんだから。でも、気付かないことも多いから、こうやって教えてもらえると嬉しいな」

プレゼントしたのは、「ハリーウィンストン ザ・ニューヨーク・コレクション トライフィック・ダイヤモンド・ペンダント」のつもり。

パンツスーツに似合いそうかなと。

---

2014年3月4日(木) Blogより転載

「あのさあ」

「うん？」

「あのとき、別の選択をしていたら、こんな幸せなかつたんだよね？」

「え？」

「ギイがいて、子供達がいて、お義父さんがいて、お義母さんがいて、絵利子ちゃんががいて……。この頃、幸せすぎて考えちゃうんだ。あのとき選択を間違えていたら、ぼくは、どうなってたんだろうって」

「間違いじゃないと思うぞ？」

「そうかな？もしも、男であることを選んでいたら、子供達と会えなかつたよ？」

「確かに。でも、託生が納得して選んだのなら、それはそれで、やっぱり幸せな人生を歩んでいたと思うな。選択の延長線上に、オレがいないわけないし」

「うん、違う幸せがあつたのかもしれないけれど、子供達はいないんだよね？」

「そう思うのは、今の幸せを知っているからだよ。オレだって、託生が今の人生を選んでくれたことに感謝してる」

「ギイ？」

「今だから言えるけど、子供のことは最初から諦めていた。託生が大切だからだ。託生以上に大切な物なんてオレにはないから。でも、託生は選んでくれた」

「それは、だって、もしかしたら……」

「子供ができるかもと思ったんだろ？」

「うん」

「託生がベストな選択をしたというより、なにか大きな歯車が回っていたような気がするよ。託生とオレの歯

車がかちりと噛みあった上で、なにか別の大きな歯車が方向を決めて運んでくれたって」  
「ギイは、今、幸せ？」  
「当たり前だろ？でも、これ以上の幸せはないと思うほど幸せだけど、オレ達はもっと幸せになる」  
「……欲張りだね、ギイ」  
「託生と幸せになるのに遠慮してどうする？一度しかない人生なんだぞ。何事も貪欲に行かないと」  
「諦めたらおしまいなんだよね？」  
「そう。もっともっと幸せになろうな」  
「……うん」  
「過去も現在も未来も。託生だけを愛してる」  
「うん、ばくも……」  
「託生、たまには言えよ」  
「う……え……」  
「ほら」  
「あ……いして……る？」  
「疑問形にするなよ……」

---

2014年2月20日(木) Blogより転載

初めて託生を抱いたとき、気が付いた。  
無我夢中で、あの白い肌に口唇を落とし、そこに行き着いたとき、託生は身を捩ってオレから体を隠そうとした。  
それは、同じ男として似て非なるもの。  
達したとき出るはずの液が、オレの腹を濡らすことはなかった。生まれつきなのだろうが、託生は生殖能力を持っていなかったのだ。  
オレとこういう関係にならず普通に女性とつきあえば、子供は望めないだろうことがわかる。  
二度目の夜を誘ったとき、  
「……見たんだろう？」  
ポツリと呟いて託生は顔を隠すように俯いた。  
「個性だろ？」  
「でも……」  
託生を抱き寄せ、安心させるように口唇を寄せる。  
それが、なんだと言うんだ。このさらりとした黒髪も、吸い寄せられるような、しつとりとした肌も、眩しく映りオレを惹き付ける。オレにとっては、託生を形作っている全てが愛おしくて堪らないんだ。  
「世の中の人間、みんな同じなら、みんな同じ顔になるじゃないか」  
軽口を叩き、託生の不安を取り除いていく。  
今まで、人知れず……兄貴だけは知っていた可能性があるが、一人で悩んでいただろう託生に語りかけた。  
「オレにとっては託生の一部なんだから、愛おしい以外の感情はないんだ」  
「でも、変だろ？」  
「どこが？託生の体なんだ。変なところなんて、なにもない」  
「ギイ……」  
「託生を形作っている全てが愛おしいんだ。愛してるんだ。なにも気にする必要はない」  
髪をゆっくり梳きながら何度も繰り返し「愛してる」と囁き、俯いている託生の頬に手を当てた。  
「これまで、いいの？」  
手の動きに逆らうことなく顔を上げた託生が、ポツリと聞く。

「このままの託生を愛してるんだ」

「.....うん」

重ねた口唇が震えていた。羞恥と不安で押しつぶされそうな託生を納得させるには、言葉だけじゃ足りない。

細い体を抱きしめ、ゆっくりとベッドに体を倒した。

「ギ...イ.....」

「愛してるよ、託生」

「ぼくも.....」

オレが、どれだけ託生を愛しているか教えてやるよ。体だけじゃない。葉山託生という人間の存在そのものを、オレは愛してるんだ。

お前が、自分の体を愛せなくとも、オレは愛してるんだ。

---

2014年1月28日(木) Blogより転載

「ねえ、ねえ、ダディ」

「なんだ、一颯？」

「マミイ、赤ちゃん、いつ生まれるの？」

「.....赤ちゃん？」

「うん、赤ちゃん」

「.....た.....託生っ！」

「なんだよ。すぐ、飲み物持っていくから、子供たちを.....」

「できたのか？！」

「なにが？」

「あー、飲み物はオレが持っていくから、向こうで座ってろ！ ていうか、お前、さっき走ってただろ？ あれほど、走るなど.....ぐえ」

「落ち着きなよ。いったい、なんの話をしてるんだよ？」

「い、一颯が.....」

「一颯？」

「赤ちゃん、いつ生まれるんだ？って」

「.....は？」

「それで、できたのか？！ なんで、オレに言ってくれないんだ？！」

「ちょ.....ちょっと、待って。落ち着いて、ギイ。できてない、できてないってば！」

「.....できてない？」

「できるわけないだろ？ 自分の胸に手を当てて考えてみなよ」

「.....あ、ああ。だな。うん」

「だろ？」

「じゃあ、一颯は、どこから子供が生まれるのかなんて考えたんだ？」

「さあ。本人に聞いてみるしかないよ」

「一颯」

「なあに？」

「どうして、赤ちゃんが生まれると思ったんだ？」

「だって2歳だから」

「え？」

「お兄ちゃんが2歳のときに僕が生きて、僕が2歳のときに咲未が生れたから」

「あー、咲未が2歳になったから、生まれると思ったのか？」

「うん」  
「残念だが、マミイのお腹の中には赤ちゃんはないんだ」  
「どうして？咲未、2歳なのに」  
「まあ、忙しくて命中しそうな日にできるような……いてっ」  
「子供相手になに言ってるんだよ。一颶、コウノトリさんが忙しいからじゃない？」  
「マミイ」  
「世界中飛んでて、なかなか、ここまで来てもらえないんじゃないかな」  
「ふうん。いつか飛んできてくれるかな？」  
「一颶、赤ちゃん、欲しいのか？」  
「ギイ！」  
「んとね、みんなでサッカーしたいの！」  
「サッカー？」  
「一颶、FIFAワールドカップのニュース見たんだろう？」  
「うん！」  
「お友達たくさん作ったら、サッカーもできるようになると思うよ」  
「そうなの？」  
「そうそう」  
「わかった。お友達たくさん作る。喉かわいた～」  
「大樹と咲未と一緒に飲んでおいで。うん、ギイ？」  
「11人だから、あと8人か。年子は大変だから、やはり2年くらいは空けて……ということは、16年かかるから……痛い、痛いって、託生！」  
「真剣に考えなくていいから」  
「でも、一颶も欲しがってるんだから」  
「生むのを代わってくれるならいいよ(にっこり)」  
「……無理です。無茶を言いました。ごめんなさい」  
「わかってもらえば、よろしい」

---

2014年1月20日(木) Blogより転載  
「千手観音が羨ましい」  
「……はあ？」  
「だってさ、あれだけ腕があるんだよ？大樹と一颶と咲未を一緒に抱っこしても、まだまだ腕が余るんだよ？絶対、便利だよね！」  
「……その前に、腰を痛めそうだけどな(ぼそり)」  
「三人と遊びながら、バイオリンの練習もできたりしてさ。あー、いいなあ、千手観音」  
「おーい、託生、戻ってこい」  
「そうだ！ギイは、どうする？」  
「なにが？」  
「もしも、千手観音のように腕があつたら、ギイはどう使う？とりあえず電話取り放題だよね」  
「そこまでして、仕事がしたいわけないだろ？そうだなあ……子供たちを抱きしめる以外の腕は、託生を抱きしめる」  
「はい？」  
「絶対逃げられないように抱きしめて、あっちこっち触りまくって、託生を全身で確認する！」  
「……ギイのスケベーっ！(逃げ)」  
「託生が話を振ったんだろうが………」

---

2013年12月05日(木)

「旅行？」

「そう。オレも数日休み取ったからさ」

「ダメだよ。その日はお誕生日会なんだから」

「誰の？」

「もちろん、ギイのに決まってるだろ」

「.....はあ？」

「去年は、当日までギイがお仕事だったし、最終的に二人でアイスランドに旅行になっちゃったからさ」

「あのな、託生。オレ、二十歳だぞ？」

「うん、ギイ、成人になるんだね」

「だからな、成人ってことは大人なんだから、今更誕生日会なんてものは.....」

「え、成人したらお誕生日会したらダメなの？じゃ、去年のぼくのお誕生日会って、最初で最後.....」

「あー！いや、別に大人だって誕生日会を開いてもいいんだけどな！オレは託生と旅行.....」

「よかったあ。もう、お義父さんにもお義母さんにも絵利子ちゃんにも予定空けてもらってるんだ。絵利子ちゃん、とんがり帽子を用意してくれるってさ」

「.....とんがり帽子？」

「お誕生日会の主役は、とんがり帽子を被るんだろう？ぼくのとき忘れていたから、今回はきっちり用意しておくねって」

「.....オレにとんがり帽子を被れって？」

「お誕生日会の主役はギイなんだから。普通は、そなんだよ.....ね？違うのかな.....」

「そ.....そなんだ。オレも忘れてたよ」

「よかった。だから29日はお誕生日会だから、皆でケーキ食べようね」

「.....絶対、結婚と同時に本宅を出てやる」

---

2013年11月23日(土)

これ、咲未に着せたいなあというか、ファミリーで着てほしいなあというか。.....アホな妄想です；

【本商品限定！2点で送料無料】ワンピースサンタ [楽天] [a.r10.to/hGqWEP](http://a.r10.to/hGqWEP)

#RakutenIchiba pic.twitter.com/Zz0cwIAEjX

「ん？絵利子からか.....おお？！」

「どうしました、義一さん？」

「見てみろよ、島岡！」

「これは、可愛いですねえ」

「だよな、咲未のサンタ！次は、一颯、こいつも様になってるじゃないか」

「大樹君も、いい感じですね」

「クリスマスが近付いたって実感できるな。ん？また、絵利子？」

「どうしました？」

「.....」

「足、ですね」

「.....」

「義一さん、上にスクロールしたって無理ですから」

「く―――っ、なんだ、この生殺しは？！赤のブーツだけで納得しろっていうのか？！膝が見えるってことは、ミニスカサンタだろ？！」

「義一さん」

「そりゃ、託生の足は綺麗だけどな、この上が大切なんだろうが！」

「義一さん、落ち着いてください。もう一通、メール入ってますよ」

「あ...ああ。全身が見たかったら、新作バッグよろしくねだとお？」

「なるほど。新手の人質ですね」

「絵利子ーっ！買ってやるから今すぐ送れ！」

---

2013年11月20日(水)

「いつまで持っている気だ？」

「ずっと」

「いいかげん蒸発するぞ？」

「蒸発してもいいよ。ペットボトルは残るだろ？」

「ポリエチレンテレフタラートだって、いつかは劣化するんだし。今まで、よく持った方だ」

「もう、いいじゃないか。置いてたって」

「でもなあ、それ、子供のおもちゃみたいなもんだぞ？託生が気に入ってくれてるんなら、もっとマシな入れ物で作るからさ」

「やだ」

「託生」

「.....初めて幸せという感情を教えてくれた大切な物だから、バラバラになっても持ってる」

「託生.....」

---

2013年11月14日(木)

「今日は、若い娘達が多いですな」

「崎夫妻が出席されるらしいですぞ」

「ああ。崎副総帥目当ての娘が多いってことですな」

「いやいや、逆です。副総帥夫人目当ての娘が多いらしいんですよ」

「.....は？」

「なにやら、タクミ・サキファンクラブなるものが存在するらしく、崎夫人自身、フェミニストの中のフェミニスト。崎副総帥を足蹴にしても、女性を大切にするようで」

「レズ.....では、ないんですよね？ご結婚されることですし」

「ええ。ですから、ファンクラブの第一条に「お姉さまの笑顔を守るために、テキトーに崎副総帥を扱うべし」という項目があって、夫人の状態によっては容赦なく連れ出していいときと、さっさとお姉さまの笑顔を取り戻しがやれという、両極端な行動があるらしく、どうも、こういうパーティでは副総帥がピリピリしているようですよ」

「.....副総帥夫人ってのは、どんな方なのですか？」

「隠れて見たところ、副総帥を尻に敷いておられる方です」

2013年11月01日(金)

託生はフェミニストだ。

女性は守らないといけない存在だからと、自分のことは棚上げで、どこででも気を使っている。ああ、夫婦で招待されたパーティー……は表向きで、自分の娘をオレの愛人にでもさせようとしているような状態でも、だ。

鬱陶しい娘の襲来にうんざりして、片手で追い払おうとしているオレに気付いた託生に睨まれることが数知れず。

でもって、オレのフォローをしている間に、いつの間にか、ターゲットがオレから託生に移動していることに気付かず、

「お姉さま」

なんて言われて、驚きつつも懐いてくれる娘を無下にすることはできなくて。

それは、まるで日本の某歌劇団のファンのようだ。

そして、今では招待される場所場所で、あっという間に囮まれる託生。

なにか間違ってないか？ 託生の両腕はオレのものだぞ？ 勝手に連れて行くんじゃない！ てか、託生！

もう、これ以上、誰彼構わず笑いかけるんじゃない！

---

2013年10月09日(水)

「ハリー、これ」

「ん、なんだ？」

「お袋のコンサートがあるんだ。それで、ハリーに来てもらいたいからって、チケットを預かってきた」

「…………あのさ、お前の母ちゃんってバイオリニストなんだよな？」

「ああ」

「クラシックの」

「そうだな」

「招待してもらって、すごくありがたいし、お前の母ちゃんに会えるのも嬉しいんだけど」

「なんだって？」

「俺、たぶん寝ちまうような気がするんだよ」

「は？」

「だからさ、すごく失礼なことしてしまうだろうから、申し訳ないけど…………」

「寝ているのを見ると、嬉しくなるって」

「……へ？」

「それだけ心地よい音楽を奏でているってことだろ？」

「うん？ そう言われば、そういうことかな……」

「だから、遠慮なく寝てくれ。お袋、喜ぶから」

「なにかが違うような気がするんだけど、それは俺の気のせい？」

「ああ、深く考えても理解はできないと思うぞ？」

「そういうもんか？」

「お袋にとっては、そういうもんらしい」

---

2013年10月04日(金)

「大樹の言ったとおり、女の子だったね」

「だな。女の子用の服とか、色々揃えなきゃあな」  
「あ、でも、絵利子ちゃんが、女の子だったら着せたいのがたくさんあるから、今度持ってくるって言ってたよ？」  
「…………リボンとフリルが満載の服だろうな」  
「え、なに、ギイ？」  
「いや。それより、託生、大丈夫か？」  
「うん、なにが？」  
「ほら、女の子って、初めてだろ？」  
「う……ん。不安と言えばそうなんだけど……男として育ったんだし、大樹も一颯も男の子だし。でも、赤ちゃんって、そんなに変わらないかなあって」  
「でも、一人で抱え込むなよ？お袋や絵利子だっているんだし……オレも男だから、よくわからないことばかりだけど、助けてくれる人間はいるんだから」  
「うん。実際にわからないときは、お義母さんに聞くことになると思う」  
「そつか」  
「でも、不思議だよねえ」  
「なにが？」  
「今は、お腹の中にいるけどさ。将来、恋をして、ぼくと同じように、次世代の子供を宿るんだなあって思ったら、人間の神秘だよね？」  
「…………え？」  
「だって、女の子なんだから、そうだろ？」  
「…………宿るってことは、馬の骨と…………（ブツブツ）」  
「ギイ？」  
「やらんぞ！どこぞの男に、大切な娘を…………ぐはっ！」  
「はい、運転中は前を見てね、ギイ。それと、子供達の邪魔するんだったら、離婚ね」  
「…………はい」

---

2013年09月29日(日)  
「ちょっと、ギイ……！」  
「二週間ぶりなんだぞ？」  
「う……ん、でも、あの…………帰ってきて寝室直行って………」  
「はあ………あのな、託生」  
「うん？」  
「オレ達、もう十年経ってるよな？」  
「え？」  
「恋人になって、結婚して、子供も三人生まれて」  
「そうだね？」  
「そろそろ、こういうことも、夫婦生活の一部なんだと、恥ずかしがらずに認めてもらいたいんだけど」  
「……もしかして、ギイ、ぼくに嫌気さしてる？」  
「は？」  
「ギイとそういうことするの、嫌じゃないんだけど、恥ずかしいだけなんだけど、鬱陶しい…………ん、だ……よね」  
「お……おい、託生」  
「ぼくから誘える……こって、なかなかできないし………ギイには盛り上がりにかけるのかもし

されないけど……でも、ぼくだって……（潤んだ目でキラリン）」

「…………そのままでいい」

「え？」

「これ以上、色気振りまかれたら、オレ、抱き潰すぞ！」

「ちょ、な……ギイっ！」

---

2013年09月18日(水)

「お？」

「野球ボールか？よく、あんな所から飛んできたな」

「イブキ、投げろって言ってるみたいだぞ？って、さすがに無理…………嘘？」

「ハリー、なんだ？」

「お前、よく届くな？！無茶苦茶、肩が強いじゃないか！」

「そうか？兄貴も同じくらい投げるけど」

「リトルリーグに入ってたとか、なにかのスポーツクラブに入ってたとか」

「まさか。そんな時間あるかよ」

「いやあ、でも、あんな距離投げられないって」

「あー、そう言えば、泥団子を投げる練習をしていたな」

「…………はあ？泥団子？」

「そう、泥団子」

「泥団子をピカピカに磨くのに嵌ったことはあるけど、投げる練習？」

「ああ。ある程度固くて、割れたときに泥がべったりつくような配合を、兄貴と研究したときに、ついでに投げる練習もした」

「…………お前ら、なにやってんだ？」

---

「泥団子、飛ばせるようになったかしら？」

「「絵利子さん！」」

「はい、これ」

「バッグ……ですか？」

「泥団子、そのままポケットに入れるわけにはいかないでしょ？そんなに数も入らないし、託生さんにはバレちゃうからね。だから、ここ」

「隠しポケット？」

「そう。バッグそのもの防水になってて、この下のところに泥団子を入れれるようになってるの。上にはカモフラージュで、なにか物を入れておけばいいでしょ？」

「すげえ……」

「ありがとうございます！」

「絵利子さん、ありがとう！」

「その代わり…………邪魔者は必ず潰すのよ」

「「はい！」」

---

2013年09月07日(土)

「お前ん家ってさ…………」

「なんだよ、ハリー？」

「歩くだけで運動になるよな。これだけ廊下が長いとスケボー使いたくなる」  
「あー、スケボーは使ったことないけど、ローラースケートはあるぞ？」  
「あるのか？！」  
「一瞬だけ。廊下の向こうに仁王立ちのお袋が現れてさ。そのまま首根っこ引っつかまれて、一時間説教された」  
「イブキが一番恐ろしい人間って……」  
「お袋だ(きっぱり)」

---

2013年08月05日(月)  
わざと託生の携帯を借りて子供達に電話したあと、秘書に自分の携帯を持ってこさせた。  
「お仕事は……」  
「本宅に電話するだけだ。すぐに電源は切る」  
そして、さっさと秘書を追い出し、親父の携帯を鳴らす。  
「義一か？！」  
「はい。ご心配、ご迷惑おかけしました」  
本宅の方も軟禁状態だったと聞いた。さぞ、心配させたことだろう。  
「いや、君がこうやって、電話ができる状態なのがわかって安心したよ」  
「父さん……」  
同じFグループの総帥をしていた人間だ。もしものときの覚悟はしていただろう。だから、直接電話をした。安心してもらうために。  
「託生さんは？」  
「ここで眠っています」  
「………そうか」  
託生の強さも脆さも理解しているが上の返答。どのような状態なのかは、予想していただろう。  
「それで、父さんにお願いしたいことがあるんです」  
「私に、なにかね？」  
「SPの話は、聞いてますよね？」  
とたん、ピリリとした空気が伝わってきた。  
「ああ、よく聞いている」  
抑えても溢れ出す怒りを隠そうともせず、親父の声が低くなる。  
「託生を泣かせたんですよ」  
「ああ」  
「子供達も泣かせたんですよ」  
「ああ」  
「オレはここから動けません。……ですので、父さん。頼めますか？」  
断られるなんて露とも思わず、確認するように依頼する。  
本来ならオレがこの手でハつ裂きにしてやりたいのだが、まだ体が思うように動かないのは事実だ。  
だからと言って傷の完治まで待てない。そんな日数が勿体無い。いや、それだけの日数、無事に生かせているのが腹立たしい。  
「承知した。君は、安心して休め」  
「よろしくお願ひします」  
そうして切ったライン。  
明日……いや、今日中だ。これで、あの男の消息は、誰にもわからなくなるだろう。

「金魚のフン」

「なにが？」

「父さんが」

オレの視線を追いかけて、

「.....ああ、なるほどな」

兄貴が深く頷いた。

そこにはお袋の膝枕で横になっている親父がいて、たまに左手を伸ばしお袋の頬を撫でたり、ちよつかいをかけたり。

自宅療養中であるけれど、大人しくベッドの中にいるわけがなく、ずっとお袋のあとを付いて回っている。

食事はもちろん、咲未の送り迎えも、バイオリンの練習中も、仕事で自室に籠っている以外は、とにかくひたすら側にいる。

あれだけベタベタ引っ付きまわっていれば、鬱陶しがられても仕方がない状態だと思うのだけど、お袋も親父の好きなようにさせているようだ。

そして、隙あらば肩を抱いてキスしている光景を、よく目にする。

「.....諸刃の刃作戦だな」

「なに、それ？」

「自分ひとり我慢するのは理不尽だってとこかな」

「.....」

あー、なるほど。親父の魂胆がわかつてしまった。この年中無休のスケベ親父め。

「勝つのはどっちかな？」

「さあ？どっちにしても、家にいる間中は、ああだと思うし」

「確かに」

滅多にない連休だもんな。

昼食後に飲んだ薬が効いていたのか、うつらうつらし始めた親父の髪を、お袋が指先で梳きながら譜読みを始めた。

お袋の仕事の邪魔になるとか二人の甘い時間の邪魔になるとか、口実はなんでもいいけれど、兄貴と顔を見合わせクリと笑って静かにその場から立ち去った。

---

2013年08月04日(日)

「ダメ...だよ.....」

と言いながら、託生が目を反らした。頬を染めながら。

「でも、こんな状態なんだぞ」

「言われても.....」

自分の下半身を指差しながら、我慢も限界なのだと訴える。

無理矢理退院してきて、着替えも風呂も託生に手伝ってもらって、あちらこちら託生の手が触れるこの状態で、欲情しないわけないじゃん。

「傷口が開くから、ダメだって」

「なら、託生が上になってくれたら、いいじゃないか」

「な.....つ」

絶句して、これ以上ないくらい顔を赤らめたけれど、普段なら訪れる鉄拳はない。

怪我をしているから。.....というのは建前で、託生もその気だということがわかっているから。

託生が心配するのはわかるし、そりゃ、まあ多少は痛むけれど、この分身の辛さに比べたら、どうってことはない。

「託生……」

「ダメだって……」

「愛してるよ」

「ん……ギイ……だ……め……げ」

「……げ？」

「ギイ！ 血が滲んでる！」

「ぐつ……た……おま……急に動くな」

ベッドが軋み、これこそ傷に響く。

「もう、なにやってんだよ！だから、ダメって言っただろ？！ガーゼ替えなきゃ！包帯、包帯！」

ガバッと飛び起き、救急用具を取りに行きざまベッドマットの端を蹴った振動が、ぼよよ～んとオレの体を揺らし、

「このくらい、大丈……てーっ！」

上半身に痛みが走ったと同時に、下半身がきゅるきゅると萎えていく。

いい雰囲気だったのに、あー、もう、くそっ！

あの狙撃犯、絶対許すまじ。

---

2013年07月08日(月)

「あの、ギイ」

病院を出て、駐車場に向かうギイの背中に呼びかける。

「本宅に行ってもらえないかな？」

「それは、いいけど」

「みんなに謝らなきゃ」

本当は、病院に行くよりも先に、みんなに会いたかった。会って、謝りたかった。

「どうして？」

「だって、この一ヶ月、ずっと避けてたし……」

心底わけがわからないと顔に書いたギイに、ぼそぼそと説明する。

本宅に行くことも、ペントハウスに来てもらうことも、全部拒否して我慢を通してしまった。

そんなぼくの頭を撫でて、

「バカだな。『ただいま』でいいんだよ」

ギイが、目を細め優しく微笑む。

「……ただいま？」

「家族だろ？」

「……うん」

素敵なお義父さん、優しいお義母さん、可愛い妹。そして、ギイ。

血は繋がっていないけれど、ぼくの大切な家族。

ぼくは家族の暖かさを知っている。愛されることを知っている。

いつかぼく達に子供ができるても、ぼくはその子を愛せるよ。そして、ぼくが受け取った見返りのない無償の愛を伝えていける。

そう遠くない未来に、それは訪れるような気がした。

永遠～後日談に入れる予定だった部分を、シート。

2013年07月06日(土)

キッズルームから、キャッキャと大樹の笑い声が聞こえ頬を緩ませた。

今日は、起きているうちに帰れたな。

「ただいま.....は？」

意気揚々とドアを開け、部屋の中の光景に目が点になる。

「あ、ギイ、お帰り～」

「うん、ただいま」

ゴロリと床に転がり、自分の足の裏に大樹の腹を乗せ、高く上げたり、自分の顔のほうに引き寄せたり、遊んでいるというよりは体操をしている？

「託生、なにやってんだ？」

「赤ちゃん体操だよ～。大樹も喜ぶし、ぼくも運動不足解消になるし、一石二鳥だよね」

少し上気した頬で、顔だけこちらに向けて、説明してくれるのはいいけれど。

お前、自分の格好わかってるか？

足を動かすたびに尻の丸みが強調され、言うなれば、あのときのような足の角度に、素直なオレの下半身が元気になっていくんだけど。

「ギイも、やる？」

「いや、オレはいい」

元気になりすぎて、たぶんナニが引っかかる。

「そろそろ風呂の時間だろ？ 今日はオレが大樹と入るよ」

「そう？ ジャ、お願ひしようかな」

勢いをつけて起き上がった託生から大樹を受け取り、ついでに託生の腕を掴んで立ち上がらせる。

さっさと大樹を疲れさせて寝かせなければ。

オレの野望を叶えるために協力しろよ、大樹。

---

2013年07月05日(金)

「ギイ、お帰り」

「ただいま.....ん？」

ただいまのキスをしたとき、吸い寄せられるような瑞々しさを感じ、そのまま託生の頬に自分の頬を摺り寄せた。

「ちょっと、ギイ、痛い痛い」

「あ、すまん」

髪が伸びてたか。

「もしかして、エステ行った？」

「うん、絵利子ちゃんに連れられて」

「式が終わってから、行ってなかったもんな」

「そうだけど、でも、贅沢だなあって思うんだよね.....」

贅沢って、お前.....。

「あのな、託生」

「うん？」

「託生は、大財閥崎家の若奥様ってやつだから、そんなこと気にしなくても.....」

「でもさ。別に生活に必要ないよね、エステなんて」

そう言われれば、そうなんだが、オレ的には、このすべすべの託生は垂涎物の一品で、「絵利

子、グッジョブ！」と新作バッグを手に本宅に行きたいような気分なんだけど。

「ぼくは、エステより、あん摩や指圧の方が好きなんだよね」

「あん摩……指圧……」

せめて、マッサージと言わぬいか、託生？

そりゃ、あん摩は服の上から、マッサージは素肌に直接という違いはあるが、今は混同しているのだし。

「あ、ギイ疲れてない？ 指圧してあげようか？」

「オレ？」

「うん、指圧の心は母心～って」

「……なら、へそから8cmほど下を押してもらおうかな」

ニヤリと笑って指示するも、なんのツボかわからずキヨトンとした託生に、

「『大赫(だいかく)』と言って、精力減退によく効くツボらしいぜ？」

と、耳に口を寄せて囁いた。

カチンと固まって、しかし、みるみる間に頬が赤く染まってきたと思ったら、キッとオレを睨みつけ、

「…………ギイには必要ない！」

きっぱり言って、

「もう、寝る！」

と、ベッドルームに逃げ込んだ。

「ひでえ」

そりゃ、オレも必要ないとは思うけど、このまま、すべすべの託生をオレが逃すわけがないだろ？

「ではでは、美味しいいただきます」

宙に向かって宣言し、ベッドルームに飛び込んだ。

---

2013年06月29日(土)

一週間の出張への、出発間際の玄関ホール。

「ギイ、いってらっしゃい」

「ああ、あとを頼むな」

託生の頬にキス。

「父さん、いってらっしゃい」

「大樹、母さんの手伝い、よろしくな」

この頃、やけにしっかりしてきた大樹の頬にもキス。

「ダディ、いってらっしゃい」

「一颯、母さんの言うこと、よく聞くんだぞ」

咲未が生まれてから、自分が大きくなったような気分の一颯にもキス。

そして。

「咲未、ダディにバイバイは？」

託生の腕に抱かれた咲未の頬にキス………。

「…………う」

「え？」

「びゅーーーん！」

「さ、咲未？」

「咲未、どうしたの？！」

「咲未、泣いちゃダメ！」

「あー、とうとう始まった………」

ぼやく託生の声が耳に届いたが、オレに手を伸ばし全身で行かないでと訴える咲未に、胸の奥がぎゅーっと絞られる。

なんて可愛いんだ！

大樹も一颯も、同じ時期があったけど、託生とそっくりの咲未がこうやって手を伸ばしているのを見ると、まるで託生がオレに「行かないでくれ」と言っているように見えて、後ろ髪を引かれるどころじゃないぞ。

「義一さん、お時間です」

「嫌だ」

「ギイ、時間だから、咲未は気にしないで」

「無理だ」

そうは言われても、オレを求めて大粒の涙を流して咲未が訴えているのに。

「島岡、出張は中……止……うぐっ」

「……つべこべ言わずに、さっさと行って来い！」

……託生。お前、その足癖どうにかしようか。

両手が咲未で塞がれているからって、靴を履いたまま……絶対、スーツに靴跡ついてるぞ。

まあ、はらえぱいいけど。

「島岡さん、連れていってください」

「了解しました」

「げほっ。お前ら……咲未……」

「ギイの姿が消えたら泣き止むんだから、さっさと行って」

首根っこをつかまれるように島岡がオレのスーツを引っ張り、放り込まれたエレベーター。

「さーくーらーーーっ」

「……託生さんからのメールです」

エレベーターのドアを拳で叩く寸前、鼻先に滑り込まされた携帯のディスプレイに、涙の粒を残しながらも、大樹と一颯にあやされて満面の笑顔を浮かべた咲未の顔が……。

あれだけ、オレに手を伸ばして「行かないで」と全身で表していたのに……。

「納得しましたか？しましたね。はい、仕事してください」

「島岡……」

がっくり肩を落とし心の内で涙を流す。

一瞬か？一瞬でダディを忘れるのか？

「……詰め込んで前倒しにすれば、1日くらい短縮できそうですが」

「……2日、いや3日だ」

「義一さん、さすがにそれは……」

「やってやる。島岡、余った日数はオフにしろよ」

オレは、子供達といちゃいちゃするんだ！なにがなんでも、帰ってきてやる！

---

2013年06月06日(木)

「どうしたの、ギイ？溜息なんか吐いて」

「咲未のことなんだが……」

「咲未がどうかした？」

「もう5歳になるんだよな？」

「うん、そうだね？」

「オレは、この5年間、ずっと待ってたんだ」

「なにを？」

「『大きくなったら、ダディのお嫁さんになる』ってのを！」

「…………」

「それなのに、全然言ってくれる気配がない」

「たぶん、無理だと思うけど（ぼそり）」

「なにか言ったか、託生？」

「ううん。でも、ギイ。仮に大樹と一颯が『大きくなったら、母さんと結婚する』って言ったら怒るだろ？」

「当たり前だ！」

「だったら、いいじゃない」

「…………そういう問題か？オレは、咲未に言ってもらえないのか？これは父親の夢だろ？」

「あー、もう。…………ギイはぼくのモノなのに、プロポーズされたいの？」

「え？」

「ギイは、ぼく以外の人からのプロポーズを待ってるんだ？もう、ぼくのモノなのに」

「い、いや、そんなことはない！だよな、オレは託生のモノだったな」

「咲未の初恋が、ギイにバレたらうるさいもんね」

---

2013年05月15日(水)

「ギイ！葉山！」

「お前ら…………」

「みんな…………」

出国ロビーに向かっていた、ぼく達の背後からかけられた声に振り向くと、そこには、事情を知っている人間全員が集まっていた。

みんな大学の準備で忙しいはずなのに。それに、終業式が終わって実家に帰っているはずの祠堂の後輩達までもが来てくれていた。

卒業式翌日の退寮日。名残惜しげに麓の駅で別れて、もうなかなか会うことはできないだろうと思っていたのに。

鼻の奥がツーンとなって、咄嗟にギイのコートを握り締めたぼくの肩に手を回し、ギイがみんなに向かって歩き出した。

「黙って出国なんて、水臭いぞ」

「あー、すまん」

文句を言う矢倉に素直に謝ったギイだけど、なんとなく知らせなかった理由はわかる。

この三年間、アメリカに帰ることは何度もあったけれど、数週間経てば、また祠堂に戻ってきた。

でも、今回はただの帰省ではない。本来、ギイがいるはずの場所に戻るのだ。

次は、いつ、みんなに会えるかわからない。

だから、うやむやの中、戻るつもりだったのだろう。

しかし、

「こんなチャンスを、みすみす見逃せられるか？」

ニヤリと笑う矢倉の顔に、嫌な予感が背中を走った。

その証拠に、真行寺と駒澤が、なにやらごそごそしているなと思ったら、左右に別れて走り出しつづけた。

「げ…………」

「これが、嫌だったんだよ…………」

『祝！ギイ＆葉山、婚約おめでとう！』とデカデカと書かれた横断幕に、涙も引っ込んでポカンと口を開けた。

周囲の人間が、物珍しそうにクスクスと笑いながら通り過ぎていく。

「いい出来だろ？」

自画自賛して頷く矢倉の横で、同情を瞳に浮かべた八津がいて、利久なんて、両手でなぜか揉んでいる。真行寺は楽しそうだけど、駒澤は口を真一文字に引いて、いつもより怖い。

「章三、止めろよ」

「紙吹雪と紙テープは止めたぞ」

自分が詰め寄られるのがわかっていたのか、章三はむっすりと腕を組み、ギイを睨みつけている。

でも、紙テープって、なにかちょっと違うような？と、現実逃避をしようとしたのに、

「それでは、諸君！ギイと葉山の前途を祝して！」

矢倉の一声に引き戻され、気が遠くなった。

「ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！」

「ギイ……」

「耐えろ」

ギイが、出国を知らせなかったのは、このためだったのか。

ぼく、今すぐ、ここから離れたい……。

ひとしきり騒いで、やっと納得したのか、矢倉が満足そうな顔して数度頷いた。

そのとき、頭上にアナウンスが流れ、ぼく達の間の空気がふと引き締まる。

「託生」

「うん」

もう、行かなくちゃ。

みんなと向かい合ったものの、なにか言いたいのに、なにも言葉が出ず焦っていたら、

「託生、またな！」

利久が、帰省するときのような気軽さを装い、目を真っ赤にさせて手を上げた。

「……うん。みんな、またね！」

「ギイ、結婚式には呼べよ！」

「おう！二年後、楽しみに待ってろ」

ギイがぼくの手を握った。

いつか、また必ず会おう。そのときには、色々な土産話を持って、思い出話に花を咲かせ、時間の流れを忘れて笑いあおう。

「またね！」

いつか、また、きっと……。

---

2013年05月03日(金)

「父さん、寝てるね」

「でも、ダディと遊びたい」

「たーい」

クスクスと可愛らしい笑い声が、遠くから聞こえる。

完璧に覚醒はしていないが、声も気配もしっかりと認識できている。

こんな可愛いらしい目覚ましなら、毎日でもいいけれど。

かすかに水音が跳ねる音がしているから、託生はシャワーでも浴びてるんだろう。

さて、どうしよう。

近寄ってきたところを、いきなり起き上がって驚かせるか。  
それとも、三人が起こしてくれるまで狸寝入りを続行するか。  
うーん、究極の選択だ。

---

2013年04月22日(月)

「託生」  
「うん？」  
「花びらが付いてた」  
「ギイ、ありが……ギイ。お腹が空いてるからって、花びら食べないでよ」  
「いや、こいつ、オレに無断で、勝手に託生にくつっていたから」  
「なに、意味わかんなこと言ってるんだよ？ 絵利子ちゃん達、もうすぐ来るから我慢して」

---

2013年04月21日(日)

「お前ら、経験くらいは、してるんだろう？」  
「え、まあ、それなりに」  
「成り行きで」  
「でも、相手はアメリカ人だろ？」  
「ええ」  
「です」  
「だったら、絶対、日本のAVは見るべきだ！」  
「なんで、ビデオ？」  
「今は、BDだろ？」  
「そんな時代の流れなんてのは知らん。けどな、絶対見て損はない。日本人女性ってのは、奥ゆかしいんだ。闇の空間ってのは、秘密に満ちてるんだ」  
「闇……」  
「闇ってなに？」  
「お前ら日本人の血を引いてるんだろう？ 人を生み出す厳かな儀式を知らないってのは、ちょっと問題だぞ？」  
「そうなんですか？」  
「あれが、厳かなのか？」  
「Jr.達。思い人と成功させたいのなら、とりあえず見ろ。ギイだって、目から鱗だったんだぜ？」  
「父さんが？」  
「だったら……」  
「ただし、葉山には内緒な」  
「はい！」

矢倉、なにを教えるんだ？  

---

2013年03月27日(水)

『あら、なにかしら、義一？』  
「母さん、そろそろ託生を返してください」  
『別にいいじゃないですか。託生さんもウィーンフィルの演奏会を楽しんでますし、どうせそっちに

戻っても、義一に襲われるだけです』

「…………申し訳ありませんでした！託生に無理はさせませんので、オレの託生を返してください！」

『定期に入ったとたん、毎日襲う野獣の言葉なんて信用できません』

「う…………あの、それは託生が…………」

『貴方の思考回路を考えれば、すぐにわかることです。心配して絵利子とペントハウスに行ったら、案の定、疲れた顔で出迎えに出てきましたし。ああ、ここまで我が息子の性欲が野獣だったとは！』

「違う…………いや、そうですけど！そのところは謝りますから、託生を返してください！」

『託生さんのことを考えれば、もう少し独り寝を味わってもいいくらいだと思いますが？』

「いや、もう、充分味わいました！反省します！お願いします！」

『返したとたん襲うなんてことは…………』

「絶対しません！」

---

2013年03月15日(土)ブログより転載

朝食に託生を誘うのは、毎日のオレの習慣。

いつものように、意気揚々と託生の部屋のドアをノックなしで開け、

「おはよう、託生」

「ノックくらいしてよね」

覗き込んだと同時に、頭から怒鳴られた。

「絵利子？なに、やってんだ、託生の部屋で」

こんな朝っぱらから。

憮然としたオレに、

「ギイ。ぼくが、絵利子ちゃんに来てもらったの。ごめんね、絵利子ちゃん」

「ううん。じゃ、託生さん、あとでね」

「うん、ありがとう」

託生は、オレを睨んだあと、絵利子をにこやかに部屋から送り出した。

「なにか絵利子に用だったのか？」

オレじゃなくて、絵利子に？

「うん。ギイに聞いたって、仕方ないし」

「なんだよ、それ。オレを呼べよ」

オレは託生の婚約者なんだぞ。仕方ないって、ちょっと失礼じゃないか？

ムッとしたオレを見て、託生は呆れた顔で溜息を吐き、

「ギイを呼んで、どうしろって言うんだよ」

そう言って、なぜかオレに基礎体温計を手渡した。

「なんだ？」

「それ、見て」

託生の言葉に基礎体温計のスイッチを入れ、表れたグラフを目にしたとたん、その図形の形に思考が固まり、ギギギと託生に視線を移した。

「低温期になったからさ。今日から始まりそうだと思って、絵利子ちゃんに聞いたの」

わかった？

と託生が説明してくれたが、珍しく脳がなかなか動いてくれない。

手術後、皮膚が定着するまでの半年間。託生は月経を止める薬を飲んでいた。

そして半年が経ち、手術跡に支障がないということで、7月の通院でその薬は処方されなくなり.....。

「たたたたくみ」

「なに？」

「始まったのか？！」

「まだだよ。でも、たぶん、今日中だろうって」

「大丈夫なのか？！」

「別に、なんとも。あ、朝食の時間、遅れちゃうよ」

「朝食なんていい！」

「大食漢のギイがなに言ってんだよ。ぼく、お腹ペコペコなんだよね」

　そう言って、ドアに向かう託生の腕を引きとめる。

「もう、なんなんだよ！」

「朝食は、ここに持ってきてやるから、ベッドで休め！」

「はあ？」

「腹が痛くなるかもしれないだろ？！ああ、ALPも今日はやす.....ぐつ！」

「ギイ、落ち着きなよ」

託生の右手が、オレの鳩尾に沈んだ。

託生、お前、手加減しなかっただろ.....。

「あのね。これから先、月に一回、絶対来るんだろう？そのたびに、休めるわけないだろ？」

「でもな！」

「きちんと絵利子ちゃんに聞いたし、お腹が痛くなったときのために鎮痛剤ももらった。これ以上、どうしろって言うんだよ？」

　どうしろって.....たしかに、どうすることもできないけどな。

「病院に運んでくれたのがギイだから、心配になるのはわかるけど、大丈夫だよ」

苦笑しながらオレを覗き込んだ託生は、きっぱりと言い切った。

あのときのような激痛は、もうないだろし、世の中の女性は、十三歳前後からそのような生活をしているだろことはわかっているけれど、それが託生だとすると、なぜかうろたえてしまう。

いやいや、オレがうろたえてどうするんだ。当の託生は、完全に腹が据わっているのに。

「わかった。具合が悪くなったら、すぐに保健室で休ませてもらえよ」

「うん」

　この話は終わりとばかりに、

「お腹空いた」

　と、オレの腕を引っ張る託生の度胸に感服しつつ、でも、今日はどうも落ち着きそうにない自分自身に、ALPまで迎えに行こうと決める。

過保護と言われるかもしれないけど。いつか慣れるから、許してくれ。

---

2013年02月11日(月)

「あれ、ギイ、なにしてるの？」

「うん？ 竜頭を巻き上げてるんだよ」

「.....もしかして、その時計、手巻き？」

「オレのはな」

「じゃ、ぼくのは？」

「クオーツだよ。普通に電池が入ってる」

「.....面倒じゃない？」

「ははっ、託生ならそう言うと思った。クオーツで正解だったな」

「ギイは？」

「オレ？全然。巻き上げながら、託生も同じ時計をつけてるんだなあと幸せに浸れるし」

「.....//」

---

2013年02月10日(日)

キッズルームのドアを開け、ギョッとして足を止めた。

「ギイ、お帰り」

「父さん、お帰りなさい」

「.....ただいま。なにしてるんだ？」

足元に寝転んでいる託生、大樹、そして一颯。

「あーあー」

「はいはい」

一颯の声に託生が起き上がり、そのまま一颯を抱き上げると思いきや、180度回転させて、またその場に置いた。

ころん。

「お？」

ころん。

「おお」

ころん、ころん、ころん。

部屋の隅から隅まで、コロコロと一颯が転がり、その後を追って大樹が笑いながら同じようにコロコロと追いかけていく。

「寝返りから戻ることができるようになったんだな」

「うん、そうなんだけど、右回りしかできないから、ずっと部屋を縦断してるんだよね」

「目が回らないか？」

「さあ、一颯に聞かないとわかんないよ」

「それも、そうだ」

そう言っているうちに部屋の向こう側にたどり着き、

「あーあー」

文句を言う。

「はいはい」

また180度向きを変えて置くと、キヤッキヤと笑いながらコロコロと転がった。

「ずっと、これ？」

「そう、一颯のマイブームなんだよね」

呆れたような溜息を吐きながらも、可愛くて仕方がないというように目が笑っている。

「でも、そろそろご飯の時間だから、止めないといけないんだけど」

「止まるのか？」

「止まるよ」

「どうやって？」

「一颯、まんま」

とたん、ぴたっと動きを止め、キヨロキヨロ託生の姿を探し、手足をばたつかせ、

「まんまんまんまん.....」

「ね？」

と可愛らしく見上げてくれるが、託生。

なにか、犬のしつけをしているように見えるんだけど。

「なに？」

「いや、なんでも」

「そう？ ギイも早く着替えておいでよ」

「あ……ああ」

この頃、たまに託生が肝っ玉母さんのように見える……とは、絶対言ってはいけない禁句だ。

---

2013年02月09日(土)

マネス音楽院のドアを、こうやって見るのも、そろそろ慣れてきた。

託生のスケジュールは完璧に頭に入っているので、少しでも時間が重なれば、できる限りここに来るようしている。

なぜなら、また勘違い男が湧き出てくるかもしれないからだ。

託生が本気でぶち切れして以来、そういうヤツは現れていないらしいが、念には念をということだ。

「ギイ！」

「よ、お疲れ」

「今日は早かったんだ」

「ああ、午後から休講になったから」

小走りに走ってきた託生の頬にキスをし、肩にかけてある鞄に手を伸ばしたのだが、なんだ、これは？

「託生、今日は荷物重いんだな」

「そうかな？ いつも、こんなもんだよ」

「本か楽譜が増えたのか？」

チラリと鞄の中に目をやったものの、以前とそれほど変わらない数の書籍しか見当たらない。

「別に増えてないけど……あ、もしかして、これ？」

と、鞄のサイドにあるファスナーを開け、託生が取り出したのは……。

「扇子？」

「うん」

冬に扇子？ てか、扇子なんて軽いものなのに、鞄が重い理由になんてならな……おい。

「託生、これ……」

「絵利子ちゃんに貰ったんだ。護身用だって」

優雅に広げて風を起こすような華奢なものではなく、日本の鎧を思い出させるような、不気味なほど黒光りしている、それ。

もしかして、これは鉄扇(てつせん)ってヤツなんじゃ。

「これで刀を受け止めたりするらしいよ。十手みたいなものだって。絵利子ちゃんが使い方を教えてくれたんだ」

にこにこと笑顔で説明する託生の可愛らしさと、禍々しい凶器のギャップに冷たい汗が吹き出ているような気がした。

SPが付いているとは言え、自身が護身用になにかを持っていることは大切だ。

託生のことだから、表立って武器になるようなものは、嫌がるだろうし。

だからと言って、鉄扇を持たせるなよ、絵利子。オレに向けられたら、どうしてくれるんだ？！

「まだ使いこなせてないんだ。ギイ、練習に付き合ってくれる？」

…… 小首を傾げてのお願いに、オレがNOを言えるわけがない。

「ギイ？」

「ああ、いつでも、付き合ってやるぞ」  
癌だらけになろうとも、託生の為だ。こうなりや、とことんまで、やってやる！

---

2013年02月08日(金)

「タクミ。婚約者がいるって聞いたんだけど」  
「うん。そうだけど……」  
「それって、ストラディバリウスの持ち主？」  
「うん、それがなに……」  
ガシッ！  
「俺が助けてやるから！」  
「は？え？なに？」  
「ストラディバリウスの為に、結婚なんて止めろ！」  
「いや、別に、バイオリンは関係ないん……」  
「自分を偽るな、素直になれよ！」  
「だから、バイオリンが！」  
………というような勘違い妄想男がいたら、ギイ、どうするんだろうねえ(妖笑)

がんばって、妄想してみたよ。勘違い男。

「顔と金だけだろ？タクミが自分を偽っているのは、わかっているんだから」  
瞬時、怒鳴りつけようとしたオレの袖を託生が引っ張った。と同時に感じる。  
託生の空気が変わったのを。  
「ぼくが、どう偽っているって？」  
そろそろと横目で託生を伺うと、ゾクリとするほど綺麗な笑顔でそいつを見ていた。  
「素直に自分の気持ちを出しているように見えないから」  
「うん、だから、どういう意味かって、ぼくは聞いてるんだけど？」  
バカだ、こいつ。  
託生の上っ面だけしか、見てなかったんだな。  
ライバルにもならない勘違い男だけれど、託生の逆鱗にふれたのは同情する。  
「じゃ、君は、ぼくが誰を愛してるんだと思ってるんだよ」  
「それは……」  
と言いながら、なぜか頬を赤らめた。  
その面と、全然、似合ってないぞ。  
「言わせるなよ」  
「言ってくれないと、わからないんだけど」  
「あー、もう、俺だろ？」  
………バカだ。本当に究極のバカだ。  
「いつ、ぼくが君を好きって言ったかな？」  
「言わなくても、わかるって。タクミの気持ちは伝わってるよ」  
「………ギイ」  
「うん？」  
「キスして」  
「いいのか？」  
「わかんないみたいだから」

と睨まれながら言われる台詞じゃないような気もするが、託生からの誘いなら喜んで。

「ん……」

「愛してる、託生」

キスの合間に、囁いて、

「ぼくも……」

なんて、託生からの言葉も貰って。

いつの間にか、外野がいることなんて忘れてしまった。

---

2013年02月07日(木)

「ギイ、名前決めてくれた？」

「ああ。『さくら』」

「……だと思ってた」

「バレてたか」

「漢字は？」

「それが、迷ってるんだよ」

「え？」

「これ」

「……これ全部『さくら』？」

「そ。どう思う？」

「うーん。みんな漢字を使ってるから、かな文字は除外して……」

「『桜』の文字を使うか、『咲』を使うか、『彩』を使うか、『沙久』を使うか、」

「だよね。『花』一文字で『さくら』っていうのも読みにくいし、『朔』の文字は女の子っぽくないし」

「託生がバイオリンやってるから『作楽』もあるけど、なんとなく違うだろ？」

「うん……あ、これも『さくら』って読むの？『さくみ』じゃなくて」

「ああ、らしいんだ。こじつけっぽいところは、あると思うけど」

「ぼく、この文字がいいな」

「『咲未』か？」

「うん。未来に咲くっていいと思う。でも、読みにくいかな」

「いいんじゃない？日本の戸籍登録にしか使わないんだし」

「じゃ、これがいい」

---

2013年02月03日(日)

「赤池家は、節分イベント終わったんだ」

「ああ、ちょうど日曜日だったから、朝から巻き寿司を作ったよ」

「いいなあ。赤池君お手製の巻き寿司なんだね」

「いつも、家のことは奈美に任せきりだから、たまにはな」

「そっか」

「そっちは、これからだろ？豆まきするのか？」

「一応恵方巻きは食べるけど、豆まきはしないよ」

「まあ、日本の行事だから、無理にしなくても……」

「じゃなくて、昔やろうとしたんだよ。鬼役の人も準備してたんだけどさ、できなくなっちゃったんだ」

「はあ？咲未ちゃんはともかく、上の二人は、豆まき楽しみそうなのにな、ギイに似て」

「それ！ギイに似てるから、豆を全部食べちゃったんだよ」

「.....なるほど」  
「だから恵方巻きも大変でさ。シェフが朝からものすごい数を作ってるよ。ギイも今日は早く帰つてくるって言ってたし」  
「心からシェフに同情するよ」

---

2013年02月02日(土)

「イブキ、昨日のは彼女？」

「は？オレ付き合っている女なんていないぞ」

「隠すなよ～。日本人の姉妹と歩いてたじゃないか。お前が付き合ってるの、どっち？姉？それとも妹？」

「.....それ、オレのお袋と妹」

「またまた～、照れるなよ。紹介するのが恥ずかしいのか？うん？」

「紹介してほしいのなら、家に来ればいいじゃないか。どっちもいるから」

「.....嘘だろーーーっ！」

「嘘じゃねえよ」

「どう見たって20代前半じゃないか！」

「日本人は若く見えるからじゃないのか。たぶん、お前の母親とそう変わらないと思うぞ」

「.....お前の母ちゃん、紹介してくれ！」

「殺されるぞ、親父に」

---

「ツレが、母さんのこと、20代前半にしか見えないって言ってたよ」

「.....その子、目が悪いんじゃない？」

「そうかな」

「うん、そうだよ。一度、眼科検診行ったほうがいいって」

「お母様、これ、見て」

「うん、なに、咲未？」

「.....普通の女性なら、若く見られて嬉しいはずなのにな」

「一颯。母さんに普通を求めるのは野暮だ」

「自分に無頓着だしね」

「父さんが褒めすぎるから、受け流す癖がついてるんだよ。本気で言ってても、冗談にしか聞いてもらえない」

「うん、父さん、いつも本気だよな」

「あ、一颯」

「なに、母さん？」

「一度、家に連れておいでよ。ぼく、一颯の友達に会ってみたいな」

「いや、あいつ忙しいから、無理だと思うよ。.....ツレの不毛な恋を後押しする気はないし（ぼそ）」

「そうなの？機会があったら、遊びにおいでって伝えておいて」

「うん、わかった」

「.....人一人の命を救ったな」

「だろ？」

---

2013年01月31日(木)

「キャベツ畠の中心で妻に愛を叫ぶ、略して、キャベチュー」

「.....突っ込みどころ、満載なんだけど」

「そうか？」

「そうだよ。だいたい、なんでキャベツ畠？」

「そりゃ、コウノトリと同じ理屈じゃないか？キャベツから子供が生まれるっていう」

「今時の子供でも信じてないよ、それ」

「と言いながら、甘い夜をだな」

「へ？ ちょっと.....ギイ、待って！」

「オレは、ベッドの中心で託生に愛を叫ぼうかな」

.....本当のところ、意味は知りません；キャベチュー。

⇒[bit.ly/xgxM5f](http://bit.ly/xgxM5f)

---

「託生、これに合わせて足を置いてみてくれ」

「これは、なに？」

「ハグマット新聞」

「.....今度は、なんの計画？」

「愛妻の日記念、倦怠感削減愛情持久力向上プログラム、略して、ハグタイム計画」

「略してないけど」

「午後8時9分に世界同時ハグだぞ。これほど、すごい計画はない！」

「.....とりあえず、地球上で24に分けてハグタイムがあるってことだね」

「そういうことかな」

「同時じゃないよね」

「まあまあ」

.....本当に世界でやっているのだろうか。ハグタイム計画。

⇒[bit.ly/hB7YLk](http://bit.ly/hB7YLk)

---

2013年01月26日(土)

「ぎい？」

「うん、ただいま」

「ごめん、また寝ちゃってたんだね」

「いいって。妊娠中は眠くなるんだってさ」

「そうなの？ 寝ても寝ても寝足りないみたいで.....ふあ～」

「寝る子は育つって言うだろ？」

「なんか違うような気がする.....」

---

「2Dとか3Dとか4Dとか」

「見たよ」

「見たのか？！」

「2Dだけど、写真見る？」

「見る！」

「今は3センチくらいって」

「…………」

「ここが頭で、体で、手と足だって。パタパタしてたよ」

「…………」

「ギイ？」

「…………オレも見たかった！次の検診はオレも行く！絶対行く！」

「それはいいけど、仕事をサボらなければ」

「島岡に調整させるから大丈夫だ。で、これは貰っていいか？」

「写真？いいけど、どうするの？」

「もちろんデスクの上に飾る！」

「…………ギイ、それ止めたほうがいいと思う」

---

「孫よ孫！」

「託生さんの子供なんだもん！絶対可愛いわよ！」

「あのね。託生の子供でもあるけど、オレの子供でもあるんですけど」

「まあ、そうとも言うな」

「なんですか、それ？！」

---

「はい、どうぞ～」

「失礼します」

「義一様のお荷物が届きましたので……」

「それ、なに？」

「アカデミックドレスでございますよ」

「アカデミックドレスって……あの、卒業式で着る？」

「はい」

「うわあ、ぼく、初めて見た」

「これって、みんな一緒なの？」

「いえ、修士、学士、博士とデザインが異なりますし。これは博士のデザインですよ」

「へえ、博士の……ん？」

「どうかされましたか？」

「ううん、なんでもない」

「お帰り、ギイ」

「託生、ただいま」

「ギイ、あれ」

「うん？ああ、届いたのか」

「あのさ。ギイ、コロンビア大学に行ってたんだよね？」

「そうだけど？」

「それって、コロンビア大学院の間違いじゃないの？」

「え……？」

「これ博士のデザインだって聞いたんだけど？」

「えーと？」

「どういうことなのか説明してもらえないかな」

「あの……な……」

「なに」  
「隠していたわけじゃないぞ？」  
「へえ」

今となっては、ボツった設定：

---

2013年01月12日(土)

「母さんってさ。携帯だけは必ず持ってるよな。性格的に、忘れそうなのに」  
「…………ああ、お前は小さかったから覚えてないんだな」  
「なにが？」  
「俺達が小さかった頃、よく携帯を忘れて、父さんが小言を言ってたんだよ。それで、今の携帯を無理矢理渡したんだ」  
「…………よく、わからないんだけど」  
「一度、母さんの携帯アプリを見せてもらつたらいい。メトロノームにチューナー、簡易ピアノや、直接書ける五線紙メモなどが入ってるぞ」  
「ようするに、電話やメールなどの連絡ツールじゃなくて………」  
「母さんにとっては、音楽関連の便利ツールの宝庫」  
「…………思い出したんだけど、確か演奏家のプロが愛用しているアプリって、Fグループの子会社が開発してなかつたっけ？」  
「それ、父さんが母さんのために作った会社」  
「…………携帯を持たせておくために、そこまでするか？」  
「いいんじゃないか？今では、音楽関連アプリのシェア1位独占だろ？」  
「母さんって、すごいんだな」  
「…………ああ、Fグループの命運を握っている人だ」

---

「父さん」  
「なんだ、一颶？」  
「兄さんに聞いたんだけどさ。携帯アプリの開発をしている会社って、母さんのために作ったんだよね？」  
「あー、どちらにしても、いつか手を出す予定の分野だったんだ。ただ、いまいち方向性が決まっていなかったから、音楽関連という大まかなカテゴリーにピントが定まってよかったよ」  
「もしかして、他にもあるとか？」  
「なにが？」  
「母さん関係のところ」  
「そうだなあ……。防音設備、音響設備、オーディオ機器とスピーカー開発。ああ、レコーディングスタジオも作ったな。託生が国外に行くようになってからは旅行会社……チケットを取りやすいから。あとは、ホテルの買収とグループ化。それから………」  
「…………父さん」  
「うん？」  
「よく、母さんにバレないね」  
「当たり前だ。オレに抜かりはない！」  
「…………これで、いいのか、Fグループ？」

2013年01月08日(火)

「日本から帰るだけなのに、ファーストクラスなんて、なに考えてんだよ？！」

「そりゃ、コンサートで疲れてるだろうし、やっぱりゆっくり横になりたいだろ？」

「ぼくはエコノミーでもいいくらいなのに！」

「いや、お前、総帥夫人としてそれはどうかと思うぞ？せめてビジネスと言ってくれよ」

「じゃ、ビジネスにするよ。だからファーストはキャンセルにして！」

「でも、絶対ファーストの方がいいって」

「無駄遣い、禁止！」

「そのくらい無駄じゃ…………」

ふとギイが口を噤み、そしてぼくの後方に視線を向けた。

「ギイ？」

ギイの視線を追って振り向くと、細く開いたドアの前に見慣れない物が置いてある。

「なに、あれ？」

ぼくの声に反応したように、それ、は、ピカピカくねくねと勝手に踊った。

「さあ？」

答えたギイの声に反応して、またもや、ピカピカくねくね。

「で、ファーストでいいよな？」

ピカピカくねくね。

「いや、だからビジネスでいいって」

ピカピカくねくね。

真剣に話し合いしているぼく達の声に反応して、ピカピカくねくねと、おちよくるようにサングラスをかけた花が踊る姿に、笑いがこみ上げて会話が続かなくなってきた。

ドアの隙間から4つの目が見える。あれは……。

「いーふーきーーっ！さーくーらーーっ！」

「きゅーーっ！」

「逃げろーっ！」

どたどたと遠ざかる足音に呆れつつ、ドアの前に置いてあるフラワーロックを手に取る。

「もう、笑うしかないじゃないか」

ピカピカくねくね。

「あいつらなりの思いやりだろ？」

ピカピカくねくね。

まったく、いつ日本から取り寄せたんだか。

「これ寝室に置こうか？」

「……なに考へてるの？」

「いやあ、託生の声に反応……てーっ！」

容赦なく踏んだ足音に、ピカピカくねくね。

とりあえず、持ち主に返しにいこうか。たぶん一颶だと思うけど。

話し合いは、そのあとで。

---

2012年12月22日(土)

「そのまま使える婚姻届」&「ほんとうの妄想用婚姻届」&「婚姻届を永遠(とわ)に残せる封印アルバム」愛極まる3点セット………。

「島岡？あ、オレ」  
「……なんでしょうか」  
「お前、今、日本だろ？」  
「買いませんよ」  
「まだ何も言ってないだろ」  
「貴方のことですから、ゼク・イを頼まれるかと思いましたが？」  
「ナイス、島岡。よく、わかつてんな」  
「だから、買いませんってば」  
「今回は封印アルバムがついてるんだ。オレと託生の愛を永遠に封印しておけるなんて、買うしかないぞ」  
「ギイ、何回婚姻届を書けば気が済むんですか…………」

---

2012年11月22日(木)

「お兄様～。できたわよ～」

シェフと厨房に籠っていた咲未が居間の入り口から顔を覗かせた。

「お疲れ、咲未」

兄貴がソファから立ち上がり、ニコニコと笑っている咲未の頭を撫でる。

咲未の手には、大き目のバスケット。

「見てもいい？」

オレの言葉に、胸に抱えたバスケットを開け、オレと兄貴の目の前に、ずいっと自信たっぷり掲げた。

「うまそ～～」

「可愛いね、咲未」

「お母様に教えてもらったものだけどね」

猫型稻荷ずしに、ひよこ卵に、タコさんフランクフルト。

…………激しく違うと、赤池さんには言われたけれど、これは形じゃない。作った人間が重要なんだ。

「じゃ、母さんに声をかけるか」

兄貴の声を受け、お袋が籠っている防音室に足を向ける。

分厚いドアをノックし、しばし待つと、中からドアが開いた。

「大樹？一颯？咲未？どうしたの、三人揃って」

勢ぞろいしたオレ達に、視線を往復させながら、お袋が驚く。

まあ、そうだろうな。

基本、お袋がここに籠っているときは、オレ達も「仕事中」と暗黙の了解で邪魔はしないようになっていたから。

「実は、父さんの夜食を咲未が作りまして」

と、兄貴が口実を言う。

「咲未が？」

証拠にと、咲未がバスケットを目の前に上げる。

「島岡さんにメールで聞いたら、ロビーまで取りに行きますと返事が来たので、一緒に行っていただけませんか？」

「……島岡さんの邪魔したんじゃ」

「一応、メールで………咲未が作ったんで」

苦笑しつつ小声で言葉を紡いで、妹思いの兄貴を演じた役者一人。

そう言われば、お袋だって文句は言えまい。

「そつか。ギイも咲未の手作りのお弁当だったら、大喜びするだろうね。一緒に行こうか」  
よっしゃ。

こっそり、三人で親指を立てたのを、お袋は知らない。

本社の車寄せに島岡さんの姿が見えた。

「お母様、はい」

「え、咲未？」

「マスコミがどこに隠れているかわからないだろ？」

肖像権にうるさい親父は、オレ達の写真に関して細心の注意を払っているから、こういう場所ではお袋が表に立つのが適当だ。

それを認識してか、お袋が咲未から素直にバスケットを受け取った。

車が止まり、兄貴がドアを開ける。

お袋が車の外に足を踏み出し、島岡さんに向き直ったそのとき。

バタン！

「え？」

「早く！」

急発進した車の車窓から、慌てたお袋の姿が遠くなっていく。

「11月22日だからな」

「いい夫婦の日だもんな」

「お父様とお母様の日なのね」

あとは島岡さんに任せておけばいい。

たまには、夫婦水入らずで、二人の時間を楽しんでもらえればと、数日前から用意していた、オレ達からのプレゼント、

「でも、お父様とお母様は、毎日ラブラブだけど」

咲未の素直な台詞に、オレと兄貴は大きく頷いた。

---

2012年10月24日(水)

「プライベートジェットなんて贅沢だよね……」

「昨日の今日だから、これは勘弁な」

「うん。ギイ、いつ休暇が取れるかわかんないし、旅行する予定もなかったもんね」

「マイアミについたらマリーナ行きのバスだからさ」

「バス？」

「そうそう。久しぶりだろ、バス？」

「なあ、兄さん」

「なんだ？」

「ほんとにバスに乗るのか？」

「断言しているんだから、バスで移動するんだろう」

「節約してますって？」

「一応な」

「……もしかして、他の客って全員SPとか？」

「当たり前だろ？」

「やっぱり……」

---

2012年10月21日(日)

「うーん」

ふんわりとした光が僕を包み込んでいるような気がして、目を開けた。

そこは、ペントハウスの僕の部屋…………のはずだったのに。

「あれ？」

空色の壁は？飛行機が飛んでいる天井は？

いつもと違う光景に、右を見たら、なぜか大樹お兄ちゃんが寝ていて、左を見たら、同じように咲未が寝ていた。

いつのまに引っ越しちゃったの？

ベッドの正面に大きな窓があって、カーテンが引かれていた。

そこから、ふんわりした光が入っていたようだ。

ベッドを降りて、ぺたぺたと裸足のまま窓に近寄り、カーテンを開けた。

「…………孔雀？」

窓の向こうに一羽の孔雀。

じっと見詰め合っていたら、バサッと羽を広げて、ビクリと一步後ずさった。

「本物の孔雀だ…………」

ここがどこなのかわからないけれど、もしかしたら夢の中かもしれないけれど、こんな綺麗な孔雀を見たのは初めてだ。

「お兄ちゃん！咲未！孔雀！孔雀がいるよ！」

わっさわっさと二人のベッドを揺らして、

「なんだよ、一颶…………ここ、どこだ？」

「んー、おにいちゃま、なーに？」

「孔雀！孔雀だってば！」

窓を指差して二人に起こす。

「おお！孔雀だ」

「くじやく……ってなあに？わあ、綺麗な鳥さん！」

窓の前で三人、大騒ぎしていたら、

「朝から元気だなあ」

と、父さんが入ってきた。

「父さん、孔雀だよ、孔雀！」

「だろ？喜んでもらえてよかった」

嬉しそうに笑った父さんも一緒に窓の前まで来て、四人でとことこ歩く孔雀を見ていたら思い出した。

…………ここは、どこ？

「家族の食卓」のラストに出てきた孔雀話でした。

---

2012年10月19日(金)

「専務？」

「ああ。親父が、『このまま肩書きなしだと、なにかと不便だから』ってさ」

「へえ。でも、前に言ってたよね。幹部の人達が意見するって」

「そうだけど、結局は親父が決めることだから、口出しさはできないさ。それに、オレが次期総帥なのは公表していることだし、親父代理で動くことも今まで以上にあるから」

「ふうん」

「今はないポジションだけど、数年後には副総帥の席を作つて、15年後までには、隠居したいって言われてる」

「15年後って……ギイ、まだ30代だよね。総帥には若くない？」

「そうか？ 親父だって、その頃には総帥だったぞ？」

「あれ？ ……そつか。祠堂にいたときには、お義父さん、総帥だったね」

「そういうこと」

「ギイの体が心配だな……」

「大丈夫だって。大樹に兄弟を作つてやれるほど、オレはまだまだ元気だぞ」

「ギイ！」

ということで、Resetとおふいすらぶが副社長。Lifeでは専務で。違いはないと思いますけど(笑)

---

「なあ、崎専務って言って」

「……ギイ、なに考えてるの？」

「昼下がりのオフィスラブ？」

「……大樹一。スケベなダディは放つておいて、マミイとねんねしようねー」

「お、おい、託生一つ」

---

2012年10月08日(月)

「ギイ、このバッグ買って♪」

「おい、絵利子。なんで、オレが……なんだ、これ？！」

「シ○ネルの新作バッグ」

「頑丈すぎるだろ。ってか、お前いったいなに考えてる？」

「あらあ、新作バッグが欲しいだけよ」

「なわけないだろうが。底に錘を入れてぶん回すか、円月輪のようにぶん投げるかしか考えてないだろ？！」

「このまま相手に転がすこともできるわよ♪」

「お前、バッグの使い方間違ってる」

⇒<http://t.co/Vppxvhlt>

うん、昨日のシ○ネルのバッグ

---

2012年09月24日(月)

その日はなぜだか、朝からおうちの中が変だった。

ダディが珍しくお仕事がお休みで、朝からおうちにいる。なのに、マミイは嬉しそうじゃない。

「託生。無理しなくてもいいんだぞ？」

「う……ううん！ 無理じゃないよ！」

「……無理だって言ってくれよ」

なんてダディの言葉がボソリと聞こえて、なにかマミイが無理をするんだと思った。

「だって大統領主催なんだろ？」

「……そうだけどな」

「お義父さんもお義母さんも招待されてるんだろう？」

「……そうだけどな」

「だったら大丈夫だよ」  
と言ったマミイの顔がひきつってる。  
「それとも、やっぱり……ぼくじゃダメ……かな」  
「そんなことないぞ！ 本当は、見せびらかしたいくらいなんだ！ ……ただ見せるのが勿体ない  
だけで！」  
「ギイの言つてること支離滅裂だよ」  
「いい加減、わかってくれ。複雑な男心を」  
ふくざつなおとこごころってなんだろう。  
ぼくには、わかんないや。

---

2012年08月27日(月)

「ねえ、ギイ」  
「うん？」  
「ギイの給料日って、いつ？」  
「……は？」  
「あ、だって、あの……ほら！ 給料日は、ちょっと食卓が華やかにしたほうがいいとか、ケーキ用  
意したほうがいいとか！ ……ちょっとサービスしたほうが……いいとか」  
「……託生。お前、またなにか女性雑誌読んだだろ？」  
「……うん」  
「いいけど。正確には、365日24時間、口座には隨時入ってくる」  
「え？」  
「不動産とか証券とかの関係で、自動的に入ってくるんだよ」  
「……え……と……？」  
「だから、給料日はいつ？と言わされたら、毎日」  
「毎日？！」  
「託生、サービスしてくれるんだ？」  
「いや、あの」  
「どんな、サービスしてくれるのかなあ」  
「言えるほどのサービスなんてできないから！」  
「毎日、託生がサービスしてくれるのか。オレ、幸せ者だよなあ」  
「無理！ 絶対、無理だから！ ぼく持たない！」  
「なに、考えてるんだよ？」  
「！！！」  
「託生……スケベ」  
「～～～～ギイのばかー———っ！」

---

2012年08月23日(木)

妄想用婚姻届。書かせたい。あの二人に。「キスの有無」なんて有はあっても無はないよ。って  
か数は無制限だろ。てか、この紙欲しさに、ゼクシィ買いたいと思う私は終わってるorz  
<http://t.co/eoUdJp7L> @TwitPicさんから

「託生。日本側に婚姻届出すんだろう？」  
「うん。あ、それ」

「ああ、用紙送ってもらった。オレの分は書いたから、託生も記入してくれ」  
「うん、わかった。……葉山託生、と。挙式日程？んと、○月○日。相手の呼び名……はあ？  
献立？キス？」  
「ほら、書けよ。オレはきっちり書いたぞ。帰宅時は『それとも、あ、た、し』にチェックして」  
「……この婚姻届おかしい」  
「どこがだよ」  
「全部！」

---

「兄さん、どうかしたのか？」  
「一颶か……」  
げんなりした様子の兄貴の背後。リビングの中から、親父とお袋の怒鳴り声がする。  
またやってるのか。  
どうせ、犬も食わない夫婦喧嘩だろうけど。  
いいかげん慣れたもので、オレの後ろについてきた咲未は、キヨトンとしてドアを眺めている。  
「今度はなにが原因なんだ？」  
「婚姻届がどうとか言ってるぞ」  
「はあ？」  
婚姻届って、日本の戸籍システムに必要な書類のことだよな。確かに、日本のお袋の戸籍謄本の身分事項欄に婚姻した事実が書いてあったから、婚姻届は出している。  
今更、婚姻届でもめるなんて、どういうことなんだ？  
ゆっくりとリビングのドアを開き、3人で覗き込んだ。  
「けど、サインはしただろうが！」  
「サインって……一番上が名前の欄だから、気付かずに名前を書いてただけだろ？！」  
「自筆でのサインじゃん」  
「そうかもしれないけど、だいたいね。あれは婚姻届じゃなかっただろ」  
「立派な婚姻届だと思うぞ」  
「違う！」  
親父の手にはラミネートコーティングされた一枚の紙。  
婚姻届というのを見たことはないけれど、あれが婚姻届なのだろう。  
「父さん、母さん。なにを揉めてるんですか？」  
代表して兄貴が二人に声をかけた。  
とたん、クルリと親父がオレ達に視線を移し、  
「飯と風呂とあたしだったら、あたしだよな？！」  
この答えが当然だよな？とばかりに、親父が噛み付く。  
……普通、我が子に聞くか？  
あれだろ？  
『ご飯にする？お風呂にする？それとも、あ、た、し？』ってか？  
そりや、オレも男だから、たぶん好きな女にそう聞かれたら、有無を言わさず襲うだろうけど、親父の口を慌ててふさごうとして、反対に腕を取られたお袋の顔を見れば、素直に答えるわけにもいかず、兄貴と顔を見合させた。  
「あー、それは……」  
「そのときの状況により……」  
「ご飯とお風呂とあたしだったら、あたしでしょ？」  
口ごもったオレ達を尻目に咲未が目を輝かせて、きっぱりはっきり答えた。とたん、その場にいた

全員が固まる。

「さ……咲未……」

お袋は血の気を引き、親父に至っては冷や汗までかき、顔は土気色に変わった。

「ご飯よりもお風呂よりも、お父様はお母様が好きってことなんですよ？」

無邪気な問いに親父はコクコクと首を振り、そのままお袋を横目で見て、その視線にお袋もコクコクと首を振って、なぜだか、オレも兄貴も首ふり人形に変化した。

ニコニコと笑う咲未と首ふり人形4人。

……崎家の夜は、こうして更けていく。

---

2012年07月26日(木)

「貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございました」

Fグループの次期総帥崎義一氏へのインタビューが終わり、周りが片付け始めたとき、

「あの…」

声を少し落として、もう一度崎氏に声をかけた。

「はい？」

「先月お子様のお誕生日だったんですよね。おめでとうございます」

3年近く前、崎夫妻を突然襲ったスキャンダルと收拾のきっかけとなった夫婦の固い絆を見たときから、実はこの夫婦のファンだったのだ。自分よりも随分若い人間ではあるけれど、もしも会うことができたら一言でもお祝いを言いたかったのだ。

「え……ああ、ありがとうございます」

「あ、これは個人的に、です。あの事件はもちろん承知しておりますが、我が社はビジネス関係専門ですので」

暗に、プライベートは一切掲載しないと滲ませて、

「可愛いでしょう？」

と、続けた。

「それは、もう！」

本当に嬉しそうに笑う次期総帥に、思わず自分で笑顔が浮かぶ。

「でも、これだけお忙しかったら、なかなかお子さんと過ごす時間がないのでは？」

「わかりますか？」

「ええ。私もそうだったんで」

「貴方も？」

「ええ。今は中学生になってますが、まだまだ赤ん坊って頃は、まだ私も下っ端でして残業続きで寝顔しか見れなかつたんですよ」

「そうですか……」

「なにか、あったのですか？」

「ええ。先日、出張に出る朝に『次はいつ来るの？』と言われまして……」

ドーンと背景に縦線トーンが見える。

しかし、その台詞に、こちら側のスタッフの間に同情とも同意とも取れるように皆が大きく頷き、特に若いスタッフも己の状態を思い出したのか、次期総帥と同じようにドーンと縦線トーンを背中にしよった。

「世の中の父親が、乗り越えなければならない大きな山ですよね」

「そうなのでしょうか？」

「あ、奥様に毎日写真を見せてもらうとか……」

「ええ、それはやってくれてるんですよ。妻が毎日『ダディだよー』と写真を見せてるので顔は覚え

ているんですが、2Dと3Dでは違うようで……。久しぶりに会ったら『おっきい』と引かれました」  
可哀想だ。あまりにも可哀想だ。  
なんとかしてあげたいけれど、こればかりはなにもできない。  
「もう少し大きくなれば、わかりますから」  
「そうですね。あと少しの我慢なんですね」  
遠い目をした次期総帥に、大きく頷いた。

---

2012年07月14日(土)

「ギイ、お帰り」  
「ただい……どうしたんだ、大樹？」  
「んー、なんか今日は機嫌が悪いみたいでさ。起きてからずっとグズグズ言ってて、ぼくもイライラしてきたから、気分転換に遊んでみた」  
「……で、七三分け？」  
「うん、可愛いだろ？写真も撮っちゃった」  
「たしかに可愛いけど……」  
「次はちょんまげにしてやろうかなって。絵利子ちゃんに言ったら、可愛いゴム持っていくねって」  
「大樹。あまりマミィを困らせるなよ。お前の恥ずかしい写真が増えるだけだからな」

---

「ギイ、お帰り」

「ダディ、おかえんなさい」  
「ああ、ただいま、大樹。ただい……託生……」  
「一颶、可愛いだろ？」  
「かわい…い……けど」  
「あのね、一颶、ずっと泣いてたの。抱っこしてもダメだったの」  
「そうか。大樹もお手伝いしてくれてたんだな」  
「そうなんだ。あまりにもギャンギャン言うから、遊んじゃった」  
「けどな、託生。モヒカンは止めてあげたほうがいいと思うぞ？」  
「なんで？ 可愛いのに、ねー？」  
「ねー？」  
「……我が息子ながら不憫だ」

---

2012年06月21日(木)

日本で術後半年と言われていた。  
だから次の通院でOKを言われるのはわかっていたけど、日にちが近づくにつれ、そわそわしているようなギイに、ぼくの方こそそわそわとしてしまい、恥ずかしくなって今回だけは一人で病院に行きたくなかった。  
ぼくの通院に合わせて仕事を休んでくれているギイには感謝しているけど、それとこれとは別。OKが出たから、はい、しましょう、は、少し違うような気がする。  
だから、通院の日の夕方からギイが出張だと聞き、ホッとした。  
いつまでも逃げられるとは思ってないし、ぼくだって、その……ギイとそうなりたいと思ってるけど、この体になってそういうことをするのは初めての経験になるから、心の準備を整える時間が欲しかった。

---

2012年06月05日(火)

「あの、お義父さん……」

「ん？ 託生さん、どうしました？」

「あれ、ショベルカーですよね？ どうして裏庭にショベルカーなんか……」

「ああ。大樹と一颯にお砂場を作つてあげようと思ってね。公園の砂は固まらないと言つていたから」

「固まらない……ですか？」

「あー、いやいや。思いっきり、砂遊びをしたいそなうなんだよ」

「そうですか。でも、わざわざ隣に水道をつけていただかなくとも」

「泥団子を作るためには…いやいや、いつでも手を洗えるようにしておかないと、目に入つたら危ないからね」

「そうですか。でも、あまり甘やかさないでくださいね？」

---

2012年06月04日(月)

「お前達、託生を好きか？」

「好き！」

「託生が大切か？」

「もちろん！」

「なにかあったんですか？」

「託生を狙つてるやつがいるんだ」

「狙う……って、どういう意味ですか？」

「オレ達から、マミイを奪うヤツだ」

「誰なんです、それは？！」

「マミイを狙うヤツなんて、やつつけてやる！」

「だから、オレが守れないときには、お前達が守ってくれ」

「ぼく達が、母さんを守る……」

「そうだ。大樹、一颯。お前達が託生を守るんだ。でなければ……」

「……どうなるんですか？」

「託生が泣くぞ？」

「母さんが泣いちゃうんですか？」

「マミイ、泣いちゃ駄目！」

「なら、わかるな？」

「泥団子を投げていいんですか？」

「許可する」

「キックしてもいいんですか？」

「許可する」

「噛み付いてもいいんですか？」

「許可する」

「なにをしてもかわない。あとのことは、オレに任せろ」

---

2012年05月27日(日)

「ギイ、いってらっしゃい」  
「うん、留守を頼むな」  
「ほら、大樹。ダディにいってらっしゃいは？」  
「…………ダディ、次はいつ来るの？」  
「…………」  
「だ……大樹！ダディのおうちはここ！」  
「うん？？？」  
「大樹…………夜に3回寝たら帰ってくるからな。ダディと遊ぼうな」  
「ちょっとギイ！出張、一週間じゃ！」  
「3日で帰る！絶対帰る！オレは帰ってくるんだーーーっ！」

---

2012年05月26日(土)

「上の二人はギイに似てるけど、咲未ちゃんは葉山そっくりだな」  
「すっげ可愛いだろ？」  
「ギイ！」  
「外見もそっくりだけど、性格も託生そっくりなんだぜ」  
「そりゃ、ギイも猫かわいがりだな」  
「たった一人の女の子だしな」  
「じゃあ、ギイの遺伝子入ってないかもね」  
「の……野沢君！」  
「あー、マジにギイの遺伝子どこにあるんだ？って感じだな」  
「矢倉君！」  
「そのとき、お前出張でも行ってなかったか？」  
「赤池君！」  
「オレの遺伝子……まさか、託生……」  
「なわけないだろ？！馬鹿なこと考えるな！」  
「あ、また父さん殴られてる」  
「からかわれてるだけなのに、真剣に取るから……」  
「お父様とお母様、ラブラブね～」  
「咲未……。お前、どうやったらそう見えるんだ？」

---

2012年05月25日(金)

(Ayaさまの小話の続きです。[Favolog](#)にてAyaさまの小話が読めます♪)

「ギーーイーーー」  
「た…託生！」  
「こんな子供になにを教えてるのかなあ」  
「い…いや、日本の伝統行事をだな」  
「節分は4ヶ月前に終わってるよ！」  
「だから、次の節分の予行練習を！」  
「えろまき？」  
「こらっ、声が大き…っ」  
「大樹。少し向こうで遊んでてくれるかな？」  
「うん、マミィ、わかった！」

「こら、大樹、ダディを見捨てるのか？！」  
「ギイ、じ———つくり話をしようか」  
「託生～～～」

---

「えりまき…はらまき…こしまき……こしまきと言えば、着物用の下着…うつ」  
「マミイ！たいへん！ダディの鼻血がとまらない！」  
「……今度はなにを妄想したのかなあ、ギイ」  
「いや、日本古来の着物を……」  
「ダディ、こしまきて言ってた」  
「…話したりないようだね」  
「た…託生…」

---

ちょうど夕食の時間だろから連絡は入れずペントハウスに帰り着き、食堂のドアを開けて飛び込んできた風景に眩暈を覚えた。

「た…くみ……」  
「あ、ギイ、お帰り」  
「父さん、お帰りなさい」  
「おかえ……なさい、ダディ」  
「あ……ああ、ただいま」  
一颶、大樹とただいまのキスをし、託生の口唇の横にキスを……甘い。  
たぶん皆わかってるんだろうなあと思いつつ周りを見ると、生温い目をしてメイド達が見ている。  
ついでに、大樹もじーっとオレを訴えかけるように見ていた。  
あの頃2歳だったけど、覚えているんだな。

「あれ、あるか？」  
「はい、準備できております」  
通じるところが、なんとも……。  
「なに、ギイ？」

「あとでいいから、妊娠判定薬使ってみてくれ」

「なんで？」

「たぶん、三人目」

ポカンと口を開け、フォークに突き刺したものを凝視して、オレに視線を戻し、

「赤くないよ？」

今度は、そこか？！

赤繋がりじゃなくても、瓜繋がりだろうが！じゃなくて、食べ物は違っても行動は一緒じゃないか！

ぽけっと見ている託生の横に座り、肩を両手で掴んだ。

「たぶん三人目できる」

「でもメロンだよ？」

だーかーらー！

「母さん、たぶん女の子」

「大樹？」

「だから、縁」

「あ、そうか！それで縁なんだ。大樹すごいねえ」

それで納得するのも、どうかとは思うけど……。

といふか。

「女？」

「うん、たぶんだけど。そんな気がする」

大樹の言葉に、託生にそっくりな女の子が脳裏に浮かんだ。

「ダディ、楽しい？」

「ああ、すっげ、嬉しい」

ニヤける顔そのままに、今回も。

「大樹」

「うん」

「いいいいいいよっしゃ———っ！！」

---

2012年05月24日(木)

出張を終え1週間ぶりに帰ってきて、託生と大樹にただいまのキスをし、ディナーの席についたものの、その食卓の風景にデジャ・ヴを起こした。

「あのな、託生……」

「うん？」

きょとんと見返す託生は可愛いが、それ以上にテーブルに置いてあるヤツの存在感が半端なく指さした。

「それ……」

「ギイも食べる？おいしいよ？」

託生の前には、真っ赤に熟したスイカ。

「マミィ、これしか食べられないんだって」

大樹の言葉にゴクリと喉が鳴る。

周りを見回すと、メイド達の視線がなにかを訴えかけている。

「なあ、託生」

「なに？」

「もしかして、できたんじゃないのか？」

「なにが？」

「二人目」

「え…………？」

フォークに突き刺したスイカを見つめ、小首を傾げる。

「でもトマトじゃないよ？」

託生の言葉に力が抜ける。

また気付いてないのか？ そうか？ そうなのか？

「あれ、来てないだろ？」

「うん？」

指を折って数えて、

「そういえば」

ぽんやりと呟いた託生に、行儀悪くテーブルに懐き、目の端に入ったメイドを指で呼んだ。

「妊娠判定薬、用意しておいてくれ」

「準備はできております」

……だろうな。

周りは気付いているのに、どうして託生は気付かないんだ？！

「ギイ？」  
「ダディ？」  
でも、とりあえずは。  
「いいいいいいよっしゃ―――っ！！」

---

2012年05月14日(月)  
「兄さん、母の日のプレゼントどうする？」  
「うーん」  
「大樹兄様と一颯兄様と三重奏したい！咲未もピアノ去年よりうまくなったり、お母様すごく喜んでくれるし」  
「……だな」  
「毎年同じだけど、それしかないか」  
「じゃ、咲未。自分が弾けそうな曲選んでくれるか？」  
「うん、わかった！」  
「問題は親父だよなあ」  
「今年は休みだって言ってたな」  
「お父様がいらっしゃるとダメなの？」  
「咲未は覚えてないだろうが、昔一度だけ母の日に親父がいたんだよ。で、兄さんとオレがバイオリンとビオラで二重奏してお袋が大喜びしたんだけど、親父がヤキモチ焼いてさ」  
「どうして？」  
「親父、楽器はてんでダメだから、お前らするいって」  
「で、殴られてたよな、お袋に」  
「ふうん？」  
「島岡さん、どつか親父を連れてってくれないかなあ」  
「あー、それはいいな。あとで連絡しておくよ」

---

2012年05月13日(日)  
「あー、パクッ」  
「お、よく食べてたよな」  
「お帰り、ギイ」  
「ただいま。美味いか？」  
むぐむぐむぐ。  
「でもね、なんでも食べてくれるのはいいんだけど量がね……。まだまだミルク以外のものに慣らすくらいで、栄養はミルクで取らないといけないんだ。内臓にも負担がかかるだろうし」  
「ミルク飲まないのか？」  
「ううん。ミルクもものすごく飲む」  
「オレの子だからなあ……」  
「ああ、そうか……。ギイの子だもんね」  
「あー、あー、あー」  
「はいはい」  
「パクッ」

---

2012年04月08日(日)

まだまだ豆粒みたいなものだろう。

まだまだ尻尾みたいなのがついているんだろう。

それでも、オレに取っては、全力をかけて守りたいものだった。

ぺったんこの腹の中で、ピコピコと動いているらしい小さな小さなものだけ。

まだまだ目に見えないものだけ。

託生が少し誇らしげに……そして、愛しげに包み込むオレ達の結晶に、込み上げる感情に追いつかない熱い想いが初めての愛情なのだと、オレは託生の柔らかな手のひらで知った。

まだ目に見えぬものが、これほどまでに愛しいなんて。

そして、この幸せをオレに贈ってくれた託生に、限りない感謝を。

…………ありがとう。

何物にも変えられない、幸せを。

ありがとう。

---

2012年03月31日(土)

廊下からバタバタと近づいてくる足音に顔を見合わせ、やれやれと首を振った。指摘せずとも、この足音が誰の物なのか兄貴にも妹にも予想がついている。

「託生！」

案の定飛び込んできた親父に、

「飛行機の関係で、少し遅くなると連絡がありましたよ」

兄貴が片手に持ったままの携帯を、ひらひらと親父に見せた。

あからさまにガックリと肩を落とした親父だが、すぐに立ち直ったばかりか今入ってきたばかりのドアを出て行こうとする。

まさか、迎えに行くつもりか？

「父さん。もうケネディ空港には着いてるんですから、入れ違いになりますよ」

半分呆れた兄貴の声に、

「そ……そうか？」

情けなさそうな顔をして、親父が振り返った。

マジに、行くつもりだったんかい？

というか、仕事は？放っぽりだして帰ってきたのなら、お袋に怒られるぞ？いつも笑顔で優しいお袋だが、本気で怒らすとこの世の誰よりも怖いからな。

「お母様だって急いでお帰りになるから、お父様も一緒に待ちましょ？」

とことこと歩み寄り親父の腕を無邪気に引っ張る妹の姿に、親父の目尻が下がる。

「そうだな。家族揃って出迎えたら託生も喜ぶよな」

いそいそと、しかし、すぐに立ち上がりるように浅く座る親父に溜息が出る。

どれだけ、お袋不足なんだ、親父？

---

「ただいま、大樹(だいき)」

「母さん、お帰り」

すこし屈んで、お袋が兄貴の頬にキスをする。

「ただいま、一颯(いぶき)」

「お帰り、母さん」

そして、オレにもキス。

「咲未(さくら)、ただいま」

「お母様、お帰りなさい」

膝について、ギュッと抱きしめ小さな妹の頬にキス。

そして。

「ただいま、ギイ」

「託生、お帰り」

親父がお袋を抱きしめ、口唇に軽くキス…………？

「何秒持つかな」

「10秒は持つんじゃね？」

「お父様とお母様、ラブラブね～」

抱き締めるの言葉より羽交い絞めの言葉が相応しい抱擁に、兄貴とオレは生暖かい眼差しに変わり、妹は小首を傾げて天然に(素直に)感嘆の言葉を口にした。

ブウウウウアキッ！

「て―――――っ！」

「なに、するんだよ？！」

蛸のような親父のキスに、お袋が切れた。

「何秒？」

「んー、12秒」

「お袋にしては、我慢したんだな」

ゲシゲシと足蹴にされている親父に、自業自得だなど納得した兄貴とオレの横で、

「これも、愛情表現なのね」

と、キラキラと目を輝かす妹。

誰だよ、これを愛情表現なんて教えたのは？！

お袋の前で土下座をしている親父を、あとで締めようと決意した。

---

2012年03月14日(水)

「ぎい……お帰り……」

滑り込んだベッドの振動で薄く目を開けた託生に軽くキスをし、そのままシーツに潜り込んで託生の腹に、

「ただいま」

とキスをした。

直後、ポコと口唇に託生の内部から、押されたような気がした。

もしかして、これが胎動なのか？

なので、その押された箇所に人差し指を当て、ツンと突いてみる。

ポコ。

ツンツン。

ポコポコ。

ツンツンツン。

ポコポコポコ。

「ダディが、わかるのか？！」

ポコ。

「お前、むちゃくちゃ賢いなあ」

親バカ全開！

託生の腹に向かって、ツンツンポコポコやっていたら、

「ぎ——い———」

頭上から託生の低い声が聞こえてきた。

「ものすごく眠いんだけど、なにやってるの？」

「ああ……親子のコミュニケーション」

ポコ。

「ぼくは眠いの。普段眠りたくてもなかなか眠れないんだから、少しでも眠させてくれてもいいじゃないか」

「あー、ごめん。返事してくれるから、つい」

ポコ。

「うん、いいけど。ぼく、寝るから」

「ああ、お休み」

目を閉じて深い寝息に変わった託生を確認して、腹をツンと突いてみる。

ポコ。

「起きてたか。ダディはお前と会える日を、すごく楽しみにしてるんだぞ」

ポコ。

「こっちに来たときには、一緒に遊ぼうな。キャッチボールしたり、冬になったらスキーしたり。いろんなことして、マミィに怒られることがあるだろうけど、お前と一緒にいろんな思い出を作りたいんだ」

ポコポコポコ。

「お。お前も、そのつもりだな。よし。今から計画立てるからな。楽しみにしてろよ」

と、突いたとたん。

「二人とも、いいかげんに寝なさい！」

託生の声に、ピシッと固まった。

「ギイ。寝た子を起こさない」

「はい」

ポコ。

「産まれた時には、好きなだけ遊べるんだから、今は眠らせて」

それだけ言って、託生が目を閉じた。

「マミーもそう言ってるし。今日は寝るか」

ポコ。

「おやすみ」

ポコ。

---

2012年02月20日(月)

「託生さんの具合はどうかね？」

「ええ、悪阻の方も治まつたらしく、今はトマトばかり食べています」

「……トマト？」

「冷たくて食べやすいとか」

「あー、母さんもそうだったかな」

「トマト？」

「いや、義一のときはチーズバーガー。繪利子のときはフライドチキン」

「……なんというか、肉食系だったんですね」

「そう。朝から晩までそればかりで、さすがに心配になって、他のも食べてみたら……」

「言ったら？」

「『貴方は私に食べさせたくないのね！』って泣くんだ」  
「……妊娠中は情緒不安定になるって言いますもんね」  
「だから、今は食べたいものだけ食べさせるのがいいぞ。それとなニンニク要注意だ」  
「ニンニク？」  
「ベッドに入ってくれなくなるからな」  
「わかりました。外食に注意します」

---

2012年02月19日(日)

「長期休暇のときは、大抵こんな状態だったかも」  
ペロッと舌を出し、託生が笑う。  
「それは困るかなあ。こいつの教育に悪い」  
「もうっ」  
からかうと安心したようにホッと息を吐いてオレを軽く睨み、ポスンと託生が胸を叩いた。その手を取って膝の上にゆっくり乗せる。  
「ギイ、重いよ」  
「大丈夫。託生と赤ん坊くらい」  
託生がオレの頭を抱きしめ、髪を優しく梳いてくれた。  
それだけで、オレを支配していた血に飢えた獣のような激情が静まっていく。  
「託生、離さないからな」  
「うん。ぼくのいる場所はここだから」  
オレの頬を包みそっと託生がキスをした。

---

2012年02月03日(金)

「ねえ、ギイ。なんか道路が白っぽいんだけど」  
「ああ。塩をまいてるんだよ」  
「塩？！お葬式でもあったの？」  
「違うよ。水が凍るのって0度だろ？でも塩水の氷点は0度より低いから、あらかじめ塩をまいておくと雪が溶けるんだよ」  
「へえ。でもさ、塩をまいたら、車とか錆びない？」  
「そんなこと気にするやつは、いないと思うぞ？」  
「そんなもののなの？」  
「そんなもんだ」

---

2012年01月30日(月)

「こないだは、ありがとな、章三」  
「いや。喜んでもらえたのなら、よかったよ。葉山の具合はどうだ？」  
「ああ、悪阻もおさまったようで、元気にしてるよ」  
「そうか」  
「なあ、聞きたいことがあるんだが」  
「なんだ？」  
「ほら。あの騒動のときに『託生は承知している』と、お前言ったろ？裏づけがあるのか？」  
「あー、あれか。夏に日本から帰った後、変わったことがなかったか、葉山に？」

「託生に？………そりゃ、急にマナーやダンスを習ったりしていたな」

「自覚したんだと」

「なんの？」

「Fグループ次期総帥の妻だってことを」

「別にオレは、託生にそんなこと望んでないぞ」

「葉山だって、そんなことはわかっているさ。だからって甘えてばかりじゃいけないってな。『ギイに守られてばかりの弱い自分じゃダメだから、ぼくもギイを守れるように努力しないと』って」

「いつ？」

「居酒屋で呑んだとき」

「あいつ、そんなこと一言も………」

「そりゃ、そうさ。お前に言ったら『無理しなくていいんだぞ』と止めるだろ。昔の諸事情もあるようだし」

「章三………」

「まあ、とにかく、お前に恥をかかさない立ち居振る舞いくらいは身に着けておいたほうがいいだろうって話になつたんだよ」

「………オレのライバルも増えそうだけどな」

「それこそ、お前が側で守っていれば問題ない」

---

2012年01月28日(土)

「あ、ギイ！」

到着ゲートを抜けてきたギイに手を振って、それに気付いたギイが手を振りかけ………固まつた。  
そして。

「義一さん？」

隣にいた島岡さんが立ち止まつたギイを振り返つたとたん、ギイが口元を押されてしゃがみこんだ。

「ギイ？！」

慌ててギイの側に走つて覗き込むと、

「お前………」

恨みがましそうな目で、ぼくを見た。

「気分悪い？」

「いや、気分はいい。半分だけ」

「半分？」

「その格好はオレの前だけでいいんだよ！他人に見せるなんて勿体無い！」

鼻を押さえながら、言い募るギイに己を格好を確かめた。

だって、たまにはこういう格好をすると浮気防止になるって女性誌に書いてあつたんだもん。  
ちょっと恥ずかしかつたけど、どうせ、ぼくなんかに他人は目を向けないだろうしと、絵利子ちゃんに相談して選んでもらつたミニスカート。

「やっぱり、似合わない？」

「似合ってる！似合いすぎて、このままホテルに籠りたいくらい」

え、そこまでの威力？

「…………帰ろう」

「はい？」

「明日の朝まで、部屋から出られないと覚悟しろ」

マジ？！

女性誌の内容って、間違ってたの？

---

2012年01月24日(火)

「パパとママじゃないの？」

「ダディとマミーだろ？」

「へえ」

「.....なに笑ってんだよ」

「だって、ギイも小さな頃はそう言ってたのかなって」

「.....いっそのこと親父とお袋でもいいな」

「んー、じゃ、短く、おとんとおかんとか、おとうとおっかあとか」

「.....却下」

---

2012年01月13日(金)

「では聞きますが、朝食は誰が作るのですか？」

「それは、手の空いてるどちらかが。二人で作っても構いませんし」

「そんな優雅な時間があると思いますか？1日2日ならともかく、これからずっとなのですよ？貴方も託生さんも、料理が得意というわけではないでしょ？」

「母さんよりはマシかと.....」

「なにか言いましたか、義一」

「いいえ、なにも」

「では洗濯は？」

「手の空いているどちらかが」

「掃除も、そのつもりですか？」

「はい」

「ようするに、朝早く夜遅い義一と比べれば、手の空いている託生さんがするということですね」

「あ、いえ！それなら当番制に統一.....」

「朝早く夜遅い貴方が家に帰り着いてから動く姿を見て、あの優しい託生さんはどう思うでしょうね。当番制なんて関係なく、たぶん託生さんが全てをしそうな気がします」

「それは.....」

「貴方は、託生さんがこちらにきた目的を忘れているよね」

「は？」

「第一に心と体の治療。第二に語学力。第三にバイオリン。貴方との結婚なんて、ついでのようものです」

「ついでって.....」

「貴方の案では、託生さんに右も左も言葉もわからない街で、一人暮らしさせるようなものじゃないですか。二人で生活したいというのは、単なる貴方の我侭。治療だけでもかなりの負担がかかるのに、これ以上託生さんの負担を増やしてどうするのですか？！」

「母さん.....」

「結婚どころか2年経たずに日本に帰ってしまうかもしれませんね」

「それは困ります！」

「ではどうすればいいか、計算が速い貴方には答えを弾きだせるでしょ」

「.....わかりました。本宅に戻させていただきます」

2012年01月10日(火)

「託生の決めたことは、オレだって全力でサポートしてやりたい。でもな、これだけは、もっと考えたほうがいい」

「どうして？ ギイはアメリカ国籍。この子だって、一応日本国籍も持っているけど、アメリカ国籍。それに、ぼくだって、これから先、一生アメリカで暮らすつもりなんだ」

「アメリカで暮らすだけなら、今そのままグリーンカードで大丈夫だ。わざわざ市民権を取る必要はない」

「でも、ぼくは取りたい」

「託生！」

「なにかあったとき、強制送還されるような不安定な状態でいたくないんだ。ぼくは、家族と一緒にいたいんだ」

---

2011年12月30日(金)

手を繋ぐ。

恥ずかしがって街中で繋げなかつたぼくに、君は呆れながら拗ねた振りをしたけれど、今はただの一風景に見てもらえるから。

だから、ぼくから手を繋ぐ。

嬉しそうに目を細める君に、ほんの少し視線をそらせてしまうけど、繋いだ手はそのまま。いつだって、ギイと繋がっていたいから。

---

2011年12月30日(金)

「崎さん……」

先生の咎めるような呆れたような声に、

「すみません」

小さくなつて頭を下げたギイにならつて、ぼくも隣で頭を下げた。

「許可を出すまではと……」

はい。ギイに聞いたのに、そのときはすっかりぽっかり頭から抜けてしまつて、勢いのままギイに迫つて……あ、顔が熱い。

日本で祠堂の友人達に会つたり、兄さんのお墓参りに行つたり、夜は夜で、その……ギイと……。

そういう数日を送つていたから、

「一日早く帰ろう」

とギイに言われてもすぐに意味がわからず、ギイラしくなくボソボソと説明されて、血の気が引いた。

先生の許可、貰つてなかつた……。

---

2011年12月16日(金)

「ぼくが大学生だつていうのは、わかってる？」

「もちろん」

「大学生ってのは、大学に行くものだよね」

「一般的には」

「それじゃ、どうして、ぼくが大学に行っちゃいけないのさ！」  
「行くなとは言ってない！車で行けと言っているだけだ」  
「徒歩10分の距離なんだよ？！」  
「……去年、初雪が降ったのが10月29日だったな」  
「ああ、確かにいつもより早かったんだよね」  
「で、みぞれまじりで、少し積もったんだよな」  
「そうだっけ？」  
「そうだったんだ。ってか、お前覚えているだろ？」  
「うーん？」  
「……まあ、いい。それで、しっかり、ずっぽり、滑って転んだんだよな？」  
「…………たまたまだよ」  
「たまたま…ね。たまたまの割には、3日に1回滑っているのは何故だ？」  
「でも、転んでないよ？」  
「それは、SPが支えているから転んでいないだけだろ？！こんな状態で歩いて大学に行くなんて、絶対ダメだ！お前、妊婦なんだぞ？もう少し考えてくれ。雪が積もらなくなったら、歩いていっていいから」  
「でも、その頃になつたら、それなりにお腹も出てくるし、それはそれでギイが反対しそうだもん」  
「いや、それはない」  
「なんで？」  
「その頃には、運動をした方がいいらしい。散歩なんてのは打ってつけなんだと。だから、歩いて通学するのは推奨する」  
「…………ギイ、なんで、そんなに詳しいの？」  
「それは、あれだ。本で読んだから」  
「そんな本、家にあったかな？」  
「いやオフィスに」  
「……島岡さんが怒ってる理由が今わかったよ」

---

2011年12月15日(木)  
「日本行けなくなっちゃつたね」  
「医者の許可が出たら行けないこともないだろうけど、13時間のフライトはキツイと思うぞ」  
「そうだよね。赤池君のお鍋食べたかったな……」  
「…………」  
「で、なんで、僕がアメリカまで拉致られないといけないんだ？！」  
「託生が章三の鍋を食いたいってさ」  
「だから二人で遊びに来いと！」  
「流産したらどうするんだ？」  
「…………できたのか？！」  
「葉山、どんどん食えよ。締めはネギたっぷりの雑炊だからな」  
「うん、ありがとう、すっごい美味しい！」  
「さすが、章三。ロブスターで鍋ができるんだな」  
「栄養取らないと元気な赤ん坊産めないと。鍋が体の芯から暖めるからな。普段からも体冷やすなよ。妊婦に冷えは大敵だぞ」  
「うん、でも、まだまだ先なんだけど……」  
「なんか、章三、小うるさい姑みたいだな」

---

「つわり……？」  
「そう、つわり」  
「つわりで入院………」  
「あるみたいだよ？」  
「じゃ、託生は………」  
「吐く回数が多かったから、脱水になっちゃったみたいだね。胃が弱ってるんだと思ってた」  
「オレはてっきり心労が重なったからと………」  
「まさか。どう思われてもかまわないって言っただろ？」  
「言った。言ったけどな」  
「言いたい人には、勝手に言わせておけばいいじゃないか」  
「…………託生的発想を忘れていたよ」  
「ギイだってそうじゃないか。利久みたいなこと言うな」

入院の原因はこれでした(笑)

---

「あのな、託生」  
「うん？」  
「3ヶ月目に入ったってことはだな。月のものが2回来ていないってことだよな」  
「そうなの？」  
「はい？」  
「2回来てないの？」  
「いや、オレが聞いてるんだけど………って、託生」  
「なに？」  
「お前、まさか、妊娠したら月のものがなくなるってこと知らないのか？」  
「なに、それ」  
「そもそも月のものってのは、排卵があって、それが受精しなかった場合、翌月の排卵に差し障るから排出してるんだ。だから、月のものが予定通りに来ない、イコール、妊娠を疑わないと」  
「そうなんだ」  
「もしかして知らなかったとか……？」  
「うん、知らなかった」  
「じゃあ、月のものってのは、なんだと思ってたんだよ？」  
「うん？ 女性なら誰にでもあること」  
「…………託生、保健体育の授業やりなおし」

---

「やっぱりダメかな？」  
そんな上目遣いでお願いされたら、オレの自制心がグラつくじゃないか。  
「次は無理かもしれないし」  
確かに。生後数ヶ月の子供を連れて……は、オレとしてもあまり賛同できない。だからと言つ

てシッターに預けてというのも、託生が嫌がりそうだ。

それに、知らなかつたとは言え誘つたのはオレだし。

「暖かくして滑りにくい靴を履いて短時間なら」

「ありがとう、ギイ！」

ロックフェラーセンターのクリスマスツリー。

もう、クリスマスは終わつてしまつたけれど、毎年楽しみにしていたイベントを諦めさすのも可哀想だ。

「じゃ、着替えてくるね」

「あ、託生」

「なに？」

「腹巻と毛糸のパンツも……てっ！」

こらつ、室内履きを投げるな！

ってか、

「走るなーーっ！！」

---

2011年12月14日(水)

「裁判が長引いても胎教に悪そうですし」

「体協？」

「それは体育協会です」

「滞京？」

「東京でなにか用事でもあるんですか？」

「退京？」

「ここは都かっての？」

「「「…………胎教———っ？！」」」

「それしかないのでしょう？」

---

2011年11月29日(火)

「ギイは、どう思つてる？」

「オレ？……託生が手術を受けたいと思うのなら受けたらいいと思うけど、オレは受けなくていいと思ってる」

「ギイは、体にメスを入れたくないんだよね？」

「当たり前だろ。そりゃ、手術しなければいけない病気なら仕方がないけど、わざわざ託生の体を傷つけてまで受ける手術じゃないと思ってる。それに、なんらかの後遺症が残る可能性もあるんだ。生活に支障がないのなら、自然のままがいい」

「このままでいいって？」

「ああ。でも、託生が受けたいのなら反対はしない。託生の気持ちしだいだよ」

「でも、普通の人と違うんだよね……」

「個性だろ？だいたい、他の人と違うからといって、同じような形を作るってのも乱暴な話だと思うけど」

「だよね。やっぱり手術って怖いし。あとが痛そうだし」

「このままでいいって」

「わかった。手術は止めるよ」

「託生は形成手術、受けたいか？」  
「それ以前に、よくわからないんだけど……見たことないし……。自分が普通の女性とは違うらしいのはわかるけど」  
「医学書に絵が載ってるから、帰ったら見てみるか？」  
「うん……ギイは見たことあるんだよね？」  
「え……？」  
「何人も」  
「あ……のな、託生……」  
「ギイ、見慣れてるんだよね……」  
「お……おい、託生……」  
「その人達と、ぼく違うんだよね……」  
「いや、だから……！」  
「なに？」  
「……ごめんなさい」

---

2011年11月27日(日)

「ギ……ギイ、手、離して」  
「なんでだよ。別にいいじゃん。夫婦なんだし」  
「でも……」  
ギュッと握った手をそのままに、ギイはぼくの耳元に口唇を寄せて、  
「オレ、託生と手を繋いで、麓の町をデートするの夢だったんだよね」

優しく笑った。

祠堂にいた当時は男同士だからと、ぼくが恥ずかしがって手を繋ぐことなんてなかった。

今なら、手を繋いでいても好奇な目にさらされることもない。

「ささやかな夢だね」

「だろ？だから、おとなしく繋がれておきなさい」

---

2011年11月12日(土)

「猫いなりは、言いたいことはあるが、まあ、いい。ひよこ卵も、鶏卵だがOKだろう。でもな、そのタコはなんだ？！」

「託生が愛情を込めて作ってくれたタコさんウインナーだ」

「どう見てもウインナーじゃないだろ？！フランクフルトだろ？！」

「章三。そんな細かい事を言ってるとハゲるぞ」

---

2011年11月11日(金)

「美味しいそうなのを食べているね、義一」

「なんですか、父さん？ノックもしないで」

ドアの隙間から顔を覗かせた親父に眉を寄せ、片手で弁当箱囲った。

珍しくここに来た魂胆はわかっている。オレの愛妻弁当を狙っているんだ。

「託生さんが作ってくれたそうだね」

言いながら興味津々に覗き込む親父を、

「あげませんよ」

ピシリとぶった切る。

「そんなにたくさんあるのだから、一つくらい…」

「あーげーまーセーん」

託生がオレのために作ってくれた猫いなり。誰が食わせるものか。

「そうか……。じゃあ、今度託生さんにお願いしてみるよ。義一が独り占めして貰えなかつたってね」

……このやろ。

託生がそんなこと聞いたら、「ギイのケチ！」ってオレが怒られるだろうが。

「……ひとつだけですよ」

言うなり、親父はひよいと摘んで、満面の笑みで猫いなりをほうばつた。

「さすが、託生さん。美味いなあ」

と言いつつ、視線がひよこ卵に狙いを定めている。

「そのひよこも……」

「あげません」

こんなにこんなに可愛いひよこ卵を食べさせる義務はない。猫いなりで我慢しやがれ。

「父さん。そんなに愛妻弁当が食べたいのなら、母さんに作ってもらつたらいいでしょう？」

「……君、あの人に言えるかね？」

溜息交じりの親父の言葉に、グッと詰まる。

親父が言えば、お袋も作ろうとするだろう。一応、仲のいい夫婦だからな。

しかし、両手で持った包丁を斧のごとく振り下ろしリンゴを切った姿を一度見れば、あの人に弁当を作ってくれなんて絶対言えない。

あまりにも危険でシェフさえも近寄れず、リンゴ一つ切るだけなのに、何故かあっちこっちに物が飛び厨房は壊滅状態に追い込まれた。

「ということで」

「あーっ！！」

オレのひよこ卵！！

「義一は幸せ者だな。愛情たっぷりの愛妻弁当を作ってもらえて」

ほくほくと息子の愛妻弁当を摘むFグループ総帥に、がっくり力が抜ける。

託生は…託生は…託生はオレのもんだーーっ！！

---

2011年11月08日(火)

「もしも、ぼくが生まれたときから女の子として育ってたら、ギイどうしてた？追いかけてきてくれてた？」

「当たり前だろ？あー、でも、そうなると、託生は女子寮に入っているかもだから、そうだなあ。とりあえず、その学校の周辺の学校に進学して、自分を売り込むしかなかったかな」

真剣な顔して宙を睨む。

「売り込むって？」

「託生に存在を知ってもらえるように、その辺りをウロウロしてさ。……って、ただのストーカーだよな」

「じゃあ、ギイ的には、よかつたってこと？」

「まあな。悪い虫が寄ってきたって追い払えたし」

「だから、それは惚れた欲目だって」

---

2011年11月07日(月)

「あのさ……」

「うん？」

「………ごめん、いいや」

「おい、こら。途中で話を止めるな」

「うん、でも、いい」

「お前な。そんなところで切られたら、気になるだろうが？」

「でも、聞いていい気はしないだろうし」

「それはないぞ。託生が考えていること、出来ることなら全て知りたいんだから」

「でも……」

「とりあえず、言ってみろって」

「う……ん……。入院中に、神崎さんから言われたんだけど……」

「うん」

「ぼくが男として育ったことに関して『もしかしたら崎君、安心していたかも』って」

「………それは、出会った頃、託生に恋人がいたかもしれないって意味か？」

「うん………だけど、ぼく………」

「安心ねえ。したかもしれないけど、あの時はそれ以上に託生が心配だったから、その比重はオレが思い出せないくらい低い。それにさ、お前、忘れてるよ」

「なに？」

「オレは、執念深いんだ。もしも託生が女性として育って、想定外のことが起こっていたとしても、オレはお前を捕まえてた」

「ギイ？」

「もしもその時、託生が命より大切にしているモノがあったとしたら、そのモノもひっくるめてオレは奪ってたよ」

「ギイ……」

「オレが託生の側にいない人生なんて有り得ないんだから。オレこそ託生のいない人生なんて御免だ。愛してるの意味、忘れるなよ」

「……うん。ありがとう、ギイ」

---

2011年11月03日(木)

和食が食べたいとおっしゃった託生様の言葉に、散らし寿司を作ったその夜。

おずおずと託生様が厨房のドアから顔を出した。

「どうしましたか？」

「あの、これって、ぼくでも作れるかな？」

プリントアウトされた紙を私に差し出し、小首を傾げた。

渡されたレシピを見て……これは、また、可愛らしい。

「これでしたら、大丈夫ですよ。これとこれは小さな型抜きで抜いて、こちらは混ぜるだけですし、……昔、工作でハサミ使ってましたよね？」

「うん。これは、自分でも切れるとは思うんだけど」

「それなら、あとはスプーンで詰めるだけですから、大丈夫ですよ」

「明日の朝、手伝ってもらえるかな？」

申し訳なさそうに託生様が、私なんかにお伺いを立てる。

詳細はよくわからないが、なんとなく義一様の様子がピリピリしているらしい事だけは、わかつっていた。一番、側にいる託生様こそが、その空気に触れているだろう。  
少しでも和んでもらえばとの気持ちから、このレシピを持ってこられたというのは、よくよくわかる。  
「もちろんですとも。材料の準備はしておきます」  
そう言うと、託生様はパッと笑顔を浮かべられ、「あの、ギイには内緒にね」と、人差し指を口の前に立て出て行かれた。  
プリントアウトされたレシピの写真と義一様のギャップがあまりにも大きいのだけれど、託生様から見ればそれほどでもないのかもしれない。  
その辺りは、ご夫婦の仲の良さのせいかもしれないが。  
さてと。  
準備するものは.....  
これ以外にも、フランクフルトとゆで卵を用意しておくか。

島岡さん、行きます。

何度も話し合いを重ねても進まない案件に、義一さんの苛立ちがピークになっているのは手に取るようにわかつっていた。

「利益を求めるのはいいが、限度を越えてはどうにもならん！」  
どれだけ義一さんが妥協案を出しても、お互いのプライドが引き際を見間違えている。

「島岡、次のスケジュールは？」

「本社に戻って、託生さんの愛妻弁当を食べていただくことです」

言ったとたん背もたれに投げ出していた体をムクリと起こし、

「愛妻弁当？」

と瞳を輝かす。

あー、どうして、こう託生さんに関することは素直なんでしょう。

「はい、愛妻弁当です。朝、お預かりしてきました」

私の言葉に、さっきまでの苛立ちはどこかに行ったらしく、その場でダンスを踊りそうな様子の義一さんを引っ張ってオフィスへと戻ってきた。

「島岡」

はいはい。わかつてますよ。

なんだか、お預けを待っている犬のようですね、義一さん。

義一さんの両手の上に紙袋を置くと、いそいそとデスクの上に中身を取り出した。

水筒と大き目の箱。

蓋を開けると.....

「可愛いですね」

「託生~~~~」

猫型の稻荷ずしにタコさんフランクフルト(けっしてウインナーではない)、プラス、ひよこ型のゆで卵(もちろん、うずらの卵ではない)

猫型の稻荷ずしに頬ずりしそうな状態の義一さんに、先ほどの険しい様子は微塵とも感じない。

箸を持って食べようとして、ふと義一さんが眉間にしわを寄せた。

「どうしました？」

「いや、せっかく託生が作ってくれた猫を、どこから食べたらいいかなと」  
耳から？頬から？口から？  
角度を変え、試行錯誤をしつつ噛む位置を考えている義一さんを放って部屋を出た。  
託生さん。貴方はFグループにはなくてはならない存在です。

クッ●パッドの猫型のおいなりを見て、ふと思いついたものでした。落ち。

---

2011年10月25日(火)

昼食会を終え車に乗り込んでマナーについていた携帯を確認すると、託生からメールが1通入っていた。

ニヤけそうになる顔をポーカーフェイスで隠し、メールを開いてみると…。

「は？」

「義一さん、どうかしましたか？」

これは、なんの暗号だ？

しばらく画面を見て、島岡に携帯を渡した。

本文

『L4L(小さなハートマーク付き)』

同じように画面をじっと見つめていた島岡が、

「いえ、私にはなんのことやら…」

「だよなあ」

オレがわからないのに島岡がわかつても腹立たしく思うだろうけど、でも、これはどういう意味なのだろう。

「直接、託生さんに聞いてみた方がいいのではないか？」

「そうだな……」

と言いつつ、たぶん教えてくれないだろうこともわかっていた。

「L4L、L4L……」

ブツブツと呟いているうちに、車は本社に滑り込んでいた。

「うー、わからん」

「まだ、考えてたんですか？」

呆れたような苦笑を浮かべ島岡がコーヒーを持ってきた。

「だってなあ。託生のメールだぞ。なんとなく悔しいじゃないか」

こういう事は、オレの得意分野だ。それなのに、たった3文字の意味がわからないなんて。

その時、秘書室の女性職員が書類を持って現れた。

わからないだろうけど、一応、聞いてみるか。

「『L4L』って、わかるか？」

女性はキヨトンとして、そして、

「もしかして奥様からですか？」

口元を手で覆い、クスリと笑った。

「意味わかるのか？！」

「はい。L4Lの意味は……」

託生のやつ、やってくれるじゃん。

メール画面を開き『L4L』にハートを3つくらい付けて、送信した。

『Love for Life　ずっと大好き。一生愛してる』

---

2011年10月11日(火)

「ギイ、見て見て！タコさんワインナー！」

「おお、すごいな、託生！食べていいのか？！」

「もちろん！ギイのために作ったんだもん」

「では、遠慮なく！」

「…………あの、あれ、ワインナーですか？」

「いいえ、島岡さん。フランクフルトです。託生様に、あの小さなワインナーを切る事はできませんから」

「ですよね。タコさんワインナーにしては大きいと思いました……」

---

2011年09月13日(火)

義一様がサンドウィッチを喜んでいたと、託生様から聞いていた。

しかし、なんとかバーベキューの串に刺して体裁を整えたところで、あのマスタードたっぷりの厚切りタワーサンドwichが、義一様のお口に合うわけがない。

なので、託生様には申し訳ないが、義一様が気を使ってメールを送ってきたのだと思っていた。

思っていたのだが……。

「すっげえ、美味かった！もう、瞬殺で完食！」

「ほんとに？」

「また作ってくれよ、愛妻弁当！」

「あいさ……ギイ！」

「島岡から聞いて、オレ、仕事がんばったんだぜ。託生の愛妻弁当だーって」

…………マジっすか？

シェフ暦18年。フランスの三ツ星レストランで修行を積み、師匠と共に崎家の本宅に雇われ、義一様と託生様の結婚と同時にペントハウスのシェフ長に選ばれ……。

あのタワーサンドwichに負けた私の立場ってのは……。

「あの……」

「は…はいっ」

知らず視線を落とした私の足元に影が映り、顔を上げれば秘書の島岡さんが微妙な表情をして立っていた。

「あまり、お気になさらず」

「はあ。あの、本当にあれ、全部、義一様が食べられたのですか？」

「ええ」

「瞬殺で完食ですか？」

「その辺りは、部屋を追い出されたのでわかりませんが、大喜びされてましたよ」

「そうですか……」

ああ、やはり、私の立場ってのは……。

「『託生さんお手製』と名がつくものなら、石でも食べるかもしれませんね」

「は？」

「たとえハバネロがたっぷり入っていたとしても、砂糖が一袋入っていたとしても、託生さんお手製なら、義一さんにとっては最高の物になるようです」

そして、島岡さんは生温い目をして、背後でラブラブな空気を増殖させているお二人に目を向けた。

託生様をべた褒めてしまいには逃げられ、慌てて追いかけていく義一様を見ていると、なんだか悩むのが馬鹿馬鹿しくなってきた。

蜜月期間真っ只中の新婚カップルだもんな。

とりあえずは、気を取り直して軽食の用意でもしてきますか。

タワーサンドウィッチ騒動、終わり！（笑）

---

2011年09月12日(月)

「義一さん、会議の時間に間に合わないので急いでください！」

「.....はいはい。でもなあ、島岡。これだけ分割みだと、さすがのオレもふてくされるぞ」

「ふてくされても、仕事は待ってくれませんけどね。とりあえず、この会議が終わったらご褒美がありますから」

「.....なんだよ」

「今朝、託生さんからサンドウィッチを預かっているんです。昨日のパンが残っていたからとか」

「託生が？！」

「シェフに手伝ってもらつたらしいですが、義一さん。”愛妻弁当”ですよ」

「愛妻弁当.....愛妻.....弁当.....愛妻.....島岡！さっさと終わらせて、愛妻弁当食うぞ！」

「.....託生さん、毎日、作ってもらえないだろうか（溜息）」

---

「おや、託生様、おはようございます」

「おはよう！あのね、昨日のパン、残ってる？」

昨日のパン...なにやら義一様への文句をブチまかしながら叩きつけて作った、あのパンのことだろうか。

「昨日のパンでしたら、まだございますよ。朝食にもお出しましょうか？」

「ううん。ギイが美味しいって言ってくれたから、サンドwichにして持つていってもらおうかと思って」

「それはそれは。義一様、お喜びになるでしょうね」

あの義一様のことだ。託生様がお作りになったものなら、手放して喜びそうだ。

「今からお作りになりますか？材料は、すぐにお出しできますが？」

「うん！」

ということで、エプロンをつけた託生様が包丁を持っておられるのだが.....。

「切る、塗る、挟むくらいだったら、ぼくでもできるから！」

材料を並べお手伝いしようとするとにっこりと拒否され、鼻歌交じりで次々とスライスされて.....託生様、パンはもう少し薄く.....それ、そのままトーストできそうですけど。

あ！トマトも、やはり、もう少し薄く.....ああああ！きゅうり、それ、たぶん、ゴリゴリになるかと。

「託生様！メインはローストビーフはどうでしょう？」

「ローストビーフ、ギイ好きだもんね。うん、それにする」

はあ、これだけは元から薄切りにしているから、なんとかなる.....託生様あああ。

「なに？」

「あの、マスタードとバターは、あらかじめ混せておいたほうが……」

「そうなの？ 口に入ったら一緒だよ？」

一緒にかもしれません、そんなにまっ黄色になるまでマスタードはお付けにならない方が……。

ああ！ バター、パンに水分が染み込まなくていいのですが、厚さ一ミリも塗らなくても……。

「レタスだろ？ トマトにきゅうりに卵にチーズに……」

え、まさか、全部一つに挟まれるとか？

「それから、ローストビーフ、と……で一きた！」

厚さ、20センチ。どこぞのタワーバーガーならぬ、タワーサンドwich。土台のパンが重みで潰され見えません。

「どうやって、切ったらしいかな？」

「あとは、私が切って籠に詰めておきますので！」

託生様には、無理だ！ 絶対、倒れる！

「そう？ ジャ、あとはお願ひします」

素直にその場を私に譲り、託生様は厨房から出ていかれた。

これを食べる義一様に同情するべきか否か。

せめて喉に詰められぬよう飲み物の準備もしておくかと、コーヒーメーカーをセットした。

---

「おおっ！」

スキップしそうな勢いで部屋に戻られた義一さんに、催促されるままお預かりしていた紙袋を渡すと、いそいそと水筒と大きな籠を取り出しデスクに乗せた。そして、うきうきとした表情で蓋を開ける。

託生さんがお作りになったというサンドwichを興味津々に覗き込むと……。

「…………斬新ですね」

「いや、託生は大胆なんだよ。お、食べやすいように串まで刺してくれてるんだ」

義一さんは目を輝かせているが、たぶん、違う。

全てが分厚すぎてバラけるのを、シェフが試行錯誤してバーベキューの串に刺したように見えます。

「さすが、託生。外食続いているから、野菜たっぷりにしてくれたんだな」

いや、それもたぶん違うと思います。

それにしても、ここまで匂ってくるマスタードの香りに、どれだけ塗りたくられているのか、興味が沸きますが。

「辛くないですか？」

「うん？ いや、ここまで野菜が多いと、このくらいあった方が美味しいぞ？」

そうですか。そういうものですか。

たぶん、マスタードの辛さも、そのめいいっぱい大口開けても収まらない厚みも、『託生さんお手製』の前には気にならないんですね。

「島岡も食べてこいよ。休憩時間はここにいるから」

「そうさせていただきます」

義一さんは水筒からまだ暖かいブラックコーヒーをカップに注ぎ、一口飲んで満足げに私を促した。

はいはい。ゆっくり託生さんお手製サンドwichを召し上がりたいのですね。

それでは、邪魔者は普通のランチを食べに行ってまいります。

にしても、義一さん。尊敬します。

2011年08月03日(水)

「お帰りなさいませ、義一様」

「ああ、託生は？」

上着を渡しネクタイを緩めながら問いかけたオレに、

「キッチンにおられます」

複雑な顔をして執事が答えた。

「キッチン？珍しいな。何か、作ってるのか？」

「はあ、パンです」

「パン？なんで、急に」

「それは存じませんが……」

視線をそらして執事が言葉を濁す。

首を傾げつつ、

「ちょっと覗いてくる」

「あ、義一様！おやめになった方が……」

方向を転換しキッチンに向かおうとしたオレに、慌てて執事共々メイド数人が焦った顔をして止めた。

「……なにか、あるのか？」

問いかけてもお互い顔を見合わせながら、ふるふると首を振る様子に疑問を浮かべつつ、

「オレが行ってはいけないわけじゃないんだな？」

「はい……」

確認を取り、キッチンに足を向けた。

うん？なにか、音がする？

キッチンに近づくにつれ、ドンドンと何かを叩きつけているような、乱暴な音が大きくなってきた。

そして。

「ギイのばか—————っ！！」

扉を開ける寸前、中から聞こえてきた託生の絶叫。

「ペテン師！我侭男！自己中！それからそれから……エロ魔人！！」

……ゴン。

ドアノブを手にしたまま、思わず扉に頭を打ち付けた。執事の不憫そうにオレを見る視線が、背中に突き刺さる。

「……託生は、何を作っていたんだっけ？」

「パンです」

そうだった。パンだった。

中から、ドッタンバッタン、オレへの文句と共に大きな音がするのは、単純に種を捏ねてるだけか。

確かに昨晩喧嘩して、託生の文句を聞きもせずバスルームに行ったものだから、託生の怒りが未消化なのはわかるけど。だからって、託生…………。

目頭が熱くなっているのは、気のせいではないみたいだ。

そこにどのくらい、いたのだろうか。

投げつけるような音が止み、二言三言ボソボソと声が聞こえたあと、唐突に扉が開き、中から託生が出てきた。

「あれ、ギイ？」

さっぱりとした顔をして、頬に白く粉をつけ、キヨトンとオレを見上げる。さっきまでの絶叫がまるで

夢だったかのような、さわやかさ。

「あ…ああ、ただいま」

「お帰り、今日は早かったんだね」

にっこり。

託生の可愛い笑顔に、「あれは夢だったんだ。夢に違いない」と、オレの願望が見て見ぬふりをしたがった。

「なにしてたんだ？」

託生の汚れた頬を指ではらい、一応聞いてみる。

「パン作ってたんだよ。発酵はシェフがやってくれるって言うから、任せときちゃった」

「ふうん、そうか」

あっさりと答える託生に、がっくり肩を落としたくなつた。やっぱり、パンを作っていたのは現実だったのか。

「あとで、ギイ、食べる？……食べるよね？」

ゾクリ。

ほんの少しトーンの下がつた託生の声に、恐る恐る託生を見ると、楽しそうな口調とは裏腹に目が笑っていない。

これで食べないと言えば、自分がどうなるのか、簡単に予想できてしまうのが哀しい。

「……はい。食べさせていただきます」

辛子が入つていようが、わさびが入つていようが、この際なんでも食べましょう。これで、託生の機嫌が直るなら。

夕食と共に出てきた食パンは、驚くほど美味かつた。

「美味しい？」

「すっげえ、美味しい」

「どんどん食べてね」

それだけで託生の機嫌は直つたが、心中複雑な気分になつたのは言うまでもない。

喧嘩は翌日まで長引かせない。

心に誓つた教訓だった。

---

2011年05月19日(木)

「ねえ、ギイ。話があるんだけど…」

「なんだよ、あらたまって」

「あのさ。アルバイトしていい？」

「……ごめん、託生。もう一度言ってくれ」

「だからね、バイトしたいんだけど」

「…もしかして、金が足りないとか？」

「なわけないだろ？使い切れないくらい毎月口座に入ってくれてるのに。貯まる一方だよ」

「じゃ、バイトしたい理由は？」

「暇だから」

「……あのな、託生。お前、自分の立場わかってるか？」

「わかってる…つもり」

「つもりじゃなくてだな。れっきとしたMrs.Sakiなんだ。託生の言う事わかるけど、バイトは許可できない」

「ふう。やっぱり、そうか」

「託生？」

「お義父さんとお義母さんにも迷惑かかるよね」  
「そりゃ、まあ、そうだが……」  
「ごめんね。言ってみただけ……」  
「……あのな、託生」  
「大丈夫。ここで大人しくしてし」  
「……でも暇なんだろ？」  
「そうだけど、こればかりは仕方ないよね」  
「……大学関係なら、いいぞ」  
「え？！」  
「勉強の一貫なら口実になるだろ」  
「ほんとに？ギイ、サークルとかぼくが入るの嫌がってたよね？」  
「そりゃ、男も多いし。託生に言い寄られそうだし」  
「もう、それ、惚れた欲目だよ。じゃ、明日から学校に顔出していい？」  
「ああ、疲れない程度にほどほどにな」  
「うん！」  
そして……。  
「託生は？」  
「今日はカルテットの練習だそうです」  
「……昨日は、オーケストラの練習だったよな」  
「はい」  
「で、一昨日は、チャリティコンサートの受付で、その前は教授の娘さんの結婚式での演奏」  
「明日は、子供向けのクラシックコンサートに出演するそうです」  
「…………一度言った方がいいと思うか？」  
「いえ、お止めになられたほうがいいかと」  
「だよな。これでへそ曲げられても困るし」  
「義一様のお言いつけは守らりますが？」  
「男と二人きりなるな、か？だからと言って、毎日数人の男が送迎していたら一緒じゃないか！」

---

2011年05月06日(金)

「もしかして、俺達ヤバいんじゃないかな？」  
「ギイ、葉山の事になると、しつこいからなあ」  
「独占欲バリバリだし」  
「視野狭くなるし」  
「暑苦しいくらい、うざくなるよなあ」  
「大丈夫じゃないか？」  
「三洲？」  
「あの葉山見たら、溶けるぞ」  
「ああ、ドロドロだな」  
「デレデレにね」  
「目尻も鼻の下も、伸びまくり」  
「ま、放っておこう」

---

2011年04月29日(金)

「体温計の事なんだけどな」

「あ、あれ！なんだか、壊れちゃってるみたい」

「壊れた？」

「うん。一応毎朝計ってたんだけど、全然グラフが下がらないんだよ」

そうか。託生は自分が変化したのだと思わず、体温計が壊れたと思ったのか。託生らしいと言えば託生らしいのだが、どうか、壊れたか。

…なわけないだろ？！

いや、落ち着け。託生の言うとおり、本当に壊れているのかもしれない。

基礎体温より最終月経だ。

「……じゃあ、最後の月経はいつだ？」

「うーん？…………わかんない」

「…わからない？」

「でも、体温計につけてるよ」

「…………うん、見た。5ヶ月近く前だったな」

「そうだったっけ？」

あっけらかんと言われて、目の前が遠くなる。あれは、つけ忘れじゃなく事実だったんだな。

やっぱり、どうか？ どうなのか？

スザンヌが戻ってきたら、即調べてもらおう。ただでさえオレの寿命が刻々と縮んでいくような気がするのだ。とにかくはっきりさせなければ、対処の仕様がない。

だいたい、もしも今回気付かなければ、一体どうなっていたんだ。そろそろ腹が膨らんでくる頃だろう。膨らんで初めて気付くなんて……託生ならありえる。それどころか、妊娠なんて思わずには病気と勘違いしそうだ。

託生に任せずに、オレがきちんと見ていればよかったんだ。あの時婦人科の本を読み漁ったオレと違って、託生はそれほど正確に知っているわけではなかったのだから。

でもな、託生。壊れたと思ったのなら、その時言ってくれ！

「忘れてた」と言われるだろう事が予想できて、深い溜息を吐いた。

---

2011年04月28日(木)

「きやつ！」

資料を取りに自室に向かっている途中、寝室からメイドの声が漏れ聞こえてきた。

「トリア、どうしたの？」

「落としちゃった、どうしよう…」

心底困った声に、ドアをコンと一回叩き、

「どうしたんだ？」

顔を覗かせた。

「義一様！」

ビクトリアの手には、託生の婦人体温計。

「申し訳ありません！ 落としてしまいました！」

泣きそうな顔でビクトリアが謝罪するのを片手で制し、

「ちょっと貸してみろ」

体温計を取り上げ電源を入れる。

「ああ、大丈夫だ。壊れていな…………」

さっと現れたグラフに、言葉が途切れた。なんだ、これは？

「義一様？」

不思議そうに立っているビクトリアとスザンヌに、

「ちょっと聞きたいんだが」

「はい」

「女性の基礎体温ってのは、低温期と高温期が2週間ずつ交互に来るんだよな？」

「そうですが」

そうだよな。普通はそうだと聞いた。

「じゃあ、高温期が13週続いているのは、どう考えればいい？」

託生の様子に変わったところもないし、食べ物の嗜好が変わった様子もない。ただ、少し胸が大きくなつたかな、なんて美味しい事を思つたりもしたんだが。まさか、そんな都合のいい事あるわけないよな。……おい、最終の月経マークが5ヶ月前ってのは、どういうことだよ。入力し忘れただけ…だよな？

---

「あの、つわりの軽い人もいらっしゃるんで」

今まで気付かなかつた事に対する慰めか、ビクトリアが小さく声をかけた。その辺りは個人個人で違うだろう事はわかるが、それよりもこの4ヶ月どれだけ託生を抱いた？ 昨日だって、3日ぶりだからと何度も……。

いや、それ以前に妊娠初期ってのは、夜の生活ってのは禁止じゃなかつたか？

背中に嫌な汗が流れていく。

もしもそつなら、知らなかつたとは言えとんでもない事をしていたんじゃないか。

「キャーーーッ！ 託生様、走らないで！！」

グルグルと考え込んだ思考が、ドアの向こうから聞こえてきた台詞に、即座に中断させられた。反射的に立ち上がり廊下に飛び出すと、廊下の向こう、こちらに向かって走ろうとしている託生が目に入り血の気が引く。

「託生、走るな！」

「あ、ギイ」

オレの声が耳に入っていないのか、託生は嬉しそうに手を振り、またパタパタと走り始める。

「だから、走るな！ オレが行く！」

頼む、走らないでくれ！

オレの言葉にピタリと足を止め、不思議そうに託生は小首を傾げた。

---

2011年04月25日(月)

どう考えても、オレが行くのが得策だと思っている。もちろん親父も、ここにいる幹部達もわかっているはずだ。しかし…。

静かに、だが慌しく島岡が親父の元に駆け寄り耳打ちをした。親父はハツとしたような顔をして島岡を見返し、そしてそのままオレに視線を定める。

なにが……？

「15分間の休憩にする！」

親父の一聲に緊張感はそのままなれど、あちらこちらから溜息が聞こえる。

「義一、一度部屋に戻れ」

「父さ……会長？」

「義一さん、早く」

島岡に急かされるように退室し階段を駆け上り、1階上の自分の部屋を開けると、

「託生?!」

結婚式以来見た事がない化粧をした託生が、そこにいた。きっちりとルージュを引き、どこからどう見ても、崎夫人として隙のないいでたち。

「ギイ」

託生の不安定な体調に、慌てて近寄ったオレの顔を見上げ、

「ギイ、行っておいでよ」

「託生?!」

「お義父さんはここを離れられないだろ?だからと言って、崎の人間が行かないわけにはいかない。ギイが一番役に相応しいと思う」

「でも、お前?!」

「ぼくは大丈夫。お義母さんも絵利子ちゃんもいるし」

不安でないわけがないだろうに、笑みを浮かべる託生に堪らなくなる。オレも親父も託生が頭に過ぎり言い出せなかつたんだ。

なのに、託生....。

「ぼくが、自分のすべき事忘れるような、ギイの足を引っ張る存在なら、ぼく日本に帰るからね」

「それは困る」

そっと腕の中に閉じ込め髪にキスする。侮っているわけではないが、託生はオレより強い。こんなとき、その強さにオレはいつも助けられるんだ。

「着替え、トランクに詰めてきたから」

「用意周到だな」

軽く笑い、潤んだ託生の瞳に気付かないふりをした。

顔を寄せると託生は目を閉じ、静かにオレのキスを受けた。ここに来たのは初めてだが、普通の託生ならこんなオフィスでキスをするなんて、受け入れられない事だろう。

右手を託生の腹に滑らせ足を折り頬を寄せた。

「行ってくるからな。ママを困らせるなよ」

オレの言葉に反応したように、ドンと託生の中から響いてくる。

「こいつ、足癖悪いんじゃないかな?」

「ギイに似たんだよ」

「託生だろ?」

クスクス笑いながら自分の腹を撫でる託生は、何気に誇らしそうだ。

「無理はするなよ」

「うん、わかってる。ギイこそ気をつけてね」

もう一度キスをして抱き締める。

いつ終わるかはわからないが、必ず間に合わせてみせる。絶対に...!

---

2011年04月23日(土)

「な...なに、ギイ?ぼくは、まだ怒ってるの」「すげ」「は?」「ん～～」「ちょ...ちょっとギイ、なに頬ずりなんか」「無茶苦茶気持ちいい。託生のほっぺ。吸い付きそう」「もう、くすぐったい」「ほら、腕も足もぷるぷる」「や...ん...」「ここもすべすべ」「だめだってば...あ」「エステ恐るべし」

---

「ねえ、ギイはどうするの?」

「オレ?フロックコートでいいだろ?なあ、父さん」

「そうだな。正礼装だしな」  
「でも、義一、一度合わせてみた方がいいんじやないかしら?もしサイズが変わっていたら、今から仕立てないと間に合わないわ」  
「そうですね、母さん。じゃ、一度合わせてみます」  
「ぼく、見てみたい」  
「託生のドレス見せてくれるならいいぞ?」  
「…………ぐすん」  
「あー!ギイ、なに意地悪してるので!」  
「そうですよ、義一。大人気ない」  
「女性を泣かせるなんて、男の風上にも置けないな」  
「え、いや、そういうわけでは……」  
「「「義一(ギイ)」」」  
「た…託生、今から試着するから部屋に行こう」  
「でも……」  
「新婦が式まで見てはいけないって決まりはないからな。では、失礼します」  
「本当に、託生さん、あの子でいいのかしら?」  
「義一に目をつけられるなんて、お気の毒としか言えないのだが」  
「やっぱり私が目を光らせなきゃ」  
「…………っ!(ゾクリ)」  
「ギイ?」  
「いや、なんでもない」

---

2011年04月22日(金)

「託生さん、今からエスティシャンが来るから」  
ギイと他愛ない話をしながらのんびり過ごしていると、絵利子ちゃんがぴょこんと顔を出した。  
「エスティシャンって?」  
「ブライダルエステよ」  
「ブライダルエステ?」  
エステって、あの女性がよく受けているエステの事?って、ぼくが受けるの?!  
「あ…あの、絵利子ちゃん…」  
「絵利子。それ、もしかして託生に全裸になれるって言ってるのか?」  
少し険しい声で、ギイが聞く。  
形成手術に関して。ギイと話し合った結果、ぼくは手術を受けていなかった。  
『託生が受けたいのなら受けたらいいと思うけど、オレは受けなくていいと思ってる』  
ぼくの意見を尊重すると言しながらも、ギイはやはり体に入れる事に難色を示した。ぼく自身、悩まなかつたというわけではないけれど、ギイがこのままでいいと言うのならそれでいいかと、医師に伝えたのだった。  
「それは大丈夫よ。上半身はともかくちゃんと下着はつけるもの」  
「本当か?」  
「うん。Tバックだけど」  
「T…!!」  
絶句するぼくに構わず、  
「お式の当日は、最高の託生さんになってほしいの。もちろん今でも肌が綺麗なんだけど、お手入れすれば今以上になるから、ね、託生さん、お願ひ」

小首を傾げて絵利子ちゃんがお願いする。

この兄にしてこの妹あり。この顔でお願いされたら承諾するしかないじゃないか。

「結婚式までね」

「やった！30分後に到着するから、それま.....」

絵利子ちゃんの声が途切れ視線が横に逸れた。それを追って横を見ると、ギイが身動き一つせずソファの肘置きに突っ伏している。

「ギイ？」

「.....この頃、ギイの妹である事が恥ずかしくなるときがあるわ」

「絵利子ちゃん？」

「放っておいて大丈夫よ。どうせ、よからぬ事を考えているんだし。託生さん行きましょ」

「うん.....」

少し恥ずかしい思いをしながらエステを受け、よろよろと戻ってきた部屋にはギイが買ってきたらしい紙袋があった。

「ギイーーッ!!!」

そのまま紙袋をギイの顔に投げつけ、ついでに蹴りを一つ入れて部屋から飛び出した。

ギイの周りをひらひらとTバックが舞っていたなんて、思い出したくもない！

---

「スケベ!!」

「そうだよ。スケベでなにが悪い？」

「開き直らないでよ！ぼくのし...下着を買ってくるなんて、なに考えてんだよ」

「恋人の下着を買うのなんて、アメリカでは当たり前だぞ」

「へ？」

「二人で選んでるカップルもいるし、恋人にこういうのも身につけてほしいと思うのも普通だと思うが？」

「アメリカではそうかもしれないけど、でも.....」

「第一、エステじゃTバック穿いたんだろう？」

「.....そうだけど」

「だったら、オレも見たいって思ったっていいだろ？」

「でもね、普通のだったの！こんなスケスケでヒラヒラじゃなかった！」

「.....これはオレの趣味だ！」

「言い切るな———っ！」

---

2011年04月21日(木)

「ギイは見ちゃダメ！」

「なんでだよ?!」

「新郎はお式まで見ちゃダメなの！」

「絵利子～」

「託生さん、デザイン画はこれよ」

「え...と、仮装になりませんか？」

「絶対託生さんに似合いますよ」

「お義母さん」

「ほお、これはなかなか」

「お義父さん」  
「でしょでしょ？」  
「オレにも見せろ！」  
「ダメ」  
「でも、あの…」  
「どこか気になる点でも？」  
「頭に乗っているこれは、ちょっと…」  
「ティアラの事かしら？」  
「このヴェールには、よく似合うと思いますよ」  
「あ、ティアラなら、託生は無理だ」  
「義一？」  
「それなりの重さだろ？頭が痛くなるらしいんだ。晴れの日に頭痛なんて洒落にならないな、託生？」  
「うん」  
「まあ、そうだったの？じゃあ、何がいいかしら」  
「託生なら、もっと柔らかい…ああ、オードリー・ヘップバーンがウェディングドレスでつけてたやつ」  
「ウェディングドレスなんて着てたかしら？」  
「幻のと言われてるやつだよ」  
「あの婚約破棄したときの。ボンネかしら。こう楕円形の細長い？」  
「ううう、それ。そういう方がいいと思う」  
「じゃ、もう一度検討してみるわ。ね、お母様」  
「そうしましょうか」  
「あの、ギイ、ありがとう」  
「いや、託生の言いたい事わかってるから」  
「うん。なんだか本物の宝石を使いそうで」  
「使いそうでじゃなくて、絶対使う。親父まで絡んでるんだから」  
「……やっぱり」  
「まあ、あれだ。一応釘は刺すけど、止められなくても文句は言わないでくれよな」  
「うん。すごい迫力だもんね」  
「でも、託生に似合う最高のを作ってくれるから」  
「…着なくちゃダメ？」  
「今更、あの二人の前で着ないと言えるか？」  
「…………言えません」  
「諦めてくれ」  
「うん」

---

2011年04月17日(日)

「「「あああああ、葉山さ～～～ん」」「うるさいぞ、お前ら」「だってよ～。あんな可愛い人が、もう人妻だなんて～」「そんで旦那が、あんなイケメンなんて～」「俺達に勝ち目ないのわかってるけど～」「「葉山さああああん」」「…………諦めろ」「あ、赤池くーん！」「葉山？」「「は葉山さん！」「お前、なんでここにいる?!ギイは?!」「……ギイなんて知らない」「はあああ。お前らまた…ん?もしもし」『章三!託生が!託生があああ!!』「ギイ、落ち着け。葉山ならここにいるぞ」『今すぐそっちに行くから、託生捕まえてろ！』「葉山さん、よかったら食事にでも」「いいお酒の飲める所があるんです」「アミューズメントパーク

はどうですか?」「あ...あの.....」「.....」「.....」「章三...」「なんだ?」「さっさと託生とつ捕まえて、隔離しろ!」

「元はと言えば、お前が連れまわしたせいだろうが!」「自分の愛妻自慢してどこが悪い?!」「「葉山さん、行きましょうか?」「おい、こら、章三!なんとかしろ!!」「あのなあ...。地球規模の夫婦喧嘩なんかするなああああ!!」

---

2011年04月16日(土)

「赤池!」「なんだ?」「この間会った葉山さん、今度いつこっちに来るんだ?」「...そんな事聞いて、どうする?」「どうするって...ポッポッポ」「あいつは諦めろ」

「いや、ちょっと待て!赤池の友人なんだろ?モデル並の美貌なのに、笑った顔は子供みたいに可愛くて、俺には手が届かないかもしれないけど、もう一度会いたいんだ!」「...無理だ」「なんでだよ?あ、もしかして赤池も惚れてるとか? !」「んなわけないだろ? !」「じゃ、なんで?」

「葉山は人妻だ」「.....え?」「葉山の隣に居たあいつが旦那だ」「.....ひとづま?」「そう、人妻」「ひとづま.....」ふらふら~「はあ、これで何人目だよ。自慢したいのはわかるが、あっちこっちに見せびらかすなよ」

---

2011年04月14日(木)

20歳になったと同時に、要望どおり手続きを始めた。

親の戸籍からの分籍。そして、戸籍法第113条【違法・錯誤・遺漏の記載の訂正】により、家庭裁判所からの許可を取り性別を変更。これは、日本にいる弁護士が代理で手続きをした。その後、変更後の戸籍謄本を送ってもらい、パスポートの再取得。

これらの手続きが全て終わった夜。オレはもう一度、託生にプロポーズをした。

「託生、愛してる。オレと結婚してほしい」

そう言ったのに、あいつは目を真ん丸くして、

「え?」

ポカンと口を開けて絶句しやがった!

「たーくーみーー」

「ご...ごめん。突然でびっくりしたんだ」

---

2011年04月11日(月)

「お二人揃って、どうしたんですか?」

「次の託生さんの通院日がいつか聞きたくてね」

「託生の?来週の金曜22日です。それがなにか?」

「金曜日...」

「金曜日ね...」

「父さん?母さん?」

「じゃあ、その日の夕方から1週間出張」

「な?!ちょっと待ってください!いくらなんでも横暴です!その日は...!」

「お黙りなさい!」

「母さん」

「そのまま貴方を託生さんの側に置いておくと、あまりにも託生さんが氣の毒です」

「どういう意味ですか?!」

「君、襲うだろ？」

「っ!!」

「さすがに、それはちょっと可哀想だから」

「いや、でも、その辺りはオレだって紳士的に…って、どうしてそこまで意見されなければいけないのですか。オレと託生の仲を」

「嫁入り前の娘さんを、お預かりしている身としては当然です」

「母さん…」

「ですから、お父様の言うとおり、仕事に行ってきなさい」

「嫌です」

「拒否権は、君にはないよ」

「……一体、貴方方は、自分の息子をどう見てるんですか?!」

「飢えた野獣」

「……………orz」

---

「そうだよ。託生がバージンロード歩くの一人じゃ心細いからって」

託生が申し訳なさそうに頼んだときの崩れ具合、世の中の人間に見せてやりたかったさ。これがFグループの総帥なんだってな。

親父でさえ、オレより先に託生のドレス姿を見るって言うのに。

「なんだって、オレが見れないんだーっ」

「あと少しの我慢だろうが」

そうは言うがな、章三。

あの可愛い託生が、オレの為にウェディングドレスを着てくれるんだぞ。それだけでも感動しているのに、実物が目の前に現れてみろ。オレ、アホ顔を晒さない自信がないぞ。だからこそ、衝撃に備えるために事前に見たいと言ったのに。

---

2011年04月08日(金)

【ボツ】何かが、おかしい。

「寄っていくだろう？」

「ううん、少し疲れちゃったから、今日は部屋に戻るよ」

確かに、ここから東京の往復は、託生の体には負担をかけただろう。それに、申告どおり疲れた顔もしている。

しかし、それだけじゃないとオレの勘が言っていた。

「わかった。朝、迎えに行くからな。ゆっくり休めよ」

「うん」

寮の廊下。キスが出来ない代わりにさりげなく指を絡ませ、そっと離す。

託生は、片手を挙げて2階の廊下の奥に歩いていった。

上着をベッドに放りネクタイを緩めながら、今日の出来事を思い返す。

いつからだ。

朝食を取り、二人で祠堂を出た。

診察が終わって、一旦昼食を取り、午後から1時間ほどのカウンセリング。それから、担当医からの説明と注意事項。これから先、渡米するまでの治療方針と治療方法。

オレも一緒に話を聞いた。

そのとき託生の様子は、どうだった？

ああ、真剣な顔をして担当医の話を聞いていた。

全てがスライド写真のように克明に残っている記憶を、一枚一枚捲っていく。

病院を出て、託生が疲れているかもと喫茶店に寄った。オレがブラックで、託生がカフェ・オ・レ。

その時は、寮の荷物をどこに送るかが話題だったな。

店を出て歩いて、駅に着いて電車に乗り……。

乗換駅でホームを移動しているとき、ヨチヨチ歩きの赤ん坊が託生の側で転んだな。託生は膝を折って泣いている赤ん坊を抱き上げ、慌てて飛んできた母親に手渡したっけ…。

その一枚が、クローズアップされた。

ベッドからカバッと起き上がり、もう一度その場面をなぞっていく。

なぜそんな辛そうな顔で笑ってるんだ。

まさか、託生……。

3種類のうちの、残りのボツでした。落ち。

---

2011年02月23日(水)

<ボツ>G「どこからどう見ても、男」T「えっと、ちょっと前に女の子だとわかりました…けど」G「託生、どうした?」T「だって、言ったって見えないだろうし、見えてもなんとなく複雑だし…」G「託生はそのままで充分可愛いぞ」T「惚れた欲目だよ、それ」

G「ちまたでモデル並と言われているのに(ボソリ)」T「ギイ、なにか言った?」G「いや、別に」

G「おせっかい」T「そうかな?」G「どれだけ他人の恋路に顔突っ込んでるんだよ。そのたびに振り回されてるんだぜ」T「…ごめんね?(上目遣い)」G「い…いや、それが託生だから。気にするな。それより、オレはどうだ?」

T「うーん、責任感が強くて、統率力があって、友人思いで、サプライズ好きで…ギイ、どうしたの、口押さえて気分悪い?」G「いや、なんでもない(照れてる)」

T「色が違った」G「はい?もしかして『外人?!』とか一步下がった感じ?」T「あ、違う違う。ギイのまわりだけキラキラしてて、色が違ったんだよ」G「たまに、こっちが恥ずかしくなるような事、さらって言うんだよな(はあ)」

T「えっ?!」G「一応、行きつくるまで」T「ギイ!」G「でも、現在、禁欲中」T「ごめんね」G「気にするな。(どうせ半年の我慢だ!)」T「……??」

G「許せる」T「ギイ、見逃してくれるんだ」G「その代わり、閉じ込める(ジロリ)」T「げっ、浮気なんてしないってば!」

G「いつも可愛い可愛いと思ってるんだが、そのときはもう、色っぽくてってか、思い出すだけでヤバいんだけど(ただいま禁欲中)」T「ギイ?」G「半年半年…」

---

2011年02月14日(月)

<ボツ>「1年の頃の葉山と今の葉山は別人のようだな。お前が側にいるようになってから……というには把握はある」

「でもな。先日の葉山の両親と会った時、根が深いと思った」

「根……ですか?」

「俺が考えているのは憶測でしかないし、たぶん全てを知っている崎も俺に言う気はないんだろうが、葉山の深い部分は、まだまだ癒されていないだろうし、これから先もフラッシュバックが起こる可能性もある」

それは、渡辺綱大に対するような状態を表すことなのか？  
「崎が心の傷を癒すのに一役買っているとは思うが、過大評価するなよ？ 崎は傷口にガーゼを当てたようなものだ。根本的な治療はプロに任せた方がいい」

---

2010年12月17日(金)

「うーんとね、月経が始まった日から平均14日間が低温期でその後の14日間が高温期なんだって。それで、低温期から高温期の境目辺りが排卵日で、たぶん今日が排卵日なんだろうって……」「…………それ、三洲に聞いたのか」  
「そうだよ？」「託生…………」

# 沈丁花

2013年01月26日(土)

汗で湿った託生の前髪をそっとかき上げ額にキスをすると、くすぐったそうに小首を傾げオレの頬に左手を滑らせた。冷たい金属の感触が頬にあたる。

シンプルなリングの裏には『Love Eternal』の文字と小さな宝石。託生のリングにはピンクダイヤモンド。オレのリングにブルーダイヤモンド。

オーダーしたその帰りに、オレは事故にあった。

「島岡さんが、空港まで持ってきててくれたんだ」

当時を思い出したのか、懐かしそうに目を細めて指輪を見る託生に胸が痛む。

「本当はチェーンを通して託生に渡そうと思ってたんだけどな。バイオリン弾くときの邪魔にならないか？」

「大丈夫だよ。慣れちゃったし」

一度も外していないと章三に聞いた。

長い年月を写したかのように鈍く銀色に光る指輪に、嬉しくもあり。……そして、心苦しくもあった。

その刻まれた一つ一つの傷の変化をオレは見ていない。

「あ…………」

「どうした？」

託生は寝返りを打つようにころりと体をうつぶせ、サイドテーブルの引き出しから何かを取り出した。

「ギイ、これ…………」

ビロードの小さな箱。開けると、中にはオレの分の指輪が収まっていた。

託生の指輪と対のはずなのに、傷一つなく光るプラチナリング。

「…………はめてくれるか？」

「うん」

託生は指先で取り出し、オレの左手の薬指に指輪をはめ、小さくキスをした。

16年遅れてオレの指に収まったプラチナリング。指輪をはめたことは一度もないのに、しっくりとオレの指に落ち着いた。

「チェーン。ぼくがプレゼントするよ。学校にはめていけないだろ？」

「それも、そうか。はずしたくないんだけどな」

ずっと、つけていたい。永遠と刻んだ誓いの指輪。

「たった2年じゃないか」

不服な口調のオレに、苦笑しながら託生が指摘した。

これから二人で生きていく長い人生の中の、たった2年。

16年間、一人指輪をはめていた託生から見れば、ほんのひと時のこと。

「卒業するまで我慢するか」

「そうしてください」

クスクスと笑う託生の頬にキスをする。

今は、対に見えないほど輝きも傷も違う二つの指輪。

でも、いつか必ず追いつくから。

「託生、愛してる」

二人を繋ぐ絆は、決して切れる事はない。

---

2011年10月28日(金)

『付き合いで遅くなるから、ご飯食べて先に寝てね』

とメールが届いたのが、夕方。

「何がご飯食べてだよ。子供扱いするなよな」  
そりや、実年齢20歳違うが、オレから見れば託生の方が危なっかしいのに。  
それでも、仕事上の付き合いが大切なのは、前世で嫌と言うほど知っている。だから託生の仕事の邪魔をしたくないオレとしては『了解。気をつけて帰ってこいよ』と返信するしかなかった。  
しかし。  
「午前様か。メールくらい打ってこいよな。心配するだろうが」  
リビングで見たくもない深夜番組を見ながら、何度もかの文句を口に出したとき、ピンポンとお気楽なチャイムの音が響いた。  
慌てて玄関に向かいドアを開けると、  
「よかった。一也君、起きてましたか。鍵がわからなくて」  
託生のマネージャーである桜井が、ホッとしたような表情で託生を抱きかかえていた。  
オレ以外の腕の中にいる託生にムッとするが、  
「あ、ギイだ」  
オレに気付いたとたん、普段人目を気にする託生らしくなくオレの首に腕を回し、猫のようにゴロゴロと甘えてきた。  
それだけで幾分気分が上昇するが、いったい、どれだけ呑んだんだか。  
「呑んでいるときは普通だったんですが、車に乗ったとたん酔いが回ったらしく……」  
「それは、ご迷惑おかげしました。あとはオレが運びますので」  
申し訳なさそうに頭を下げる桜井ににこやかに答え、「お休みなさい」とドアを閉め、ぐたっと寄りかかっている託生を抱き上げた。  
「託生、飲みすぎだぞ」  
そのまま抱き上げベッドに横たえ、一応水を持ってきておくかとドアに向かおうとした時、  
「ギイ、どこ行くの？」  
そのまま寝たと思った託生が、クイとパジャマを引っ張った。  
「水を取りに行くだけだよ」  
言い聞かせるように胸をぽんぽんと叩いて宥めたのだが。  
「ギイが、ぼくを置いていく——！」  
布団を蹴飛ばす勢いで、託生が拳を突き上げた。  
「おい、人聞きの悪いこと言うなよ。オレが託生を置いていくことなんてないだろ？」  
オレの言葉に、キッと視線を険しくさせ、そして、  
「嘘つき。置いていったくせに」  
自分の言葉に余計感情が高ぶったのか、ポロポロと涙を零しながらオレの胸にすがりつく。  
普段、責めることのない託生が零した、託生の本音。  
オレが死んだとき、どれだけ傷つけたのか。思うだけでも胸が苦しくなる。  
だから、罪滅ぼしではないけれど、これ以上泣いてほしくなくて、  
「もう、二度と置いていかないから」  
軽く口唇を合わせて囁いた。  
「…絶対？」  
「絶対」  
「本当に？」  
「本当」  
二度と、あんな目に…自分で命を捨てさせるようなことに会わせるものか。  
深く口唇を合わせオレを引き寄せる託生に、片膝をベッドにつきギュッと抱きしめた。  
オレの罪と罰。  
何一つ避けることなく全て受けてやるよ。

それが、オレの最上の幸せ。

---

2011年10月13日(木)

「なあ。章三って結婚してんだよな？」

「うん。奈美子ちゃんとしてるよ」

「子供は？」

「えっとね。上の子が10歳で下の子が6歳だったかな。男の子と女の子でね。また、あの二人によく似てしつかりしてるんだ」

「へえ」

「もう、赤池君と奈美子ちゃんの縮小版！みたいな感じで。すっごく可愛い」

「楽しそうだな。今度、行ってみようかな」

「そうだね。ぼくも長く会ってないし……って、なに考えてるの、ギイ？」

「なにが？」

「なんだか、変な事考えてるみたいに見えるんだけど」

「まさか。今、一番歳が近いのがオレだろ？だから、二人と遊ぼうかなと」

「悪いこと教えないでね。赤池家に出入り禁止にはならないけど、にんじんサラダをボール一杯出してきて『うちの子の教育に悪いことはしないよな？』ってすごまれるから」

「……やられたのか？」

「一度……」

「容赦ないなあ」

「だろ？」

---

2011年08月29日(月)

「ギイ、荷物これだけ？」

「ん？ああ、そうだが？」

「ふうん。……あのさ」

「うん？」

「どうしてベッドがないの？ 買い換えるの？」

「あー、そうだなあ。セミダブルだもんな。せめてダブル……いやクイーンくらいにはしたいよな」

「……ギイ、なんの話？」

「託生が言ったじゃないか。ベッドだよ」

「ぼくは、ギイのベッドの話をしてるんだよ」

「オレのベッドは託生のベッド。寝室は別だなんて、水臭いこと言わないとよな？」

「え？」

「うんうん。ベッド選びは大切だから、二人で現物見にいって買おう。夜の生活は大切だもんな。ん、どうした？」

「ギイ、日本人だよね……？」

「おお、今回は正真正銘日本人」

「日本人は、男二人でベッドを選びにいくような恥ずかしいことしないよ！」

「そうか？」

「……開けっぴろげなところはアメリカ人だったからじゃなくて、ギイの素だったんだorz」

---

2011年08月28日(日)

「ギイ.....」

「ん、どうした？ 眠れないのか？」

腕の中でもぞもぞと角度を変え、託生がオレを見上げた。

「う.....」

「う？」

「浮気していいから」

「はあ？！」

いきなりの浮気黙認宣言に、眠気がぶつ飛んでしまった。

「ちょ.....託生、なに言ってんだよ？ 浮気なんてしたくないし、するわけないだろ？」

「.....別に、ぼくのこと気にしなくていいから」

いやいやいやいや、託生が気にしなくてもオレが気にする。だいいち、そんな涙を堪えて言われても説得力ないぞ？

時を越えてやっと託生と巡り会えたのに浮気してもいいだなんて、これはちょっと、いやきちんと託生と話し合わなければ。

「なあ。どこをどうなったら、オレの浮気に繋がるんだ？」

「だって」

とたん、ぶわっと託生の目から涙が零れ落ちた。落ち着くように、とんとんと背中を叩き、涙に口を寄せる。

「だって、ぼく、ギイについていけない.....」

「はあ？！」

オレ、なにかヘマをしたのか？！託生がついてこれないようなことを、押し付けた？！

「ちょっと待ってくれ！ オレ、なにか託生に許されないようなことをしたのか？」

ふるふると頭を振る。

「じゃ、何がついていけないんだ？」

「.....体力」

「.....たいりょく？」

「ギイ、満足してないだろ？」

自分で言った台詞に悲しくなったのか託生の目からまた涙が零れ、慌てて指でぬぐった。詳しく聞こうにも、託生自身ある意味興奮状態だから、たぶんこれ以上聞いてもわけのわからない言葉しか返ってこないだろう。

体力。満足。

託生の言葉を反芻して、考えてみる。

.....あー、そういうことか。

託生の仕事がそれほど忙しくないのをいいことに、毎日のようにベッドに誘った。いや、託生がこの腕の中にいるのに、抱かずにいられなかった。

「あのな。託生だから、だ。託生以外の人間に勃つわけないだろ？ 託生に無理をさせていたなら謝るから。そんな顔して、浮気を推奨しないでくれ」

「でも、満足してないだろ？」

「してる」

「していない」

「してるよ」

「していないってば」

むきになって言う託生に、はあと溜息を吐いた。

「じゃあ、言うよ。満足していないと言えば、たしかに満足はしない」

「やっぱり.....」

だから、逃げるな！  
「じゃなくて、オレが託生を抱いて満足することは、たぶん一生ない！ 抱いても抱いても、抱き足りないんだ！」  
「…………は？」  
「だーかーらー、抱いた側から抱きたくなるんだから、そういう意味では満足することはない。これは、託生を初めて抱いたときからだぞ。今になってからの話じゃないからな」  
「…………」  
「だから、浮気をしたって満足なんてできるわけがない。でも、託生には無理させたかもな。ごめん」  
チュッとキスをして、託生を抱きしめる。  
「じゃ、あの……」  
「添い寝だけの日も作るから、そんなこと言わないでくれ」  
「…………うん」  
こっくり頷いた託生に、大きな溜息が漏れた。と同時に、反省する。  
託生が根をあげるくらい無理をさせていたのなら、やはり週5日は考えなければならないな。これ以上無理強いするとベッドを別にすると言われかねない。  
そのためには、自家発電の回数を増やして……。  
真剣に考えているオレの横で、託生はいつの間にか眠りの世界に入っていた。

---

2011年08月26日(金)  
「葉山、少し痩せたか？」  
「う……うん、ちょっとね」  
「そんなに無理させてるつもりないんだけどな……(ぼそり)」  
「ギイ！！」  
「そんなことだろうと思った。崎」  
「み…三洲、今、どこから出した？」  
「赤池、そんな細かい事は気にするな」  
「これなんだ？」  
「等身大、葉山の写真プリント済みの抱き枕だ。それで、たまには我慢しろ」  
「……どうせなら、裸の写真の方が…てっ！」  
「なに言ってんだよ！！三洲君、こんな恥ずかしいもの！」  
「それで安眠できるなら楽だぞ。それに、ほら」」  
「写真はあれだけど、これ抱き心地いいな(頬ずり)」  
「…………ギイ(涙)」

# 短文問題集・お題

2014年03月27日(木)

「このまま溺れて」でgreenhouse\_rikaの140字文はいかがですか？ shindanmaker.com/439490  
あー、これならいけるかな。Reset風味で。

一筋の光さえも届かない海の底。命がけで求めたたった一つの恋も、オレには過ぎた望みだったようだ。行かないでくれの一言を奥歯を噛みしめ堪え見送った後ろ姿が、何度も残像のように目の前を横切っていく。この苦しみから抜け出せるのなら、このまま溺れて胸の鼓動が止まるのも悪くはないな。

---

2014年03月20日(木)

りかに問題です。「部長」「新聞」「宴会」の3つの言葉を含め、6ツイート以内でニュースの原稿を書きなさい。shindanmaker.com/5279

さつきの結婚式の挨拶は論外だけど、これならなんとか；

十九日夜、Fグループ日本支社にて、副社長を囲んでの懇親会という名の宴会が盛大に開かれました。宴会部長の挨拶もそこそこに、ギラギラと目を光らせた女性社員、そして顔を覚えてもらおうと躍起になっている男性社員がひしめく宴会場ではありましたが、

副社長は料理長が腕を振るった和食を堪能し舌鼓を打っていたようです。

その後、アタックしようと待ち構えている女性社員達をひらりとかわして副社長は携帯を片手に姿を消し、阿鼻叫喚の混乱の中、部屋の隅で第二秘書が女性社員を口説いていたとかいないとか。

なお、この宴会の様子は社外秘なので口外は厳禁です。

【Fグループ日本支社広報部発行 社内新聞】

---

2013年03月26日(火)

「返却完了っと」

早朝のレンタルショップで、借りていたDVDを返却ボックスの中に放り込んだ。

ただいま午前6時。

普段なら、まだまだベッドの中にいるはずだけど、疲れなかったのだ。

「婚約間近なんだ……」

昨日、仕事帰りに寄ったコンビニで買った雑誌に書いてあった。

ギイと、どこぞのご令嬢が婚約間近だって。

Fグループの次期総帥。だったら、結婚して跡取りを作ることが、周りから期待されているはずだし、それがギイの義務だろう。

ご丁寧に載っていた写真を見る限り、お似合いじゃないか。

そう頷きながら買い込んだビールを飲んだはずなのに……これだけ飲めば、普段のぼくなら起き上がることも無理なはずなのに、この朝の空気に触れたとたん冷めてしまった。

「こんなこと想定ないだろ、葉山託生？」

卒業式の夜。ゼロ番で別れたんだ。もう、なんの繋がりもない。

一昔前に終わった恋なんだ。

残骸が心の中を占めているぼくとは違い、ギイは、もう新しい人生を送っているはず。

自分で自分を納得させて、人気のない店の前をターンし元来た道を戻ろうとしたぼくの前に、いつのまにか

桜井さんが立っていた。  
「え、桜井さん？おはようございます」  
「おはようございます。託生さん、お早いですね」  
首にタオルを巻いた桜井さんは、ジョギングの途中だったと見える。  
「桜井さんこそ、いつもの公園じゃないんですね」  
「あー、毎日同じコースだと飽きてしまうんですよ」  
苦笑しつつ説明した桜井さんに、同意して頷いた。  
「お帰りですか？」  
「はい。早く起きすぎただけなんで」  
「じゃあ、私もご一緒させていただいていいですか？」  
「かまいませんけど……ジョギングはいいんですか？」  
「実は、もう充分走ってるんで、そろそろ帰ろうかと思ってたんです」  
にこりと笑った桜井さんに、  
「じゃ、帰りましょうか」  
と答えて、元来た道に足を向けた。  
ギイの歩いている道とは違う、ぼくの道。  
交わることなんて、たぶんこの先ないだろうけど、君の歩く道をずっと見ていていいだろうか。  
君の隣に、ぼくの知らない誰かが歩くことになったとしても。

久しぶりの恋愛お題ったーでした。  
greenhouse\_rikaさんは、「早朝のレンタルショップ」で登場人物が「さめる」、「ビール」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai [bit.ly/d2DNCR](http://bit.ly/d2DNCR)

---

2012年10月06日(土)  
オレの心は、底なし沼に沈んだかのように、動けなくなっていた。  
こんな子供に、媚びへつらい、ご機嫌を取る大人達。  
将来へのメリットを考え、友人顔して近づく同世代のヤツら。  
そして、崎家の御曹司だと一挙一動が注目され、オレはオレでなくなっていた。  
マリオネットのように自分を操りながら、本当のオレは冷たい沼の底で自分を守るように動くことも出来ず、  
小さく小さく存在感を消していた。  
音がした——。  
キラキラと輝き、優しく包み込むような、音。  
そろそろと目を開ける。  
遙か向こうに小さな光が見えた。  
近づきたいと、触れてみたいと思った。  
丸めていた体を起こし立ち上がる。  
オレがオレ自身を取り戻すために必要な、音と光。  
どれだけ時間がかかっても、絶対に手に入れなければいけないと、オレの本能が訴えかけていた。  
そうして動き出した、オレの心。  
それが、オレとお前との始まり。

「音」「冷たい」「動く」を使って感動する短文を作りなさい。#voitekatyan <http://t.co/c5px2KtY>  
短文問題集でした。

2012年09月24日(月)

greenhouse\_rikaさんは、「朝の浴室」で登場人物が「夢中になる」、「誕生日」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/O5QGsdt3>  
ちょっと長くなっちゃったけど、朝言ってたお題を改めて。

「あのさ、ギイ」

「んー？」

「いったい朝っぱらから、なにやってるのさ？」

朝の浴室で泡だらけになっているギイに、話しかけた。

「だって、今日、託生の誕生日だろ？」

「そうだけど……」

「麓に降りてデートしに行くんだろう？」

「そうだけど……」

「だから、今しか時間がないんだ」

言いながら機嫌良さそうに、しゃかしゃかと隅から隅まで風呂掃除に夢中になるギイに、本気で首を傾げた。

誕生日だから風呂掃除？

ギイの思考回路がわからない。

「よし、終了。託生、準備はできるか？」

「うん、できるよ」

いつでも、出かけられるように。ギイが誘ってくれたんだから。

「5分で準備するから、待ってくれ」

結局、ギイは5分もかからず仕度を終わらせ、ぼく達は予定通り外出したのであった。

夕食まで済ませ、寮に戻ったのは門限の少し前。

部屋に戻るなり、ギイはバスルームに直行してお湯を溜め、

「託生、風呂に入ろう」

ぼくの返事を聞く間もなく服を脱がせ、ぼくを風呂に放り込んだ。

「どうだ？」

「いい匂いだけど、不思議な匂い。入浴剤？」

「バスボム。ラベンダーとイランイランの」

「へえ」

ラベンダーの名前は聞いたことあるけど、イランイランってなに？

「これを入れるために、朝っぱらからお風呂掃除をしてたの？」

「んー、17歳になった託生を綺麗な風呂場で綺麗にして、いただこうか、と」

ニヤリと笑い口唇を覆ったギイを押しのけようとしたのだけれど、鼻腔をつく香りが頭をくらくらせ、ギイの思うままに翻弄されられ気付けば真夜中のベッドの中。

その後、イランイランの香りに催淫効果があることを知ったぼくは、ギイが持っていた全ての入浴剤を押収した。

しかし、全てイランイランが混じっているこの入浴剤、どうしよう……。

---

2012年09月18日(火)

「裏切り者」

1ヶ月ぶりに来日してきたギイが、ムッとした表情で拗ねた。

朝から大学の講義で、ギイがぼくの大学に来るにも、ぼくが空港に行くにも、時間的に中途半端で、

「部屋で待ってて」

と言ったぼくに、

「1秒でも早く会いたいから」

と、時間のロスがないようにギイが指示した昼の公園で、顔を合わせたときのことだ。

「別に裏切ってなんかないだろ？」

そうだよ。あれは、偶然だ。

「でも、オレ抜きだったろ？ あーあ、託生が裏切るとは」

ここに来る前に、章三にでも話を聞いたのだろう。

だからと言って、まさかこう拗ねられるとは。

「けど、アメリカって、よくBBQパーティするんじゃないの？」

「BBQと焼肉を一緒にするな」

腕を組んでふんぞり返るギイに呆れて溜息が出た。

たまたま上京している祠堂のみんなと焼肉を食べに行ったからって、どうしてここまで拗ねられるのか不思議だよ。

「……はあ。じゃ、今から焼肉食べに行く？」

「行く！」

とたん、不機嫌な表情を一変させ、ギイが破顔した。

「でも、ぼく、そんなにお金持っていないけど」

「デート資金はオレに任せろ」

「……ギイ。焼肉を食べたいだけ？」

胸を叩いて断言するギイに、いつもなら何も考えずに甘えるところなのだけど、なんだろう。なんとなく、下心が見える。

「焼肉と言えば、薬味はニンニクだろ？ ニンニクと言えば精力……てーーっ！」

「ニンニク臭いキスは嫌いだから」

言い置いて歩き出したぼくの横に並んで、

「ニンニク美味しいのにな」

ブツブツ呟くギイを横目で見ながら、二人とも食べれば匂いなんて気にならないけど、クスリと笑った。

greenhouse\_rikaさんは、「昼の公園」で登場人物が「裏切る」、「焼肉」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/0eltBoQb>

なんとかしようとして考えたら、こういうのになりました。

---

2012年09月14日(金)

ぼく達が着いたときには、すでに真行寺の姿は見えず、高層ビルのどこから大きい声が漏れ聞こえるだけだった。

「三洲、大丈夫か？」

「ああ」

言いながら、三洲がビルに視線を向ける。

「アーラーターさーーん！」

「あの、バカ…………」

「擦れ違いになっちゃったんだね」

三洲がいるビルが襲撃されていると連絡が入ったとたん真行寺が飛び出し、慌ててあとを追つたものの着いた時にはすでに真行寺の手によって片がついていた。

あちらこちらに伸びているヤツらを捕獲し、さて当の真行寺はどこにいるんだと首を傾げたとき、三洲がビルの上階を指差した。

「あんな上まで行ったら、聞こえなさそうだね」

「まったく、あいつは。なんとか煙は高い所に登ると言うが登りすぎだろ」

「慌てて出て行っちゃったから、携帯もトランシーバーも持っていないし」

「三洲はさっさと脱出したっていうのに」

邪魔者を殴り倒しながら三洲を探している内に、上まで行っちゃったんだろうけど、エレベーターも止まっているし、あそこまで呼びに行くのもなあ。

「アーラーターさーん！」

「どうする、ギイ？」

「仕方ないな」

ギイは指を口にくわえて、ピーッと指笛を鳴らした。

ああ、名前を呼ぶより、この方が遠くまで聞こえるな。

すると、ひょこっと真行寺が窓から顔を出し、ぼく達を視線に捕らえ……いや、ぼく達ではなく三洲を認識したとたん、忍者のように窓から消えた。

「………3分かかんないだろうな」

「うん……あ、三洲くん、待たないの？」

「あんな恥ずかしいヤツ、待ってられるか」

言い捨てて、三洲は章三の車に乗り込み、その場をあとにする。

「あれだけ自分の名前を連呼されてたら、三洲くんも気まずいだろうけど」

「オレだったら、託生があんな風に呼んでくれたら、無茶苦茶嬉しいぞ」

「ちょっと、ギイ。恥ずかしいこと言うなよ」

「いいじゃん。章三もいないし」

「ギイってば、くすぐったい」

「あの……」

背後からかけられた声にビクリとして振り向くと、

「アラタさんは……？」

真行寺が肩で息をしながら涙目で問いかけてきた。

「三洲なら署に向かったぞ」

「待ってくれなかつたんスね」

「真行寺君……」

「アラタさーん！」

半泣きの真行寺を連れ署に戻ったときには、これまた三洲と擦れ違いになり、その夜、署では報告書を書きながら吠える真行寺の姿があった。

「笛」「大きい」「呼ぶ」を使って爽やかな短文を作りなさい。#voitekatyan <http://t.co/sMwEpflj>

またもや祠堂署設定で。ごめん、真行寺。いつも謝っているような気がするけど、こういう印象なんだもん；

---

2012年08月13日(月)

「ああ、なぜ、貴方はロミオなの？……で、よかつたのかな？」

「そうそう。託生さん、バッチリv」

「でもね、絵利子ちゃん。ここ、55階だから、さすがにロミオは登ってこれないような……」

(注：上ってではなく、登ってを使っております)

「大丈夫！夜のベランダでロミオがジュリエットに告白するのよ！階数なんて関係ないわ！」

「でも……」  
「ほら、人目を避けて密会するんだから、多少の危険を伴ったって……」  
「多少の危険ねえ」  
「あら、ギイ。どこから登場したのかしら？」  
「ドアだよ、ドア！ どうやって55階のベランダに登れって言うんだ？ ！ 魔法を使ってほうきで飛ぶしかないだろうが！」  
「ギイ。そこは、気合よ！」  
「お前は、アニマル●口か？！」

greenhouse\_rikaさんは、「夜のベランダ」で登場人物が「密会する」、「魔法」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/DjyEjvuU>  
終わっちゃったけど、オリンピックってことで。

---

2012年07月26日(木)

コンクリートからの反射熱と、なかなか沈まない太陽にめげて夕方のゲームセンターに入ってはみたけれど。  
「エアコン、効きすぎてない？」  
「機械は熱に弱いからな。どうしてもこういう場所は温度が低く設定されてるよな」  
入った時は「うわっ、天国！」と思ったけれど、汗が引くと急激にこの温度が身に沁みた。隣の誰かさんは、全然大丈夫そうだけど。  
「出るか？」  
ギイの言葉にしばし考えて首を振る。  
エアコンが効きすぎている感はあるけれど、せめて太陽が沈むまでは、あの灼熱の中に出るのはごめんこうむりたい。  
そんなぼくを見て、ギイが吹きだした。  
「……なんだよ？」  
「託生、暑いのも寒いのも苦手なんだよな」  
「別にいいだろ。暑くも寒くもない丁度いいのが好きなんだよ」  
「わがままなヤツめ」  
言いながら、ギイがぼくの髪を撫でる。その手の温かさにうっとりと目を閉じそうになって、ハッとした。  
もう！ ここは公共の場だってば！  
「じゃ、寒がりの託生くんにホットコーヒー買ってきてやるよ。砂糖なしのミルク増量でいいか？」  
「うん」  
「ナンパされずに待ってるんだぞ」  
そう言い置いてギイが自動販売機コーナーに向かった。  
ギイってば、ぼくを甘やかしすぎ。……嬉しいけど。

greenhouse\_rikaさんは、「夕方のゲームセンター」で登場人物が「髪を撫でる」、「ミルク」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/0eltBoQb>  
「ミルク」は普通はこういう健全な使い方をするんだよね。うん、普通は；

---

2012年07月22日(日)

「終わった終わった。託生、帰るぞ」  
「うん。って、ちょっと、ギイ近寄らないでよ」

「なんでだよ」  
「汗臭いから」  
「あー、そんなに匂うか？ あいつ逃げ足速かったからなあ」  
「捕まえたからいいじゃない。じゃなくて、ぼくが汗臭いから」  
「かわいいなあ、託生」  
「だから、ひつくなつて」  
「はああああああ」  
「…………どうしたんだ、あいつは」  
「うん、また三洲くんにデート断られたみたいで」  
「何回目だ？」  
「5回目」  
「アラタさ～～～ん！ どうして貴方はあの月のように遠いんですかああああ？！」  
「ポエムってるよ」  
「捜査一係の窓でやってもなあ」  
「アラタさ～～～ん」  
「仕方ないな。おい、真行寺」  
「はい？」  
「これ食べるか？」  
「…………チビット。アラタさんとの思い出。アラタさんの……うおおおおおおん！」  
「ダメだ、こりゃ。おい、章三。オレ達帰るぞ」  
「こら、待て！ こんな真行寺と当直なのか？！」  
「くじで決まったんだから仕方なかろう？」  
「赤池君、お先～。お疲れ様で～す」  
「ギイ！ 葉山！」  
「アラタさ～～～ん」  
「黙れ、真行寺！」

「月」「遠い」「食べる」を使ってありがちな短文を作りなさい。#voitekatyan <http://t.co/sMwEpflj>  
祠堂署設定で。ごめん、真行寺；「月」と聞いて、アルテミスしか思い出せなかったんだもん。

---

2012年07月16日(月)

裏庭の陽だまり。背後から草を踏みしめる音が聞こえて振り向いた。

「ギイ、縦笛の追試どうだった？」  
「追試って言うなよ」  
むっすり黙って拗ねた様子のギイのボサボサの前髪を指で梳く。この分じゃ、再追試だな。  
「高校生にもなって、なんで縦笛なんだよ」  
「文句言ったって仕方ないじゃないか」  
祠堂の芸術科目は音楽と決まってるのだから。  
「……楽しそうだな、託生」  
「そんなことないよ」  
ぼくがギイに勝てる唯一の科目。じゃなくて、ギイが唯一苦手な科目。  
少しだけ優越感を持ったっていいじゃないか。ギイに勝てるのこれしかないんだから。  
「歌のプロデュースなら、オレが勝つのにな」  
ギイは横目でチラリとぼくを見て、なにかを思いついたようにニヤリと笑った。

「歌？」

音痴のギイが、歌のプロデュース？

意味がわからぬと顔に書いたぼくの頬に楽しそうにキスをし、

「オレ、ベッドの上では託生に歌わすの得意だろ？」

「…………ギイのばかーーーーっ！！！」

ぼくの平手打ちとギイが口唇を寄せたのと、どちらが早かったのかは不明である。

「笛」「ボサボサの」「勝つ」を使って感動する短文を作りなさい。#voitekatyan <http://t.co/sMwEpf1j>  
短文じゃないけど、短文問題集でした。

---

2012年07月08日(日)

見上げた小窓から月が見えなくなった。

「ということは、もうすぐ夜明けか」

早朝の密室。冷たい床の上で胡坐をかいて、頭の後ろで手を組んだ。

閉じ込められて数時間。SPが、ここを突き止めるには十分余裕はあつたはずだ。

オレを拉致監禁するなんて、どれだけ馬鹿な人間なんだ。ま、その根性だけは認めてやるけどな。

煙草を吸おうと無意識に内ポケットを探った指先に、カサリと薄っぺらい紙の感触が当たった。

託生のコンサートチケット。日付は……今日。

『新曲を演奏するんだ。誕生日プレゼントのつもりなんだけど』

島岡のことだ。オレがこういう状況になっていることは、託生の耳に入れていないだろう。

だからこそ、必ず脱出しなければならない。

オレが、託生との約束を破るはずがないのだから。

四角い紙片に軽くキスをして、内ポケットに滑り込ませた。

さて、どうしてやろうか。

にやりと笑って、靴のかかとに隠してあった小型の銃を取り出した。

greenhouse\_rikaさんは、「早朝の密室」で登場人物が「約束を破る」、「月」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/0eltBoQb>

やっぱり3つまでかな。恋愛お題ったーでした。

---

2012年07月05日(木)

小さな歌声が聞こえてきたような気がして目を開けた。

体を起こしコンクリートの壁からそっと覗くと、ほっそりとした愛しい姿が柵に両手を預けて大海原の方向を見つめながら口ずさんでいる。

「部屋ではあまり吸うな」と章三に言われて、朝の一服しようと仕方なく屋上に足を運んだのだが、一日の始まりに葉山の姿を見れるなんて今日はラッキーだ。

何物にも邪魔をされず、葉山にも逃げられず、こんなにじっくりと見つめることができるなんて。

注意深く静かに葉山の歌声に耳を傾ける。優しい柔らかな声。滅多に聞くことができない、葉山の声。

『I would give you anything』の原曲なのか？

曲そのものに聞き覚えはあるものの、歌詞は全く意味が異なる。心に残る歌。これが葉山の本心なのだろうか。

しばらくすると歌声は止み、葉山はドアの向こうに姿を消した。

部屋に戻り章三に聞いてみたら『I would give you anything』のタイトルは知らなかったが、覚えた歌詞を

伝えると、  
「ああ、赤い鳥の『翼を下さい』だ」  
あっさりとタイトルを教えてくれた。  
翼を下さい.....  
頑なに殻に閉じこもっていても、いつかは羽ばたきたいと思っているのか？  
出来るならば、そのきっかけにオレが携わってみたい。許してくれるのならば、羽ばたく瞬間をオレが見届けたい。  
祈りのような小さな願いを秘め、もっと日本を知って葉山に近づきたいと、勉強することを胸に誓った。

「鳥」「赤い」「勉強する」を使って爽やかな短文を作りなさい。#voitekatyan <http://t.co/sMwEpflj>  
140文字にはまとめられなかった；短文じゃないし、爽やかでもないけど；

あ、そうだ。『I would give you anything』の翻訳は、こちらにありました。なにが、どうなって「翼を下さい」が  
こういう歌詞になったんだろう。  
⇒<http://t.co/tThcIWhI>

やっと見つけたよ。  
普通バージョンの「翼を下さい」  
⇒<http://t.co/lb6EmTuQ>  
英語バージョンの「I would give you anything」  
⇒<http://t.co/wUb7YRCV>  
初めて聞いた時の、衝撃をお分けします。

---

2012年06月30日(土)  
「章三、そっちに行ったぞ！」  
「止まれ！動くな！」  
「どこから入ってきたんだろうね」  
「葉山サン、普通に考えたら入り口のドアでしょ」  
「おい、こら、逃げるな！」  
「ギイも赤池君も、追いかけるから逃げるんだろう？」  
「いや、違うぞ、託生。逃げるから追いかけるんだ。哀しき、刑事の性...」  
「そんな虫取り網を振り回しながら言っても、さまにならないよ」  
『ショーゾー。ショーゾー。ウゴクナ』  
「.....鳥の分際で生意気だな」  
「あ.....赤池君の目が据わった」  
「焼き鳥にしてやる——っ！」  
「わわわ、真行寺君、止めてよ！」  
「いや、無理っす。あのギイ先輩と赤池先輩を止められる人なんていないっす」  
「もう、困ったな。飼ってあげるから、おいで」  
「...うわ、葉山サン、鳥使い」  
「いい子だね。なにか食べる？」  
『タベル？』  
「そつか。じゃ、美味しいもの食べに行こうか」  
「...この数時間の格闘はなんだったんだ」

「鳥」「困った」「動く」を使ってアホな短文を作りなさい。#voitekatyan http://t.co/sMwEpflj  
アホと聞いて、なぜか祠堂署が浮かぶってのは、ちと問題かも；

---

2012年06月29日(金)

greenhouse\_rikaさんは、「深夜の海辺」で登場人物が「約束する」、「雷」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai http://t.co/0eltBoQb

弁当を作りながら、考えた。Reset設定で、いきまーす♪

少し湿った海風が、ぼくの頬を撫ぜていく。顔を上げれば、どこまでも続く満天の星空。  
目が覚めたぼくはなにかに誘われるよう、ギイの腕を抜け出して深夜の海辺を歩いていた。  
素足にさらさらと砂がまとわる感触が、くすぐったい。

目を閉じて波の音に耳を澄ませていると、砂を踏みしめるような足音が聞こえてきた。

「託生、無防備すぎるぞ」

そんな格好で。

ぼくを包み込むように伸びてきた腕が胸の辺りで交差される。背中がほんわりと暖かくなった。

「だって、ここにはぼく達しかいないんだろう？」

ギイのシャツを拝借しただけのぼくの姿にギイが苦言を言うも、誰にも見られる心配はない。

ギイが、そう言った。

ぼくの返事に、かろうじて留まっているボタンを一つ外し、ギイの手が素肌を滑る。

「ギイ……！」

「だから無防備だと言ったんだ」

含み笑いを滲ませ、でも熱くさせるつもりもないらしく、ただ穏やかに愛しげに肌を撫で下ろした。

「次の夏もここに来たいな」

「……託生がおねだりなんて珍しいな」

だって……。

『ごめんな』

夢か現か判断がしかねるあやふやな空間に落ちてきた、謝罪の言葉。

ただの空耳かもしれない。でも、雷に打たれたような衝撃を受け一瞬固まってしまったぼくを、ギイは強引に押し上げ意識を奪った。まるで、記憶を塗り替えるように。

傷ついたギイの心は、まだ癒されていない。

ぼくが側にいることそのものに、まだ後悔している。巻き込むんじゃないって。

「ギイ？」

小指を立てて振り返り、ギイの目を覗き込む。

来年も再来年も、二人の間に死が忍び込む瞬間まで、ぼくは側にいるから。

「……約束するよ」

ぼくの真意を間違いなく受け取ったギイは、小指にキスをして自分の小指を絡ませた。

---

「祠堂のいい所は、いつでも森林浴が出来る所だろうな」

「確かにね。これだけは他の学校に負ける気がしないよ」

「それに……」

「なに？」

「人気が少ないので、こうやって託生といちゃいちゃできるのもな」

「ちょっと、ギイ、近い近い！」

「……お前ら、僕がいるのを忘れてないか？」

「森」「近い」「負ける」を使って爽やかな短文を作りなさい。#voitekatyan http://t.co/sMwEpf1j  
でした。

爽やかじゃないけど；短文じゃなくて会話だけど；

---

2012年06月24日(日)

一昨日も昨日も、もちろん今日も、ギイから電話がなかった。

だからと言って、ぼくから電話をすることはない。

だって、ギイは普通の大学生じゃないから。仕事中かもしれないから。

ギイの空いた時間に声が聞けるだけで、満足しなくちゃいけないんだ。

一応、携帯を横に置いてかかるのを待っていたけれど、いつもの時間を30分越えても鳴らなくて諦めた。

うーん、諦めたというのは違うな。納得した、かな？

でも、なんとなく部屋にいたくなくて、財布だけを持って駅前の商店街に足を向けた。

ここなら、12時まで開いているお店があるから。

暖かそうな色を写した深夜の書店で少し立ち読みをして、ぶらぶらとその辺りを歩き、コンビニで明日の朝食代わりの弁当を買って、そろそろ帰ろうかと横道に逸れたとき、ぼくの足を柔らかなにかが横切った。

「みゃー」

リンリンに良く似た……って黒なら、どの猫でも似ているとは思うけど、やや小ぶりの黒猫がぼくの足にまとわりついている。

「家に帰らないの？」

「みゃー」

首輪をつけているのに、こんな時間にいるなんて。

でも、柔らかな手触りに、心が柔らかく溶けていく。

「早く、帰らなきゃダメだよ。飼い主さんが待ってるだろ？」

気持ち良さそうに、ぼくの手に頭をすりつけ、もっと撫でてくれと訴えているような仕草にクスリと笑った。

そして、待ってくれている人がいるこの黒猫を羨ましく思う。

「君はいいね。家に帰れば大好きな人がいるんだから」

そう口から本音が出た時、

「猫となんか浮気してるんじゃないよ」

拗ねたような言葉と共に背中が温く包み込まれ、ギクリと体が固まった。

「恋人の声を忘れたか？」

「………ギイ？」

首だけ後ろに捻ると、そのまま口唇が柔らかく塞がれた。

「ただいま、託生」

にっこりと笑うギイの笑顔が、ぼやけていく。

ギイと重ならない時間があるのだと納得したのに、どうしてここにいるんだよ？

「た………託生？！」

自分なりに気持ちを整理してたんだよ。ギイのいない時間に慣れていかなきゃって。

「電話できなくて、ごめん！飛行機に乗りっぱなしだったから……」

ギイの言葉よりもキスが欲しくて、口唇を重ねた。

軽く重ねたつもりだったのに、主導権はすぐにギイに移り、存分に吐息を交換してコツンと額をぶつける。

「託生の部屋に泊まっていい？」  
「弁当一人分しか買ってないけど？」  
「んー、食料の心配は明日に回すとするか」  
ぼくの腕を取ってギイが立ち上がった。そして、手を滑らせ指を絡める。  
気付けば、黒猫の姿は見えなくなっていた。

greenhouse\_rikaさんは、「深夜の書店」で登場人物が「浮氣する」、「猫」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/0eltBoQb>  
久しぶりの恋愛お題ったーでした。

---

2011年10月11日(火)

greenhouse\_rikaさんは、「深夜の部屋」で登場人物が「見上げる」、「蜜」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/0ely8YR5> #rendai  
うーん。意味深だねえ、の言葉ですね。

「なあ、託生」

甘えるようなギイの声に、うっかり流されてしまいそうになる自分を叱咤して、  
「ヤダ」

短く答えた。

消灯をとうに過ぎた深夜の部屋。ぼくのベッドに乗り上げ、頬を摺り寄せて、ギイが強請る。

「いいじゃん」

「ヤダってば」

「託生だって好きだろ？」

「……そりや、嫌い…じゃないけど……」

「だったら、二人でいこ？」

こういうときのギイは、とにかく執念深い。ぼくが「うん」と言うまで、口説くつもりだな。

「オレ、ずっと我慢してたんだぜ？」

だからって、耳元で強請るなんて卑怯だぞ。つい頷いてしまいそうになるじゃないか。

チラリとギイを見上げる目の端に、あれから30分も経っている時計が映った。

もう、頼むから、ギイ寝かせてよ。

「あのね。ぼくは行かないって言ってるの」

「そんな冷たいこと言うなよ」

「文化祭のときに、食べればよかったじゃないか。メニューにあつただろ？」

「章三が作ってくれなかつたんだよ。商品を食わす義理はないって」

実に実に不服そうに言って、

「だから、二人で甘味所行って、あん蜜食おうぜ？」

絶世の……人の10倍ほど食い意地の張った美男子が、にっこり笑った。

---

2011年09月30日(金)

greenhouse\_rikaさんは、「夜のベンチ」で登場人物が「離れる」、「本」という単語を使ったお話を考えて下さい。#rendai <http://t.co/O5QKZNtX> #rendai  
ってことなんで、久しぶりにいきます。

土を踏む足音に気付いてはいたけれど、ぼくは顔を上げなかつた。その足音で誰だかわかっていたから。  
「怖がりの託生が、ここにいるとは思わなかつた」  
外灯に照らされた中庭のベンチ。  
普段のぼくなら、こんな夜に近づくことなんてしないだろう。けれども、ギイに見つかるのを少しでも長引かせたくて、ここを選んだ。  
ギシリとベンチが音を立ててきしんでも顔を上げないぼくに、ギイは溜息を吐く。  
「ぼくは謝らないからね」  
「ああ、オレも謝らないけどな」  
足を引っ掛けころびそうになつたぼくを、たまたまその場にいた友人が咄嗟にぼくを支えた。  
そう。”支えた”だけだ。それを”抱きしめた”と判断したギイが、  
「捻挫しているかもしれない」  
と、誰にも何も言わせずぼくを抱き上げ、見せつけるように保健室に運んだ。  
もちろん、ぼくの言い分も文句も無視だ。暴れに暴れて保健室の前で下ろされたと同時に、ギイを殴り飛ばし逃げ出した。  
それから、ぼくはギイと会っていない。  
「もう9時だぞ。あと1時間で消灯だ」  
「だったら、ギイ戻れば？」  
「託生が戻るなら、オレも帰る」  
「ぼくは、もう少しここで本を読んでるから、先に帰れよ」  
まだぼくは怒っているんだ。  
皆の興味津々な顔。あんな恥ずかしい思いは、もうたくさんだ。  
「だったら、託生が本を読み終わるまで、星を見てる」  
「なに言って。こんな曇り空に星なんてないじゃないか」  
何をバカなことをと、顔を上げたぼくに、嬉しそうにふんわり笑い、  
「あるよ。オレだけの星」  
言ってぼくの頬を親指で撫で、その意味するところを理解して、そっぽを向いた。頬が熱い。  
「オレだけのだよ。誰にも触らせたくないんだ。たとえ、それが不慮の事故であっても。でも、それが嫌でオレから離れるというのなら自重する」  
「自重って……」  
自重とか遠慮とか、ギイに全然似合わないことを言われても。  
子犬のような心細そうな目をして、ぼくを伺っているギイを見ると、許してあげないといけない気がする。  
もう、仕方ないなあ。  
「今回だけだよ」  
本を閉じ立ち上がって手を伸ばすと、ホッとしたような表情をしてギイはぼくの手を握った。  
雲の切れ目から覗いた月が、こっそりとぼく達を見ていた。

---

2011年08月29日(月)  
ガラガラガッシャーン！  
起きたときから怪しい雲行きたつたのだが、教室に着いたとたん雨が降り始め窓を激しく叩いた。そして容赦なく稻妻が走り、その地響きを起こすような大きな雷鳴に隣に座っていた託生の肩がびくりと震える。  
「託生、雷怖いのか？」  
「違うよ。別に怖くないよ。でも、音に驚いちゃうんだよね」  
確かに託生の顔に、怖がっている表情は浮かんでいない。と、また雷鳴。  
「裏山にでも落ちたら山火事かな？」

「ギイ。そんな怖いこと言わないでよ」  
実に嫌そうに託生が顔をしかめる。

そのとき、これ以上もないくらいの稻妻と雷鳴が響き、教室全体がざわめいた。

「たくみくーん？」

「………背後からシンバル鳴らされるほうがマシかも」

「オレはそっちの方が、驚くけどな」

一応、数秒だけでも早く光ってくれるのだから、雷の方が予測できる。

「なあ、聞こえなくなる方法があるの知ってるか？」

「そんなのあるの？」

目をぱちくりしながらオレを見上げた託生の耳に口唇を寄せる。

「二人で獣のように愛し合えば、雷鳴なんて聞こえないって」

「ギイ！」

託生の容赦なしの平手打ちとオレの悲鳴は、タイミングよく鳴った雷鳴にかき消された。

「ほら、驚かなかったろ？」

「………あれ？」

小首を傾げた託生の口唇を、アドバイス料代わりに素早く奪った。

greenhouse\_rikaさんは、「朝の教室」で登場人物が「愛し合う」、「雷」という単語を使ったお話を考えて下さい。<http://t.co/7BouSpD> #rendai  
恋愛お題ったーでした。落ち。

---

2011年07月06日(水)

壱がどこからか入手したカノンロックの伴奏と楽譜。

「これ、バイオリンでも弾いてる人がいるんだぜ」

の一言に、

「へえ。葉山君に頼んでみようか」

背後から聞こえてきた声。

「野沢先輩！」

「俺、一度、生で聴いてみたかったんだよね」

その一言で、野沢先輩、壱、俺の3人で、葉山先輩が練習しているであろう温室へと向かった。

「あれ？野沢君、珍しいね」

バイオリンの練習をしていた手を止めて、葉山先輩が俺達を見ると、

「葉山君、ちょっと聴いてもらいたいものがあるんだ」

野沢先輩は言いつつ、丸い木の椅子に葉山先輩を座らせ、俺達にも目で座るよう促し、プレーヤーを操作した。

はてなマークを頭に飛ばしていた葉山先輩は、最初の一音が聴こえるや否や、

「あ、カノン」

と、呟く。

「すげっ……」

まだ一音しか聴こえていないのに、それだけでわかるものなのか？

ゆったりとした独特の旋律が続いた後に聞こえてきたシャララランのシンバルの音に、「あれ？」と首を傾げ、その後続く旋律を耳にしたとたん、

「エレキギター？」

ポカンと口を開けた。

そして、派手なドラムが入り一気にテンポアップしたカノンに、葉山先輩の目が驚きに丸くなり、そして、楽しそうに輝きだす。

バイオリンを持っている左手は、いつの間にか聴こえてくる旋律に合わせて動いていた。

「面白いアレンジだね、これ」

「だろ？色々な楽器で弾かれてるんだって。葉山君に弾いてもらえないかなと思って」

「いいよ」

あっさりと頷き、立ち上がった葉山先輩に、

「葉山先輩、楽譜あります！」

壱が慌てて声をかけた。

「楽譜、あったんだ」

え、楽譜なしで弾こうとしてたのか？

ってか、今、一度聴いただけなのに、もう覚えているとか？

なんなんだ、この先輩は？！

ラストダブってたんで；渡辺綱大からみた温室の出来事でした。

---

2011年07月05日(火)

温室に向かう小道を歩いていると、白い息の向こうから軽やかな踊るような音色が聴こえてきた。

「カノンか？」

にしては、少し...いや、かなり派手。

温室のドアを開け中を覗けば、オーディオプレイヤーから流れるどぎついドラムの音をバックに託生がカノンを弾いていた。

その横には、野沢と1年坊主が2人。

「あれ、ギイ？」

曲が終わり気付いた託生が、オレに目を向ける。

「今のは、なんだ？」

カノンをアレンジしたのはわかるが。

「カノンロックだよ。伴奏と楽譜が手に入ったんで葉山君に弾いてもらおうと思って」

オレの質問に野沢が答え、同意して託生が頷いた。

「へえ、面白いのがあるんだな」

「だね。結構楽しいよ」

余程、楽しかったのだろう。にこにこ笑いながら、託生が楽譜を捲る。

「ギイ」

「ん？」

野沢の呼びかけに振り返ると、

「それ置いていくから、葉山君に頭から弾いてもらいなよ」

「野沢は？」

「俺達、そろそろ時間だから」

そう言いながら、悟ったような表情で野沢は1年を引き連れて温室を出ていった。

「.....よかったのかな？」

「あとで返しておけば問題ないさ」

困ったようにオレを見上げる託生の頬に、ちゃんとキスをして、

「それより、聴かせてくれよ」

プレーヤーを手に取った。

暖かな陽射しの中の少し派手なパフォーマンス。  
楽しそうに弓操る託生を見ながら、オレの心も軽やかに跳ねた。

「道」「白い」「踊る」を使ってありがちな短文を作りなさい。 <http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan  
短文問題集でした。  
140文字制限は、どこに行ったんだ?  
カノンロック バイオリンバージョンはこちら→<http://bit.ly/kejqCK>

---

2011年06月19日(日)

パイロットスーツ姿で前髪を上げられている託生を妄想してみよう。 <http://bit.ly/lfAgaj> んーとね。思わずガン・ムが浮かんじゃったのよ(爆)ということで、ちょいとパラレル。

「おい、無理するな」

鳴り響いたアラートに、仮眠を取っていたぼくは、ロッカールームに飛び込みパイロットスーツに着替えた。同じく飛び込んできたギイがすばやく着替え、ヘルメットを被ろうとしたぼくの手を壁に押し付け顔色を探る。

「大丈夫。休んだから」

心配げに覗き込むギイこそ、疲れが滲んでいる。

それもそのはず、最終決戦はすぐそこまで来ているのだから。

「無茶はするなよ。変調を起こしたら、離脱しろ」

「うん、わかってる」

そうする事はできないとお互いわかってはいるけれど、心配性のギイの言葉に、いつものように微笑んで頷いた。

その間も鳴り止まぬアラート。遠くからぼく達を呼んでいる声がする。

「ギイ、行かなきゃ」

「託生……」

ぼくの前髪をかきあげコツンと額を合わせ、

「帰ってこいよ」

「ギイこそ」

そのまま口唇を重ねた。

こんな切羽詰った状態なのに、穏やかに甘いキス。

湿った音と共に口唇が離れ、ぼくの口からふうっと溜息が零れ落ちた。

「行くぞ！」

「うん」

ギイの声に頷き、格納庫へのドアを開き、床を蹴ってぼくの機体へと乗り込んだ。カタパルトへ進むと、すぐさま発進シーケンスが流れた。体に襲い掛かるGを振り払い宇宙へと飛び出す。

遠ざかる母艦に「帰ってくるよ」と呟き、一気に加速した。

絶対に帰る。ギイと約束したのだから。

---

2011年06月15日(水)

greenhouse\_rikaさんは、「夕方の屋上」で登場人物が「幸福になる」、「風」という単語を使ったお話を考えて下さい。 <http://bit.ly/d2DNCR> #rendai .....だそうで。

なんとなく寮の喧騒から離れたくて、一人夕方の屋上に上った。  
6月のあの日から、ギイとの距離は縮まったけれど、急激な距離感の変化に慣れない自分がいる。  
息が詰まるような閉塞感ではなく、高鳴る胸の鼓動をギイに気付かれてしまいそうで、どうしたらいいのかわからなくなるんだ。  
ギイに愛されて幸せなのに……。  
知らず漏れる深い溜息。  
「こんな所にいたのか」  
「ギイ…？」  
扉の開く音に振り返ると、ギイが息を弾ませて足早に歩いてきた。  
「探したんだぞ？」  
「ごめん」  
熱っぽいギイの視線に瞬間鼓動が跳ね上がり視線を逸らしたぼくを、ギイは戸惑いもなく抱き寄せた。  
少し汗ばんだ体から立ち上るギイのコロン。そして耳に響くギイの鼓動。  
ぼくと同じ速さだ。  
ぼくだけじゃないのかもしれない。ギイも同じなのかもしれない。  
そう思ったら、緊張していた体から力が抜けた。  
ギイは愛しそうにぼくをギュッと抱きしめてから腕を解き、赤く染まった夕日に目を細める。  
「さすがに夕方は風が涼しいな」  
「うん、そうだね」  
こんな些細な出来事を重ねていけば、少しばかり慣れていくのだろうか。君の隣にいるぼくに。  
「託生」  
呼ばれて返事をする間もなく重なった口唇。小さく繰り返すキスに、胸の奥が幸福になる。ギイが与えてくれる無限の幸福に、ぼくは同じだけの幸福をギイに返せるのだろうか。  
「部屋に戻ろう」  
ひとしきりのキスのあと、ギイが目を細めてぼくを見つめた。  
返事の代わりに、伸ばされた大きな手に右手を重ねる。  
握り合ったこの手のように、これから先の未来が君と重なるようにと願いながら。

---

2011年05月20日(金)  
「鳥っていいねえ」「はあ?」「だって自由に飛び回って、自由にどこにでも行けるんだよね」「託生……現実逃避する前に、単語一つでも暗記しろ！また赤点になりたいのか?!」「だって…」「のんきに構えてるから、ギリギリまで勉強する羽目になるんだぞ！」  
「……チンパンカンパンなんだもん」「オレは、やる気の問題だと思うけど。…ああ、それとも、勉強放っぽりとして二人で鳥になるか？」「はい?」「天国まで飛んでみるか?(ニヤリ)」「覚えます!覚えさせていただきます!!」

「鳥」「のんきに」「暗記する」を使ってありがちな短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan  
久しぶりの短文問題集。140文字に収まらなかった……。

ああ、間違ってる！「暗記する」が「暗記しろ」になってる：考えるの面倒くさいから、ま、いいや。

---

2011年04月19日(火)  
「神」「黒い」「隠れる」を使ってアホな短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan アホな短文ね～。

(祠堂署設定です)

「すみません!ほんの出来心なんです!」「とは言っても、これで3回目だよね、君。さすがに出来心と言われても信じられないな」「さっさと認めろ!」「ひっ」「こら、駒澤。すごむんじゃない」「でも、野沢さん」「うーん、じゃあ、君の心に隠れる黒い悪魔に出て行ってもらおうか」「はい?」  
「だって、出来心なんだろう?君の本心じゃないんだろう?」「はあ...」「じゃ、ちょっと待ってて。駒澤は見張ってね」「はい」「お待たせ」「の...野沢さん...」「なに?悪魔祓いの用意してきたんだけど」「け...刑事さん!!ここ警察署ですよね?!でもって、取調室ですよね?!」  
「うん。取調べしても君の悪魔に出てきてもらわないと困るみたいだからね、神に降りてきてもらおうと」「いやいやいやいや、悪魔なんて居ません!!ってか、神なんて降りてきません!!ってか、なんで魔方陣なんて警察署にあるんですか?!」  
「え、君、知らないの?これで何体もの悪魔を呼び出してるんだよ」「すみません!私がやりました!私の意思です!勘弁してください!!」「よかったね、駒澤。白状してくれたよ」「野沢さん.....」

---

2011年04月15日(金)

「空」「短い」「食べる」を使って感動する短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan 感動じゃなくて、なんの変哲もないアホな短文だけど。

「空が透き通るようだね、ギ...」「おおお?」「...ぼく、空見たの数秒だと思うんだけど」「ゴックン。そうか?」「そうだよ。その短い時間で、どうしたら弁当が半分になるんだよ」「食べるの早いからな」「噛んでる?」「噛んでる噛んでる。託生も早く食べろよ」「うん...え?」「ごちそうさん」「嘘...」

---

2011年04月05日(火)

「木」「熱い」「抱く」を使って楽しい短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan うん。状況を説明しないと通じないかもしれない。

「ああ、もう!」木に突き刺さったままの斧を意地になって力任せに押し込む。ギイが軽々やっていたからぼくにも出来るかと思ったのに。「託生、ヨロけてるぞ」クスクス笑うギイの声に「熱い!」八つ当たりした。そのまま斧を取り上げられて「ほどほどにしとけよ。今夜抱くから」何て事言うんだよ。バカ。

---

「ギイ?」

「なんだ、起きたのか。もう少し寝てればいいのに」

雪こそ降ってはいないけど、首をすくめる位寒い山荘の裏庭で、ギイは腕まくりをして薪を作っていた。

「寒くない?」

「いや、熱いぞ」

「ふうん」

目の前で、気持ちいいくらい真っ二つに割っていく丸太。

なんとなく楽しそうで、

「ぼくも、やってみたい」

そう言うと、

「託生には無理だ」

愛想も素っ気もなく、ぶつた切るように断言される。

むかつ。

「ぼくだって、できるよ」

「いや、無理だって」

その間にも、どんどん増えていく薪。

「ちょっと位やらせてくれてもいいだろ?」

食い下がるぼくに、ギイは大げさに溜息を吐いて、

「危ないから気をつけろよ」

斧をぼくに差し出した。

「重い……」

場所を交代して斧を振り上げると、その重さに体がふらつとよろけた。背後で「ふっ」と吹き出す気配を感じるが無視無視。

そのまま勢いよく振り下ろして、

「あれ?」

ギイの時はあれだけスパンと真っ二つになっていたのに、なんで途中で止まるんだ?

笑いをかみ殺すギイに気付かないふりをして、突き刺さった丸太ごとガンガン打ち付けて二つに割る。

「もう一回」

今度こそと、ぼくは斧を振り上げた。

……数分後。

「ああ、もう!」

木に突き刺さったままの斧を、意地になって力任せに押し込んだ。

ギイが軽々やっていたから、ぼくにも出来るかと思ったのに、気持ちよく飛んでいってくれない。

「託生、ヨロけてるぞ」

クスクス笑うギイの声に、

「熱い!」

鬱憤を晴らすように八つ当たりして、コートを脱ぎマフラーを外す。

ぼくだって男なのに、どうしてこれだけ腕力が違うのか。

丸太をセットしようとして、横からギイがひよいと斧を取り上げた。

「ほどほどにしどけよ。今夜抱くから」

何て事言うんだよ。バカ。

耳まで赤く染まったのを自覚しつつギイを睨み上げると、

「託生の上気した顔、色っぽいんだよ」

ほんの少し視線をずらして、ギイがポツリと言った。

さっきのお題。ざっと書いてみたら、これだけの長さ;これを140文字に縮めてます。

---

2011年04月04日(月)

「水」「遅い」「聴く」を使ってありがちな短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan ありがちってなんだ?

「託生、ほら」渡された水と薬を飲んでポスンと枕に頭を乗せた。「寝ろよ」「やだ。寝るの勿体無い」「バカな事言ってないで、早く寝ろ」ギイの小言を聴く間も心配性の指がぼくの髪を優しくかきあげる。のんびりとした昼下がり。時計の針までもが遅く動いているよう…。ギイに見守られる静かな午後。

---

2011年04月03日(日)

車を止め窓から事務所を見上げた。ここに託生がいる。それだけでオレは幸せを感じていた。いつも託生の音を聴く事だけが、オレに許され唯一の慰めなのだから。こんなに近くにいるのに、お前に会う事は決して許されない。謎解きを終わらせたオレにできる事はただ一つ。お前の幸せを願う事だけ……。

「謎」「近い」「聴く」を使って泣ける短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan 朝から問題やってて、こんな時間；Reset設定くらいしか、思い浮かばなかったorz

---

2011年04月02日(土)

「託生、頼む!」「ヤダ」「一人にしておけないんだ」「だからって、何でぼくが…」「明日までだから」「…ギイは?」「仕事が終わったら、すぐに戻るよ。今日は熱い位だから、放っておいて大丈夫だな。冬だったら冬眠してしまうけど」「そうだね」「託生が面倒見てくるってさ。よかったなあ、亀」

「亀」「熱い」「頼む」を使ってアホな短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan 今日のお題はこれでした；ほんと、アホだ……。

---

2011年03月30日(水)

「月」「熱い」「かける」を使って気持ちいい短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan ～、ま～た難しい…ってか、このキーワードで気持ちいいって、あっち方向にしか考えられないのですが。いや、ギャグと言われても困るけど。

口唇に直接吹き込まれる熱い言葉と強引な指先が、幾重にもベールに包んだぼくを容易く暴いていく。羞恥心を感じる間もなく与えられる愛に、逃れる術もなく闇に引きずり込まれた。溶ける体と架ける心。二人の間に隙間はなくて。薄く目を開けると、降り注ぐように月の光が妖しく二人を包み込んでいた。

---

「月が～出た出た～月が出た～あ、よいよい♪」「誰だ、あいつに盆踊りを教えたのは？！」「ごめんなさい」「葉山～」「だって日本の夏を満喫したいって言うから」「あいつがお祭り人間だって事、忘れたのか!!」「ここまで喜ぶとは思わなかったんだもん」「あれ、章三踊らないのか？」「子供ならまだしも、男子高校生が踊るか！」「そうなのか、託生？」「えーっと、あ、ギイ、力キ氷、何かける？」「レモン。サンキュ。げっ、ペットボトルの水が熱い！」「そんな所に置いているからだよ」……あのキーワードで笑い話は無謀でした；落ち。

---

2011年03月29日(火)

「鍵」「低い」「遊ぶ」を使って楽しい短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan うーん。難しいなあ。なんか、以前にもこういうキーワードを使って…ってのを書いた気がするけど、短文はなあ。

忙しい君に放っておかれ、頬をツンとついてみた。「託生」低い声でたしなめられても、その弾力が楽しくて。「悪戯っ子め」咄嗟に逃げようとして足が絡まり、そのまま二人してベッドに転がる。じゃれあって遊ぶうちに、君の目が熱っぽく変化し口唇が落ちてきた。「鍵、閉めてないよ」それが、合図。

# 祠堂署

2011年04月19日(火)

「あー。やっと報告書終わった」「お疲れ様っす」「託生、帰るか」「あ、今日当直なんだ。ギイ、先に帰って」「え、お前、今日じゃないだろ?」「うん。でも、利久がお腹痛くなっちゃって変わったんだよ」「片倉が?また食べ過ぎたんじゃないのか?」「さあ?」「で、もう一人は誰だ?」「俺っす」  
「真行寺か...よし、真行寺、オレと変われ」「え?あの...ギイ先輩の当直って」「オレ、明後日」「あー、その日は、えー、無理っす」「なんだと?!」「ギイ!」「すんません!その日だけは無理っす!アラタさんと...」「あ、やつとOK貰ったんだ♪」「へへっ」  
「何とかならないのか?!」「本当にすんません!」「別の日に変えろ!」「絶対、無理っす!」「ダメだよ、ギイ。真行寺君、三洲君追いかけて、踏んでも蹴られても諦めずに耐えて、やつと3ヶ月ぶりにデートできるんだから!」「.....葉山サン」「.....託生、フォローになってない」「あれ?」

---

「神」「黒い」「隠れる」を使ってアホな短文を作りなさい。<http://bit.ly/g2D6da> #voitekatyan アホな短文ね~。

「すみません!ほんの出来心なんです!」「とは言っても、これで3回目だよね、君。さすがに出来心と言われても信じられないな」「さっさと認めろ!」「ひつ」「こら、駒澤。すごむんじゃない」「でも、野沢さん」「うーん、じゃあ、君の心に隠れる黒い悪魔に出て行ってもらおうか」「はい?」  
「だって、出来心なんだろう?君の本心じゃないんだろう?」「はあ...」「じゃ、ちょっと待ってて。駒澤は見張っててね」「はい」「お待たせ」「の...野沢さん...」「なに?悪魔祓いの用意してきたんだけど」「け...刑事さん!!ここ警察署ですよね?!でもって、取調室ですよね?!」  
「うん。取調べしても君の悪魔に出てきてもらわないと困るみたいだからね、神に降りてきてもらおうと」「いやいやいやいや、悪魔なんて居ません!!ってか、神なんて降りてきません!!ってか、なんで魔方陣なんて警察署にあるんですか?!」  
「え、君、知らないの?これで何体もの悪魔を呼び出してるんだよ」「すみません!私がやりました!私の意思です!勘弁してください!!」「よかったね、駒澤。白状してくれたよ」「野沢さん.....」

---

2011年04月18日(月)

@torte\_2011「託生...」「今日は駄目だよ。走り回って、ぼく、へとへと」「...って、毎日言ってるじゃないか!」「お願い、寝かせて。ぐー」「託生、寝るな!!」託生君が刑事だと、ギイ欲求不満になっちゃう♪

---

「犯人も捕まつたし、託生」「え、ちょ...ちょっと、ギイ。どこ触ってるんだよ」「がんばつただろ、オレ?は、ん、に、ん、捕まえただろ?」「...うん」「だったら、御褒美があってもいいんじゃないかなあと思うんだけど」「でも....ん.....」「もう、オレ、限界...たくみ...」「あ.....」  
ビービービービー!!どげしつ!!「ぐはっ!」「はい、葉山です!」「たく...」「3丁目のコンビニで強盗?!こっちに向かって逃走中?!はい、すぐ行きます!」「おまつ、鳩尾に...」「ギイ、何寝てるんだよ!犯人、こっちに逃走してるんってば!!」「ちくしょーっ!!絶対、とつ捕まえてやる!!」  
「ギイ先輩、そいつです!!」「このヤローっ、邪魔しやがって!!」「ひえ」.....「崎、お前やりすぎ」「あー、溜まりすぎまして」「あ?」「...ストレスが」「目が血走ってましたもんね」「ギイ、すごいね!一日で二人も捕まえるなんて」「...今度こそ、御褒美もらおうかな、託生くん?」「え.....?」

その他

2014年11月29日(土)  
モーレツ困っていたんです関連

矢「甘いっ！」  
ギ「……………そうか？」  
矢「甘い、甘すぎるぞ、ギイ」  
ギ「じゃあ、矢倉はそういう場面に遭遇したらどうするんだ」  
矢「広げて堪能、匂いを堪能！」  
ギ「おまっ…！」  
矢「そして頭にかぶって気が済むまで裸踊りをだな」  
ギ「やるか？やるのか、矢倉？」  
矢「やるしかないだろうが。そこを突きぬけてこそ漢(オトコ)だ！」  
ギ「いや、やりたかったんだが、一応イメージってものがだな………」  
矢「いいかげん壊れてると思うぞ、俺もギイも」  
ギ「……………矢倉、漢だな」  
矢「おお！」  
章「お前ら。それが階段長会議でする話題か？」

……………そーゆーシーンを入れようかと何度も書いて消していた私が、一番ぶつ壊れていると思います；

---

2014年11月05日(水)

「崎義一、29歳。私、脱いてもすごいんです」  
「……………あの脱ぎたがる癖、どうにかならんのか、葉山？」  
「言い疲れて諦めたよ…………」

「崎義一、29歳。うまいんだなあ、これが！」  
「ぎゃ―――っ！おろせ！おろして、ギイっ！」

「崎義一、29歳、イインダヨ！グリーンダヨ！」  
「……誰だ、あのお祭り男にバカ殿メイクを教えたのは？」  
「あそこにいるよ。同じメイクをして」  
「…………矢倉あああああ」

---

2014年11月04日(火)

「崎義一、29歳。どうしてもあなたに会いたい夜があります。きっとみは こな~い ひとりきりのクリスマス・イブ(\*^-^\*)θ~♪」  
「…………いつまで拗ねてるんだよ？仕事なんだから仕方ないだろう」

---

2014年11月03日(月)

「崎義一、29歳。ド・ホルン・ンクルを使ってます」  
とかで、パックしてる顔があつたら吹くな。

崎義一、29歳。カッコイイとは、こういうことさ。

崎義一、ピッカピッカの～29歳。  
.....これは無理があるな；

崎義一、29歳、にじゅ～よじか～ん たつたか～えまっすつか り～げい～ん り～げい～ん(\*^-^)θ～♪

崎義一、29歳。もっと あいして なが～く あいして(づ^-^)づ

「崎義一、29歳。100人乗っても大丈夫！」  
「ギイって、頑丈なんだね～」

---

2014年11月02日(日)

「崎義一、29歳。違いが分かる男 ダバダ～ ダ～ダ ダバダ～ ダバダ～(\*^-^)θ～♪」  
「.....葉山、あれを止めろ。耳障りだ」  
「無茶言わないでよ。ぼくがギイを止められるわけないだろ？」

---

2014年10月10日(金)

東京都・原宿に「壁ドンカフェ」が登場 -男性も体験できる! |マイナビニュース  
[news.mynavi.jp/news/2014/10/0...](http://news.mynavi.jp/news/2014/10/0...)

「壁ドンカフェだって」  
「壁ドン？それならいつでもオレが...！（ドン！）」  
「ギイ、好きだよね、壁ドン」  
「はい？」  
「最初から壁ドンだったよね？」  
「.....それは進歩がないって言いたいのか？」  
「そうじゃないけどさ」  
「なんなら、床ドンでも天井ドンでも！」  
「.....遠慮します」

---

2014年07月29日(火)

「託生、来週の火曜日.....」  
「土用の丑の日だよね。うな重食べなきゃ」  
「いや、そうじゃなくて」  
「え、ギイ、うな重好きだろ？」  
「好きだけどな。じゃなくて！」  
「足りない？じゃ、鰻巻きと肝吸いも用意しようか？」

「美味そうだな。……違うぞ！もっと大切なことがあるだろうが！」  
「大切な物…………デザート？仕方ないなあ。差入れに貰ったうなぎパイもつけるよ」  
「お前、一人でうなぎパイを食べるつもりだったのか？」  
「そうじゃないけどさ。晩ご飯は、うな重と鰻巻きと肝吸いとうなぎパイでいいよね？」  
「ああ……そうじゃない！託生、お前、ほんとに忘れてるのか？大切な大切な、この日を！」  
「知ってるよ。29日は」  
「29日は？」  
「毎月、肉の日」  
「…………託生、鰻、山盛り用意しておいてくれよな」  
「はい？」  
「ベッドの中で、思い出させてやる」

---

2014年07月16日(水)

「ぎっくり腰ですね」  
「そんな簡潔に……てーっ！」  
「情けないです。毎日、蝶のように色々な花に飛び回っている貴方が」  
「ここぞとばかりに、嫌味かよ」  
「そのように取られるとは心外ですね」  
「…………お前、ストレス溜まってるだろ？」  
「とりあえず医者を呼びましたから、診察を受けてくださいね」  
「はいはい。どっちにしろ、ここから動けないんだからな。大人しくしてるさ」

「では、看護士を置いていきますので、なにかありましたら言ってくださいね」  
「…………で、この痛みは我慢しろって？」  
「いえ、ぼくがブロック注射打つんで、すぐに楽になりますよ」  
「…………は？」  
「じゃあ、下着下ろしますね」  
「ちょ…………ちょっと、待て！ いてえ！」  
「ほら、無理に動くと痛いでしょ？ 注射一本で楽になりますから、ほらほら」  
「ほらほらじゃない！ 勝手に下ろすな！ 待て！ 待て待て！」  
「なに、恥ずかしがってんですか？」  
「…………名前は？」  
「はい？」  
「お前の名前」  
「…………注射打つのに、名前が必要なのでしょうか？」  
「オレには必要」  
「わかんない……っと」  
「げっ」  
「力、入れないでくださいね」  
「患者の同意なしで…………」  
「痛いんでしょ。すぐに楽になりますから」  
「いや、楽にならない。たぶん、ずっと痛いまま」  
「はあ？」  
「この胸の痛みは、ずっと消えそうにないんだ」

「ぎっくり胸？」  
「なわけあるか？！」  
「…………変な患者さんに、当たっちゃったなあ」

---

2014年04月30日(水)

「この浮気者っ！」  
「どこが浮気なんだよ？！」  
「オレ以外の男を誉めること自体浮気だろが！」  
「ギイが、言ったんだろ！イチローはすごいって！」  
「……オレが？」  
「そう、ギイが」  
「そうか」  
「そうだよ」  
「こういうことでしょうな。たぶん。

---

2014年4月18日(金)ブログより転載

「逃げるか？」  
　ポツリとギイが言った。  
「……どこに？」  
　おもちゃ箱をひっくり返したような雑然とした景色から目を離さず、ポツリと答える。  
「月の果てにでも」  
　できるわけがないのを承知で、ギイがジョークに本心を紛れ込ませた。  
　日本とアメリカ。二人の気持ちは変わらないのに…いや、日々募る想いがこれまで以上に膨れ上がり、離れている方が不自然に思えてくる。  
　でも、状況がそれを許してくれない。ぼくにはぼくの。ギイにはギイの。それぞれいるべき場所がある。  
　まだ未成年のぼく達が勝手できるほど、世の中は甘くない。

---

「逃げるか？」  
　ポツリとギイが言った。  
「……どこに？」  
　おもちゃ箱をひっくり返したような雑然とした景色から目を離さず、ポツリと答える。  
「とりあえず、二人きりになれる場所」  
　横目でチラリとうかがうと、いたずらっぽくギイが笑った。  
　振り返らずとも背後に数人のSPがついているのはわかる。ギイとぼく、それぞれのSPが集まっているから5人ほどか。  
「逃げられると思う？」  
　ギイはいいけれど、ぼくは特別足が速いわけじゃない。  
「んー、展望台のエレベーターに飛び乗るタイミングが味噌だよな……久しぶりのデートなんだ。SPなんて、糞食らえ？」  
「……お説教は逃げないでよ」  
「はいはい。そのときは二人で怒られよう」  
　言うなり繋いだ手に力を込め、閉まりかけたエレベーターに向かって走り出した。

2014年2月9日(日)チャットルームより転載

「ギイ.....？」

「何も言わずに消えて、すまない」

やっとオレ達を取り巻く障害物を取り除き、その足で託生の下に来ることができたオレに目を見開き.....ん?

なんだか、託生の様子が変だぞ。

「まだだ?」

「はい?」

「ぼく、夜に夢を見るだけじゃなくて、白昼夢まで見るようになっちゃったんだ」

一人納得したようにブツブツと呟く託生を見て、

「白昼夢じゃないって、オレだって。ギイだ！」

と叫ぶものの、

「あー。幻覚だけじゃなくって幻聴まで聞こえるなんて.....。しっかりしなくちゃ、ギイに怒られちゃう」頭をふるふると振って、泣きそうな笑顔を作った。

「オレは、ここにいるだろうが！」

「よく、そうやって怒鳴られたよね。懐かしいなあ」

「おい」

実体と見てもらえず、がっくりと肩を落としながら、おもむろに託生の腕を掴んだ。

その感触に、ハッと託生が息を飲む。

「ギイ？」

「だから、オレだって言ってるじゃないか」

「いや、そんなはずないよ。ギイがここにいるはずない」

「いるの！じゃ、オレは誰だって言うんだよ？！」

「.....変装が得意な誰か？」

オレは、ルパン三世かつての！

「あー、じゃあ、質問してみろよ。なんでも答えるから」

「ぼくの誕生日は？」

「2月18日」

「2年生のときの寮の部屋番は？」

「305号室」

「3年生のときは？」

「270号室」

「.....でも、知ってる人は知ってるよね」

確認するように首を傾げ、うーんと悩む託生の姿に凹む。

なにが、なんでも他人にしたいか？！

「そんな質問より、二人しか知らない記念日を尋ねたらいいだろ？」

「記念日？」

「ああ、6月7日。二人の記念すべき初エッ.....いってーーーっ！」

「ギイのスケベ！」

「.....お前、わかってんじゃん！」

【再会で遊ぼう第四弾、信じてもらえない？編】

2014年2月8日(土)チャットルームより転載

「ギイ.....？」

「何も言わずに消えて、すまない」

やっとオレ達を取り巻く障害物を取り除き、その足で託生の下に来ることができたオレに目を見開き、信じられないとでも言いたげに、涙をためて託生が首を振った。

「託生.....」

「ギイ.....」

託生を抱き寄せて、口づけを.....。そくつ、殺氣！

「はいはいはいはい、ストップ！」

「ぐえっ」

誰だ、首根っこ引っ張ってるのは？！

「葉山君は、こっちね」

「野沢君？吉沢君？」

「ギイは、こっちだ」

「～～～～～(たーくーみーつ)」

「葉山がよくても」

「俺達は許さない」

「よくも勝手に消えてくれたもんだ」

「一言もないなんて、そんなに薄っぺらい友情だったってわけか」

(章三！矢倉！)

「覚悟は決まってるんだろうな」

ボキボキッ！

「気がすんだか.....？」

「一応な」

「僕達に無体を働いたことは忘れてやるよ」

「そうか、サンキュ.....」

バタッ！

「わーーーっ、ギイ！」

## 【再会で遊ぼう第三弾、友情編】

2014年2月7日(金)チャットルームより転載

「ギイ.....？」

「た.....くみ.....」

「なんで、こんなところにいるの？」

と言われても、どう答えればいいのやら。

いや、それよりも、そんなところに立たれると困るんだけど。

「あの...な。少しだけ離れてくれないか？」

「嫌だ！ギイ、またなにも言わずに行っちゃうかもしれないじゃないか」

ポロリと零れた涙を拭いてやりたいけれど、しかし.....。

「えーと、託生くん。あとで、殴ってもいいし罵倒しても構わないから、2分だけあっち向いてもらえないか？」

「どうして？」

「.....いいかげん漏れそうなんだ！」

## 【再会で遊ぼう、トイレ編】

「ギイ.....？」

「何も言わずに消えて、すまない」

やっとオレ達を取り巻く障害物を取り除き、その足で託生の下に来ることができたオレに目を見開き、信じられないとでも言いたげに、涙をためて託生が首を振った。

「託生.....」

呼んで抱き寄せようとした瞬間。

.....ボスッ！

鈍く重い音とともに、鳩尾に入った渾身の一発。

「う.....」

「ギイの.....バカ———ッ！」

ボスッボスッボスッ！！

「た.....」

「どれだけ心配したと思ってるんだよ！」

「本当に、わるか.....うつ」

ボスッボスッボスッボスッ！！

「なにかあったんだとは思うけど、あまりじゃないか！」

ボスッボスッボスッボスッ！！

「た...く.....」

「ギイ？」

「.....お前、以前よりパンチの威力が増してるんだけど」

さすがに、これ以上殴られたらヤバイかも。

「あ、ボクシングジムに通ってるんだ、赤池君に誘われて。体力つけるために」

「章三と.....そうか」

二人がかりなのか.....。

無事に生きて帰れる確率は、何パーセントなのだろうか.....。

## 【再会で遊ぼう第二弾、ボクシング編】

---

2013年12月14日(土)

ベッドの上の影が丸い。

まるで卵のような可愛らしい寝姿に声を潜め笑ったものだが、託生の告白を聞き、それは胎内回帰の表れなのだと気付いて、己の楽観的主点に嫌悪した。

何者からも守られる胎内。

もう、戻ることは叶わない胎内。

それでも、自分を守るために丸く身を縮め、眠っている時間でさえ気を許すことはできないのか。

静かに託生の隣に身を滑らせ、囮い込むように託生を抱き締めた。

いつか、この手が、この足が、自由に伸ばせられるように。固く緊張した体から、力が抜けるように。

オレは、お前の盾になる。

2013年11月18日(月)

「来るもの拒まずの海千山千だったって言ってたよね(ぼそぼそ)」

「どうした、託生？」

「ギイってさ」

「うん？」

「バイだよね？」

と言われて、コーヒーを吹き出して焦っているギイが、ちらちら。

2013年11月07日(木)

「今日は立冬なんだって」

「そろそろ冬支度を始めましょうってことだな。託生にはあまり関係ないみたいだけど」

「なんだよ、それ」

「お前、オレがいない間、電気ストーブつけてるだろうが」

「え、知ってるの……」

「わからないはずないだろ？ 部屋に入ると、妙に暖かいんだから」

「で、でも、正式に冬なんだから、ストーブつけてもいいよね？」

「ふうん、じゃ、立春になったら消すんだ？」

「…………立春っていつ？」

「2月3日。へえ、節分と重なるんだな」

「2月3日？！冬の真っ只中じゃないか！ 無理、絶対無理！」

「託生…………ストーブに抱きつくのなら、オレに抱きついてくれないか？」

「ストーブはどっかに持って行かれるかもしれないけど、ギイはどこにも行かないだろ？」

「…………」

「ギイ？」

「お前、なにも考えずに言ってくれるんだもんなあ」

「なにが？」

「こっちのこと。さて、冬になったんだから、ストーブつけて、ギイ君が暖めてあげよう」

「わわっ」

「どこにも行かない。ずっと側にいるからな」

「…………うん」

2013年10月02日(水)

「あれ、赤池君？」

「葉山、洗濯か？」

「うん。今日はなにもないから、今の内にやっておこうと思って」

「やれるときにやらないと、すぐに溜まってしまうからな」

「でも、赤池君を、この時間にランドリールームで見るのって初めてのような気がする」

「基本、僕は朝に洗濯をするから」

「朝？！」

「起きてすぐに洗濯機を回して、朝食を取りに行く前に乾燥機に放り込むんだ。30分もすれば乾くから、朝食の帰りにここに寄って持って帰れば効率がいいだろ？」

「それで、赤池君って洗濯物が溜まらないんだね」  
「そういうことだ。ところで、葉山」  
「なに？」  
「お前さん、いつまでここにいるつもりだ？」  
「乾燥機が終わるまで」  
「どうして？そんなに暇なのか？」  
「うーん、じゃなくて、なんだか洗濯物が減っていくような気がするんだよ」  
「…………は？」  
「ぼくの気のせいかもしれないんだけどね」  
「服か？」  
「ううん、下着」  
「…………葉山」  
「なに？」  
「ギイに言ったか？」  
「言ってないよ。この頃、帰ってくるの消灯後だし」  
「あんな、こんなときこそ、ギイに言え」  
「どうして？」  
「葉山の気のせいじゃないんだったら、寮内の盗難だろ？」  
「あ、そうか」  
「とにかく、まだ無くなるようなら風紀委員として動くから。ギイには僕から言っておく」  
「うん、わかった。とりあえず、今日は乾燥機が終わるまでここにいていいんだろ？」  
「ああ。じゃ、僕は急ぐから」  
バタン。

「ヤローの下着をコレクションするような、マニアックなヤツがいるとは考えたくないが、一応ギイの耳に入れておくか。ああ、頭が痛い」

これと言って、続きません。

---

2013年09月23日(月)  
「…………託生」  
「にやおん」  
「どういうことなのかな、託生くん」  
「暖かいんだよ」  
「うん」  
「首とかさ。カイロを入れておくポケットもついてるんだ」  
「暖かそうだな(棒読み)」  
「うん、だからギイのも用意した」  
「…………は？」  
「アメシヨがいい？クロネコにする？」  
「…………誰だ、これを考えたのは？」  
⇒www.felissimo.co.jp/kraso/v14/cfm/...  
うん、なんとなく；

2013年09月17日(火)

水面に雲が落ちた。

さざめく水面に、体がざわめいていく。

雲の熱さが移り、息が浅くなる。鼓動が早くなる。

互いの指先が意思を持って軌跡を描き、想いを伝えていた。

君が欲しいと。ひとつになりたいと。

水面が粟立つ。大きな波を打つ。

そして、二人は誰もいない水中で穏やかな眠りにつく。

---

2013年08月10日(土)

「あー、疲れた」

バイトが長引き、重い体を引きずるように帰ってきたワンルームマンション。

エレベーターを降り、チカチカ切れそうな蛍光灯に目を向け、

「管理人さん、今日も換えてくれなかつたんだ」

と、ちょっとムカつきながら、視線を廊下の先に向けギョッとした。

おそるおそる廊下を進み近づいて、その光景にポカンと口を開けた。

平べったいダンボール…………側面に『トマト JA●●』なんて書いてあるから、その辺りから持ってきたのだろう。その上に、一人の男が胡坐をかいて目を閉じていた。

「あの……」

風邪引きますよ……と続けようとして、男が首からかけていた板に目が点になる。

『拾ってください』

ぼくの声に男が目を開け、ぼくを認識してふわりと笑った。

うわっ、イケメン……じゃなくて！

「お帰り」

「た……だい……ま？」

あれ？ぼくの知り合いだったっけ？

「あの……」

「うん？」

「どなたですか？」

「ギイ」

いや、名前を言われたって、わかんないし。

「ここ、ぼくの部屋の前なんで、困るんですけど」

「うん、知っててここにいるんだ」

「は？」

「オレを拾って？」

……ぼくは、目を開けたまま夢を見ているのだろうか。

---

2013年07月11日(木)

色とりどりの絹の洪水に、そこかしこから笑い声やガラスが触れ合う音がする。

付き合いとは言え、ぼくがこんな所にいるのは、あまりにも場違いだ。

そんな中、ひとりわ目立つ集団の中にいる人物が、ぼくを……いや、ぼくの連れを見つけ、周りにいる人達になにやら声をかけ、こちらに向かって歩いてきた。

「副総帥、お久しぶりです」  
「これは、山中理事長」  
ほらね。  
お決まりのご挨拶というのを交わし、理事長がぼくを振り返る。  
「副総帥、当オーケストラのコンサートマスターの葉山です」  
「…………お久しぶりです、副総帥」  
とたん、ピクリと眉を上げ、一瞬ムッとしたような表情を浮かべたものの、すぐにお得意の仮面を被り、「久しぶりだな、葉山」  
と、右手を上げた。  
にこやかに握手をするぼく達を、驚いたように見る理事長に、「同じ高校の同級生なんですよ」  
彼が補足する。  
そう、同じ祠堂の卒業生。顔見知りであっても、おかしくないわけだ。  
忙しそうな副総帥は、その後すぐ別の客に捕まり奥へと消えた。

「あー、疲れた」  
あんなパーティ、ぼくの仕事になんの影響があるんだか。  
マンションに帰り、上着とネクタイをソファに放り、シャツのボタンを3つほど外したときチャイムが鳴った。  
「はいはい」  
インターホンの応答に応えることもなく玄関に直行し、ドアを開ける。  
「お帰り」  
「…………」  
にっこり笑ったぼくを機嫌悪そうに睨み、さっさとリビングのソファにどさりと身を投げ出た。  
「なに怒ってるんだよ？」  
「お前な。久しぶりって、なんだよ？」  
「だって、一ヶ月ぶりじゃないか。久しぶりって言ってもおかしくないだろ？」  
「知り合いなら、な」  
「……知り合いだよね？」  
とたん、見下ろしていたはずの視界がぐるんと回って、気付けば彼の腕の中。  
「知り合い？」  
「…………恋人だったかな？」  
「疑問系にするなよ」  
とぼけるぼくにクスクスと笑いながら、一ヶ月ぶりのキスをする。  
「ギイ…………」  
知人の振りは、君が好きな恋のスパイ士ってやつだよ。

---

2013年06月25日(火)

「あっ」  
バチン！  
「泉？」  
「あー、逃げられた！かゆい～」  
「蚊に刺されたのかい？」  
「うん」  
(俺の泉の柔肌に……！)

「.....吉沢？」  
「しっ(精神統一)」  
「.....」  
.....キー.....バチン！  
「すごい、吉沢！」  
「そんなことより、泉！薬塗らなきゃ。痕が残ったら大変だよ！」  
「吉沢.....(うつとり)」

「.....」  
バチン！  
「アラタさん？」  
「くそ、逃げられたか」  
「蚊に刺されたんスか？」  
「見ればわかるだろ？」  
「俺のアラタさんに～～～～！」  
「ばかもの。お前のものになった覚えはない」  
バチン！バチン！バチン！バチン！  
「聞いてないな、こいつ」  
「ふー、追い詰めた。おーれーのアーラーターさんにはいいい！」  
バチン！  
「よっしゃ！」  
「蚊くらい、一発でやれよ。それより、真行寺、薬」  
「ははははははい！」  
「じゃ、お前、帰れ」  
「はい？！今日は葉山サンがないから、お泊りしていいって！」  
「かゆくて、お前の相手するのが面倒になった」  
「そんなああああ。ア～ラ～タ～さああああん」  
「うるさい」

「あっ」  
バチン！  
「野沢さん？」  
「あー、逃げられたか。かゆくなってきた」  
「蚊に刺されたんですか？」  
「そう」  
(俺の野沢さんに.....！)  
「駒澤？」  
ずずずずず、シャキーン！  
(おお、駒澤の背後に赤い炎が)  
.....キー.....バチン！  
「さすが、駒澤。すごいね」  
「それより、野沢さん！薬塗らないと！」  
「うん、駒澤塗って。あ、ここは違うからね(ちらり)」

「の……のざ……(鼻血)」  
「駒澤、可愛いw」

「あっ」  
バチン！  
「託生？」  
「あーあ、逃げられちゃった。かゆいー」  
「蚊か？かくなよ、痕が残るぞ」  
「でも……ああ、もう！」  
バチン！  
「よほど、託生の血が美味いんだろうな」  
「ギイ、どうにかして！」  
「よーしよし。どうにかしてあげよう」  
「そっちじゃない！」  
キー……ン。  
「ほら、飛んでるじゃないか！」  
「確かに。託生の肌に痕を残していいのはオレだけだし」  
「バカなこと言ってないで、なんとかしてよ！」  
「はいはい」  
殺虫剤噴射。  
ぶしゅわ—————っ！  
「げほげほ、ギイ……撒きすぎ……げほっ」  
「蚊を探してぶつ潰す時間が惜しいからな。夜は短いし」  
「はあ？ そんなことより、ギイ、かゆい。薬ないの？」  
「オレが塗ってやるよ」  
「……って、こら、脱がすな」  
「服に隠れているところも刺されてるかもしれないし♪」  
「ギーイ——ツ！」

---

2013年05月24日(金)  
「ラマダーンは夜しか食っちゃいけないんだぞ」  
「それで？」  
「食いためしないといけないから」  
「ギイ、なに、してんだよっ！ 食べるんだろう？！」  
「そうだよ、食うんだよ」  
「なにを？！」  
「なにって、ナニ」  
「……ぼく、知ってるよ。あれってラマダーン中、禁止なんだよね」  
「へ？」  
「託生、それ間違い」  
「え？」  
「確かに断食期間中の飲食、喫煙、性行為、投薬は禁止されてるけど、断食期間中ってのは日の出から日没までの間だから、夜はOKなんだ」

「そうなの？」  
「なにしろ教典に『明け方まで飲み食い、性行為を行え』って書いてるし」  
「って、脱ぐな、こらーっ！」

---

2013年03月23日(土)  
「なんだよ、矢倉。こんな時間に？」  
「仕方ねえだろ。追い出されたんだから」  
「は？」  
「AV鑑賞会だってよ」  
「AV.....」  
「って、ギイ、知ってるよな？」  
「アダルトビデオだろ？DVDなのに、なぜビデオなのか考えただけだよ」  
「そんなこと、俺も知るかよ」  
「で、ここにどれだけいるつもりなんだ？」  
「あー、1時間程度かなあ。始末は自分の部屋でしろって言ってきたから」  
「1時間もいるのかよ」  
「だからビール持ってきたじゃん」  
「いいけど。舍監にバレたら、ややこしいぞ」  
「大丈夫じゃないか？洋モノじゃない限り、外には漏れないだろうし」  
「は.....？」  
「あれ、うるさいじゃん」  
「そうか？」  
「『Oh ! Oh～ ! OK ! Come On ! YesYes ! !』って感じだし、萎えるよな」  
「普通だろ？」  
「.....は？」  
「.....え？」  
「.....今、ものすごく温度差を感じてるんだが」  
「オレも、そう思う」  
「ちなみに聞くが、ギイって日本のAV見たことあるか？」  
「ない」  
「じゃ、葉山とイタすとき、違和感を感じなかったか？」  
「.....ノーコメントだ」  
「てことは、違和感、感じまくったってことじゃねえか。悪いことは言わん。一度見てみろ。でもって日本人を勉強しろ」  
「矢倉.....」  
「葉山のためだ。体育会系の乗りじゃ、いつか葉山に愛想をつかされるぞ」  
「あのな」  
「今からでも見にいくか？」  
「いかねー」  
「じゃ、借りてきてやるから。ちょっと待ってろ」  
「お.....おいつ」

---

2013年02月04日(月)

Ayaさまの時代劇

「山吹色の菓子でございます。どうぞ、お納めください」

「ほお、菓子とな。越後屋、おぬしも悪よのう」

「いえいえお代官様には……」

ごとつ。

「なにヤツ？！」

「見つかっちゃった。どうしよ……」

「だから言ったんだよ。託生には無理だって」

「ギイ！……あれ？いつ来たの？」

ぐさつ。

「うおっ。短気なヤツだなあ。仕方ない。いっちょ一暴れしますか」

「だめだめだめ。二人じゃ無理……」

「託生が行くって言った時点で、全員来てるって」

「む……それって、ぼくが頼りないってこと？」

「じゃなくて」

「出て来い、曲者！」

「とりあえず話はあとでな」

---

2012年12月22日(土)

逃げ出すように走り出したぼくの腕を、力強い手が握り締め引き止める。

その反動で足をつまづき、前につんのめったぼくの体を、器用に片手で引き寄せクルリと路地裏の壁に固定した。

絡み合う二人の荒い息が、他人事のように耳に届く。

支社長の睨み付けるような視線に居たたまれなくなったぼくは、顔を隠すように視線を下に向いた。

いや、そうじゃない。

こんな顔、見せられない。見られたくない。この人にだけは……。

「お……まえを待ってたの……に、どうして逃げるんだよ」

逃げたわけじゃない。

目の前に飛び込んできたお似合いの二人に、自分が場違いな存在だと自覚したから、その場を去っただけだ。

「……お邪魔のようだったので、遠慮したんですよ」

無理矢理大きく深呼吸を繰り返して息を整え、それらしき理由を口にする。

多少棘があったかもしれないけど、急遽呼び出されて行った先で、あんなキスシーンを見せられることになるなんて思わなかつたのだから、これくらいは許されるよね。

「あれは、不可抗力だ。好きなヤツがいるのに、オレが女に声をかけるわけがないだろ？」

不可抗力との言葉にホッと息を吐きかけ、でも続けられた台詞にすっと心が凍っていく。

今までプライベートなことを聞いたことはなかつたけれど、やっぱりいるんだ。心に決めた女性が。

「だったら、ぼくの仕事の邪魔なんかしないで、その恋人のところに行けばいい……」

「恋人なんかじゃない！」

唸るように噛み付いた支社長の表情が泣き笑いのように歪む。と同時に、貼り付けのように固定されている両腕に力が込められ、その痛みに顔を歪ませた。

放せよ、この馬鹿力！

「……片思つてことですか？ それなら、さっさと告白したらいいじゃないですか。こんな所で油を売つてないで」

「無理だ。これだけオレを見てもらおうと努力しているのに、気づいてもらえない。想いを告げたってふられるだけだ」

こんな情けなさそうな顔でさえこの人には似合うのに、なにをそんなに弱気になっているんだか。

支社長に好きだと言われて断るような女性なんて、いるはずがない。

「だったら客観的な意見を言ってあげます。支社長をふるような人間なんて、この世にいません」

「………絶対だな？」

「ええ」

ぼくの言葉に、支社長の目の奥が光ったような気がした。腕が開放される。

「好きだ」

「ぼく相手に練習したって………」

鼻先に支社長のコロンと柔らかい布地があたったと思ったら、体が暖かいなにかに包み込まれた。

「愛してる」

「……え？」

「オレが好きなのは、お前だ」

信じられないような言葉を耳にし、確かめようと顔を上げた至近距離に真剣なまなざしの支社長がいて頬を引く。

「オレはふられないんだろう？ 託生が今言ったんだから」

「じょ……冗談は………」

「誤魔化すな！」

ビクリと固まったぼくの右頬に支社長の手が触れる。指が頬を滑り愛しそうに髪をかき上げ、頭の後ろに大きな手が回りこんだ。

「……愛してるんだ、託生を」

口唇に直接流れ込んできた言葉を拒否することなんて、ぼくにはできなかった。

だって、ぼくも支社長を愛していたから……。

以前Suicaがどーのこーのツイッターで言っていたときに浮かんだアナザーおふいすらぶのボツです。はい、ただいまフォルダ整理中。最後間違えてたので、削除してもう一回。

---

2012年10月10日(水)

「よ」

「ギイ？！言ってくれれば、時間空けたのに」

「託生も忙しいんだろうと思ってた。でさ、託生。佐智にソリストになるかどうか、相談してるって？」

「ああ、その話か……。うん、以前から佐智さんにも言われてるし、楽団員やっている間にコネもできてきたし、そろそろかなって」

「オレも、いい頃合いだと思う」

「本当に？」

「ああ。だからな、オレ、託生のマネージメントをすることにした」

「………は？」

「オレだったら、日本だけじゃなくて海外まで活動を広げができるぜ？ 通訳もばっちり」

「………へ？」

「もちろん、ソリストの手に怪我させちゃいけないから、炊事洗濯はオレの仕事な。そのために料理学校も行ってきた」

「…………ギイ」

「なんだ？」

「いったい、いつ日本に着いてたのさ？仕事は？島岡さんは？」

「まあまあ」

「じゃなくて！きちんと、ギイがここにいる理由を教えろよ！」

「ははは、勘当された」

「………ギイ？！」

---

2012年05月15日(火)

う、考え出したら面白いぞ。

「森林浴クラブ？誰だ、発起人は？崎？」

「予算もかからないし、早起きのリズムがつくし、なにより健康的だぞ？」

「……葉山とデートしたいなら、勝手にしてろ。却下」

---

「トムソーヤクラブ？誰だ、発起人は？」

「はーい。俺、俺」

「矢倉……」

「やっぱり、男の夢だよな！木の上の秘密基地！」

「材木を買うのに、予算がかかりすぎる。それにもしものときの保険もだ。却下」

---

「崎！」

「げっ」

「こらこらこら、なにを逃げる？」

「……はあ。今日は、なんですか、相良先輩？」

「いやいや。麗しの美少年を新しいクラブに勧誘しようと思って」

「お断りします」

「まだ、どんなクラブか言ってないだろ」

「聞いてますよ。巷の噂では相良先輩が『ターザンクラブ』なるものを作ったと」

「そうそう。生徒会長の権限で作ったんだよ。どうだ、崎？」

「入りません」

「そう、言うなよ。気持ちいいぞー。『アーアー』って」

「………どんなクラブだよ」

---

2012年01月25日(水)

「すまない。お前しか頼めないんだ」

「できる限りのことはするがな。でも相手はFグループなんだ。こんな子供騙しな小細工なんか数日で揉み消されるぞ」

「わかってる。たった数日の逃避行だってことは」

「ギイ…！」

「でもな、章三。ほんの少しごいい。夢を見させてくれ」

---

2011年10月07日(金)

Ayaさまの海賊物語  
「チャ～ラッタ チャ～ララ～ チャ～ラッタ チャ～ララ～」  
「.....てめえら、なにやってる？」  
「あ、お頭。今、陸で流行ってるヒップダンスってやつでっさあ」  
「それは、ボンッキュンッボンの女がするやつじゃねえのか？ てめえらにはタコ踊りの方が似合いだうが。気持ち悪いから止めろ！」  
「.....そなんだ」  
「へ、託生？」  
「ボンッキュンッボンのお姉さんしか似合わないんだね」  
「いやいやいや！ 託生なら似合う！」  
「思ってもいないこと言わなくていいよ。あの、教えてくださって、ありがとうございました(ペコリ)」  
バタバタバタ。  
「あーあ、坊主、楽しそうに踊ってたのに」  
「楽しそうに？」  
「あんな笑顔、初めて見たのに」  
「笑顔？」  
「腰のくねらせ方が、絶妙だったのに」  
「くねらせ方.....託生————っ！！」  
「.....どうする？」  
「やっぱり、これしかないってか？！さあ！お頭が坊主に許してもらえるのは、今日か、明日か、明後日か？張った張った！！」  
「俺、明後日！」  
「明日だ！」  
「船上の娛樂を提供してくれる坊主ってのは、貴重だよなあ」  
どろん!! |ω・|・) |) ※ハッ

---

2011年09月28日(水)  
Ayaさまの海賊物語  
「章三、託生は？」  
「葉山なら、甲板の掃除してるぞ」  
「は？」  
「ギイが剣の練習反対したから、ヤロウ共にナイフを教えてもらってたんだが.....」  
「なにい？！あいつら、そんな危ないこと教えてやがったのか？！」  
「だ！が！ナイフ、後ろに飛んでいったんだそうだ」  
「.....ああ」  
「それで、やることがないというから、甲板の掃除を頼んだ」  
「なるほど。ちょっと見てくる」  
「おーい、たく.....」  
ドタドタドタドタ！！  
「.....ははは。真面目なヤツだから、仕方ねえなあ。託生.....」  
ドタドタドタドタ！！  
「おい、こら、託生、無視すんな」  
「えっ、ギイ、なに？！」  
ドタドタドタドタ！！

「オレが来たんだから、少しくらいサボっても……」  
「あーっ！ そこ掃除したばかりなのに！！」  
「す…すまん」  
「もう、ギイ、邪魔だから向こう行って！！」  
「たく……」  
ドタドタドタドタ！！  
「葉山、掃除終わったか？」  
「うん。久しぶりに運動した気分」  
「ギイ、いたっけ？」  
「……はあ。ま、いい。モップ直してたらどうだ？」  
「うん、わかった」  
「……おい。海賊の船長殿が樽の陰で「の」の字を書くのは鬱陶しいぞ」  
「託生に、邪魔者扱いされた……さめざめ……」

---

2011年09月27日(火)

Ayaさまの海賊物語

殴られそうになった時、無意識に腕で庇うような防御本能もあるが、未知の事柄にどう反応するのかわからない場合、普通なら、ただ身体に力を入れ硬く手を握り締めるだけだろう。  
それなのに、否定の言葉を発している態度とは裏腹に、自分の身の内に起きている衝撃を最小限にする為、無意識に呼吸を浅くし力を抜いた。

……こいつは知っている。

本能が悟った時、視界が赤く染まったような気がした。

@torte\_2011 「子供のような顔をしておきながら、中身は十分オトナなわけだ。……遠慮はいらねえよなあ」

ヤバイヤバイヤバイ！

@torte\_2011 「操なんて立てたって、そいつは助けに来てくれねえぜ？ ここは海賊船の中だ」

オレの腕の中だ…！

「身体は正直だよなあ。素直になれよ。現実を見ろ」

オレを見ろ…！

「落ちろよ」

オレと地獄へな……。

$\epsilon = \epsilon = \epsilon = \epsilon = \epsilon = (\circ \cdot \cdot) \circ$ ブーン

@torte\_2011 「お頭！ 駐染に聞いたところ、『惚れてんだ！』ってのはムードがなくていけねえらしいっす。やっぱ、あい、あい、あいし……」「てめえはバカか。愛してるくらい照れずに言えよ」「さすが、お頭！ 海千山千の男！ …ハッ」「……ぼくだけじゃないんだ」「こらっ、託生、待て！」

@torte\_2011 「お頭！ 駐染みが言うにはムードを考えろと」「メード？」「モード？」「iモード？」「iモードってなんだ？」「ヌードのことだろ？」「てめえら！」「……お頭、鼻血止めてくんせえ」

---

2011年09月20日(火)

「初めて弁護士の崎です。相談事とは？」

「主人のことなんですが、外に出れば『どこに言ってた？』と言われるし、少しでも他人と仲良く喋ればむすりと怒ってヤキモチ妬くし、あの人の手帳には記念日と名を打って、事細かく色々なことが記録されていますし。

そう！それも『初めて手を握った日』とか『初めて間接キスした日』とか、しょもない記念日で、しかも私が忘れるふとくされるんですよ。つい最近はGPSまで私に付いている事がわかって、もう、こんな窮屈な生活イヤなんです！」

「それは、大変ですね……って、オレのことか？（小声）」

「先生、なにか？」

「いえいえ。こちらの話で」

その夜。

「ギイ、おかえ……」

「託生、オレを捨てないでくれ～～～～！！！」

「はい？！」

---

2011年09月16日(金)

「ふうん。君が託生を捨てた男か」

「捨てただと？！オレは託生を…！」

「結果的には同じことだよ。事実、託生は君の横にいないじゃないか」

「っ……！」

「バカな男だよ。こんな可愛い託生を捨てるなんてね」

託生の肩に回した手を頬に移しその動きに逆らいもせず、託生は男の肩に頭を預けた。

---

2011年08月04日(木)[Ayaさまの暗号]

「助けに来るころには心中してそうだ」「やめてくれ！」「手引きしてやれよ。時限爆弾を停止にするにはどうすればいいのか。教えるのは得意だろう？」「たくみ…っ」「ほら、早くしないとまた爆発した」「集中、しろ」「なんだって？」

「託生、集中しろ！」「聞こえてないよ？」「余所見するな、赤を切ろっ！」

140文字には収まらなかつたし、ものすごく無理矢理(笑)

@torte\_2011 「xx」を消しながら、楽しませていただきました♪……が、最後間違ってる；「切ろ」じゃなくて「切れ」ですね；あああああ。

@torte\_2011 「全員にキスし終わったころには見つかりそうだ」「やめてくれ！」「心してしてやれよ。ニューハーフを返り討ちにするにはどうすればいいのか。変装は得意だろう？」「たくみ…っ」「ほら、早くしないとまた……キスされた」「…、しろ」

@torte\_2011 「なんだって？」「託生、女装セット用意しろ！」「聞こえてないよ？」「ボヤボヤするな、かま野郎を振り切るっ！」…………そろそろ壊れてきましたので、落ち！

---

2011年06月26日(日)

「なあなあ、やっぱり3年の先輩って、経験あるんだろうな」  
「ああ、ありそうだよな」  
「崎先輩は、どうなんだろ」  
「……そりゃ、あるんだろうけど、ストイックすぎて想像つかないな」  
「想像つかないって、ベッドの中の？」  
「だって、あの顔だぞ？ 性欲なんて微塵もありませんってな感じで」  
「なんか、黙々と腰振ってそう」  
「わはは、ありえる！」  
「義務的にやって、はい終わりみたいな」  
ワイワイガヤガヤ。  
「……オレ、そんなか？」  
「自分が一番よくわかってるんじゃないの？」  
「だよなあ。時間があるなら、ずっと託生を抱いていたいのにな」

---

### 2011年06月11日(土)

そうそう。男子高校生の体育の授業で武道ってあるよね。柔道、剣道、相撲。ギイ的に許されるのは、剣道かなあ。相撲なんて、論外。柔道は…「なんでギイが相手なんだよ？」「変わってもらった。当たり前だろ？！」「…いいけど」「ちゃんと受身取ってくれよ」「うん」襟元を握って、ダン！「いったあ」「……」「ギイ？」「託生…」「うーん、受身取れたけど、くらくらする」「……」「ギイ？…はっ！どこ、見てんだよ？！」「い…いや」と言いつつ、乱れた柔道着から覗く、上半身から目を離せない。……ってことになりそう。そーいや、寝技なんて、危ないなあ。うん。下半身危ないよ(笑)  
「ギブギブギブ！ギイ！」「すまん！今は無理！」「無理じゃなくて、離れて！」「だから無理。……反応したみたい」「じゃなくて、してるだろ？！当てるってば！(小声)」「だってなあ、託生を組み敷いてるんだぞ。反応するなって方が無茶だ」「どこでも、盛るな！」げしつ！

あー、体育っていいよなあ。高1の時は、絶対体操服に着替えるとき、ちらちらと「見てはいけない」と思いつつ見てただろうし、高2では、「誰も見るなよ、オレのものだ！」と思いつつ、やっぱり鼻血だしそうになっていただろうし。ギイの苦悩って、楽しいよね♪

---

### 2011年06月08日(水)

「手玉はな、真ん中を打てば、当たったあとそのまま転がるけど、下の方を打てばバック。右側を打てば当たったあと右に、左側を打てば左に飛ぶんだ。だから、次の玉が打ちやすいような位置に持っていくようにするんだぞ」

---

### 2011年06月07日(火)

「ギイのブレイクショット、格好いいね！」「そうか？」「うん！カンカンカンって、全部散っていくよね。いくつかボールも入るし」「ほら、託生の番だぞ」「うーん、どこ狙ったらいい？」「キューは腰に固定して…そう。バックかけなきゃだから、手玉の下を突くんだ」「あ、戻った！」「筋がいいぞ」

---

### 2011年06月02日(木)

「この頃、体力が落ちてきてるよね。このままじゃコンサートに響くし、どうしよう…。ジムに通う？ ギイがなん

だかんだと反対しそうだし、その代わりに一部屋丸々トレーニングルームに改造しそうだし...。うーん」というわけで、託生くんにWiiFitPlusをやってもらいました♪(笑)

もしも託生くんが「ジョギング」をした場合。

「お。頑張ってるな」

「お帰り。ちょっと待って。はあはあ。あと少しだから」

「ああ、頑張れ。託生に体力ついたら、あと1、2回付き合ってもらえそうだし」

「はい？！」

「楽しみだな」

「違う！ぼくはバイオリンの為に！...と終了。ギイ！」

「照れるなよ。色々試したいのもあるしさ」

「なに、色々って？！わわっ、ダメだって、ぼく汗びっしょり...」

「オレ、託生の汗の匂い、だいすき♪」

「ダメダメダメダメ！シャワー！」

「じゃ、シャワー浴びながら」

「ギャ———！」

もしも託生くんが「燃焼フープダンス」をした場合。

「これ結構腰痛い」

「でも、いいな、これ」

「なんで？」

「腰の揺らめきが、なんとも」

「なに、それ？！」

「腰が柔らかくなったら、色々できるもんな」

「だから、その色々ってなに？！」

「あ、もしかして、託生、誘ってる？」

「誘ってない、誘ってない！」

「はい、終了～」

「うわあ、ギイ、おーろーしーてー！」

「とりあえず、運動の成果を確認させてもらうか」

もしも託生くんが「リズムボクシング」をした場合。

「託生.....」

「なに？」

シュシュ！

「これは、しなくてもいいんじゃないかな？」

「何言ってるんだよ。これこそやらなくちゃ」

シュシュシュ！

「いや、これは必要ないと思うぞ」

「肩と腕の筋肉鍛えるんだよ。バイオリンには必要だよ」

シュシュ！ シュシュ！

「これ以上、腕つ節強くなられたら、オレ顔面変形する...」

「ギイが、変な事しなきゃいいんだよ」

シュシュシュシュ！

「やっぱり、これは止めろ」

「あー、ギイ、消すなよ！」

バキッ！

「……だから、これはいらない…と……効…いた…」

---

2011年04月28日(木)

【ボツ】「昨日は笹かまありがとう。すっげえ旨かった」

「よかった。ギイの口に合うかちょっと心配してたんだ」

「ははっ、いらない心配してくれてたんだな。マジ、全部食っちまった」

「そうなんだ。それはよかったよ……あのさ、ギイ」

「うん？」

「託生のこと頼むな。俺、託生の事、弟のように心配で…。ギイだったらわかってもらえると思ってるんだ。託生、あれだけ、いいやつなんだ」

「うん、知ってる」

「それとな、鶏肉と麺類が好物で、緑黄色野菜が苦手なんだ」

「……らしいな」

「それと、朝が弱い」

「今朝もギリギリだったぞ」

「それから、それから……雨が嫌い」

「……雨？」

「たぶんだけど、俺、朴念仁だから違うかもしれないけど、雨の日は、託生が泣いてるように見えたんだ」

「……片倉は、どうしてた？」

「ただ、何も言わずに、じっと気付かないふりをしてた。もしかしたら、何かあったのかな？って思ったんだけど、聞ける雰囲気じゃなくて…」

「……わかった。雨の日に気をつけたらいいんだな？」

「うん。俺、託生の病気治したかったんだけど、できなかつたから。だから、せめて過ごしやすいようにしていたつもりだったんだ。ギイ。託生の事、頼むよ」

片倉に言われるまでもない。オレこそが接触嫌悪症を治したいと思っていたんだ。

ヒントは雨。これから、何かが見えてくるのだろうか。

---

2011年04月23日(土)

「この奥がラスボスだな」

「なにか、音が聞こえてこないか？」

「本当に、こんな所に魔物がいるのか？」

「誰？」

「この国の王子、ギイだ。お前を退治しにきた」

「ぼくを退治？！」

「あ……」

「ぼく、殺されちゃうの？リュート弾いちゃいけなかったの？」

「いや……」

「イヤだ！殺さないで！」

「ごめん！オレの勘違いだ。殺さないから」

「でも、殺さなくても捕まえる気でしょ？」

「あ、え、うん。お前を城に連れて帰りたい」

「やっぱり、捕まえるんだーーー！」  
「なあ、あれ、どうする？」  
「放っておけ。だいたい歴代の王子が17歳の時に、そんな都合よく魔物が出てくるか」  
「じゃあ、一体、あれは誰だ？」  
「さあな。城の占い師あたりが、結婚相手を水晶玉で探したってところだろ」  
「……男に見えるんだが」  
「でも、あいつは気に入っているぞ」  
「名前を教えてくれないか？」  
「……タクミ」  
「いい名前だな」  
「……ギイ」  
「なあ、オレと一緒に城に行かないか？」  
「ぼくを城に連れて行って、どうする気なの？」  
「どうするって……」  
「あー、妄想しすぎてパンクしそうだな、あいつ」  
「なにを考えているのやら」  
「オレと一緒に行こう」  
「お城って、怖くない？」  
「怖くないさ。オレが守ってやるから」  
「本当？」  
「……すっげ、かわいい」  
「え？」  
「いや、なんでもない。じゃ、行こうか」  
「わっ！ おろして、おーろーしーてー！」  
「あーあ、可哀想に」  
「なあ、跡継ぎはどうするんだ？」  
「ま、なんとかなるだろう」  
「なる……のか？」  
「深く考えるな」

---

2011年04月19日(火)

今日のフライトを終えケネディ空港に着いたオレ達は、社から指定されたホテルへ向かった。  
機長のオレに用意されているのは、それなりのシングルルームなのだが、そんな非効率的な部屋割りなんてごめんだ。せっかく託生が副操縦士についたのだから。  
事前にホテル側に連絡し、託生に気付かれぬようツインルームを用意させた。  
「機長、お疲れ様でした」  
「ああ、託生もお疲れ」  
アタッシュケースを置き制帽を脱いだ託生が、他人行儀に声をかける。  
なにをそんなに緊張してるんだか。滅多に会わないが、同じマンションに住んでいるというのに。  
「2日間の休暇か。明日、ニューヨーク案内でもしようか?」  
「え、でも、機長。こっちに実家があるんでしょう?御家族に顔を見せられたほうが…」  
仕事モードが抜け切っていない託生に苦笑し、  
「オレは、そんなに暇じゃない」  
上着をベッドに放って、託生へと足を向ける。

「じゃ...じゃあ、そんなニューヨーク案内なんて...」  
「だから、オレは託生を口説くのに忙しくて、そんな暇ないって」  
「き...機長!」  
まだきっちりと留まっているダブルのボタンを外しながら、託生の米神にキスをする。  
「もう仕事は終わりだよ。託生...」  
「ギイ.....」  
託生は頬を赤く染めながらオレを見上げ、観念したように目を閉じた。

---

2011年04月04日(月)  
@torte\_2011 「待ってた」微かに動いた口唇がオレに囁きかける。霧に溶けないように、そっと白い肌に触れた。潤んだ黒い瞳が、寂しそうに震えていた。深い眠りの中、オレの声だけがお前に届いたのだろうか。  
「帰ろう、託生」羽のように軽い体を抱きかかえオレは霧の出口へと歩き始めた。

---

葉山。明日キャンセル」「別にいいけど、急用?」「いや、親父が持ってるマンション贈与される事になって、住民票を移す事になった」「引っ越しの?」「引っ越ししないよ。ただ住んでいる事にした方が、建物の登記代が安くなるんだと。租税特別措置法ってやつだな」「へえ」「期間は決まっているがな」

---

2011年03月25日(金)  
@torte\_2011 君を殴りたくなんてないのに、体の髓まで染み込んだ条件反射。それさえも「託生だから」と笑ってくれる君に、いつかぼくからのキスを送れるだろうか。その時の君の驚いた顔を思い浮かべて、小さく吹き出す。もう少し。あと少し...。

---

2011年03月24日(木)  
「どうした、眠れないのか?」「ううん。リュートが鳴らして欲しがってたから」「月と共に鳴しているようだな」「うん。この子はノクターンが好きみたい」.....やっぱりドラクエでBLって、絶対おかしいと思う。

ギイ 勇者、ショーゾー 魔法戦士、ミス 賢者、ハヤマ 天地雷鳴士、シンギョージ バトルマスター、ヤグーラー ゴッドハンド、ヤツ パラディン、カタクーラ 魔物ハンター、ヨシ=ザワ 海賊、タカバヤシ スーパースター...上級職にするところかな。って、アホな事考えるのやめよ。

ギイ 戦士、ショーゾー 魔法使い、ミス 僧侶、ハヤマ 吟遊詩人、シンギョージ 武闘家、ヤグーラー 笑わせし、ヤツ 盗賊、カタクーラ 羊飼い、ヨシ=ザワ 船乗り、タカバヤシ 踊り子.....7の基本職業で行くところかなあ。

---

2011年03月23日(水)  
@chisayakun 「お前な自分のレベル考えてるか?スライムごとにやられそうになっているのに、このレベルで森の中に突入するのは、どう考えてもまずい」「このくらいの傷、ショーゾーが魔法で何とかしてくれるだろ?」「僕は僧侶じゃないんだ。攻撃魔法しか持っていない」なんですけど?

「仕方なかろう。Level1の戦士は、鍋の蓋とこん棒って決まっているんだから」

「……そういうショーザーは木の杖か。年寄り臭いな」  
「魔法使いに杖は必須だろうが！」  
「いやいや普通は、なんとかロッドとか言う飾りのついた綺麗な杖だろ」  
「……一人で行くか？」  
…いつか個人的に遊ぼう

---

2011年03月04日(金)

「もうすぐ卒業だから一目見ようと女子高生も必死なんじゃないか?」「迷惑だ、おちおち託生とデートもできやしない」「だったら女装でもしたらどうだ?」「矢倉…どっちが女装しろ?」「やっぱギイだろ。バリバリ目立つぞ」「目立ってどうする?!というか、誰が女装なんてするか!」…すみません。  
「大体、こんな身長で女装なんてできるか!」「おっ、ギイ、やる気だな。胸はアンパンでも詰めとけ」「バカか。そうだ、お前やれよ、矢倉」「俺、化粧した らガンガン男釣れるぜ」「ふうん、矢倉は男が釣りたいのか」「や…八津」「ギイに女装の趣味があったなんて…」「託生…」「勝手にやってれば!」

---

2011年02月27日(日)

見てしまった!もしかしたら、まだ葉山サンが練習しているかもと走っていった温室の隙間から、二人がキスをしているのを!ギイ先輩の指一本までもが男の色 気を放ち、受け止めている葉山サンの幸せそうな表情に、昨晩を思い出して己の力量を思い知る。いつかアラタさんに、あの顔を!…できるのか、俺?

---

2011年02月23日(水)

<ボツ>「真行寺君は、昨夜ぼくと一緒にいました」「でも、君も酔っていてあまり記憶がないんじゃ、信用するわけにはいかないよ」「ようするに、真行寺君とぼくが朝まで一緒にいたという証明ができればいいんですね?」「葉山サン?」「もしもし?うん、ぼく。昨日の午後8時頃から今朝8時頃までの、ぼくの映像あるよね?」『…………』「誤魔化さなくていいから。今はそれが必要だから。真行寺君の無実を証明するのにいるんだよ」『…………』「ああ、もう!今は、そんな事言っている場合じゃないだろ?とにかく、その映像を持ってきて欲しいんだ」『…………』「うん。今○○署。どのくらい?」『…………』「30分だね。うん、ありがとう…えっ?」『…………』プチッ。

「葉山さん、今のって…」「一緒に怒られてね、真行寺君」「そんなあ…でも、映像って、葉山さんSPでもついてたんですか?」「ううん。空」「は?」「宇宙から見てるみたい」「へ?」「ギイはバレてないと思ってたみたいだけどね」ギイ先輩のスケールの大きさには、ついていけそうにない…。

---

2011年02月20日(日)

「飛び立つ飛行機を何度見ればいいのだろう」「離れ行く滑走路を何度見ればいいのだろう」「身を切られるような想いを何度経験すれば」「二人が共にいる事を許されるのだろう」交差する想いは必ず一つに混ざり合うから「いつか…きっと…」

---

2011年02月18日(金)

夜中に青白い光が、部屋の隅から浮かんでいないだろうか?勝手にカーソルが左から右に動き、デスクトップ一杯に「takumi」と並んでいたのなら、それは世にも恐ろしいギイウイルスに感染してしまっている。

貴方の友人に「惚気メルマガ」を配信し、いかに自分がtakumiを愛しているのか、切々と訴えるトロイ系ウイルス。そのままにしておくと、貴方の品性まで疑われてしまうだろう。

恐怖のギイウイルス駆除には、『シマオカテック タークミインターネットセキュリティ20XX』好評発売中！

奥付

## 小話ツイッター

りか

URL <http://greem.shop-pure.net>  
MAIL [greenhouse@shop-pure.net](mailto:greenhouse@shop-pure.net)